遊戯王5D's～遊城を受け継ぐ者～

遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王５Ｄ' ｓ～遊城を受け継ぐ者～

【Ｎコード】
Ｎ１８００Ｉ

【作者名】
遊

【あらすじ】
時は数年経ち、デュエルアカデミアを卒業し旅に出た十代に息子が出来た。十代の精霊の力を受け継いだ少年が５Ｄ' ｓの世界へとタイムスリップする物語

オリジナル主人公を出して５Ｄ' ｓの内容に沿ってストーリーを描こうとしますが内容を大幅に変更すると思います。オリカも出します。あと勝手にＣＰは主人公と龍可にします

プロローグ（前書き）

初めて書く小説なのでメチャクチャな設定になりますが是非楽しんで下さい

プロローグ

遊城十代と呼ばれる少年はデュエルアカデミアに通い、災いがあれば何度もアカデミアを救ってきた

セブンスターズと三幻魔との闘いや光の結社との闘い、精霊世界での闘い、ダークネスとの闘いなど様々な闘いを重ねて成長するのであった

そしてデュエルアカデミアを卒業すると同時に助けを求めんとする精霊がいると言って旅に出たのだった

そして十代は成長しある女性と結婚し子どもが出来た

だが母親は出産と同時に亡くなってしまい十代1人で育てたのだった

長い時を得て子どもは成長し歳は13歳までに成長したのだ

運命のカード（前書き）

上手く書けたか心配です……あと更新も……

運命のカード

ここはドミノシティのとあるアパートの中である

「父さん、もうすぐ実技試験だからそろそろ行くよ」

「そうか、今日が実技試験だったか。そういえば俺は実技試験の日に遅刻しそうになって遊戯さんに会って相棒を貰ってクロノス先生とデュエルしたんだっけ」

今日、海馬コーポレーションが造ったデュエル場でデュエルアカデミアの入学試験の実技試験が行われるのである

「んじゃあ行ってきまーす！」

「キラ！ちょっと待て！」

「何？父さん？」

「これを持って行け」

少年のお父さんが1枚のカードを渡す

「これって、『超融合』のカード！？」

「俺からの御守りだよ、実技試験ちゃんと受かれよ！」

「ありがとう父さん！」

少年の名前は遊城キラ、お父さんが自分よりも大きな輝きを出せるようにと名付けた名前である。そして、キラは今日お父さんから貰ったカードによって大きな運命に立ち向かうのであった。

タイムスリップ（前書き）

背景描写が微妙になってます：そこはスミマセン！

あと、今回はあのキャラを出します！

デュエルアカデミアでお馴染みのあの人です！

タイムスリップ

キラは十代のように遅刻ギリギリにならずに会場に到着することが出来ていた。

すでに会場内のあちこちでデュエルが開始されている中でキラはデッキ調整をしていた

放送で次々に呼ばれていく受験生の中で自分の出番だと気付いたキラはデュエル場へと足を運んでいた

審査をしている先生の中で1人1人の受験票を確認していてふとキラの受験票に目が止まり笑顔を見せる者がいた

「（多分だけどこの生徒あの遊城じゅうだ～いの息子なノーネ）受験番号３２番の生徒はわたくしがお相手をするノーネ！」

「ちょっと待って下さい！クロノス教諭、試験用デッキを使って下さい」

「この生徒は試験用デッキでは弱すぎるノーネ、もし私が勝ったとしても内容によっては合格でスーノ」

そう言って自分のデッキを持ちデュエル場へと向かった

クロノスとキラはデュエル場に着いた時に向かい合ってデュエルディスクを起動させた。

「では、受験番号３２番の実技試験を始めるノーネ！」

「「デュエル」」

クロノスＬＰ４０００

キラＬＰ４０００

「楽しいデュエルにしましょうね、先生！先行は頂きます！ドロー！手札から永続魔法『未来融合フューチャー・フュージョン』を発動して対象とするのは『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』を選択し、『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』を召喚してカードを１枚セットしてターンエンド」

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン

ＡＴＫ１６００

「（やっぱり遊城じゅうだ～いの息子もＥ・ＨＥＲＯデッキなノーネ）わたくしのターン！ドローニョ！まずは永続魔法『古代の機械城（アンティーク・ギアキャッスル）』を発動して『古代の機械騎士（アンティーク・ギアナイト）』を召喚なノーネ！そしてモンスターが召喚されたことによりアンティーク・ギアキャッスルにカウンターを一つ置くノーネ、さらに手札からマジックカード『二重召喚（デュアルサモン）』を発動してアンティーク・ギアナイトをデュアル召喚するノーネ！』

クロノスの後ろには大きな城が出てきて前には歯車などで機械で造り上げられたような騎士が現れる

「そして、モンスターが再び召喚されたことによ～り、アンティーク・ギアキャッスルに2つ目のカウンターを置くノーネ。さらにアンティーク・ギアキャッスルの効果により、『アンティーク・ギア』と名の付くモンスターは攻撃力が３００ポイントアップするノーネ！』

古代の機械騎士
ＡＴＫ１８００→２１００

「バトルなノーネ！アンティーク・ギアナイトでスパークマンに攻撃なノーネ！」

「この瞬間！罠カードを発動！『攻撃の無力化』……ってあれ？」

罠カードを発動させたつもりだったが罠カードが発動出来ていなか

った

「アンティーク・ギアナイトの効果でこのカードが攻撃する場合、
相手はダメージ終了時まで魔法・罠カードを発動できないノーネ！」

スパークマンはアンティーク・ギアナイトの槍に貫かれて破壊される

「ぐっ・・・そんな効果があるとは・・」

キラＬＰ４０００→３５００

「ターンエンドなノーネ」

「俺のターン！ドロー、クレイマンを守備表示にしてターンエンド」

Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン

ＤＦＥ２０００

粘土でできたＨＥＲＯが現れ防御の体制をとる

「わたくしのターン！ドローニョ、私は古代の機械城の効果でこのカードを生け贄にするノーネ、必要な生け贄の数以上古代の機械城にカウンターが乗っていれば生け贄の代わりに出来るノーネ！よって２体分の生け贄を捧げて『古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）を召喚するノーネ」

古代の機械巨人
ＡＴＫ３０００

歯車などのいろんな物でできた機械巨人が現れる

「古代の機械巨人でクレイマンに攻撃なノーネ！アルティメット・パウンド！」

古代の機械巨人がクレイマンに向かって拳を下ろしクレイマンが破壊されそのまま拳がキラまで届いてきた

「貫通能力か」

「そうなノーネ、古代の機械騎士でダイレクトアタックなノーネ！」

「ふぅ・・・ギリギリじゃないか」

「これでターンエンドなノーネ」

キラＬＰ３５００→７００

「俺のターン、ドロー！・・・・・！先生！この勝負は俺の勝ちだ！」

「まだ、分からないノーネ。古代の機械巨人を倒さないと私には勝てないノーネ」

「やってやろうじゃないか！このターン『未来融合フューチャー・フュージョン』の効果により『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』を融合召喚！」

キラの前に十代が使っていたフェイバリットカードのフレイム・ウィングマンが現れる

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン
ＡＴＫ２１００

「手札からマジックカード『Ｏ－オーバーソウル』を発動して墓地に存在する『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のついた通常モンスターのスパークマンを特殊召喚！そして舞台はクライマックス、最高のバトルにしようぜ！フィールド魔法『摩天楼－スカイスクレイパー－』を発動」

「こ・この展開は・・」

キラとクロノスの周りが大きなビルに囲まれた街へと変わりだす

「フレイム・ウィングマンで古代の機械巨人に攻撃！」

「た：確か『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力は１０００ポイントアップするノーネ」

「そのとおりさ！行け！スカイスクレイパーシュート！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン
ＡＴＫ２１００→３１００

ビルの頂上にいたフレイム・ウィングマンが古代の機械巨人に向かって飛び降り炎に包まれ古代の機械巨人を貫いた

「この時フレイム・ウィングマンが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相

手ライフに与える！」

クロノスＬＰ４０００→９００

「（次に何をするのか楽しみになってきたノーネ）」

だが、しかしこの後、誰もが予想出来なかった事が起こる

「そして、手札１枚をコストにして手札から速攻魔法『超融合』を発動！フレイム・ウィングマンとスパークマンを融合させる」

フレイム・ウィングマンとスパークマンの間に大きな渦が出来てフレイム・ウィングマンとスパークマンを吸い込むと同時に突然大きな輝きを放ちだした

「現れよ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン』！」

だが、シャイニング・フレア・ウィングマンが現れることが無く輝きはますばかりで突然キラは体に異変があることに気付いた

「な‥何‥この痣‥‥」

キラの右腕に渦状の痣が出て来て輝き始め、吸い込まれる様に渦の中に吸い込まれて行った

「うわぁぁぁぁぁーー!!!!!」

そして気を失った

キラを吸い込んだ後に輝きは消えキラがいなくなったデュエル場を残すのみだった

―――――――――――――――――――――

『クリリ～ン』

「（何だろうこの声は・・・）」

意識がだんだんと覚醒していって瞼を開けたら目の前にデュエルモンスターズの精霊がいた

「（・クリボー・に似てるけど尻尾にリボンがあるから・・・）・・・クリボン？」

そう呟いた時に直ぐ隣から声が聞こえた

「あっ・・・気がついたのね」

タイムスリップ（後書き）

っというわけでクロノス先生を出してみました！

まぁ、今回だけだと思います・・・

では、また次回に

ネオ童実野シティ（前書き）

アニメで言うと１４話辺りからの話になります

あとアクセス数がパネェっす：目が飛び出そうなくらいパネェっす

感謝感激です、あざす！

「あっ‥‥気がついたのね」

隣に前髪を2つに結んだ少女がいて自分はソファーに寝かされていて自分のさっきまでの状況を整理していてあることに気付いた

「‥‥そうだ!実技試験は!?デュエルはどうなった!?」

ガバッと勢いよく起き上がること少女はビックリして何を言っているのか分からない様子である

「わ‥‥‥わからないわよ‥」

「そうか‥‥んで‥ここどこ?」

デュエル場ではなく家の中にいることに気付いたキラは思った事を聞いてみる

「ここはトップスの最上階よ。いきなりベランダに倒れ込んでたからビックリしたよ」

「トップス？童実野シティじゃなくて？」

「何言ってるの？ここはネオ童実野シティのトップスよ」

ネオ童実野シティという単語に引っかかり頭脳をフル回転して整理していく

「（ネオ童実野シティ？：ネオが付くって事だから：）童実野シティじゃなくて？」

「童実野シティは昔の話よ。今はネオ童実野シティに改名されてる

から」

「（今はネオ童実野シティで、童実野シティは昔の話だから・ここは未来の童実野シティ・・ってところかな）」

「どうしたの？そんなに深刻な顔して、あなたさっきから変よ」

変という単語にグサリとくるが心配している事にありがたみを持っていた

「まぁ、とりあえずありがとう。・・・え～っと・・」

「私は龍可よ」

「ありがとう龍可、俺はキラ、よろしくな」

「うん！」

「ところで何で見ず知らずの俺に警戒心を持たないの？」

会ったばかりなのにあまりキラに対して龍可は警戒心を持ってないように持ってないように見えている

「だって、あなたのカードの精霊が教えてくれるもん。良い人だって・・」

「カードの精霊・か・・・・」

「信じてくれないと思うけど私はデュエルモンスターズの精霊の声を聴ける事が出来るの」

「あぁ・・・例えばそこのクリボンとか？」

龍可の隣にずっといるクリボンに指を指して聞いてみる

「え!?あなたクリボンが見えるの!?」

龍可は驚いているのかどこか嬉しさのこもった声だった

「あぁ、昔からだよ。父さんがそうだったから俺も見えるようになってた」

「そうなんだ」

仲間がいて嬉しそうな笑顔の龍可だった

だが、キラはどうしてここにいるのかを考えているのでいっぱいいっぱいだった

「ところでキラはどこから来たの？」

「信じてくれないとは思うが多分：過去から来た」

「過去？どうやって？」

どうやってここに来たのかは分からないが今日自分の身に起きた事：デュエルアカデミアの実技試験のデュエルの真っ最中にここに来たのを話してみた。だが、痣の事は忘れていた

「どう？信じられるか？」

信じてはくれないだろうと思っていたがキラの考えとは逆だった

「私は信じるよ。それにこのデュエルディスクは古いタイプだから」

机の上に置いてあるキラのデュエルディスク（十代が使っていたレッド寮専用のデュエルディスク）を見て言った

「ありがとう。ところで龍可の両親は？」

「私の両親は今は出掛けていて帰って来ないの。でも、私の双子の兄の龍亞っていうんだけどいつも一緒に居てくれるの。今は友だちと一緒にダイモンエリアに行ってて居ないけど」

両親の話になると暗い顔になるが龍亞の話になると嬉しそうな顔であった

「それはそうとキラは大丈夫なの？」

「大丈夫…と言うと？」

「過去から来たって事は住むところよ。ＩＤカードも無いと思うし」

「確かにマズいな‥警察に見つかったら何も言い訳出来ないしな」

予想通りだと思っていたようにキラにとっては予想外の事を口にする

「だったらここに居てよ！ね！」

「助かる話だけど‥さすがにそれは‥あと龍亞って子の意見も聞かないと」

「大丈夫よ。龍亞なら絶対良いって言うから」

「まぁ、直接聞いてみよう。それとネオ童実野シティの事を教えてくれないか？」

この後はネオ童実野シティがどんな場所か、トップスの事、ダイモ

ンエリアの事、そしてサテライトの事など様々な事を聞けたことによりネオ童実野シティの事がキラには少しは理解出来た

そうこう話をしているうちに外の景色がだんだんと茜色に染まっていった

「もうそろそろ龍亞が帰って来ると思うわ」

龍亞が帰って来ると言った瞬間に玄関のドアが開いて1人の少年が飛び出して来た

「ただいま～！ねぇ～龍可聞いて聞いて！さっき遊星に会ってそれに魔女にも会ったんだよ！」

龍亞が帰って来た途端に騒がしいと思うキラだった

「お帰り、良かったじゃない。それで、魔女とデュエル出来たの？」

「いや～それがやっぱり怖かったんだよ～・・・ってこの人誰？」

今気付いたのかキラに指差して誰と龍可に聞いてみる

「この人はキラって言うのちょっと訳有りで困ってるのよ」

「訳有りって？」

「キラはちょっとした事があって過去から来てしまったんだけどＩＤが無いから住む場所やセキュリティにことやらいろいろよ」

「え！？過去から来たの！？」

「あぁ、過去から来たのは本当の事だよ」

「嘘だ～、そんな話信じられるかよ～。龍可はそんな話信じてるの？」

「うん。信じてるよ」

「だよな～信じられないよな……って…え??」

龍可の事だからそんな話を信じて無いって思っていた龍亞とは反対の意見だったから龍亞は驚きを隠せずポカンとしている

「それで、ここに住まないかって話なんだけど…良いよね龍亞?」

「…ちちちょっと待ってよ!過去から来たって信じられないでしょ!」

「ううん、私はキラを信じてる。それに私と同じでキラは精霊の声が聴けるのよ。だから嘘を言ってない」

「だ‥だだだったら俺とデュエルだ！もし、お前が勝ったらお前の話を信じてここに居て良い、だけど俺が勝ったらお前の話を信じない！」

キラの事を信じてる龍可に納得がいかない龍亞は条件を付けてデュエルを申し込む

「なんか、凄く嫌われてるみたいだけど‥」

「大丈夫よ！それと絶対に勝ってね！」

満面の笑みで応援してくれる龍可に「わ‥わかった」としか言えないキラと敵意むき出しの龍亞だった

ネオ童実野シティ（後書き）

会話文多い事に気が付いた今日この頃・・・

何故か三人称で話を進めると会話文は多くなってしまう自分です

背景描写をなかなか上手く書けない自分が情けないです・・・

次回はキラＶＳ龍亞のデュエルです！

E・HERO　ゼクス（前書き）

今回はオリカを出します！

あとモンスターの効果はアニメの効果にしています

E・HERO　ゼクス

ベランダに出てキラと龍亞は距離をとって向かい会うようにして立っていた。そして、デュエルディスクを腕に装着した時に

「うぉ！やっぱりカスマタイズされてるからかなり軽いじゃん！」

「朝も言ったでしょ。カスマタイズじゃなくてカスタマイズよ」

「あはは・・そうだっけ・・」

龍亞の言葉の間違いに呆れる龍可である。そしてデッキをセットした時にキラは目を疑った

何故なら龍亞のデッキが勝手にシャッフルされている

「え?‥‥何そのハイテクなデュエルディスク‥?」

「何って‥普通のデュエルディスクだけど」

「すっげー!未来のデュエルディスクはそんなことも出来るんだ」

訳が分からないと言いたげな顔をする龍亞である。だが、逆にキラが手でシャッフルしていることに龍亞は驚く

「何で手でやってるのさ?デュエルディスクにはめたら勝手にシャッフルしてくれるのに」

「いや‥俺のはそんなにハイテクじゃないんだよ」

「は‥‥はぁ‥‥」

お互いに準備が出来てデュエルディスクを起動させる

「「デュエル！」」

龍亞ＬＰ４０００
キラＬＰ４０００

「先行は俺からいくぞ！ドロー！シャッキーン！俺は『Ｄ・ラジカッセン』を守備表示で召喚！そしてカードを１枚セットしてターンエンド」

Ｄ・ラジカッセン
ＤＥＦ４００

「条件の事はともかく、楽しいデュエルにしようぜ。俺のターン、ドロー！俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ』を召喚！」

E・HEROの紅一点のバーストレディが現れる

E・HERO　バーストレディ
ATK1200

「おぉ！HEROデッキか！」

「バトル！バーストレディでラジカッセンに攻撃！『バーストファイア』！」

ラジカッセンに向けて火球を投げつけるがラジカッセンは破壊されなかった

「残念でした～、D・ラジカッセンが守備表示の時、自分フィールド場の『D（ディフォーマー）』と名の付くモンスターが攻撃対象に選択された時、1ターンに1度だけ戦闘を無効に出来るんだ」

「なるほど、だから破壊出来なかったのか・カードを1枚セットし

てターンエンド」

「よ〜し！こっから俺のディフォーマーデッキの反撃だ！ドロー！俺は『D・ボードン』を攻撃表示で召喚だ！そしてD・ラジカッセンを攻撃表示に変更！シャキシャッキーン！」

キックボードが現れると同時にボードンとラジカッセンが変形していって人型に変形した

D・ラジカッセン
ＡＴＫ１２００

D・ボードン
ＡＴＫ５００

「かっけー、面白いじゃん」

「だろだろ！だが、格好いいのは見かけだけじゃないんだぜ！ボードンの効果！ボードンが攻撃表示で存在する限り自分のフィールド場の『D（ディフォーマー）』と名の付くモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃が出来るんだ！ボードンとラジカッセンでダイレクトアタック！」

ボードンとラジカッセンがバーストレディを通り越してキラに攻撃をしてきた

キラＬＰ４０００→２３００

「まだまだ行くよ！ラジカッセンは攻撃表示の時１度のバトルフェイズに２回攻撃が出来るんだ！ラジカッセンでもう一回ダイレクトアタック！」

キラＬＰ２３００→１１００

「くっ・・・ここまで減らされるとは・・」

「今日の俺絶好調じゃん！勝てるんじゃない！？勝てるんじゃないかな！？俺！」

大きく叫ぶ龍亞に龍可は呆れていた

「はぁ…まだわからないわよ。とにかくターンエンド？」

「おう！エンドエンド、どっからでもかかって来なさい」

「んじゃあ、遠慮なく行かせてもらうぜ！俺のターン、ドロー！『E・HERO スパークマン』を召喚！」

E・HERO スパークマン
ATK1600

「バトルだ！バーストレディでボードンに攻撃！」

「待ってました！罠カードオープン！『ディフォーム』を発動！」

ボードンの表示形式が守備表示になりバーストレディが突然攻撃を止めた

「ディフォームは自分フィールド場の『D（ディフォーマー）』と名のついたモンスターが攻撃対象になった時、攻撃モンスター1体の攻撃を無効にして攻撃対象に選択された『D（ディフォーマー）』のモンスターの表示形式を変更するんだ！ボードンが残っていて次のターンモンスターを出せばダイレクトアタックで俺の勝ちじゃん！」

「まだ俺が負けるとは決まってないぜ。スパークマンでラジカッセンに攻撃！『スパークフラッシュ』！」

龍亞ＬＰ４０００→３６００

「ふん、そんな攻撃痛くも無いね。ターンエンドかい？」

「いや、まだだ！リバースカードオープン！『超融合』を発動！手札1枚をコストにしてフィールド場のバーストレディとスパークマンを融合して『Ｅ・ＨＥＲＯ　ボルテック・フレア』を融合召喚」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ボルテック・フレア
ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１７００
炎　戦士族　星６
融合　効果
『Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ』＋『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』
このカードが戦闘によって相手モンスターをバトルによって破壊した場合次の相手のターンのエンドフェイズまで破壊したモンスターの攻撃力分このモンスターの攻撃力が上がる

「げげ！これじゃあボードンが破壊されるじゃん！」

「続けてバトルだ！ボルテック・フレアでボードンに攻撃！」

ボルテック・フレアの攻撃によってボードンが破壊された

「そしてこの時ボルテック・フレアの効果が発動される。このカードが相手モンスターをバトルで破壊したとき破壊したモンスターの攻撃力分ボルテック・フレアの攻撃力に加える」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ボルテック・フレア
ＡＴＫ２４００→２９００

「あぁ～！もう絶望的だぁぁ！！」

「はは：ターンエンド」

「畜生：もう駄目かな：ドロー：：：！きたきたきたきたきた～！へっへ～とっておきのモンスターをこのターンで出してやる。チューナーモンスター『Ｄ・スコープン』を召喚！スコープンが攻撃表示の時１ターンに１度手札からレベル４以下のディフォーマーを特殊召喚出来るんだ！だから『Ｄ・ラジオン』を特殊召喚！」

龍亞の場に顕微鏡のモンスターとラジオのモンスターが現れる

「レベル４のラジオンにレベル３のスコープンをチューニング！世界の平和を守るため、勇気と力をドッキング！シンクロ召喚！愛と正義の使者『パワー・ツール・ドラゴン』」

4＋3＝7

龍亞のエースモンスターのパワー・ツール・ドラゴンが現れる

「そしてパワー・ツール・ドラゴンは1ターンに1度デッキからランダムに1枚装備カードを手札に加える事が出来るんだ！」

だが、キラは今の状況を理解出来ていなかった

「ち・ちょっと待て！シンクロ召喚って何だ？」

「え？何って・シンクロ召喚を知らないの？」

「あぁ・知らない」

「う～ん・説明が面倒だから、龍可！説明よろしく」

「もう・・・とりあえずシンクロ召喚っていうのは・・・まぁ、モンスターとモンスターを融合無しで融合みたいな形よ、そのかわりチューナーと呼ばれるモンスターが必ず1体いないと駄目なの。例えばさっきの龍亞の場にいた『D・スコープン』がチューナーなの。んで、チューナーのレベルの数とチューナー以外のモンスターのレベルを足してシンクロ召喚が出来るの。だけどチューナーとチューナー同士ではシンクロは行えないのよ。そしてシンクロした時にエクストラデッキ・・まぁ、キラには融合デッキと言った方が良いかな・融合デッキからシンクロモンスターを特殊召喚出来るのよ。あと例外もあるけどね」

「なるほど・融合デッキは今はエクストラデッキなんだ・んで、あれがシンクロモンスター」

「ま、そんなとこよ」

龍可の説明によりキラは今のマスタールールを理解することが出来た

「そろそろ続けて良いよね？」

「あっ…あぁ、どうぞ」

「パワー・ツールの効果より装備カードをランダムにドロー！……ヨッシャ！『ダブルツールＤ＆Ｃ』をパワー・ツールに装備！このカードは自分のターンの場合装備モンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする。」

パワー・ツール・ドラゴン
ＡＴＫ２３００→３３００

「パワー・ツールでボルテック・フレアに攻撃！この時ダブルツールＤ＆Ｃの効果も発動される。装備モンスターの攻撃対象となったモンスターの効果は無効化される！」

「何！？」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ボルテック・フレア

ＡＴＫ２９００→２４００

「行けー！『クラフティブレイク』！」

パワー・ツール・ドラゴンの装備がドリルとカッターに変わりドリルわ回転させてボルテック・フレアに突き刺しボルテック・フレアは破壊される

キラＬＰ１１００→２００

「危ねぇ危ねぇ：ギリギリじゃないか」

「へっへ～んどうだどうだ！？もう俺の勝ちじゃん！ターンエンド」

「龍亞は調子にのりすぎよ：まだ終わってないからわからないよ」

「いや、でもだってあいつのフィールドには何も無く手札があるだ

けだよ」

「いいや・フィールドと手札が全てじゃないんだ。このドローで全てを覆すかもしれないぜ」

「やれるもんならやってみろ」

「ドロー・・・あと1つ言っておく。墓地も活用出来るんだ！墓地に存在するネクロダークマンのモンスター効果を発動！このカードが墓地にある時1度だけ『E・HERO』と名の付くモンスターをリリース無しで召喚出来るんだ。舞台はクライマックスに突入したぜ！エースの登場だ！『E・HERO ゼクス』を召喚」

E・HERO ゼクス
ATK2500 DEF2000
闇 戦士族 星7
通常モンスター

キラのフィールドにゼクスと呼ばれる仮面とベルトを付けたヒーローが現れる

「か・・・格好いい・・じゃん・・・・っていつの間にかネクロダークマンを墓地に送ったのさ！？」

「あぁ！超融合を使った時にコストとして送ったのね」

龍可は超融合を使った時の記憶でネクロダークマンを墓地に送ったのを思い出した

「そういう事さ」

「でも、パワー・ツールは装備カードを墓地に送る事で破壊を無効に出来るんだから！」

「このターンで終わりにするさ。マジックカード『Ｈ－ヒートハート』を発動、ゼクスの攻撃力を５００ポイントアップすることが出来る」

E・HERO　ゼクス
ATK2500→3000

「それでもまだ俺のライフには届かないよ」

「これでとどめさ！マジックカード『ラスト・アタック』を発動、『ゼクス』と名の付くモンスターの攻撃力をこのターン2倍にする事が出来る。だけどエンドフェイズ時にはこの効果を受けたゼクスは破壊されるけどね」

「攻撃力3000の倍だから…攻撃力6000！？」

「これで終わりだ！ゼクスでパワー・ツールに攻撃！必殺『ラスター・オブ・キック』！」

空に高く跳躍したゼクスはパワー・ツール・ドラゴンに向かってキックをした

「うわぁぁ～～！」

龍亞ＬＰ３６００→０

「う・・・うぅ・負けた・・」

「ほら・龍亞！泣かないの！」

泣きそうになっている龍亞に慰める龍可である

「諦めない気持ちが大切だ。デッキを信じればデッキは応えてくれるさ」

キラの言葉に反応したように龍可と龍亞がキラを向く

「・・・え・それって・・」

「うん・・昨日のあの人が言ってたのと同じ人ね」

「昨日の人？」

「昨日下に倒れてる人がいてその人と龍亞がデュエルしたときに龍亞が負けた時にキラと同じ事を言ったのよ」

「へぇ～良いことを言う人なんだ」

「それはキラも同じよ」

褒められた事に嬉しさなのか恥ずかしさなのか顔を赤くしてそらすキラだった

「キラが勝ったからキラはここに居て良いんだよね？」

「あぁ！男に二言は無いさ！いつまでもここに居ろ！そして俺とデュエルしろー！！」

龍亞が高々と叫んだ時に外は段々と暗くなっていた

「ありがとう。これからお世話になるよ」

その後はご飯なり風呂なりデュエルだったりしたが龍亞の全戦全敗だった

E・HERO　ゼクス（後書き）

：龍亞が・・・悪役っぽい・・・・

なんかスミマセン：

漫画版のＨＥＲＯも今後出していきたいと思います

大会1日前（前書き）

何故か更新が出来てしまっている今日この頃・・

１４話と１５話には日にちがあったという設定にしています

大会1日前

キラと龍亞がデュエルをした次の日の朝。キラはあまり眠れなく布団から起き上がった。ふと横を見ると幸せそうな笑顔で寝ている龍亞の姿だった

リビングの方へ足を運んで自分がこの世界に来る前の日の事を思い返していた

「（確か：審査員の先生とデュエルしていてフレイム・ウィングマンとスパークマンを融合した時にこの世界に来たんだよな：）」

キラが実技試験の日に使ったカードは未来融合と攻撃の無力化（発動出来なかったけど）とオーバーソウルとフェザーマンとバーストレディとスパークマンとクレイマンとフレイム・ウィングマン：：：そして超融合：

「：：：そうだ：腕の痣：」

袖を捲り上げて右腕を確認したが痣は無かった。もう訳がわからなくなり溜め息を吐くしかなかった。

そして部屋を見渡してみるとある物に目が止まった

それはジャックとレッド・デーモンズのフィギュアだった。目を下にやると招待状のような物

中を開けて見てみるとフォーチュンカップの招待状だった

「デュエルの大会なんだ‥！」

招待されているのが龍可であることにビックリだった

「（龍可ってデュエル強いんだ‥）」

そんな考えごとをしていると龍可と龍亞がリビングに集まっていた

「おはようキラ。何見てるの？」

「おはよう龍可、龍可は大会に出るんだ？」

「あぁ！フォーチュンカップの招待状ね。私は出ないわよ」

「勿体無いよな～：でも龍可が出ない代わりに俺がフォーチュンカップに出るんだ！あっそれとおはよう！」

「おはよう龍亞、んでも龍亞は招待されてないけどどうやって出るの？」

昨夜の連続のデュエルで龍亞の警戒心を少しは解かれていた

「俺が龍可に変装して出場するんだ！顔が似てるからバレないし」

「絶対に似てないわよ！」

「（顔が似てるとか似てないかじゃなくて性格で男の子とバレるんじゃないかな）」

龍亞と龍可がいがみ合っているときに龍亞が何かを思い出しように話を代えた

「そういえば遊星もフォーチュンカップに出るんだよ！」

「遊星も？どうして？」

「俺も昨日知ったからね。まぁ、遊星が選ばれて当然だよね！」

「その：遊星って人って？」

「昨日のデュエルで龍亞が負けた時にキラと同じ事を言った人よ。
一昨日の夜中か昨日の朝に出て行ったけどね」

キラは遊星に少し会いたくなっていた

「んで、遊星って人は強かったんだ」

「うん！すっげー強かったんだよ！」

「龍亞はこてんぱんだったけどね」

痛いことを言われたのか「うっ：」と声をあげる龍亞だった

「フォーチュンカップは明日だから…龍亞と龍可は行くんだ？」

「おう！行くけどキラは行かないの？」

「いや…さすがに外に出るのは……もしセキュリティに捕まると大変な事になるだろうし…」

「きっと大丈夫よ！それに街の中も一応理解していた方が良いと思うから」

よくよく考えたら確かに龍可が言っていることは間違ってはいなかったが多少の危険性があるのだが…

「ねぇ、行こうよ行こうよ！」

と龍亞も言うので「わかった」としか言えなかった

その後は龍亞のデッキ調整や龍亞と龍可の変装ともしもという場合のためのキラの変装の話をしていた

大会1日前（後書き）

なんかネタ切れになって更新が遅くなるだろうと思うと・・・

ダークシグナー編までは考えてはいるんですがその後が・・

フォーチュンカップ開幕（前書き）

演説や解説だけで文章が長すぎる・・・

今回でフォーチュンカップが始まります

フォーチュンカップ開幕

今日はもうデュエル・オブ・フォーチュンカップの日。キラと龍可と龍亞の3人は変装の準備をして龍可と龍亞の友だちである天兵との待ち合わせ場所であるスタジアムに行っていた

スタジアム前には観客がたくさん並んでいたので天兵を見つけるのは大変である

「天兵のやつどこにいるかな～」

「ねぇ、待ち合わせって具体的にしなかったの？」

「スタジアム前に集合ってだけ～」

「スタジアム前って…この観客の多さの中で探すのは大変だな……」

スタジアムの入り口まで行ってみると龍亞が大きく叫んだ

「あ！おぉ～い！！天兵～！」

天兵と呼ばれる少年はこっちに気付いたのか手を振りながらキラ達の所に向かってきた

「龍亞！龍可！遅かったじゃないか。何やってたの？」

サスペンダーに蝶ネクタイとメガネが特徴的な少年だ

「龍亞がね。ここに来る前に私になりすますために『化粧品を持って行く！』って言い出してその準備で遅くなったの・・いらないのに・・」

「あははは・・そうなんだ・・ところでこの人は？」

「この人はキラだよ。今訳あって俺達の家に居候してるんだ」

「まぁ、そんな訳だ…よろしく」

「僕は天兵、よろしく」

軽く自己紹介をしたところでスタジアムの中に入り龍亞と龍可と天兵は控え室に行ってキラは「席取りをしておくよ」と言って分かれた

龍亞は更衣室で着替えて龍可達の所に戻ると遊星と矢薙のじいさんと氷室がいた

「どう?遊星、龍可にそっくりでしょ?」

「さすがは双子、全然わからんよ」

龍亞の変装を褒める矢薙のじいさんであるが龍可は納得のいかない顔をしてそれを苦笑するしかない天兵であった

「じゃあ遊星~そろそろ行きましょうか~」

「あぁ」

集合時間もそろそろなのか2人は行ってしまうがここで遊星は思った事言った

「龍亞:化粧はやめた方が良い」

「あぁ：やっぱり～？」

「俺たちもそろそろ行こうか」

「キラが席を取ってるからそこに行きましょ」

「キラってのは龍可ちゃん達の友だちかい？」

「うん、そうだよ。って僕はさっき会ったばかりだけどね」

龍可達は客席の方へ足を運んでいった

キラはぼんやりと会場内を眺めていると龍可達が来たことに気付いたが見知らぬ男が2人いるので誰だろうと思っていた

「キラありがとね」

「あぁ、どう致しまして。んでこの人達は？」

「この人達は遊星の仲間で矢薙のおじいさんと氷室さんよ」

矢薙のじいさんは右目のちょっと下にマーカーがあり氷室には両頬にマーカーがある人だ

「あんたがキラってのかい？よろしくな」

自己紹介をして大会が始まるのを待っていると時間になったのかMCと呼ばれる長いリーゼントの男性が現れ司会を始めた

「Ｅｖｅｒｙｂｏｄｙ　ｌｉｓｔｅｎ!デュエル・オブ・フォーチュンカップ!ついに開幕だ!!」

観客もやっと始まったか…ってな感じで声を張り上げていた

すると会場の真ん中にレッド・デーモンズ・ドラゴンとライティング・デュエルの入場コーナーからDホイールに乗ったジャック・アトラスが現れた

すると観客席から黄色い声で「「アトラス様～」」と言っていた

そして、舞台の真ん中でDホイールから降りるとこう叫んだ

「キングは1人!この俺だ!俺とデュエルするのは誰だ!?」

とジャックが言った後にＭＣが解説したあとにデュエルフィールドが開いてしたから８人のデュエリストが現れて１人１人モニターに映っていると１人の男が映ると観客から声が消えた

左頬に大きなマーカーが付いている遊星だった

「おい、マーカー付きがいるぞ？」

「あんなやつ選ぶくらいなら俺らを選べよな」

などなどブーイングの嵐だった

「あの人が遊星よ」

と龍可が教えてくれるのでキラにとってはわかりやすかった。

ブーイングの嵐の中当の本人は気にしてない様子だ

だがＭＣはどうすれば良いかと慌てていたが１人の男がＭＣからマイクを奪い取り語りだした

「お集まりの諸君！私の名前はボマー、ここに立つデュエリストとして諸君が何を見ているのか問いただしたい！」

観客は皆静かになりボマーの話を聞いていた

ボマーが遊星に指を差してまた口を開いた

「彼は我々と同じ条件で選ばれた紛れも無いデュエリストだ！マーカーが有ろうが無かろうがカードを持てば皆同じだ。この場に立っていることに何ら恥じる事はない。寧ろくだらぬ目で彼を見ている諸君の言葉は暴力に他ならない！」

突然拍手が起こりこの場をまとめることが出来たのだった

その後は治安維持局長官の演説やＭＣからの本大会の説明があった
後トーナメントの発表があって第１試合目の準備に取りかかっていた

龍亞の相手はボマーで遊星の相手は死羅という男だった

―――――――――――――――――――――――――

とある部屋のソファー腰掛ける治安維持局長官、レクス・ゴドウィンに後ろに立っている治安維持局特別調査室室長のイェーガーが話かける

「全て準備は完了しています。シグナーが揃うのも時間の問題でしょう。ヒッヒッヒッ」

そしてパチンと指を鳴らすとモニターが現れ海馬コーポレーション

のモーメント研究開発部員の阿久津が現れる

「おぉはよ～ございます。こちらの準備も全て整っております。後は存分にデュエルを行ってもらうのみ！シグナーの反応は巨大モォォーメントを通し、ここにございます・・・名付けて：Dセンサーによって感じちゃうのでございま～す。スタジアムに取り付けたセンサーにより、デュエルによって高まるシグナーの反応を漏らさず捕らえることが出来ます！」

「後は頼みましたよ」

それだけ言ってゴドウィンは部屋を出て行った

フォーチュンカップ開幕（後書き）

次は龍亞対ボマーです

アニメ通りに多分やると思います：

第1試合　龍亞ＶＳボマー（前書き）

アクセス数が１万を突破！！

涙の感謝ですよ！

読んでくださってる皆さん！ありがとうございます！

第1試合　龍亞ＶＳボマー

「さぁあ！第１試合のデュエリストの紹介をしよう！おそらく全世界の子供達が彼女を羨ましく思っているだろう！参加最年少、舞い降りたデュエルの天使、ミス龍～可ちゃ～ん！」

ＭＣの紹介によりデュエルフィールドに現れる龍可（龍亞）に観客からの声で盛り上がっている

「龍可はデュエルの天使なんだ」

「別にそんなんじゃないわよ」

少しからかいを入れるキラだが恥ずかしいのかすぐに否定された

そして龍亞の反対の所からボマーが現れた

「対するは先程の熱い言葉が印象的だ！黒き暴風！ボマー！」

デュエルはスタンディングで行われるらしい。龍亞とボマーは握手をする

「俺さっきのおじさんの話、すっげー感動したよ！デュエリストに悪い奴なんていないって言うけど本当だよね！」

「女の子と聞いていたがボーイッシュなんだな」

これは随分痛い事を言われ慌て出す龍亞である

「お：俺男の子みたいだって言われるけど、一応お・ん・な・の・子・ね」

色気づくような行動に氷室とキラと天兵は顔に手を当ててため息を

吐き、龍可は「あんなの‥私じゃない‥」と怒っている様子だ

デュエルの時間になり両者はデュエルディスクを起動した

「「デュエル」」

龍亞ＬＰ４０００
ボマーＬＰ４０００

先攻であるボマーから始まった

「私の先攻だ。ドロー、手札からマジックカード『スターブラスト』を発動」

「良いよ良いよ、どんどん発動しちゃってよ」

「このカードはライフを５００ポイント払うことで選んだモンスターのレベルを１つ下げる事ができる」

「ライフを削る？何で？」

ボマーＬＰ４０００→３５００

「手札の『サモン・リアクター・ＡＩ』のレベルを5から４に下げて攻撃表示で召喚」

アドバンス召喚に必要なリリースを無しにするためにレベルを下げて召喚するのだった

サモン・リアクター・ＡＩ
ＡＴＫ２０００

「げっ！・・・いきなり攻撃力２０００かよ・」

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「（いきなり攻撃力２０００はきついけどカード信じてデュエルをするだけだ）俺のターン、ドロー！おぉ！いきなり来たぜ！『Ｄ・モバホン』を攻撃表示で召喚」

Ｄ・モバホン
ＡＴＫ１００

携帯が現れ人型へと変形した

「おじさん！俺のディフォーマーデッキの凄さを見せてあげるね！」

「その前にサモン・リアクターの効果を発動させてもらおう。サモン・リアクターは相手の召喚に反応し相手プレイヤーに８００ポイントのダメージを与える」

「うわぁあぁ！」

龍亞ＬＰ４０００→３２００

「やるねおじさん。でも俺のディフォーマーも負けないからね」

「（そうだ、もっとたぎるが良い。俺に牙をむけ）では、君のディフォーマーの力とやらを披露してもらおうか」

「おぉう！言われなくてもやってやる！」

もう完全に自分が龍可のふりをしていることを忘れている龍亞に龍可はストレスを溜めるばかりだった

「モバホンのモンスター効果いっくよー！『ダイヤル・・・オ～ン』！モバホンが攻撃表示の時ダイヤルに表示された数字分デッキからカードを引いてその中にレベル４以下のディフォーマーなら特殊召喚が出来るんだ」

モバホンのダイヤルの1~6がランダムに点滅していって2が光った

「よっしゃ！2だ！来た！『D・ラジカッセン』を守備表示で特殊召喚だ！カードを1枚伏せてターンエンド」

D・ラジカッセン
DEF４００

龍亞はエンド宣言をした後、手札のカードを見つめてニヤニヤしていた

巨大モーメントの近くでシグナーの反応があるかパソコン画面を見ているが何の反応が無いことに不満を漏らす阿久津だった

「うぅ～ん…反応無しですか…ではもっと強くスキャンして見ましょうか」

この時、龍可とキラが突然頭に異変を感じた

「どうしたの？」と聞かれても「うん…ちょっとね…」と答えるだけだった

ターンはボマーのターンに移りカードを引く

「私のターン、ドロー！手札から『トラップ・リアクター・ＲＲ』を攻撃表示で召喚。では行くぞ、トラップ・リアクターでモバホンに攻撃」

トラップ・リアクター・ＲＲ
ＡＴＫ８００

「待ってました！罠カード『ディフォーム』キラーン！この効果でモバホンを守備表示にしてモンスターの攻撃を無効にするんだ！」

モバホンに向かって攻撃をしようとしていたトラップ・リアクターは攻撃を中断した

「多少はやるな・だがこちらもトラップ・リアクターの効果を発動させてもらおう」

「え？」

「トラップ・リアクターは相手のトラップに反応し、相手に８００ポイントのダメージを与える！行け！」

トラップ・リアクターからマシンガンが放たれ龍亞にダメージを与えた

龍亞ＬＰ３２００→２４００

「冷たたかなデュエルをする男だな・龍亞を乗せてはライフを削る。龍亞に対するプレッシャーは高まるばかりだ」

氷室の言うとおりである。龍亞はライフを削られピンチになるのだった

「ぐぅ・・まだまだ・・」

「（そうだ‥たぎれ‥お前のデュエルはこの程度では無いはずだ、竜の力で私を倒してみろ！）」

――――――――――――――――――――――――

再び場所は変わって阿久津の場所、全く反応を示さないことが不満だった

「うぅ～ん‥全く反応が起きませんか‥うん！？」

だが、この時わずかに反応があった

――――――――――――――――――――――――

「まだまだこれで終わりじゃないぞ。もう1度バトルだ！サモン・リアクターでラジカッセンを攻撃！『サモンリアクト』」

サモン・リアクターのプロペラから竜巻を起こし、それをラジカッセンに放つがかき消された

「な‥何！？」

「へっへ～ん、守備表示のラジカッセンはバトルを1ターンに1度だけ無効に出来るんだぜぃ！」

「ならば、罠カード『自虐召喚』を発動、自分のモンスターが相手を破壊出来なかった時ライフを８００ポイント払い、手札のレベル４以下のモンスターを特殊召喚できる」

ボマーＬＰ３５００→２７００

「またライフ削って特殊召喚を？」

「手札から『マジック・リアクター・ＡＩＤ』を特殊召喚！３度目のバトルだ。マジック・リアクターでラジカッセンに攻撃！『フレイム・エイド』」

マジック・リアクター・ＡＩＤ
ＡＴＫ１２００

マジック・リアクターからミサイルが放たれラジカッセンは破壊された

「あぁ！ラジカッセンが：」

「カードを１枚伏せてターンエンド」

「（やっとターンエンドか：でもモバホンは残せたからね。これがあればガジェット・トレーラーが召喚出来る：逆転してみせるぞ）」

自分に夢を見るようなデュエルをしている龍亞にボマーがプレッシャーをかけてきた

「随分楽しそうだが君は己のピンチをわかっているのか？」

「え？」

「私の場に3体揃ったリアクターシリーズ。サモンとトラップのダメージによりお前はライフを削られている。となれば当然マジックにも同様の効果がある、そうは読めないか？」

「（・・・そうか！俺が魔法を使えばマジック・リアクターが俺にダメージを・他の2体も召喚やトラップを発動すればダメージになる・・ヤバい！）あぁ！？」

ここまで考えて1つの結論に辿り着いた

「そう…デュエルに必要な召喚、トラップ、マジックを君はこの後も続けるだろう、さればライフを失うばかり、すなわちもう私が何をせずとも君は自分のデュエルによって負けるのだ」

「あ……あぁ…あぁ……」

どんどんと龍亞の精神が追い詰められ弱気になっていっている

――――――――――――――――――――――――――――――

「ボマー君は良い仕事をしてますがね…驚く程無反応です」

目を回しながらモニター越しのイェーガーに伝える

「あの少女に力が宿っている事は調査済みです。問題はシグナーと力のリンク、十分に注意を」

「はっ・・・承知致しましております故にお知らせが・・客席にて僅かな反応を2つキャッチ致しました」

「客席？フィールドでは無いと？それに2つ？」

「奇妙奇天烈な話で御座いますが・・」

―――――――――――――――――――――――――――――――

キラと龍可の頭に感じるモヤモヤは酷くなるばかりである

「大丈夫？医務室に行く？」

「違うの‥病気とかじゃなくて‥」

――――――――――――――――――――――――

「（俺が何かをする度に８００ポイントライフを削られる‥この時遊星ならどうする？‥ううん、遊星なら‥）カードを信じるよ！」

「（ここまで来てようやくたぎり始めたか‥それで良い！牙を向けろ！）」

「俺も自分のカード達を信じるよ！次のターンで勝負を決めるよ！俺のターン、ドロー、モバホンのモンスター効果！『ダイヤル‥オ～ン』、守備表示のモバホンは出た目の数だけデッキをめくり、確認してからデッキに戻すんだ」

モバホンのダイヤルがまたランダムに点滅していって３が光った

「出たのは3だ…」

めくって1枚目がマグネンUで2枚目がガジェット・ボックス、そして3枚目がチャッカンだった

「（ディフォーマーシリーズが続いているな…まだチャンスはある！）モバホンを攻撃表示に変更！シャキーン！もういっちょ！『ダイヤルオ～ン』」

そしてまた攻撃表示となったモバホンのダイヤルが点滅していった

「（俺が勝つにはここでチャッカンを出すしかない！…3以上よ出てくれ！」

点滅したのは5だった

「よっしゃ！来たぜ！『D・チャッカン』を攻撃表示で特殊召喚！

ドーン！」

観客もだんだんと盛り上がるばかりだがＤセンサーもまた強くなるばかりでキラと龍可は気分が悪くなっていた

―――――――――――――――――――――

「やはり！客席に反応有り！」

反応があったことに阿久津は喜んでいた

―――――――――――――――――――――

「サモン・リアクターの効果のモンスター効果を発動、プレイヤーに８００ポイントのダメージだ！」

サモン・リアクターが龍亞に竜巻を放ち龍亞のライフを削った

「うわぁあ！」

龍亞ＬＰ２４００→１６００

龍亞のライフが削られ敗北へとだんだんと近づいてしまった

「くっ：行くぞ！チャッカンは自分のモンスターをリリースすることで相手に６００ポイントのダメージを与える！モバホンをリリース」

チャッカンから炎が放たれボマーのライフを削った

ボマーＬＰ２７００→２１００

「どうだ！決まったぜ！そしてチャッカンをリリースして『ガジェット・トレーラー』をアドバイス召喚！」

チャッカンの中からガジェット・トレーラーが現れチャッカンが消えた

「へっへ～ん！召喚しても俺にはダメージは無し！サモン・リアクターのモンスター効果は１ターンに１度だけ：でしょ？」

だがまだ安心は出来なかったここで引き下がるボマーでは無いことは承知済みだった

「ガンガン行くよ！手札からマグネンＵをリリース、ガジェット・トレーラーは手札のディフォーマーを墓地に送り攻撃力を８００ポイントアップ！そして手札からマジックカード『百機夜工』を発動！百機夜工は墓地に存在するディフォーマーを全て除外する！」

モバホン、マグネンＵ、ラジカッセン、チャッカンの４体がガジェット・トレーラーの中に入っていく

「これで機械族モンスターの攻撃力は２００ポイントアップする！攻撃力は２９００だ」

ガジェット・トレーラー
ＡＴＫ１３００→２１００→２９００

「マジックカードの発動は君の敗北へと進んでいく、マジック・リアクターの効果を発動！」

またマジック・リアクターからミサイルが放たれた

龍亞ＬＰ１６００→８００

「デュエルにかける魂を見せてみろ！全力でかかってこい！」

「ここまで耐えたんだ！思いっきり行かせてもらうぜ！バトル！ガ

ジェット・トレーラーでトラップ・リアクターに攻撃！『ガジェッティングキャノン・ファイヤー』！」

ガジェット・トレーラーから砲弾が現れ粒子砲をトラップ・リアクターに放った

そして煙に包まれた

「よし！」

この攻撃が決まればボマーへの大逆転が出来るのだった

――――――――――――――――――――――――――――――

「見つけま～した！」

阿久津もまた盛り上がっていた

――――――――――――――――――――――――

「やったか‥？」

「フフフフフ‥‥フハハハ‥‥小さいながらも戦士の誇りをしかと見た‥この攻撃は大いなる価値があった！」

「じゃあ‥ガジェッティングキャノンの攻撃は‥決まった？」

「罠カード‥『デルタ・リアクター』だ」

「ふ‥伏せカード！？」

「デルタ・リアクターはサモン、マジック、トラップの3体のリア

クターを1体ずつ墓地に送ることで発動し、『ジャイアント・ボマー・エアレイド』を特殊召喚する！

龍亞の攻撃は失敗に終わりボマーの強力なモンスターを召喚させてしまった

「ジャイアント・ボマー・エアレイドの効果で手札を1枚墓地に送ることで相手フィールドのカード1枚を破壊する。『デス・ドロップ』！」

ジャイアント・ボマー・エアレイドから爆弾が投下されてガジェット・トレーラーが破壊された

「しまった！！」

「バトルだ、ダイレクトアタックだ！『デス・エアレイド』」

ジャイアント・ボマー・エアレイド

ＡＴＫ３０００

「うわぁあぁ～！！・・あぁ・・」

ジャイアント・ボマー・エアレイドからまた爆弾が投下されて龍亞のライフは０になったのだ

龍亞ＬＰ８００→０

そして龍亞はその場にひざまずいた

「勝者決定だ！！２回戦進出したのはボマー選手だ！！」

「ゴメンよ・・龍可・・遊星・・」

「龍亞・・」

「負けちゃったな‥」

龍亞を心配する天兵と矢薙のじいさんであった

だが、ここで、龍可とキラはモヤモヤが消えたのを感じ取った

「‥変な感じが‥消えた‥」

「でも何でキラと龍可だけだったんだ?」

これが5人にとっての疑問だった

選手控え室に向かっているボマーの前にイェーガーが現れた

「ご苦労様でした・良いデュエルでしたね。ヒッヒッヒッヒッヒッ」

「話が違うぞ、少女と聞いていたがあれはどうみても少年だ」

「それでも、結果には繋がりましたよ。面白い事になってきましたね」

イェーガーが持っていた資料をボマーに見せた

そこに書いてあるのは龍可と龍亞が双子という事だった

―――――――――――――――――――――――――――

「Dセンサーの出力を通常値に戻しました。いかが致しましょうか？反応は明らかにこの少女とそのとなりにいる少年で御座います」

モニター越しに阿久津はゴドウィンに伝えていた

そして：

「やっと来ましたか：シグナーを助ける者が：」

第1試合　龍亞ＶＳボマー（後書き）

大変だった･･ここまで書くのに時間がかかった･･･

次は十六夜アキとジル・ド・ランスボウのデュエルです

第2試合　アキＶＳジル（前書き）

もう何か絶好調です！嬉しさでついつい更新しちゃいました（笑）

第2試合　アキＶＳジル

第1試合を終えた龍亞は着替えて遊星の所に向かっているがデュエルに負けて気を落としていた

「もぉ：負けたからっていつまでもうじうじしないの」

「そうだよ、頑張ったんだからさ」

龍亞を慰める龍可と天兵だがやっぱり負けたことは悔しかったらしい

「でも：」

「次のデュエルに勝てばいい。負けた経験は決して無駄にはならない」

いつの間にか遊星のいる所に着いていた

「遊星こそ負けちゃダメだぜ。俺らは客席で応援してるからさ」

龍亞達の前方から1人の美少女が向かって来て一瞬だけだがすれ違いざまに遊星と睨み合って通り過ぎていった

そして龍可達も客席へと戻って行って席に着いたと同時に第2試合の始まりだった

「さぁ！我らがヒーローの登場だ！誇り高き鉄血の騎士、百戦錬磨のヒーロー、今日はいったいどんなデュエルを見してくれるのか！？ジル・ド・ランスボウ！」

MCの紹介の後にジルが現れ、いきなり剣を抜いてこう言っていた

「我はこの剣に誓う！古の血を引く者としてこのデュエルを必ず制

すと！」

「おぉ！ジル・ド・ランスボウ、早くも勝利宣言だ！」

「凄い人気だね…」

「正義を気取るいけ好かない野郎だが、実力は大したものらしい」

だが、キラは納得がいかなかった

「何かあの人嫌だな…」

「何でさ？かっこよくない？」

「いや、ただ単に俺の考えだけど、『我の前に立つ者は皆悪』っていう感じがするからヒーローとしては嫌いだ…」

「まあまあ・・（そんなこだわりがあったんだ・・）」

キラをなだめる龍可だった

「さぁ！今度は対戦相手の登場だ！経歴、実力ともに未知数の謎の美少女！我々は新たな才能を今！目撃することになるのか！？十六夜アキ！」

アキの登場した後龍亞が「うーん・・あの人どっかで見たような・・」って唸っていたが結局思い出せなかったが龍可はアキのデッキの何かを感じ取っていた

「どうしたの？」

「あの人のデッキ・・何だか苦しそう・・」

そして、客席のどこかでアキのデュエルを見ている謎の男が怪しい笑みをしていた

「（この娘が黒薔薇の魔女か…）小娘だとて容赦はせぬ！騎士のデュエルを見せてくれよう！」

「「デュエル」」

アキＬＰ４０００
ジルＬＰ４０００

「我がターン！ドロー！『マスクド・ナイト　ＬＶ３』を召喚！そしてマスクド・ナイトのモンスター効果を発動！『ペルソナ・ブラスト』」

マスクド・ナイトが現れたと同時にマスクド・ナイトが攻撃してきたがアキは動ずることは無かった

「これにより相手に４００ポイントのダメージを与え、そしてマジックカード『レベルアップ！』を発動！『マスクド・ナイト　ＬＶ３』を墓地に送り『マスクド・ナイト　ＬＶ５』を特殊召喚する。そしてマスクド・ナイトのモンスター効果で相手に１０００ポイントのダメージを与える」

そして再びアキにダメージを与えたが無反応だった

アキＬＰ４０００→３６００→２６００

「我はカードを1枚伏せてターンエンド」

アキは自分のターンを迎える事無く１４００ポイントのダメージをくらっていた

「進化するナイトの恐ろしさ、その身に染みただろう」

だが、アキはさらに無反応で返答もしなかった

「だんまりか…薄気味悪い娘だな…」

続いてターンはアキに移った

「ドロー、『アイヴィ・ウォール』を守備表示で召喚」

最初のターンから防御に徹するのかとジルは馬鹿にしたように笑うがアキのやることは違っていた

「そして手札からマジックカード『偽りの種』を発動。これで手札のレベル2以下の植物族モンスターが特殊召喚可能となる。レベル1のチューナーモンスター『コピー・プラント』守備表示で特殊召喚。コピー・プラントのモンスター効果で相手フィールド場のモンスターのレベルと同じになる」

コピー・プラントの姿がマスクド・ナイト　ＬＶ５と同じになった

コピー・プラント
レベル1→5

「しかし、レベルだけ上げて何をするんじゃ？」

当たり前のように龍亞と天兵が答えた

「「そんなの決まってんじゃん！」」

「シンクロ召喚か？」

「レベル2のアイヴィ・ウォールにレベル5となったコピー・プラントをチューニング」

2＋5＝7

「冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ…開け、シンクロ召喚…現れよ『ブラック・ローズ・ドラゴン』」

ブラック・ローズ・ドラゴンが出現した瞬間、会場に突然突風が巻き起こった

ブラック・ローズ・ドラゴン
ＡＴＫ２４００

「ま…魔女め…早くも正体を表したか！」

魔女という言葉に会場内の人々が騒ぎ出した

「魔女？」

「俺知ってる。あれは仮面の魔女が使うモンスターだ」

「魔女だ！黒薔薇の魔女が現れたぞ！」

会場の人々は魔女だ！魔女だ！と騒いでいた

「魔女よ、お前がどんな切り札を出そうとも、我が鋼の鼓動は微動だにしないぞ！（お前のモンスターなど我が伏せカードの『炸裂装甲』で返り討ちだ）」

アキはジルの目を見て何かを感じ取った

「何だ？その目は？」

「モンスターの効果を発動。ブラック・ローズ・ドラゴンを特殊召喚した時、フィールド場の全てのカードを破壊する。『ブラック・ローズ・ガイル』」

「何！？」

ブラック・ローズが羽を大きく広げると大きな風が起こりフィールド場のカードを全て破壊した

「これが…魔女の力か…」

「カードを1枚伏せ、さらにフィールド魔法『ブラック・ガーデン』」

フィールドが薔薇の庭へと変化していった

「こ…これが魔物の潜む庭か!?」

「ターンを終了」

「魔女の罠に気をつけろ」などなど客席ジルに対しての声援を送っていた

「御声援感謝致します！だが、心配は無用！我がターン、ドロー！」

引いたカードを見てはニヤリとしていた

「手札からマジックカード『戦士の生還』を発動、これにより墓地から戦士族モンスターを手札に加える。『マスクド・ナイト　ＬＶ３』よ再び我の下へ！誇り高き騎士は消えぬ！」

マスクド・ナイトが現れたらブラック・ガーデンから弦が伸びていきマスクド・ナイトを絡めとった

「な！：マスクド・ナイト！？」

「ブラック・ガーデンが発動している間、モンスターの攻撃力は半分となり、自動的に相手フィールド場にローズトークンが召喚される。ここはブラック・ガーデン：モンスターの命を養分に花を咲かせる魔界の花園」

ジルの場のマスクド・ナイトの攻撃力は半分になり、アキのフィールドにローズトークンが召喚される

マスクド・ナイト　ＬＶ３
ＡＴＫ１５００→７５０

ローズトークン
ＡＴＫ８００

「だが、攻撃力は減らされてもモンスター効果は変わらない…無駄な小細工だったな…『ペルソナ・ブラスト』」

再びアキに効果ダメージを与えるが全く動じていない

アキＬＰ２６００→２２００

「ふん！どうだ？」

「罠カード『ドッペル・ゲイナー』発動。モンスター効果のダメージを受けたとき相手に同じダメージを与える」

薔薇の花びらが飛んでくるがジルのデュエルディスクである盾で防いだ

ジルＬＰ４０００→３６００

だが、ジルの頬に傷が出来ていた

「傷だ！」

「本当だ、怪我してる」

「デュエルで傷を負うだと！？」

「魔女よ引っ込めー」などブーイングまで起こり始めた

「その力で相手に現実に傷付ける魔女よ…お前は何者なのだ!?」

「お前達とは違う…」

「魔女よ、その目で何を企む!?カードを2枚伏せてターンエンド」

「ドロー、装備魔法『薔薇の刻印』を発動。これにより相手モンスター1体のコントロールを得る。マスクド・ナイトをこの手に…」

マスクド・ナイトの額に薔薇の刻印が刻まれアキのフィールドに現れてアキが手を差し出すと忠誠の証として跪くのだった

「裏切りの刃の痛みを思い知るがいい。マスクド・ナイト　ＬＶ３でダイレクトアタック」

マスクド・ナイトが剣を振り上げジルに下ろすてジルはとっさの反応で盾で防いだ

ジルＬＰ３６００→２８５０

「ぐ‥ぬぅ‥‥モンスターの忠誠を揺るがすとは‥いかにも魔女らしい邪悪な戦いぶり‥」

「装備魔法『反目の従者』をマスクド・ナイトに装備。このカードは装備モンスターのコントロールが変わった時、プレイヤーにそのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える」

「何だと！？」

「エンドフェイズ、マスクド・ナイトのコントロールがお前に戻る。二心を抱く者の一撃、その身で味わえ」

マスクド・ナイトのコントロールがジルに戻るといきなりジルを斬りつけた

「ぐわぁぁあ！！」

ジルＬＰ２８５０→１３５０

「ぬぅ：我が戦いはここからだ！我は罠カード『レベル・チェンジ』を発動！このカードは相手ターンのエンドフェイズに発動する。自分フィールド場のレベルモンスターを墓地に送りモンスターのテキストに記されているモンスターを召喚条件を無視して墓地から特殊召喚できる！復活しろ！『マスクド・ナイト　ＬＶ５』」

マスクド・ナイト　ＬＶ３を墓地に送ったことにより2枚の装備カードが破壊されるが・・・

「ブラック・ガーデンの効果を発動」

マスクド・ナイトが弦に巻き付かれ攻撃力が半減した後にアキのフィールドにローズトークンが召喚された

「モンスターの召喚により私の場にローズトークンが特殊召喚される。ターンエンド」

「魔女よ！まやかしの庭園に身を隠したところで無駄だ！正義の刃はどこまでもお前を追う！ドロー、そしてこの瞬間、我がマスクド・ナイト　ＬＶ５はレベル７へと進化する！出でよ！『マスクド・ナイト　ＬＶ７』！」

マスクド・ナイト　ＬＶ７の出現により客席から歓喜の声が上がる

「ブラック・ガーデンの効果を発動」

また弦が伸びていきマスクド・ナイトに絡めとった

マスクド・ナイト　ＬＶ７
ＡＴＫ２９００→１４５０

「そしてローズトークンを特殊召喚」

「その目！マスクド・ナイトが効果を発動するとドッペル・ゲイナーが発動されると思っているな？だが、我に秘策有り！装備魔法『グローリー・シールド』をマスクド・ナイト　ＬＶ７に装備！」

「上手い！：グローリー・シールドを装備したモンスターの攻撃ではマジック、罠カードの発動は出来ない」

「そして戦闘ダメージを与えた場合、相手のマジック、罠カードを１枚破壊出来る！」

ジルの秘策を見抜いた氷室と天兵だった

「バトル！マスクド・ナイト　ＬＶ７でローズトークンに攻撃！『ペルソナ・ビッグ・スラッシュ』！」

マスクド・ナイトがローズトークンに攻撃するが破壊は出来なかったがダメージ計算は適応されている

アキＬＰ２２００↓１５５０

アキにダメージを与えた事で観客も盛り上がっていた

「グローリー・シールドの効果で、ドッペル・ゲイナーを破壊する！これでお前の手は尽きた！効果ダメージを受けてもらうぞ！」

ダメージをくらったことにより爆風が起きてジルは勝ったかのように笑みを浮かべていた

アキＬＰ１５５０↓５０

アキのライフは風前の灯火になった

「魔女よ！これでラストターンだ！お前に逃げる道など無い！」

アキに対して勝利宣言を行ったが逆にアキが勝利宣言をしてきた

「そう・・・このターンで・終わる」

「ん・何？」

「ドロー」

「（臆するな・魔女より我の方が圧倒的に有利だ。魔女に可能なのはローズトークンをリリースしてアドバイス召喚をするくらいのもの・そしてブラック・ガーデンの効果で我がフィールドにローズトークンが現れ召喚したモンスターで叩く・そんなところだろう・だ

がそれをやった瞬間、お前は破滅する！何故なら我が伏せカードは『殉教者の旗』、このカードを発動すれば我がマスクド・ナイトＬＶ７の攻撃力は倍になるからだ！返り討ちにしてくれる！）」

「フィールド魔法、『ブラック・ガーデン』の効果を発動」

するとブラック・ガーデンが枯れだし、崩れていった

「な・何が起きている！？」

「このカードとフィールド場の全ての植物族モンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力の合計と同じ攻撃力のモンスターを墓地から特殊召喚する」

「何だと！？」

攻撃力８００のローズトークンが3体破壊したことにより攻撃力の合計が２４００になる。とすれば呼び出されるモンスターは・

「ブラック・ローズ・ドラゴンを召喚！」

再びアキのエースモンスターのブラック・ローズが現れた

ブラック・ローズ・ドラゴン
ＡＴＫ２４００

だが、ブラック・ガーデンの呪縛から解き放たれたマスクド・ナイト　ＬＶ７の攻撃力は元に戻ってしまった

マスクド・ナイト　ＬＶ７
ＡＴＫ１４５０→２９００

「何故ブラック・ガーデンを捨てた！？２４００のブラック・ローズ・ドラゴンでは２９００のマスクド・ナイトでは分が悪いぞ！これでは自ら勝ちを消すようなものじゃないか！魔女め…追い込まれて血迷ったか…」

「ブラック・ローズ・ドラゴンのモンスター効果、墓地の植物族モンスターを除外することでお前のモンスターの攻撃力を０にする。『ローズ・リストリクション』」

ブラック・ローズ・ドラゴンの触手でマスクド・ナイトを縛り付けた

マスクド・ナイト　ＬＶ７
ＡＴＫ２９００→０

「：こ：攻撃力０だと！？殉教者の旗で攻撃力を倍にしても０のままではないか！」

この瞬間会場が一気に静まり返っていた

「バトル、偽りの正義をかざす騎士よ、冷たい悲しみの炎を受けるが良い」

「や‥やめろ‥やめてくれぇ！！」

「『ブラック・ローズ・フレア』！！」

ブラック・ローズの口から炎が放たれたダイレクトアタックも同然のダメージをジルに与えた

そして煙が消えたら傷だらけで倒れるジルだった

ジルＬＰ１３５０→０

そして会場は悲鳴に包まれるのとアキに対する暴言だらけだった

第2試合　アキＶＳジル（後書き）

この次は遊星ＶＳ死羅（？）のデュエルです

第3試合　遊星ＶＳ炎城ムクロ（前書き）

アクセス数が日に日に増えていってことで嬉しさがハンパないです！

読んでくださってる皆さんありがとうございます

第3試合　遊星ＶＳ炎城ムクロ

波乱の第2試合も終わり観客も落ち着きを取り戻していた

次の試合はライディングデュエルが行われるためキラにとっては初めて見るデュエルのため会場の中で1番嬉しそうだった

第3試合目の出場者である遊星はＤホイールの調整をしていた

「蘇る死神？」

「やつとデュエルした者はその恐怖により二度とデュエルが出来なくなるらしい。その道では知られた非情のＤホイーラーだ」

氷室が遊星の対戦相手である死羅の情報を教えていた

「あのカードを使うのか？」

「スター・ダストは使わない。スター・ダストを使うのはジャックと決着をつける時だ」

だが、この時、死羅と謎の男が入れ替わっていることに観客は誰も知らなかった

「なあなあ！次は遊星だよな？」

「大丈夫かな～・」

「あんちゃんが負けるはずはないよ」

と上から龍亞、天兵、矢薙のじいさんが口にしていた

そして、第3試合目が始まるのだった

「Ｅｖｅｒｙｂｏｄｙ　ｌｉｓｔｅｎ!次はお待ちかねのライディングデュエルだ!!」

「うぉぉ!やっとか!ワクワクしてきたな!」

キラのテンションは上がってきていた

「フォーチュンカップに選ばれた1人目のＤホイーラーは･･不動ぉ遊星!!」

紹介の後に遊星がＤホイールに乗って現れたが会場はシラケていた

「マーカー野郎は引っ込め!」

「かっこつけんな!」

ブーイングが酷いものである

「何かこの大会、面白いが観客によって面白さが減らされるよ‥」

「確かに酷いよ！遊星は悪いやつじゃないのに」

キラの不満に同意する龍亞だが氷室と龍可と矢薙のじいさんと天兵も同じ考えだった

「対するＤホイーラーは、蘇る死神！死～羅～！」

マントを被ったままの登場で顔がよく見えなかった

そして阿久津もまたＤセンサーの前でワクワクしていた

「いよいよ、デュエルの時間だ！フィールド魔法『スピード・ワールド』セットオ～ン！スピード・ワールドによって支配された！これで『Ｓｐ（スピード・スペル）』意外の魔法は発動出来ない！」

そして、スタートのカウントが始まりカウントが０になったときにデュエルが開始された

「ライディングデュエル！アクセラレーション！」

２人がアクセルを回してスタートするのだがここでハプニングが起きた

死羅のマントが飛んでいって現れたのは死羅ではなく・・・・

「待たせたな・炎城ムクロの登場だぜ！！」

「これはなんというサプライズでしょうか！マントの中から現れたのは打倒キングに命を賭ける炎のＤホイーラー、炎城ムクロだ！」

会場はビックリするしかなかった。が、当の本人である死羅はボロボロの状態で見つかったそうだ

だが、炎城ムクロは招待されてもいないのに勝手に出場しているため進めて良いのかＭＣは困っていた

ＭＣがゴドウィンが映っているモニターに目をやると「良い座興になりそうですね。続けて下さい」と許しの言葉が出た

主催者から許可が出たことによりデュエルは続行される

遊星ＬＰ４０００
ムクロＬＰ４０００

「先攻はこの俺様からだ！ドロー！『バーニング・スカルヘッド』を召喚しカードを３枚伏せてターンエンド」

バーニング・スカルヘッド
ＡＴＫ１０００

「俺のターン！」

遊星ＳＰＣ１
ムクロＳＰＣ１

「『スピード・ウォリアー』を召喚。スピード・ウォリアーは召喚されたバトルフェイズのみ攻撃力が２倍となる！バトル！」

スピード・ウォリアー
ＡＴＫ９００→１８００

「罠カード発動！『ゼロ・ガード』、自分フィールドのモンスター１体の攻撃力を０にすることにより、このターン破壊されない！」

「『ソニック・エッジ』！」

スピード・ウォリアーがカポエラでバーニング・スカルヘッドにキックをかました

ムクロＬＰ４０００→２２００

だが、モンスターを守ってまでダメージをくらい、なおかつスピードカウンターを減らしたことに意味があるのかと氷室達は疑問に思った

だがスピードカウンターは減っていなかった

「罠カード発動、『デス・アクセル』、バトルでダメージを受けたときダメージの５００ポイント毎にスピードカウンターを一つずつ上がっていく！」

ムクロＳＰＣ１→４

「見ぃたか！？これが炎城ムクロがあみ出した最強のスピードアクセルデッキだ！」

「スピードスペルで勝負か…その勝負、受けて立つ！カードを２枚伏せてターンエンド」

スピード・ウォリアー
ＡＴＫ１８００→９００

「俺のターン！」

遊星ＳＰＣ１→２
ムクロＳＰＣ４→５

スピードカウンターが上がっていく事にDホイールのスピードが上がっていくので観客も盛り上がってきた

「ドロー！俺は『Ｓｐ・サモン・スピーダー』を発動！スピードカウンターが４以上ある時手札からレベル４以下のモンスターを特殊召喚出来る！来い！『スカル・ベース』！そして、スカルヘッドとスカル・ベースをリリースして、『スカル・フレイム』をアドバンス召喚！」

スカル・フレイム
ＡＴＫ２６００

「アドバンス召喚のためにスカル・ベースをリリースしたとき、カードを１枚ドロー出来る。バトルだ！」

スカル・フレイムの攻撃によりスピード・ウォリアーが破壊された

「うわぁっ！」

遊星ＬＰ４０００→２３００
ＳＰＣ２→１

「まだまだこれからだぜ！永続トラップ！『スピード・ブースター』を発動！」

ムクロのＤホイールのマフラーの部分にブースターが取り付けられ一気に加速した

「これがスピードアクセルデッキの真骨頂！まだまだこれからだぜ：遊星」

「何？」

「スピード・ブースターは相手よりスピードカウンターが多いときに発動出来る永続トラップ。相手のターンの時にスピードカウンターの差の分だけ相手の攻撃を無効にし、さらに自分のターンに１度、スピードカウンターの差の１００倍のダメージを相手に与える！」

遊星とムクロのスピードカウンターが離れれば離れるだけムクロが有利になっていくカードだ

だが、遊星はどこか楽しそうだった

「あれ？遊星楽しそう？」

「おいおいヤバいんだろう？なのに何で笑ってるんだい？」

「ただ純粋に楽しんでるんじゃないかな？俺も楽しくなってきたし」

矢薙のじいさんの質問に答えたのはキラだった

「笑ってんじゃねぇ～よ！スピードブースターの効果を発動！」

ブースターの中からミサイルが放たれた遊星はギリギリ直撃を避けていた

遊星ＬＰ２３００→１９００

「誰も俺のスピードについて来れないぜ！カードを１枚伏せてターンエンド！どぅだ？ぶっちぎられてる気分は？ってえぇぇぇ！？」

スピードカウンターの差だけムクロと遊星の距離は離れていると思っていたがすぐ真後ろに遊星がいることにムクロは驚いた

「ドロー！」

「何でスピードカウンター１のお前が！？あぁあ！？『スリップ・ストリーム』か！？」

キラにとってはまだまだわからない世界だった

「スリップ・ストリームって？」

「スリップ・ストリームってのはスピードカウンターが相手より少なく、相手がスピードスペルを発動した時に発動出来る罠カードさ、次のスタンバイフェイズの時にスピードカウンターを相手と同じ数にする事が出来る」

氷室が教えてくれたから状況が理解できたキラだった

「いつの間にそんなカードを・・・そうか！？俺がサモン・スピーダーを発動した時か！？そうかそうか・遊星・楽しくなってきたぜ！だが、俺様のスピードについて来れるかな？罠カード『アクセルゾーン』を発動！行くぜ？」

地面にアクセルゾーンが敷かれムクロはギアをチェンジして加速していった

そしてまた遊星との差が開いてしまった

「ヒャッハ～！アクセルゾーンは相手プレイヤーがスピードワールド以外の効果でスピードカウンターを増やした時、カウンターを５つ増やす事が出来る！このスピードにはついて来れまい！」

ムクロＳＰＣ６→１１

「『Ｓｐ・サモン・スピーダー』を発動！サモン・スピーダーの効果で『ボルト・ヘッジホッグ』を守備表示で特殊召喚する。さらに！チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を通常召喚！そしてジャンク・シンクロンの効果により墓地からレベル２以外のモンスターの『スピード・ウォリアー』を特殊召喚する！レベル２のスピード・ウォリアーにレベル３のジャンク・シンクロンをチューニング！」

２＋３＝５

「集いし星が、新たな力を呼び起こす！光指す道となれ！シンクロ召喚！出でよ！『ジャンク・ウォリアー』！ジャンク・ウォリアーは自分の場にいるレベル２以下のモンスターの攻撃力分、攻撃力をアップさせる。バトル！」

ジャンク・ウォリアー
ＡＴＫ２３００→３１００

「はっ！スピードブースターの効果でバトルを無効にする！」

ジャンク・ウォリアーが攻撃しようとしたがスカル・フレイムによって止められた

「スピードブースターはスピードカウンターの差の分だけ攻撃を無効に出来るからな・・」

「遊星のスピードは６でムクロのスピードは１１だから５回も無効に出来るってこと！？」

龍亞は驚いていた

「ここはしのぐしかない・カードを1枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー」

遊星ＳＰＣ６→７
ムクロＳＰＣ１１→１２

ここでついに出てしまった。スピードカウンター１２、つまりマックススピードである

「スピード制する者がライディングデュエルを制す！このスピードこそがキングへの道！そう信じて俺は修行を重ねて来た！このキングのスピードを手に入れるために！！一気に行くぜ！『Ｓｐ・アクセルドロー』を発動！この効果でデッキから2枚をドローする」

どちらとも引きが良かったのかムクロは叫びだした

「引いたぜ！『Ｓｐ・ジ・エンド・オブ・ストーム』を発動！」

「ジ・エンド・オブ・ストームだと！？」

「このカードこそキングのカードだ！このカードは、スピードカウンターが１０個以上ある時に発動でき、フィールド場の全てのモンスターを破壊し、１体につき３００ポイントのダメージを与える！」

遊星ＬＰ１９００→１３００
ムクロＬＰ２２００→１９００

遊星のライフを１３００まで下げたのは良かったがムクロのフィールドもがら空きになり攻撃が出来ないでいた

「そして、墓地に存在するスカル・フレイムをゲームから除外し、手札から特殊召喚出来るモンスターがいる！いざ！カモ～ン！『スピード・キング☆スカル・フレイム』」

燃え上がったケンタウロスのような骸骨が現れる

スピード・キング☆スカル・フレイム
ＡＴＫ３０００

「攻撃力３０００だと！？」

フィールドのモンスターを全て破壊しなおかつ上級モンスターを召喚するための布石とは完璧なコンボだ

「これで、決まりだぜ！スピード・キング☆スカル・フレイムで遊星にダイレクトアタック！」

「罠カード発動！『くず鉄のかかし』」

スピード・キング☆スカル・フレイムから炎が放たれたが遊星はくず鉄のかかしで身を守った

「ならば、スピードブースターの効果だ！」

スピードブースターから再びミサイルが放たれ遊星のライフを削った

「うわっ！ぐぅ：」

遊星ＬＰ１３００→８００

「さらに、スピード・キング☆スカル・フレイムの効果で墓地に存在するバーニング・スカルヘッド１体につき４００ポイントのダメージを与える！」

遊星８００→４００

「俺のターン！」

遊星ＳＰＣ７→８
ムクロＳＰＣ１２

「『Ｓｐ・シフト・ダウン』を発動」

遊星はシフト・ダウンの効果によりスピードカウンターを下げた

遊星ＳＰＣ８→２

「何でわざわざカウンターを減らすの？」

「遊星は可能性に賭けたんだ」

「可能性に？」

「シフト・ダウンはスピードカウンターを６下げる代わりにデッキ

からカードを2枚ドロー出来るスピードスペルだ」

「そうか！カードを信じる心だね！」

「あぁ、それがあいつの強さだからな」

一番ライディングデュエルに詳しい氷室が子供達に解説をしてくれた

「・・・シフト・ダウンの効果でカードを2枚ドロー！『ニトロ・シンクロン』を召喚！そして、墓地に存在する『ボルト・ヘッジホッグ』はフィールドにチューナーモンスターがいれば特殊召喚が出来る！さらに罠カード『ギブアンド・テイク』を発動！これにより墓地に存在するモンスター1体を相手フィールド場に守備表示で特殊召喚する。」

ムクロの場にジャンク・シンクロンが現れ防御体制をとる

「何？」

「この時、自分のモンスター1体は特殊召喚したモンスターのレベル分、レベルをアップする」

ボルト・ヘッジホッグ
レベル2→5

「ボルト・ヘッジホッグにニトロ・シンクロンをチューニング！集いし想いが、ここに新たな力となる、光指す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ！『ニトロ・ウォリアー』」

2＋5＝7

ニトロ・ウォリアー
ＡＴＫ２８００

「無駄な事を！スピードブースターがある限り俺に攻撃する事は出来ないぜ！」

「だが、ニトロ・シンクロンの効果でこのカードが『ニトロ』と名の付いたシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地に送られたとき、自分はデッキからカードを1枚ドロー出来る！」

勝負は次のカードに全てがかけられた

「遊星：俺のスピードで追い抜いてやる！」

後ろからムクロが接近して来るが遊星は静かにデッキに手をやり、デスティニードローをした

そして、キーカードが引けたのか「来たか：」と呟いた

「俺は『Ｓｐ・ギャップ・ストーム』を発動！」

「な‥何だ‥？」

「ギャップ・ストームはスピードカウンターが１０以上離れている時に発動出来る。フィールド場のマジック、トラップゾーンのカードを全て破壊する！」

「ってことは‥‥俺のスピードブースターのカードもぉぉ！？」

ムクロのスピードブースターが破壊される

「さらに、モンスター効果だ！ニトロ・ウォリアーは自分のターンにマジックカードを発動した時、攻撃力を１０００ポイントアップする！」

ニトロ・ウォリアー
ＡＴＫ２８００→３８００

「にゃにー！？」

「バトル！行け！ニトロ・ウォリアー！『ダイナマイト・ナックル』！」

スピード・キング☆スカル・フレイムがニトロ・に向かって炎を吹き出すがそれをもろともせずにニトロ・ウォリアーは加速しスピード・キング☆スカル・フレイムを殴って破壊した

「クッソー・・・」

ムクロＬＰ１９００→１１００

「さらに、ニトロ・ウォリアーがモンスターを破壊した時、相手フィールドの守備表示モンスターを攻撃表示にし、追加攻撃をすることが出来る」

「何！？ってことは・ジャンク・シンクロンが・」

ジャンク・シンクロンが攻撃表示の体制になった

ジャンク・シンクロン
ＡＴＫ１３００

「バトル！これで終わりだ！」

ニトロ・ウォリアーがジャンク・シンクロンを殴りつけジャンク・シンクロンは破壊された

ムクロＬＰ１１００→０

「き・・決まった！遊星見事なコンボで逆転勝利！」

ＭＣが勝利宣言したことにより遊星の勝利で終わった

「へっへっへ……よぉ！」

「良いデュエルだったな」

「あぁ、今日は負けちまったが今度は負けないぜ！」

「いつでも相手になってやる」

再戦の約束をして第３試合は終わりを迎えた

第3試合　遊星ＶＳ炎城ムクロ（後書き）

次は龍可ＶＳフランクのデュエルです

敗者復活戦　龍可ＶＳフランク（前書き）

長かった…果てしなく長かった…

一番長い話になった…

敗者復活戦　龍可ＶＳフランク

遊星のライディングデュエルも見事に勝利し次のステージへと駒を進めることが出来た

「凄く熱い試合だったね！」

「だろ！遊星はすっごいデュエリストなんだ！」

天兵も遊星のデュエルを見るのは初めてだったようだ。そして何故かそれを自慢する龍亞である

「そうね。１回戦で負けた誰かさんとは大違いね」

龍可の言葉にショボーンという効果音が適切だろうか龍亞の落ち込み具合がよくわかった

「・・・うん？へっへ～ん、何言ってんだ？負けたのは龍可の方だろう？俺の公式記録にはカウントされないんだもんね～」

さすがに龍可もこの言い方にはカチンときたのか龍亞と龍可の喧嘩が始まった

その後の第４試合であるフランクと来宮虎堂のデュエルは来宮虎堂の勝利で終わった

今日は終わりだろうと思っていたがまだ続くようだった

「Ｅｖｅｒｙｂｏｄｙ！イェーイ！緊急事態の発生だ！先程ゴドウィン主催からサプライズな提案がなされた！ヘイ、惜しくも１回戦に負けたデュエリスト共よ、聞いているか？これより、敗者復活戦が行われることが決定した！」

突然ゴドウィン長官からＭＣに連絡があったのか、敗者復活戦が始まるようだ

そして会場もこれには大盛り上がりだ

「やったー！これでもう一度デュエルが出来るぞ！今度こそ勝ってやるんだ！」

「龍亞が勝っても公式記録には残らないんじゃない？私の公式記録にカウントされるんだから」

「何を～！」

喧嘩の事はさておき、龍亞はデッキ調整を始めた

「どうしようかな～デッキ！組み直さないと。あっ：龍可、また服貸してね」

「嫌よもう・・」

「何でだよ」

普通は逆に龍亞に何でだよと聞きたいものである。そして、突然会場が暗くなった

「これより、敗者復活戦の組み合わせを発表する！この試合はランダムに抽選された１組のみ行われる。その幸運に選ばれたのは、惜しくもボマー選手に敗れたが、若干１１歳にして実力はゴドウィン主催の折り紙付き！その将来性は右肩上がりの天井知らず、舞い降りたデュエルの天使！ミ～スぅ・龍可ちゃ～ん！」

龍亞が元気よく返事をするのだがスポットライトに当てられたのは龍可だった

「ど・どうしよう・・」

「どうしようって・・そりゃあ大会に参加してるのは龍可ちゃんなんだから」

「でも、龍可は俺なんだよ！」

「いや、そこは違うと思う。それにここで龍可が出て行かないとマズいんじゃないか？」

キラの言っている通りである。会場からは龍可コールがされているからだ

「そんな・・私嫌よ・・デュエルすると凄く疲れちゃうのに・・」

「あぁ～あ・・せっかく遊星と戦えるチャンスができたのに・・このまま終わるなんて・・」

「・・・わかったわよ、このデュエルだけ頑張って勝つわ。その後は龍亞が出れば良いじゃない」

「えぇ？マジで？それ良いね！断然応援しちゃう！」

「もう：調子が良いんだから：」

それだけ言うと、デッキとデュエルディスクを持って席を立った

「わくわくしてきたな！龍可のデッキって何？」

「妖精デッキさ」

「妖精？あぁ！納得した」

「え？何で納得出来るんだい？」

「龍可はデュエルモンスターズの妖精の声が聞こえるんだって、その声に従ってデッキを組んだって言ってた。だから妖精デッキ」

「それは・・どうなんだろう」

大人にとっては信じがたい話であるのは確かだった

「妖精の声を聞くとあいつは凄く疲れるんだ。だから、あまりデュエルをやりたがらないんだけど・・」

緊張しているのか暗い表情でステージへと龍可は行っていた

「さぁ！フィールド場に天才デュエリスト！龍可ちゃんの登場だ」

そしてデュエルディスクを装着してあることに気付いた

「（龍亞の言ってた通りだ‥このデュエルディスク凄く使いやすそう。ありがとう遊星‥）」

「さぁ！天才デュエリスト龍可ちゃんの対戦相手は‥‥デュエルカウンセラーの異名を持つ、プロフェッサーフランクだ！」

龍可の反対のところからフランクが現れお辞儀をしてきた

「初めまして龍可さん」

「は‥はぁ‥」

「さぁ、このデュエルであなたの深層意識に隠された本当のあなたを見つけましょう」

「（なんだか‥この人‥）」

不安な気持ちの中、突然声が聞こえてきた

「クリリン‥」

「（そう‥あなたも嫌な感じがするのね‥）」

そしてお互いにデュエルディスクを起動させて敗者復活戦が始まった

「「デュエル」」

龍可ＬＰ４０００
フランクＬＰ４０００

「（さっさとこのデュエルを終わらせよう‥）私のターン、ドロー、『サニー・ピクシー』を守備表示で召喚して。ターンを終了」

サニー・ピクシー
ＤＥＦ４００

「私のターンです。ドロー、私は『シンメトリー・ロールシャッハー』」

左右対象の蝶々のような像が現れる

シンメトリー・ロールシャッハー
ＡＴＫ１２００

「あなたはロールシャッハーテストというのはご存知ですよね。このモンスターをどのように感じるかによって、あなたの抱える心配、不安、問題を解き明かすための手掛かりを得るための心理テストです。さぁ、龍可ちゃん、あなたにはこのモンスターは何に見えますかね？」

「（何なの…この人…）」

「あなたは何に見えます?さぁ、答えてください」

「何って‥」

変な質問に龍可の不安は大きくなるばかりだ

矢薙のじいさんは水晶ドクロで、天兵は蝶々と言っていた

「さぁ‥さぁ‥何に見えます?」

「な‥何って‥」

シンメトリー・ロールシャッハーが突然形を変えサニー・ピクシーのような形になった

「よ・妖精？」

そして、龍可はその像をぼんやりと眺めていて、シンメトリー・ロールシャッハーがサニー・ピクシーに変化したとき、クリボンの声によって気がついた

シンメトリー・ロールシャッハーの顔が怖い顔になった

「『スパイラル・マインド』」

そして、オーラのような物が流れ込んで来たと思えば、サニー・ピクシーが破壊されていた

「え？」

「フフフ・これはあなたが心の奥底で恐れているものを露わにするものだったのです。あなたは妖精や精霊を恐れている。違いますか

？」

「そんなことは‥」

「大丈夫ですよ、このデュエルであなたが抱えていた悩みを解き明かし、解放してあげましょう。そのためにも勇気を持ってあなたの深層意識に住むもう一つの世界‥デュエルモンスターズの精霊世界へと旅立って行くのです」

「デュエルモンスターズの‥精霊世界？」

「知っていますよ‥あなたは精霊の言葉を感じる事ができる。だったら、デュエルモンスターズの精霊の世界があったって不思議じゃないでしょう」

「そんな世界が‥あるなんて‥」

「シンメトリー・ロールシャッハーの効果を発動。相手モンスター

を破壊した時、相手のデッキの一番上のカードを表向きにすることが出来る『ピーピング・マインド』」

龍可がデッキの一番上を表向きにしたカードは『クリボン』だった

「クリリン！」

「可愛い精霊のカードですね。もしや、その子の声も聞こえてるんじゃないんですか？」

「（確かに私には精霊の声を聞くことが出来る。でも：）」

龍可が不安になり龍亞の方を向くと龍可は何かを見たように、龍亞はぼんやりし始めた。

「カードを2枚伏せて、ターンエンドです。あなたのターンですよ」

「・・・ドロー、『クリボン』、来て・・」

クリボン
ＡＴＫ３００

「この瞬間、リバースカードをオープン、『深層へと導く光』。相手はデッキから5枚カードを墓地に送り、6枚目のカードをお互いに確認しあい、手札に加えます。このターン、そのカードをプレイしなかった場合、相手プレイヤーは２０００ポイントのダメージを受けます。デッキからカードをめくって下さい」

龍可は『深層へと導く光』が発動した時から様子がおかしくなっていた。どこか集中力がかけているのか、それともぼんやりとしている様子だ

ゆっくりとカードを1枚1枚ずつ引いて墓地に送っていってそして6枚目のカードになった

「さぁ・・6枚目のカードは何ですか?」

引いたカードは『古の森』だった

「ほぉ…それは、フィールド魔法、古の森ですか…全てのモンスターは攻撃表示となり、守備表示で召喚することも、守備表示に変更することも出来なくなる。攻撃を行ったモンスターはバトルフェイズ終了時に破壊される。フッフッフッ…全てをあからさまに…そして決して争う事を許さない世界、さぁ…デュエルモンスターズの精霊世界へ」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「ここは……？」

龍可が気がつくと、そこは森の中だった。妖精達が飛び回っていて

目の前に実体化してるクリボンが現れた

「クリリ～ン」

「クリボン！…！まさかここって…あの人が言ってた精霊世界？こんなに穏やかな場所なのに…何だか…怖い…」

――――――――――――――――――――――――――――――

「どうやら、深層意識に通じた世界にたどり着くことが出来たようですね。ドロー、永続トラップ『ゲシュタルト・トラップ』を発動。このカードは相手モンスターの装備カードとなります。クリボンにこのカードを装備、装備モンスターは効果が無効となり、攻撃力守備力共に０になります」

ゲシュタルト・トラップの首輪のようなものがクリボンを捕らえた。そしてそれは精霊世界でも同じことが龍可の目の前で起こっていた

クリボン
ＡＴＫ３００→０

「さらに手札から装備魔法『不死のホメオスタシス』をクリボンに装備します。装備モンスターは戦闘では破壊されない。自分のスタンバイフェイズに装備モンスターの攻撃力が元々の攻撃力と違っていた場合、持ち主は３００ポイントのダメージを受けます。つまりクリボンの攻撃力が０のままだとあなたは毎ターンダメージを受けることになります」

クリボンは何を装備をされたのかわからぬまま苦しみだした

「さらに私はシンメトリー・ロールシャッハーをリリースして『超魔神イド』をアドバンス召喚」

フランクの場にどこか奇妙な獣のモンスターが現れた

超魔神イド
ＡＴＫ２２００

目の前に超魔神イドが現れて龍可は驚きつつ悲鳴を上げていた

「イドは破壊されたターンのエンドフェイズに私の場に特殊召喚されます。そしてイドがあるかぎり、私はモンスターを召喚が出来ません」

ピンチになっているのにぼんやりとしている龍可に観客は声をかけていた

「何やってんだ〜」

「また負けっぞ！！」

そして、龍亞も同じ状態になっていたのに天兵は気づいて声をかけるが無反応だった

「超魔神イドでクリボンに攻撃！『ヴァイオレント・エゴイズム』」

クリボンに襲いかかってそのまま踏み潰した

――――――――――――――――――――――――――――――――

精霊世界でも同じ事が起こっていて、破壊されたと思えば元の形のクリボンに戻りつつ龍可にダメージを与えた

「いやぁぁ！！！」

龍可ＬＰ４０００→１８００

―――――――――――――――

「装備された不死のホメオスタシスの効果によりクリボンは破壊されない。だが、不死の世界で永遠の苦痛を味わって頂きましょう。さぁ：龍可ちゃん、よ～く思い出すんだよ：痛みの中から：恐怖の中から：あなたの本当の使命を：さぁ！」

―――――――――――――――

だが、この時森がざわめき始めた

「そう！この森で争うことは許されない！」

古の森の効果で超魔神イドが破壊されて安心していた龍可だが、すぐに復活したイドに驚いた

「そ‥そんな！？」

――――――――――――――――――――――――

「イドは破壊されたターンのエンドフェイズに特殊召喚されます。フッフッフッ‥ターンエンドです」

「ドロー」

「このスタンバイフェイズに不死のホメオスタシスの効果により３００ポイントのダメージを受けてもらいましょうか」

龍可ＬＰ１８００→１５００

「『サンライト・ユニコーン』を召喚。サンライト・ユニコーンに

『一角獣のホーン』を装備」

サンライト・ユニコーンが現れた後一角獣のホーンが装備されて強化された

サンライト・ユニコーン
ＡＴＫ１８００→２５００

「（攻撃力が‥イドを上回った‥）」

――――――――――――――――――――――――

精霊世界でもサンライト・ユニコーンが龍可の前に現れて突然どこからか声が聞こえてきた

「龍可‥‥‥龍可‥」

「だ・・誰!?誰なの!?」

「龍可・・約束を守りに来てくれたんだね・・」

「約束?」

「デュエルモンスターズの精霊世界を悪なる者から守ってくれる・・と・・」

「あなたは誰?誰なの!?」

「龍可・・こっちへおいで・・」

「え?」

「約束を‥精霊世界を守と‥」

「し‥‥知らない‥そんな約束してない！」

突然の事に何が起きてるのかわからなくなってもきていて戸惑いが焦りを生んでいた

そして後退りをするが後ろにはイドがいた

サンライト・ユニコーンが龍可を守るためにイドの突進していった

「ダメよ！サンライト・ユニコーン！」

そして、イドを倒した

――――――――――――――――――――――――

「……！やりましたね‥」

フランクＬＰ４０００→３８００

―――――――――――――――――――――

そしてまた、森がざわめき始めた

「森が‥‥怒ってる‥ここでは争いを許さないと‥」

サンライト・ユニコーンが光に包まれ、破壊された。

「あぁ‥サンライト・ユニコーン‥いや、サンライト・ユニコーンは死なせない！私が！」

―――――――――――――――――――

「フッフッフッフッフッ…わかっているのだよ、あなたは今精霊世界にいるのだね。できれば私にも教えてほしいものですね」

「一角獣のホーンが破壊された時、デッキの一番上に戻る。そして、手札からマジックカード『救急救命』を発動。このターンに破壊されたモンスターを1体を特殊召喚することが出来る。サンライト・ユニコーンを復活」

「何?またサンライト・ユニコーンを?ぐっ……」

「サンライト・ユニコーンの効果により、デッキの一番上のカードがマジックカードだった場合、手札に加える事が出来る」

「デッキの一番上は……」

「一角獣のホーンを装備」

そしてまた一角獣のホーンがサンライト・ユニコーンに装備された

サンライト・ユニコーン
ＡＴＫ１８００→２５００

「カードを２枚伏せてターンエンド」

――――――――――――――――――――――――

精霊世界でもサンライト・ユニコーンが復活していた

だが、それは相手も同じでイドが再び特殊召喚されていた

「うそ・・・このモンスターは何度破壊しても何度でも蘇ってくる・・」

逃げるしかないと思い、サンライト・ユニコーンが龍可を背中に乗せてクリボンと一緒にその場を離れた

ふと周りを見渡すと木々が枯れていることに気付いた

「どうして・森がこんなことに・・」

「悪なる意志がデュエルモンスターズの精霊世界を汚そうとするのです。精霊の力をその汚れた手の内に入れようとしている」

そしてまたどこからかさっき聞こえた声が聞こえてきた

「悪なる意志？なんなのそれは？」

ある場所に止まるとサンライト・ユニコーンから降りると龍可の目

の前に何かがいる…もしくはあると言った方が良い

「龍可…私はここよ…」

「この声は…あの岩山から…」

龍可は目の前の岩山をじっくりと観察をした

「…ドラゴン…？…！知ってる！私は…あの竜を！『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』…」

「龍可…また会えたね…」

そして突然周りが霧に包まれていった

「な…何なの？」

そして目の前に映ったのは幼きの姿の自分と楽しく遊んでいる精霊達だった

そして、自分がこの精霊を守る事を約束していた事を思い出した

「そう‥思い出したわ‥あの時、私は昏睡状態になってこの世界に来て、精霊世界を守って約束をした‥でも‥‥」

――――――――――――――――――――――――――――――――

フィールドにいつの間にか遊星が現れ、２人がおかしいことに気付いた

そして、突然龍亞も倒れた

「え？おい龍亞！龍亞！どうしたんだよ！？」

「龍亞君大丈夫か？」

氷室が龍亞の頬をペチペチと叩くと意識が無い事に気付いた

「ヤバいぞ！意識が無い」

「すぐに医務室に運ぶぞ！」

龍亞の意識の中ではずっと「龍可：龍可：」と呼び続けていた

――――――――――――――――――――――――――――――

「でも、私はあの時龍亞の声を聞いて：私はあなた達を置いてここから逃げた：龍亞の声を：龍亞の叫びを理由にして：でも本当は怖

かったの‥ここで私1人であなた達を守ることが、怖かった。それで私は、あなた達を忘れようと、この世界を心の中に閉じ込めた」

そんな事を思い出してると後ろにイドがいつの間にかいた

――――――――――――――――――――――――

遊星は2人の様子をうかがっていた

「（どういう事だ‥2人とも様子が変だ‥‥‥！！）」

龍可の方に視線をやると腕が光っていることに気付いた

「（あの光は！まさか‥竜の痣！？）」

そして、意識の無い龍亞を医務室にキラ達は運んでいた

フランクが動き始めてデュエルが再開された

「私のターン：ドロー」

――――――――――――――――――――――――

「フッフッフッフッフッ：これがデュエルモンスターズの精霊世界ですか？」

フランクも精霊世界に来ていたのだ

「この私もこの場所に来るとは：やはりお前はシグナーだ！」

「シグナー？」

「お前の力を欲する者がいる、さぁ、おじさんと行こうじゃないか。お前の力を正しく引き出すためにさぁ！」

「何で私なの！？もう私に構わないで！！」

フランクの足元から黒い霧が出て来て木々が枯れていって砕けるまでいってしまった

「……どうして…私が…この世界を守らなければならないの？どうして皆は私の力を…龍亞！私を呼んで！あの時みたいに私を連れて帰って！龍亞！」

―――――――――――――――――――――――――――――――

医務室に運ばれた龍亞はベッドに寝かされていたが突然「龍可…龍可…」と言い出した

キラはふと気付いたのか龍亞のでこに自分の額を当てた

「お・キラ！何やってるんだ！？」

―――――――――――――――――――――

龍可は叫び続けていたら龍亞の声が聞こえてきた

「龍亞！？龍亞なのね！？私はここよ！お願い、私を連れて帰って！」

だが、龍亞はただ「龍可・龍可・」と呼び続けるだけだったが、龍可の足下から湧き水が出て来てそこに映っていたのが龍亞だった

「龍亞！私を連れ戻して！」

龍可は必死にお願いをするのだが龍亞はそれを断った

「それはダメだよ、俺も見てた・皆と約束したんだろ?俺・遊星みたいに強くなるから、龍可は俺が守るから、だから龍可はその世界を守ってあげて」

そう言って龍亞の姿は消えた

周りを見てみると精霊世界も暗くなっていっていた

「私は・・・私は・・・私はこの世界を守る!クリボンや皆を守ってみせる!」

そして、デュエルが再開された

「リバースカードオープン『ガリトラップ・ピクシーの輪』!自分フィールド場に攻撃表示モンスターが2体以上存在する場合、相手プレイヤーは私の場の攻撃力の一番低いモンスターを攻撃出来ない

！クリボンをこれ以上攻撃させない！」

「ならば手札から永続魔法『悪意の波動』を発動！フッフッフッ：自分フィールド場のモンスターが戦闘で破壊されるたびに相手プレイヤーは３００ポイントのダメージを受ける。超魔神イドでサンライト・ユニコーンに攻撃！『ヴァイオレント・エゴイズム』！」

超魔神イドがサンライト・ユニコーンに攻撃をするのだが逆に返り討ちにされて破壊された

フランクＬＰ３７００→３４００

「ぐっ：痛いよお嬢ちゃん：が、この痛みはお嬢ちゃんにも受けてもらうよ。悪意の波動の効果を発動！」

「え？うぅぅ！くっ：これくらい！」

龍可ＬＰ１５００→１２００

「どこまでそのやせ我慢が続くかな？マジックカード『精神汚染』を発動！モンスターが破壊されたターンに発動が可能！相手の場のマジックかトラップを１枚破壊できる」

精神汚染の効果でガリトラップ・ピクシーの輪が破壊された

「あっ！クリボンの守りが！」

「そして、このターンのエンドフェイズに超魔神イドは復活する！」

超魔神イド
ＡＴＫ２２００

「ターンエンド」

「私のターン！ドロー」

「フッフッフッ、この瞬間クリボンの攻撃力が変わっていることにより、不死のホメオスタシスの効果により３００ポイントのダメージを受けてもらおう！」

龍可ＬＰ１２００→９００

「あぁ・・うぅ・・（攻撃してモンスターを倒したとしても全て苦しみに繋がっていく・・どうしたら・・）カードを１枚伏せる。そして手札からマジックカード『癒やしの風』、フィールド場のモンスター１体につき、ライフを２００ポイント回復する。ターンを終了」

龍可ＬＰ９００→１５００

「フッフッフッ・本当はね・私にとってお前はどうでもいいんだよ。私はお前をただ倒せればそれで良い！お前も・精霊も・苦悶するその表情を見させてもらえればそれで良いんだよ！ウッハッハッハッハ！」

フランクから出る黒い霧がだんだんと多くなり土も砕けていっていた

「…！この人が悪い者！？……許せない！許せない！」

「超魔神イドでクリボンを攻撃！苦悶しろクリボン！」

イドがクリボンに向かって襲いかかって来た

「させない！罠カード発動！『妖精の風』フィールド場に表側表示で存在するこのカード以外の全てのカードをマジック、トラップを破壊する！」

「何！？」

クリボンについていた首輪が破壊され、サンライト・ユニコーンに装備されている一角獣のホーンも破壊、そして、フィールド魔法の古の森も消えた

「互いのプレイヤーはこの効果によって破壊したカード1枚につき４００ポイントのダメージを受ける」

フランクＬＰ３４００→２２００
龍可ＬＰ１５００→３００

「装備魔法が消えたことによりクリボンの攻撃力は３００に戻る」

クリボン
ＡＴＫ０→３００

「バトル続行！」

「３００に戻ったところで何になる？食らいつくせ！精霊を！」

「クリボンのモンスター効果を発動！攻撃対象となったクリボンを

手札に戻すことで、そのモンスターの戦闘ダメージを０にして、効果の対象になったモンスターの攻撃力分のライフをモンスターのプレイヤーは回復する」

フランクＬＰ２２００→４４００

「クリボンにもこの世界の誰にも手出しはさせない！」

「フッフッフッフッフッフッ：お前の世界など、汚し尽くしてくれる！」

その言葉が引き金になったのか、岩山に封印されているエンシェント・フェアリー・ドラゴンが怒りだした

「エンシェント・フェアリー・ドラゴンが怒ってる！自分が傷つくことも感じないくらい！あの人に怒りを！」

エンシェント・フェアリー・ドラゴンが手を伸ばしてフランクを捕

まえるがフランクは何の抵抗もなく狂っているようにただ笑っているだけだった

「このままじゃ…あの人が！お願い！エンシェント・フェアリー・ドラゴン！怒りを解いて！」

龍可の叫びは届かずエンシェント・フェアリー・ドラゴンは我を見失って怒っていた

「このデュエルを終わらせれば…リバースカード『オベロンの悪戯』を発動！ライフを回復する効果を無効にし、お互いのプレイヤーはその数値分ライフを受ける！」

天空から大きな竜巻が起こって2人を飛ばしていった

フランクＬＰ４４００→０

龍可ＬＰ３００→０

「「うわぁぁ〜！！」」

「いずれあなたを助ける者が・・」

エンシェント・フェアリー・ドラゴンが最後に言った言葉を最後まで聞くことが出来ずに現実世界に戻ってしまった

――――――――――――――――――――――――――――――

フランクが気がついたら何かに怯え後退りしてから倒れて気絶した

龍可もふらふらになりながら意識を取り戻した

「あの人は・・？」

ただ気絶しているだけだと見て安心すると倒れるが、遊星が支えた

観客は呆気にとられて何が何だか分からない様子だった

遊星は龍可を抱えて会場を出て行った。龍可は龍亞の事が気になっていた

丁度医務室では、龍亞が大きな欠伸をしながら目を覚ました

「ふぁぁ～あぁ…あれ？ここは？」

「お前！？気絶して倒れたんだぞ！？」

「えぇ！？そうなの！？何か夢を見ていたような…何だっけ…」

「龍亞…覚えてないのか？」

「うん、思い出せない。」

「はっ！呆れた奴だ」

だが、キラは龍亞が見ていたものを見ていた。龍可が精霊世界にいたことを

「あれ？そういえば龍可は？」

「あれを観ろよ」

すぐ近くにモニターが現れＭＣが敗者復活戦の結果が引き分けのお知らせをしたら龍亞は驚いた

「えぇ！？はぁ・・まぁ、良いか・・」

敗者復活戦は引き分けという結果で幕を閉じた

敗者復活戦　龍可ＶＳフランク（後書き）

フォーチュンカップ１日目の終了です

次からオリジナルが混ざっていきます

大会1日目の終了（前書き）

アニメでも映画の宣伝をしていますね～

観たい：絶対に観たいですよね！

最初は5県しか放映しないのかと思っていて観れないとがっかりでしたが全国ロードショーとわかったのでハイテンションになりました（笑）

あと、感想やお気に入り登録などが増えてるので大変嬉しく思っています。アクセス数が凄い事にもビックリして、アクセス数を見るのも楽しみになっています（笑）

大会1日目の終了

龍可の引き分けによって敗者復活戦は終わった。観客席の方に皆で集まっていた。最初は仕方なく思っていた龍亞だが、思い返せばなんとなく納得がいってなかった

「龍可！何で自分から引き分けるんだよ！？」

「負けるより良いでしょ。あのままじゃ、どうせ勝てなかったんだから」

「でもさ…あぁあ～！遊星とデュエルが出来ると思ったのに…」

「（龍亞は何も覚えてないのかな…あの時の声って…それとフランクって人が言ってたシグナーって何…）」

いろいろ腑に落ちない事があって腕を押さえながら暗い顔で考え込

んでいた

「龍可ちゃん？気分でも悪いのかい？」

「そうだよ、デュエルの時もぼんやりとしてたからさ」

「……え？…ううん、大丈夫」

「2人共、今日は俺が送っていこう」

やはり心配だと思っている遊星が送る事を提案した

「あぁ…それが良いだろう」

遊星と一緒にいられる事を嬉しく思っている龍亞がはしゃぎだした

「本当!?じゃあ、今日は俺んちに泊まっていきなよ!あっ!それと2人じゃなくてキラもね」

「キラ?」

「俺の事だよ。あなたが龍亞達の家に来た次の日から居候させてもらってるんです。遊城キラだ。よろしく」

「不動遊星だ」

お互いここで自己紹介が終わった時にMCからお知らせがあった

「Everybody listen!白熱した大会第1日目はこれで終了だ!そして、これが明日の準決勝のマッチメイト!それでは今日の興奮と感動を明日のデュエルまでto be continued!Good bye!」

大会1日目が終了し、モニターには遊星VSボマー、アキVS虎堂と表示されていた

「明日…遊星と戦うのはあのおじさん……」

龍亞は第1試合目でデュエルした相手、ボマーとのデュエルを思い返していた

「強敵だな…やつは」

「あぁ…」

「ライディングデュエルならボマーがどんなDホイールに乗ってくるのか楽しみだ」

「（…！あのおじさんのDホイール…そっか！もしそれが先にわかっていれば遊星が有利になるかも！）」

「どうしたの？」

「あ・いや・なんでもないよ！あのさ・先に帰ってて！用事を思い出したから」

「何の用事？」

「え～っと・・・何の用事だったかな～・それも思い出してくる！」

龍亞はそれだけ言ってはどこかへ行ってしまった。そして、皆には何がしたいのかよくわからなかった

「それじゃあ、龍可、キラ・行こうか」

「今日はここで解散だな、それじゃあまた明日な」

それぞれ帰宅へとして行った。キラと龍可と遊星はスタジアムの廊下を歩いていると前からイェーガーが現れた

「ヒッヒッヒッ…そこのあなた、お待ちなさい」

「！お前はイェーガー！何の用だ？」

「残念ながら今は遊星に用事ではなくあなた様に用事があるのです」

イェーガーが指を差したのはキラだった

「……俺に…用事…？」

この時、キラと龍可はキラの事がバレているのではないだろうかと内心かなり焦っていた

「はい、ゴドウィン長官がお呼びになっております故に、ご同行をお願いします」

イェーガーはそう言っては頭を下げてきた

「何故彼をゴドウィンが呼んでいる？」

「それは、遊星には関係の無いことでしょう。それとあなた様も拒否は出来ないはずですよ。ヒッヒッヒッ」

自分の事がバレてしまっているので拒否が出来ず、同行するしかなかった

「‥わかった‥案内してください‥2人は先に帰ってて」

「キラ！？：だったら私も行くわ」

「俺も行く」

「お好きになさい。では：こちらです」

イェーガーに案内されるがままに、関係者立ち入り禁止の所を過ぎて行ってはある部屋へと入って行った

そして、そこにはフォーチュンカップの主催者、治安維持局長官のレクス・ゴドウィンがいた

「来ましたね。初めまして、治安維持局長官のレクス・ゴドウィンと申します」

「遊城：キラです」

キラは警戒心を持ちながら何を言われるのかと不安な気持ちだった

「私がここにあなたを呼んだのは自分でもわかってますよね。住民登録も無く、ＩＤカードも持っていないはずです。いわば、不法入国です。普通ならば、セキュリティに捕まるのですが、あなたが逮捕されるとこちらもマズい事になりますので条件があります」

やはり自分の事がバレていて、キラの事を知らなかった遊星はただ驚いていた

「条件：とは何ですか？」

「明日もあるフォーチュンカップに御参加ください」

「フォーチュンカップ・・・ってもう４人に絞られているじゃないですか！」

「それは、大丈夫です。こちらで何とかします。あなたがフォーチュンカップに出場すれば、IDカードなどなど、あなたがこのネオ童実野シティに住めるようにあなたにとって必要な事をさせてあげます。どうでしょうか？」

「おい、ゴドウィン！何か裏があるんじゃないのか？」

ゴドウィンが何かを隠していると思い、遊星が突っかかってくる

「何も裏などありませんよ。本当の事を言っているまでです」

「・・・わかりました。明日出場します」

少し迷っていたが自分にとって不利な条件ではなく好都合な条件なので了承した。

「対戦相手は明日になったらわかるので、それと後は我々にお任せください。では、ご帰宅を」

遊星はあまり腑に落ちないような感じだったがキラが決める事なので仕方ないと思い、そのまま部屋を出て行って今は帰ろうとしていた

「キラ、お前は何者なんだ?」

「多分信じてはくれないと思うけど俺は過去の人なんです」

「過去?タイムスリップをしたとでも言うのか?」

「どういう原理でこの世界に来たのかはわからないんですが・・まぁ、それだけしか言えないです」

「そうか・・」

それだけ言っては遊星は何も言わなくなった。

家に帰り着いて夕食の用意をしてもらったが、いつまでたっても龍亞は帰って来なかった

そして椅子に座っていた遊星が立ち上がった

「探してくる。何かあったのかもしれない」

「私も行く」

「龍可は休んでいろ」

「体ならもう大丈夫。ここで待っている方が気分が悪くなりそう」

「大丈夫です。俺が龍可と一緒に行きますから」

「わかった。だが、無理はするな」

「うん」

そして、それぞれ外に出て遊星はDホイールを走らせながら探し、キラと龍可も家の周りを探していたが見つからず、外の景色もだんだんと暗くなっていた

そして、3人は一旦集まっていて見つかったのかを聞いたが誰も見つけれなかった

すると、遊星のDホイールに通信が入って、雑賀と呼ばれる俺と連絡していた

内容は雑賀がサテライトにいて、遊星のアジトにいるが遊星の仲間がいないこと報告していた。そして通信を止めた後にビルとビルの間から龍亞を担いでいたボマーが現れた

「……！龍亞！」

「何故お前が？」

「説明は後だ：怪我はしていない。寝ているだけのようだ」

龍亞を家まで運んでそのままベッドに寝かせた。龍可は疲れたのかソファーで寝ていた

龍亞はボマーのガレージにいたようで、警備システムによって閉じこめられて出れなくなって寝ていたようだ。

おそらくボマーのDホイールを探りに行っていたのだろう

ボマーと遊星はベランダに出て話をしていた

キラは明日のためにデッキ調整をしながら2人の話を聞いていた

そして最後にボマーが遊星に宣戦布告をしたあと、帰っていった

「キラはまだ寝なくて良いのか？」

「うん…明日のデュエルのためにデッキは万全な状態でしていたいので」

「そうか…体調も万全にしとけよ」

「はい」

デッキ調整が終わった後、それぞれ就寝して夜が明けて大会2日目を迎えたのだった

大会1日目の終了（後書き）

次はいよいよキラのデュエルです

第６試合　キラＶＳデラク（前書き）

オリカがたくさん出ます。ネーミングセンスがとても悪いのであまりふれないでおいてください：ｏｒｚ

こんなデュエルで良かったのかな：と思ってます

第6試合　キラVSデラク

大会2日目の朝を迎えた。それぞれ起床し、龍亞は昨日の事で遊星に謝ったが、勝敗がどうであろうとボマーに謝ることで許してくれるのだった。

キラはデュエルディスクのメンテナンスをしていた時に、龍可があることに気付いた

「そういえば、キラのデュエルディスクってまだ私達のデュエルディスクのような機能が無いんじゃない？」

「あっ！……そうだった…やり方も分からないしな～…龍可のデュエルディスクを貸してくれないか？」

「うん、良いよ」

龍可のデュエルディスクを借りて、腕に装着してみたが、かなり軽

い事に気付いた

「このデュエルディスク・軽いな・・」

「うん・・元々はもっと重かったけど、遊星が改良してくれたのよ」

「へぇ～、遊星ってそんなことも出来るんだ・俺のデュエルディスクも改良してもらおうかな・・」

「頼めばやってくれると思うよ」

「後で頼もうかな・・っと・良し！準備万全だ！」

それぞれ準備が出来たところで早めにスタジアムに行くために早い時間に４人はスタジアムに向かっていった

そして、天兵達と合流して、龍可達は観客席に向かい、キラと遊星は控え室にいた

「ねぇ、遊星このデュエルディスクを改良出来ませんか？」

「ちょっと見せてみろ」

キラのデュエルディスクを遊星は受け取るとデュエルディスクをいじりだした

「これって・・・かなり昔のじゃないか」

「そうです。だから、今のデュエルディスクみたいに出来るかな・・と・思って」

「時間がかかるがそれでも良いか？」

「はい、お願いします。そろそろ時間なので、行きますね」

「デュエルディスクはあるのか？」

「龍可から借りたので大丈夫です」

キラは会場の方に向かっていった。そして、時間になったのかＭＣが喋り出した

「いよいよ大会2日目！泣いても笑っても、今日でキングへの挑戦者が決定する！準決勝・・・と言いたいところだが主催者からサプライズなお知らせだ！昨日、会場内でデュエルを見ていた諸君から抽選で選ばれた2人が大会の参加が決定した！本日の第1試合目はゴドウィン長官直々に選んだ選ばれし英雄！遊城～・キラ！！」

ＭＣの紹介と共にフィールドにキラが現れた。大会に出場することを知らなかった龍亞達は驚いていた

「え?.え?.何でキラが出場してんの?」

「昨日龍亞がどっかに行った後に呼ばれたのよ」

龍亞はバレたのではないかと思い龍可に小声で話しかけた

「それって・キラの事がバレたって事?」

「そうよ、でもセキュリティに捕まることは治安維持局長官にとってはマズい事らしくて、キラが大会に出場することで住民登録してくれるって事で出場することになったのよ」

コソコソと喋っていることが気になっていた氷室達だった

「何の話をしてるんだ?」

「ううん！こっちの話よ。気にしないで」

気になったが気にしないでと言われたので気にしないことにした

「そういえばキラ君のデッキってどんなんだい？」

「ＨＥＲＯデッキだよ。デッキの事をかなり信頼していてとっても強いんだよ！」

「龍亞は何回やっても勝てなかったけどね」

「へぇ～そいつは楽しみだな」

「さぁ！対戦者の登場だ！あらゆる人を恐怖に陥れてる悪魔！デラク！」

デラクと呼ばれる中年の男がフィールドに現れた

そして、デラクに氷室は驚いた

「デラクだと！？」

「氷室のおっちゃん知ってるの？」

「あぁ、やつとキラの相性はかなり悪いぞ。やつはデッキ破壊だ」

「「デッキ破壊！？」」

「あぁ、しかもだ‥デッキを破壊しては墓地へは行かせず除外させるやつだ」

「デッキ破壊に除外って‥デッキを信頼してるキラにとっては深い傷を与える人じゃない！」

「精神的に苦痛なデュエルになりそうだな」

準備が整うとデュエルディスクを起動させた

「あなたはデッキを信じていますか？」

「‥？はい、とても信頼しています」

「そう‥では、面白いデュエルになりそうですね」

「楽しいデュエルにしましょう！」

「「デュエル！」」

キラＬＰ４０００
デラクＬＰ４０００

「俺からの先攻！ドロー、『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を攻撃表示で召喚！さらにエアーマンの効果！このカードが召喚、または特殊召喚に成功した時、『ＨＥＲＯ』と名のつくモンスターを１体を選択して手札に加える事が出来る。俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』を手札に加え、カードを２枚セットしてターンエンド」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン
ＡＴＫ１８００

「私のターン、ドロー、モンスターをセットしてマジックカード『手札抹殺』を発動」

「何！？」

「お互いは手札を全て捨てて、自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドローします」

せっかく手札に加えたゼクスを墓地に行かすことがキラにとっては嫌だった

キラのデッキの残り枚数３３→３０

「そして、さらに墓地に送った『ワーム・ドレイド』の効果を発動、このカードが墓地に送られた時、相手はデッキの上からからカードを５枚除外する」

「じ・・・除外って！・・」

キラのデッキの残り枚数３０→２５

「そして、永続魔法『スペース・ブラック』を発動。このカードが存在する限り墓地へ送られるカードは墓地へ送られずゲームから除外する。そしてカードを2枚セットしてターンエンドです」

「くそ…除外じゃあヤバいな…俺のターン、ドロー。『E・HERO フェザーマン』を召喚！バトルだ！エアーマンでセットされているモンスターに攻撃！」

「この瞬間、罠カードをオープン『次元のバリア』、相手が攻撃宣言をしたときに発動できる。相手フィールド場の攻撃モンスターを全て破壊して、破壊したモンスターのレベルの合計分、デッキから墓地へ送るカードです。ですがスペース・ブラックの効果で墓地には行かないので除外してください。信頼しているデッキから」

「な！？……お前…まさか…！」

「フフフ…その顔…実に良いですね……」

キラが驚いた顔をしたらデラクは笑っていた

「ついに始まったな‥あいつのデュエルが‥」

「フェザーマンのレベルは3でエアーマンのレベルが4で合計が7だから‥‥あとキラのデッキって何枚?」

「え〜っと‥‥17枚よ」

「それって、だんだん追い詰められてるじゃん!」

キラのデッキの残り枚数24→17

「お前‥デッキ破壊か‥」

「そうですよ、デッキを信頼している人のデッキを削るのは楽しいですからね」

「早いうちに決着をつけないといけないが……ターンエンド」

「私のターン、ドロー、リバースモンスターをオープン。『ニードル・ワーム』、ニードル・ワームのモンスター効果を発動、このカードがリバースしたとき相手はデッキの上から5枚を墓地に送りますが、スペース・ブラックの効果により、除外してください」

「まだ削るのかよ!?」

「破壊したあとの相手の歪んだ顔がたまらなく面白いですからね」

キラのデッキの残り枚数17→12

「さらにカードを1枚セットしてターンエンド」

「俺のターン、ドロー！良し！手札からマジックカード！『平行世界融合（パラレル・ワールド・フュージョン）』を発動！除外されているスパークマンとバーストレディを除外融合し、『Ｅ・ＨＥＲＯ　ボルテック・フレア』を融合召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ボルテック・フレア
ＡＴＫ２４００

「上手いぞ！相手の除外効果を坂手にとるとは…やるな」

「こっから一気に逆転だ～！行けーキラ！」

「バトルだ！ボルテック・フレアでニードル・ワームに攻撃！」

ニードル・ワーム

ＡＴＫ７５０

ボルテック・フレアがニードル・ワームに向かって稲妻を落として破壊した

デラクＬＰ４０００→２３５０

「ぐっ…なかなかやりますね…だが、ここで罠カードを発動『選ぶ選択肢』、自分モンスターが破壊された時に発動が出来ます。相手は攻撃してきたモンスターのレベル分、デッキから墓地に送るか、手札を全て墓地に送るかを選択します。ですが、除外ですがね。さぁ…どうします？」

「…手札を全て除外する」

キラは、今はデッキの残りを保つ事を優先して手札を全て除外する事を選んだ

「ターンエンド」

「私のターンです。ドロー、モンスターをセットしてターンエンド」

「俺のターン、ドロー」

キラのデッキの残り枚数１１→１０

「バトルだ！ボルテック・フレアで攻撃！」

「残念ですね。・・・リバースカードオープン『トラップ開発』を発動、自分の場のカード１枚を除外する事で、除外されている罠カードを１枚を選択して発動出来ます」

「え？・・・じゃあ、お前が選ぶのは・・・」

「そうですよ、伏せカードを除外して『次元のバリア』を再び発動します」

ボルテック・フレアが向かった先に次元のバリアが現れてそのまま衝突してしまい破壊されてしまった

「そして、次元のバリアのもう一つの効果を忘れてませんよね？」

「・・・破壊したモンスターのレベルの合計分デッキから墓地に送るが、スペース・ブラックの効果で除外・・か・・」

E・HERO　ボルテック・フレア
レベル６

「そうですよ・・さぁ・・いよいよなくなってきましたね・・フフフ・・」

キラのデッキの残り枚数１０→４

「俺はこのままターンエンド」

「私のターン、ドロー、リバースモンスターをオープン！『ダスト・ワーム』、このモンスターがリバースした時、相手はデッキの上から3枚墓地に送りますが、除外してください」

ダスト・ワーム
ＡＴＫ３００

「何！？次でラストドローかよ！？」

キラのデッキの残り枚数4→1

「そして私はマジックカード『暗黒の扉』を発動します。これでお互いのプレイヤーはバトルフェイズに1体しか攻撃が出来ません。これで、王手を指しましたよ。手札1枚と伏せカードが2枚しかなく、デッキは僅か1枚、ましてや攻撃は1体しか出来ません。あなたはもう終わりですね。ターンエンド」

たしかにデラクの言うとおりである。次の引きで全てが決まるデスティニードローとなってしまった

「これじゃあ、マズいぞ！次が全てじゃないか！？」

「で・でも、キラならなんとかするさ！」

観客のほとんどがキラが敗北すると思っていた

「でも、キラ笑ってる。まるで、ピンチを楽しんでるように・・」

龍可が言っているとおりキラは笑っていた。

「何がおかしいんですか？」

「いや…ナイスな展開になってきたからだよ。ここで逆転出来たら面白いからさ！」

「やれるものならやってみせなさい」

「やってやるさ！俺のターン！ドロー！」

キラのデッキの残り枚数1→0

会場の全てが息を止め、静まり返った瞬間だった。そして…

「俺はマジックカード『O・オーバーソウル』を発動！墓地に存在する『HERO』と名のつく通常モンスターを特殊召喚出来る」

「あなたの墓地にそんなカードがあるんですか？」

「あるさ！お前が一番最初に『手札抹殺』を発動したときに墓地に送ったモンスターが！エースの登場だ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』を特殊召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス
ＡＴＫ２５００

「２５００のモンスターでは私は倒せませんよ」

「まだだ！伏せカード『戦士の生還』を発動！墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン』を手札に加える。そしてもう１枚のリバースカード『ＨＥＲＯの盾』を発動する。このカードは墓地に存在する。守備力が一番高い『ＨＥＲＯ』と名のつくモンスターを特殊召喚出来る！呼び出すのは『Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン』を特殊召喚！さらにバブルマンを通常召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン
ＡＴＫ８００

Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン

ＡＴＫ８００

「それが、どうしたと言うんですか？攻撃出来るのは１体だけですよ」

「わかっているさ。使えるのは手札や墓地、そしてフィールドだけじゃない！除外されている『ゼクター・ブレイド』の効果を発動！フィールド場に『ゼクス』と名の付くモンスターが存在する場合、手札を捨てる事でこのカードを手札に加えることが出来る。そして、『ゼクター・ブレイド』をゼクスに装備する！」

「そんな能力が何も上がらないカードを使って何を？」

「上がらないんじゃない！フォルムチェンジだ！ゼクスとゼクスに装備されているゼクター・ブレイドを墓地に送り、エクストラデッキから『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス・ソードフォルム』を特殊召喚！」

ゼクスがベルトから大きな大剣、『ゼクター・ブレイド』を出して手にすると、ゼクスの体の色が黒から赤色に変わった

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス・ソードフォルム
ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２０００
炎　戦士族　星７
融合モンスター　効果
『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』＋『ゼクター・ブレイド』
自分フィールド場に上記のカードが揃っているとき、墓地に送る事でこのカードを特殊召喚できる。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）１ターンに１度このモンスターの攻撃力はこのカード以外のフィールド場に表側表示で存在する『ＨＥＲＯ』と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする。この効果を発動するターン、他のモンスターは攻撃する事ができない。

「このモンスターはフィールド場にこのモンスター以外の『ＨＥＲＯ』と名のつくモンスターの合計分の攻撃力をアップする事が出来るんだ！」

「な！？……じゃあ…まさか…そのために…」

「そうさ！バブルマンとクレイマンの攻撃力をゼクスに加える！」

E・HERO　ゼクス・ソードフォルム
ＡＴＫ２５００→４１００

「これで、終わりだ！ゼクスでダスト・ワームに攻撃！『スラッシャー・ブレイク』！！」

ゼクスがゼクター・ブレイドを大きく振り上げ跳躍しダスト・ワームに向かって振り下ろした

そして、ダスト・ワームは破壊された

「ぐわぁぁぁ！」

デラクＬＰ２３５０→０

「決まった～！キラの奇跡の大勝利！ハラハラドキドキしましたが最後に凄まじいコンボで大逆転！準決勝に進出が決まった～！」

MCの勝利宣言によりキラは準決勝に進む事ができた。奇跡の大逆転により会場は大盛り上がりだった

「すっげーよ！めちゃくちゃすげーじゃん！」

「とっても凄かったね」

そう言って龍可達は、選手控え室、キラのところに向かった

第６試合　キラＶＳデラク（後書き）

次は遊星ＶＳボマーです。

指がものすごく痛くなってまいりました（笑）

準決勝第1試合　遊星ＶＳボマー（前書き）

これまた長い話になっちゃいました

寝不足になっちゃってます（笑）

準決勝第１試合　遊星ＶＳボマー

キラ試合である第６試合が終わった後、控え室に戻ったら皆が集まっていた

「すっげー逆転劇だったな、キラ！」

「カードが応えてくれたからこそ勝てたんだよ」

「いや～、本当に勝てるとは思ってもみなかったぞ、ラストドローの時のカードがコンボを決めれるカードで良かったな」

「ありがとうございます」

「で、次は遊星の試合だな！」

「あぁ、そろそろDホイールの準備に行ってくる。それとデュエルディスクは出来上がったぞ」

そろそろ準決勝の始まりを迎える時間なので、ガレージに行こうとするが完成したデュエルディスクをキラに渡した。

デッキを取り出してセットすると勝手にシャッフルされていることに感激を覚えた

「おぉ！ありがとうございます。それと次の試合頑張ってくださいね」

「頑張れよ遊星！」

「あぁ」

その後龍可達も観客席に戻り遊星の試合が始まるのを待っていた。

「さぁ！白熱した試合だったが次の試合に行くぞ～！準決勝第１試合はサテライトの流れ星、不動遊星ＶＳ黒き暴風ボマー！」

観客が盛り上がって来たところで、遊星がＤホイールに乗って登場してきたが、やはりブーイングの嵐だった。

そして、ボマーが登場する入り口から何かがこすれる音がして、何かが飛び出した

「なななななな～んだこれは！？象か？恐竜か？いや、ボマーが操るＤホイールだ！」

とても大きなＤホイールで登場し、遊星と並ぶが遊星のＤホイールがとても小さいよいに思えた

そして、スタート地点へと止まった

「そのDホイールでは、うっかり踏みつぶしてしまうかもしれんな」

「Dホイールはデカけりゃあ良いってもんじゃない」

「このデュエルは私が勝つ！：いや、勝たねばならない！」

そしてMCの指示によりフィールド魔法『スピード・ワールド』を発動した。

「これで、フィールドはスピード・ワールドによって支配された！発動出来る魔法はスピードスペルのみ！ライディングデュエルアクセラレーション！」

「「デュエル」」

アクセラレーションという言葉とともに、アクセラを回してスター

トした

遊星ＬＰ４０００
ボマーＬＰ４０００

「私のターン、ドロー、手札よりモンスターを召喚する。現れよ『マジック・リアクター・ＡＩＤ』。そして、私はカードを3枚セットし、ターンエンド」

マジック・リアクター・ＡＩＤ
ＡＴＫ１２００

遊星ＳＰＣ０→１
ボマーＳＰＣ０→１

「俺のターン」

カードをドローした時ボマーのＤホイールから爆音が響いていた。

ボマーのDホイールが大きいから遊星はどこかやりにくそうだった

「俺はカードを1枚セット、そして『スピード・ウォリアー』を召喚」

スピード・ウォリアー
ＡＴＫ９００

「この瞬間、私のトラップが発動する！『隠れ兵』、このトラップは相手がモンスターを呼び出した時、手札からレベル４以下の闇属性モンスターを特殊召喚する。私が召喚するのは『トラップ・リアクター・ＲＲ』」

トラップ・リアクター・ＲＲ
ＡＴＫ８００

「スピード・ウォリアーは召喚したターン、攻撃力が2倍となる。行け！スピード・ウォリアー、『ソニック・エッジ』」

スピード・ウォリアー
ＡＴＫ９００→１８００

スピード・ウォリアーがマジック・リアクターに向かって行って、
マジック・リアクターを蹴り飛ばした。蹴り飛ばした衝撃で爆風が
起こった

ボマーＬＰ４０００→３４００

だが、爆風の中からマジック・リアクターが現れて、破壊が出来て
いなかった

「何！？」

「甘いぞ遊星、私はすでにトラップカード『フェイク・エクスプロ
ージョン・ペンタ』を発動している！このカードは、相手のモンス
ターの攻撃から守り、その時、手札からレベル５のモンスターを特
殊召喚する。現れよ『サモン・リアクター・ＡＩ』！

サモン・リアクター・ＡＩ
ＡＴＫ２０００

早くもサモン、マジック、トラップの３体のリアクターシリーズを揃えたのだった

「さらに私は新たなトラップカード『デルタ・リアクター』を発動！このカードは場のサモン、マジック、トラップの３体のリアクターを墓地に送り、現れよ『ジャイアント・ボマー・エアレイド』！」

ジャイアント・ボマー・エアレイド
ＡＴＫ３０００

なんとボマーは僅か２ターンでエースモンスターを召喚してしまった

「ジャイアント・ボマー・エアレイドは相手ターンに１度、相手が召喚、特殊召喚をしたとき、そしてカードをセットしたとき、そのカードを破壊し、相手に８００ポイントのダメージを与える。遊星

よ、お前の動きは封じられた！私は勝つ‥そして自らの使命を果たす！！」

「‥‥ターンエンド」

遊星ＳＰＣ１↓２
ボマーＳＰＣ１↓２

早くも３ターン目を迎えて、ボマーの攻撃が始まる

「私のターン、ジャイアント・ボマー・エアレイドでスピード・ウォリアーを攻撃！」

マシンガンを撃つがスピード・ウォリアーはかわしていくが、プロペラに当たってしまい破壊される

「ぐっ‥‥」

遊星ＬＰ４０００→１９００

遊星はたまらずスピンするがなんとか耐えて体制を戻してボマーを追った。スピード・ワールドはダメージを受けたとき１０００ポイント以上事にカウンターが一つ減ってしまう。２１００ポイントのダメージを受けて遊星のスピード・カウンターは０に戻ってしまった

遊星ＳＰＣ２→０

「ふんっ、この程度で終わられてしまったらな、こい！遊星！私はカードを１枚セットしてターンエンド」

遊星ＳＰＣ０→１
ボマーＳＰＣ２→３

「俺のターン、：（俺のターンに１度プレイしたカードは破壊される：）手札より『シールド・ウォリアー』を召喚！」

シールド・ウォリアー
ＤＥＦ１６００

「この瞬間、ジャイアント・ボマー・エアレイドの効果を発動！相手がモンスターを召喚したとき、そのカードを破壊し、８００ポイントのダメージを与える。『シャープ・シューティング』」

ジャイアント・ボマー・エアレイドからミサイルが放たれシールド・ウォリアーが破壊された

遊星ＬＰ１９００→１１００

「カードを1枚伏せてターンエンド」

ボマーの一方的な展開により遊星の場にはモンスターがおらず、伏せカードが2枚あるのみだ。次のダイレクトアタックが決まれば遊星の負けが決まってしまう

「マズいよ！モンスターを召喚しても破壊されるんじゃあ遊星は手も足も出ないよ！ってか俺ってあんな強い人と戦ってたの！？」

「龍亞：今頃気付いたの？」

「ヤバい！次の攻撃であんちゃんは終わりだぜ！」

「だが、遊星はまだ諦めてはいない。チャンスはある」

「どうして？」

「さっきのターン、遊星は自分のモンスターが破壊される事を計算済みだ」

氷室は説明をしているが矢薙のじいさんはいまいちわかっていなかった

「ジャイアント・ボマー・エアレイドは相手ターンに1度、召喚や特殊召喚されたモンスターかセットされたカードを破壊する事ができる」

「そう。遊星はさっきのターン、モンスターを破壊され、その後カードをセットした」

「ってことは、本当の目的はモンスターの召喚じゃなくて、伏せカードをセットすること！」

「ならば、あのカードはミラーフォースのような逆転のカード」

氷室や天兵の言うとおり遊星の目的はカードを伏せる事だった。そしてそのカードは逆転できるカードとも読み取れるが、ボマーはどう選択するか：

「私のターン！」

遊星ＳＰＣ１↓２
ボマーＳＰＣ３↓４

「（確かにお前の伏せカードが逆転の一手でもある。だが、ジャイアント・ボマー・エアレイドは手札１枚をコストにして場のカードを破壊するもう一つの効果がある。：たとえモンスターの後にセットしようと結局ジャイアント・ボマー・エアレイドの破壊効果から逃れられる事は出来ない。それを読みきれぬお前じゃない：ならば今のプレイの真意は：：そうか！今のプレイの真の目的！それは、さらなるターンのため１枚でも多く手札を削る事！）ならば！遊星！お前にダイレクトアタックだ！」

「ダイレクトアタックだと！？」

ジャイアント・ボマー・エアレイドが攻撃を仕掛けてきた

「罠カード発動！『荒野の大竜巻』、このカードはマジック、トラップカードを１枚破壊する。俺が破壊するのはこれだ！」

そう言って選択したカードは遊星の場の『リミッター・ブレイク』だった

「自分の場のカードを破壊するだと!?」

「このカードが破壊された時、自分の墓地からスピード・ウォリアーを特殊召喚する事ができる」

リミッター・ブレイクのカードの中から守備表示のスピード・ウォリアーが現れて、遊星の盾となり破壊された

「やはり私の攻撃を受けきったか。だが、お前に残されたのは手札のみ!」

「(さすがだ:ボマー、俺の戦略を読みきっている)」

遊星の真意に気付いて真の罠を回避した。ジャイアント・ボマー・

エアレイドの効果で荒野の大竜巻を破壊しようとすればそれをチェーンしてリミッター・ブレイクを破壊しスピード・ウォリアーを特殊召喚させる。逆にリミッター・ブレイクを破壊するば荒野の大竜巻が残り、スピード・ウォリアーが特殊召喚されていたがボマーはこの戦略を読んでいた

「もう…氷室のおっちゃん！全然違うじゃん」

「め…面目ない…」

氷室の当てはハズれていた

「私はカードを1枚伏せてターンエンド」

遊星ＳＰＣ2→3
ボマーＳＰＣ4→5

「俺のターン！…手札より『マッシブ・ウォリアー』を召喚！」

マッシブ・ウォリアー
ＡＴＫ６００

「この瞬間、ジャイアント・ボマー・エアレイドの効果を破壊！相手がプレイした時、そのカードを破壊して相手に８００ポイントのダメージを与える！『シャープ・シューティング』」

ジャイアント・ボマー・エアレイドのミサイルによってマッシブ・ウォリアーが破壊されついに遊星のライフが３００になってしまった

「うっ……」

遊星ＬＰ１１００→３００

「『Ｓｐ・ゼロ・リバース』発動！このカードはスピード・カウンターが３以上あるとき、このターン効果によって破壊されたモンスターの攻撃力を０にし、特殊召喚する！」

マッシブ・ウォリアー
ＡＴＫ６００→０

「だが、攻撃力０では私は倒せん！」

「モンスターの召喚に成功したとき、このモンスターは特殊召喚する事ができる！行くぞ！『ワンショット・ブースター』を特殊召喚！マッシブ・ウォリアーでジャイアント・ボマー・エアレイドに攻撃！」

「攻撃力０のモンスターで何をするつもりだ？」

「ワンショット・ブースターの効果、こいつをリリースすることで、自分のモンスターとバトルを行った相手モンスターを破壊する」

「だが、お前のライフに３０００のダメージを与えるぞ！」

「マッシブ・ウォリアーは1ターンに1度、戦闘ダメージを0にし、破壊を無効にできる！ワンショット・ブースターをリリース！」

「何だと！？」

マッシブ・ウォリアーがワンショット・ブースターのブースターの部分に乗っかりジャイアント・ボマー・エアレイドに向かって放たれそのまま突っ込み、ジャイアント・ボマー・エアレイドを破壊した

ついに遊星がジャイアント・ボマー・エアレイドを破壊した

「永続トラップ『チャリオット・パイル』を発動！」

ボマーのDホイールのタイヤのホイール部分からトゲのような物が出てきた

「私は負けん！使命を果たすまで負けはせん！私のターン！」

遊星ＳＰＣ３→４
ボマーＳＰＣ５→６

「チャリオット・パイルの効果を発動！これにより１ターンに１度、相手に８００ポイントのダメージを与える。この効果はモンスターをリリースすることで無効にできる。さぁどうする！？遊星！」

「くっ・・・俺はマッシブ・ウォリアーをリリースしてダメージを無効」

マッシブ・ウォリアーが遊星の盾となりダメージを無効にした

「ふんっ、モンスターをリリースしてダメージを防いだか・私はこれでターンエンド」

遊星ＳＰＣ４→５

ボマーＳＰＣ６→７

「俺のターン、（：頼むぞ：ジャンク・シンクロン）『ジャンク・シンクロン』を召喚！このカードの召喚に成功したとき、墓地のレベル２以下のモンスターを特殊召喚できる。復活しろ！『スピード・ウォリアー』！そしてスピード・ウォリアーにジャンク・シンクロンをチューニング！」

「シンクロモンスターか」

２＋３＝５

「集いし星が、新たな力を呼び起こす！光差す道となれ！シンクロ召喚、出よ『ジャンク・ウォリアー』、ボマーにダイレクトアタック！『スクラップ・フィスト』！」

ジャンク・ウォリアー
ＡＴＫ２３００

ジャンク・ウォリアーがシンクロ召喚され、ボマーにダイレクトアタックを狙いに行った

「甘いぞ遊星！チャリオット・パイルにはもう一つの効果がある。相手がダイレクトアタックをしたとき、８００ポイントのライフを支払い、その攻撃を無効にし破壊する！」

ボマーＬＰ３４００→２６００

ボマーにパンチをしたときバリアが張られその衝撃でジャンク・ウォリアーが破壊された

「俺はカードを１枚セットしてターンエンド」

遊星ＳＰＣ５→６
ボマーＳＰＣ７→８

「私のターンだ、『ブラック・ボンバー』を召喚。このカードが召喚に成功したとき、墓地に存在するレベル４以下のモンスターを守備表示で特殊召喚することができる。現れよ『トラップ・リアクター・ＲＲ』！」

ブラック・ボンバー
ＡＴＫ１００
トラップ・リアクター・ＲＲ
ＤＥＦ１８００

「レベル４のトラップ・リアクターにレベル３のブラック・ボンバーをチューニング！」

「シンクロ召喚！？」

３＋４＝７

「そうだ。シンクロモンスターを使うのはお前だけじゃない！現れよ『ダーク・ダイブ・ボンバー』！ダーク・ダイブ・ボンバーで遊

星にダイレクトアタック！」

ダーク・ダイブ・ボンバー
ＡＴＫ２６００

遊星に向かってミサイルが放たれる

「罠カード発動！『シンクロ・スピリッツ』、墓地のシンクロモンスターを除外し、シンクロ召喚に使ったモンスターを特殊召喚する！ジャンク・ウォリアーをゲームから除外！復活せよ、ジャンク・シンクロン、スピード・ウォリアー！」

ジャンク・ウォリアー
ＤＥＦ５００

スピード・ウォリアー
ＤＥＦ４００

ジャンク・シンクロンが遊星の盾となりミサイルを受けるが破壊されなかった

「何!?なぜ破壊出来ない?」

「墓地のシールド・ウォリアーはゲームより除外することで、バトルによる破壊を無効にする」

「だが、この瞬間、チャリオット・パイルの効果を発動!1ターンに1度、相手に800ポイントのダメージを与える」

「俺はスピード・ウォリアーをリリースすることでダメージを無効にする」

スピード・ウォリアーがチャリオット・パイルに飛びかかり、止めようとしたが破壊された

「さらに罠カード、『アルティメット・マイン』を発動。このカードにより、アルティメット・マイントークンを特殊召喚する」

アルティメット・マイントークン
ＤＥＦ０

「何だ？あれは？」

「破壊される時、相手に８００ポイントのダメージを与えるモンスターだ」

「ダーク・ダイブ・ボンバーはリリースしたモンスターのレベルの２００倍のダメージを与えるはず・・・」

「アルティメット・マイントークンのレベルは１０」

「ってことは・・・え～っと・・」

「レベル１０×２００だから・２０００ポイントのダメージ」

「「２０００ポイントも！？」」

「これで再びお前の手は封じられた。次の私ターンでお前のライフは０になる！ターンエンド」

遊星ＳＰＣ６→７
ボマーＳＰＣ８→９

「さぁ！どうする！？遊星の手札は０枚！次のドローに全てがかかる！」

そう、ボマーのターンに移ってしまえば確実に遊星のライフは０になってしまう

「俺のターン！俺はこのカードに賭ける！『チューニング・サポーター』を召喚！レベル１のチューニング・サポーターにレベル３のジャンクシンクロンをチューニング！シンクロ召喚！出でよ！『アームズ・エイド』」

１＋３＝４

アームズ・エイド
ＡＴＫ１８００

遊星の場に手だけのモンスターが現れる

「攻撃力１８００のモンスターで何をするつもりだ？」

「チューニング・サポーターがシンクロ召喚に素材になったとき、デッキからカードを１枚ドロー出来る」

遊星はなんとか繋いで最後デスティニードローをするのだった

静かに引いて、カードを確認すると遊星は笑って「来たか…」と呟いた

「『Ｓｐ・シンクロ・リターン』を発動！このカードはスピードカウンターが５個以上あるとき、ゲームから除外されているシンクロモンスターを特殊召喚できる。出でよ！『ジャンク・ウォリアー』！さらにアームズ・エイドの効果を発動！」

「何！？」

「アームズ・エイドはシンクロモンスターの装備カードとなり、攻撃力を１０００ポイントをアップさせる！」

アームズ・エイドがジャンク・ウォリアーの右腕に装着された

ジャンク・ウォリアー
ＡＴＫ２３００→３３００

「攻撃力がダーク・ダイブ・ボンバーを上回っただと!?」

「バトル!『パワー・ギア・フィスト』!!」

アームズ・エイドが炎のように光り出し突撃してきてダーク・ダイブ・ボンバーが迎撃しようとミサイルを放つがミサイルが破壊され、ダーク・ダイブ・ボンバーがアームズ・エイドによって潰された

「うぐぅ・・・」

ボマーLP2600→1900

「さらにアームズ・エイドのモンスター効果、装着モンスターがバトルによってモンスターを破壊したとき、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える!」

「な・何!?うわぁぁぁ～」

ボマーLP1900→0

ボマーのDホイールが停止してその衝撃でボマーが転げ落ちた

そして遊星が勝ったがデュエルが終わったのにソリッドビジョンであるはずのチャリオット・パイルが消えてなかった

そして、デュエルフィールドの真ん中に立っている建物の中からゴドウィンとイェーガーとジャックが見ていた

「残念です・彼ではシグナーの覚醒は出来ませんでしたか・」

「ついに決着！サテライトの流れ星の不動遊星がボマーを撃ち破ったぞ！この準決勝を見事勝ち抜いたのは不動遊星だ！」

観客の反応はやはり不満でいっぱいだった

遊星はボマーが心配になって引き返してきた

「大丈夫か！？ボマー」

ボマーがゆっくりと立ち上がるとマイクを持っていた

「よって次の戦いは「遊星・見事だった。私の完敗だ」

ここで事件が起きた。ＭＣが喋っていたがマイクをジャックされていた

「私は負けた・だが、私の使命は終わってはいない！」

「!?」

「私はこの大会に優勝し、式典でゴドウィンが行った事実を公にするつもりだった。だが、今になってそれは叶わぬ夢…ならば、この場で復讐を果たすまで!これを観よ!」

「復讐?」

ボマーが指を差した先にモニターが現れ、とある村が映し出されていた

「無に帰した我が村を!」

止められるモニターだが何故かゴドウィンはモニターを止めなかった

「これが私の村だ!故郷だ!ゴドウィンは赤き竜を復活させようと

我が村を実験材料にした…そして私の村は……」

突如村が大爆発を起こし跡形もなく消え去っていた

「村人全員が行方不明…そしてその中に私の姉弟もいた…」

「それじゃあ、お前の姉弟は……」

「遊星！ジャック！やつを信じるな！ゴドウィンに赤き竜を渡してはならない！」

それだけ言ってボマーはDホイールに乗ってアクセルを回した

「ボマー！！」

「やつとはこの俺が決着をつける！私の村のために！姉弟のために

！この悲しみを二度と繰り返させないために！」

ボマーはカーブの盛り上がっている部分をジャンプ台にしてゴドウィンのいる方向へと飛んでいった

「ボマー！！」

遊星もまた逆の方向から同じことをして飛び上がった

「何！？」

そして、遊星のDホイールがチャリオット・パイルにぶつかり、根元から折れてゴドウィンの方へと飛んでいってしまった

そして遊星とボマーは無事だった。だがボマーは止めたことに怒りを露わにした

「遊星！何故止めた！？何故！？」

「ボマー：俺もやつを許すことは出来ない。だが、力ずくで決着をつけるならお前とやつと同じだ」

遊星に本当の事を言われボマーは何も言い返せず、叫ぶだけだった

あまりの出来事に会場はただ唖然とするしかなかった

するとゴドウィンは何も無かったのように報告を始めた

「会場の皆様、御安心下さい。私は治安維持局長官として皆さんを守る責任があります。どんな事が起ころうとも、皆さんを守ります。この命に代えても」

そして会場はゴドウィンの言葉を信じ拍手を送るのだった

そしてその後、ボマーはセキュリティによって連行された

準決勝第1試合　遊星ＶＳボマー（後書き）

次は第7試合でアキと虎堂のデュエルです。

第7試合　アキＶＳ虎堂（前書き）

関係ないけどワンピースの映画が楽しみです！

遊戯王の映画の映画の方がもっと楽しみだけど

第7試合　アキＶＳ虎堂

ここはとある一室である。虎堂はパソコンでアキのデータを調べている。そこへイェーガーがやって来た

「そろそろスタンバイを」

ゆっくりとパソコンを閉じると喋り出した

「いよいよ俺の仕事か‥十六夜アキの１６年間の情報はこの４０枚のデッキに抄訳された」

「さすがはプロファイラー‥」

「お前達が望むものを暴き出してやる。その時は報酬の5倍は貰いたいものだ」

虎堂は部屋を出て準備をしに行った。

そしてまた、場所は変わってとある廊下でアキと謎の男：ディヴァインが話をしていた

「アキ、怖いか？」

「私はまた：傷つける：」

「恐れるな、お前はサイコデュエリストの未来、その誇りと使命を知ったとき、この仮面とは別れをつげたはずだ。堂々とその美しい素顔をさらし、お前の存在を知らしめよ」

時間も過ぎていって、第7試合の始まりを告げた

「さぁ！始まった第7試合！デュエルの仕事人、来宮虎堂！」

来宮虎堂がフィールドに現れ、声援が贈られた

「対するは、1回戦の衝撃が生々しい、黒薔薇の魔女、十六夜アキ！」

アキが現れると会場の反応はブーイングだった

ゲームはスタンディングデュエルで行われる

「あの人、怖くないのかな……」

「そりゃあ怖いだろう・相手は魔女だぞ。怒らせるとヤバいって・・」

「わしゃあ魔女と友だちになりたいね。あの力は凄いよ～」

緊張感に包まれた会場だが、呑気な考えの矢薙のじいさんだった。

遊星とキラと氷室はガレージに居て、Dホイールのメンテナンスをしていた

「どうだ？Dホイールの調子は？」

「あぁ、大丈夫だ」

「魔女か・・もし魔女が勝ったらキラの対戦相手になるぞ。お前はどう思う？」

「俺は・・・楽しいデュエルが出来ればそれで良いです」

「楽しいデュエルってな・・・遊星は？」

「このデュエルでわかる」

注目の一戦が始まるようでアキと虎堂はデュエルディスクを起動させた

「「デュエル」」

アキＬＰ４０００
虎堂ＬＰ４０００

「私のターン、ドロー、『バイオレット・ウィッチ』を召喚、続いて手札よりフィールド魔法『ブラック・ガーデン』を発動」

バイオレット・ウィッチ
ＡＴＫ１１００

フィールドが薔薇の庭へと変わっていった

「始まったな…結局お前は自分の世界に閉じこもっているだけだ」

「カードを1枚伏せてターンエンド」

早くもブラック・ガーデンを仕掛けて来たアキだがどう立ち向かうのかが気になっていた会場内

「俺のターン、ドロー、何故お前がブラック・ガーデンを使っているかわかっているさ。お前は人と仲良くありたいと願っている…だが、家族や友人が取った行動はこうだ……カードを1枚セットしてターンエンド」

虎堂はモンスターを召喚するのではなく、ただ伏せカードをセットしただけだった

「この伏せカードは、お前が今まで出会ってきた全ての人を象徴する。誰も魔女と仲良くしたいとは思うまい・・・その目！相手をジッと揺らがぬその瞳を誰もが恐れるのだ！」

虎堂はプロファイラーと呼ばれるデュエリストで、大戦前に相手のプロフィールを調べつくし、デッキを組み上げるデュエリストだった

「私のターン、ドロー、バトル：バイオレット・ウィッチよプレイヤーにダイレクトアタック」

バイオレット・ウィッチが虎堂に攻撃を仕掛け、ライフを削った

「うぉっ！！」

虎堂ＬＰ４０００→２９００

アキのダイレクトアタックが決まり文字通りの衝撃を与えるダイレクトのダメージだ

「また君はデュエルで人を傷つけたね・・サイコデュエリスト・・十六夜アキ！」

「！？」

サイコデュエリストと呼ばれ、僅かに動揺するかのように目を見開いていた

「３年前の５月１５日、デュエル実習において君はまさにそのバイオレット・ウィッチでクラスメイトを傷つけた。君がデュエルアカデミアで初めて力を使った瞬間だったね・・以来、君は皆から恐れられ、次第に遠ざかるようになった。背を向けたこのカードのようにね！」

「（この男：何故そんな事を：）」

「君の力はあってはならぬ罪深いもの。忌まわしい力には罰が必要だ。トラップカード『罪と罰』を発動。このカードは自分が直接攻撃によってダメージを受けた時に発動できる。相手モンスター１体を破壊する」

罪と罰のカードから光が放たれバイオレット・ウィッチが破壊された

「バイオレット・ウィッチのモンスター効果、このカードがフィールドから墓地に送られた時、自分のデッキから守備力１５００以下の植物族モンスター１体を手札に加える。選択したカードは『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』」

「また君の１６年にとって罪深いカードを選んだもんだね：：：罪と罰の効果、バトルフェイズ終了時にレベル４以下のモンスターを特殊召喚できる。『ヘイト・エージェント』を守備表示で特殊召喚」

ヘイト・エージェントが現れるとブラック・ガーデンから弦が伸びていき、ヘイト・エージェントを絡み取った

「ブラック・ガーデンの効果、召喚されたモンスターの攻撃力を半分にする」

ヘイト・エージェント
ＡＴＫ０→０
ＤＥＦ０

「残念だったな：ヘイト・エージェントは攻撃力守備力共に０だ！魔法効果など無意味だ」

「ヘイト・エージェントの特殊召喚により、私の場に、ローズトークンを特殊召喚する」

ローズトークン
ＡＴＫ８００

「この効果で特殊召喚されたローズトークンは戦闘で破壊されず、攻撃も出来ない」

「では俺も：ヘイト・エージェントの効果を発動。相手ターンのバトルフェイズ終了後にプレイヤーが1度に戦闘で受けたダメージ分のライフを回復することができる」

虎堂ＬＰ２９００→４０００

「手札よりフェニキシアン・シードを召喚」

フェニキシアン・シード
ＤＥＦ０

「ブラック・ガーデンの効果を発動。モンスターの攻撃力を半分にし、ローズトークンを相手フィールドに攻撃表示で特殊召喚する。トラップカード、『ローズ・フレイム』を発動、相手フィールド場にモンスターが特殊召喚された時、相手プレイヤーに５００ポイントのダメージを与える」

ローズ・フレイムから炎に包まれた薔薇が放たれ、虎堂にダメージを与えた

虎堂ＬＰ４０００→３５００

「うぉっ！！ぐっ……うぅ…今度は5歳の出来事を再現…か…」

「？」

「君が初めてデュエルで勝ったあの日だ。初めての勝利の興奮が君の潜在意識に眠っていた力を覚醒させた」

「（私の力は周りを壊すだけじゃない…人の心も壊す……なのにこの力は高まるばかりだった…私は…）ターンを終了」

「お前は破壊を世にもたらす化け物だ。化け物なら化け物の巣に帰れ！ここは人間の世界だ俺のターン、ドロー、手札よりマジックカード『マインド・モンスター』を発動。マインド・モンスターの効果、相手のモンスターを1体を宣言する。俺が宣言するのは『ブラック・ローズ・ドラゴン』だ！宣言したモンスターがいる場合、相手プレイヤーはそのモンスター1体の攻撃力の半分のダメージを受ける。ブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃力は２４００、その半分の１２００の攻撃力でお前にダメージを与える！」

マインド・モンスターがブラック・ローズ・ドラゴンの姿になり、アキに攻撃をした

アキＬＰ４０００→２８００

アキに攻撃を与えたことにより会場が盛り上がっていた。魔女を倒せ…と…

「残念だよ…俺に力があればお前を傷つけれたのに…次のターンを楽しみにしているがいい…俺の場にいるローズトークンを守備表示に変更しターンエンド」

ローズトークン
ＤＥＦ８００

「私のターン、ドロー、（…体の傷は癒えても、心の傷は消える事は無い…私は痛みを力に変える。痛みを知るからこそ力となる。それを教えてくれたのが…ディヴァイン…）」

「どうした？早く来いよ、アルカディアムーブメントはその力に期待しているのだろう？」

「！？」

アルカディアムーブメントとはサイコデュエリストの理想郷、密かに結集しては活動している者達

その名前を口に出した時にまたアキは目を見開いていた

「私は：私の信じる人のためにここへ来た。必要とされる力を持って。フェニキシアン・シードの効果、自分フィールド場に表側表示で存在するこのカードを墓地に送ることで、手札から『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』を特殊召喚！」

フェニキシアン・シードが破壊されるとフェニキシアン・クラスター・アマリリスと呼ばれる花のモンスターが現れるがブラック・ガーデンの効果により攻撃力を半分にされた

フェニキシアン・クラスター・アマリリス
ＡＴＫ２２００→１１００

そして、虎堂の場にローズトークンが現れた。その時、ローズトークンが特殊召喚されたことにより、ローズ・フレイムの効果が発動された

またローズ・フレイムから炎が放たれ虎堂はだんだんと体に傷がついていった

虎堂ＬＰ３５００→３０００

「バトル、フェニキシアン・クラスター・アマリリスよ‥ローズトークンを攻撃！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスから種のような物が飛ばされローズトークンに攻撃し、虎堂にダメージを与える

「うわっ！！」

虎堂ＬＰ３０００→２７００

「フェニキシアン・クラスター・アマリリスは戦闘を行ったとき破壊する。そして効果を発動、このカードが破壊され墓地に送られるとき８００ポイントのダメージを相手に与える」

「！！ぐわっ‥‥自滅行為はこれが狙いか‥」

虎堂ＬＰ２７００→１９００

虎堂の体力も限界に近くなっていたのか倒れた

だが、ヘイト・エージェントの効果で戦闘ダメージ分のライフを回復しながらゆっくりと立ち上がった

虎堂ＬＰ１９００→２２００

「ぐ…体が引き裂かれる…魔女は本気で俺の命を削るつもりだ…ライフが０になったら報酬どころじゃない…俺の命まで割に合わねぇぞ！」

「カードを１枚伏せてターンを終了、フェニキシアン・クラスター・アマリリスは自分のターンのエンドフェイズ時に墓地から守備表示で特殊召喚することができる」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスはブラック・ガーデンの効果によって攻撃力が半分にされるが、虎堂の場にローズトークンが特殊召喚される。

フェニキシアン・クラスター・アマリリス
ＤＥＦ０

「永続トラップ『ローズ・フレイム』の効果を発動」

永続トラップのローズ・フレイムが虎堂を襲った

「うわぁぁぁ！！：はぁ：はぁ：ば：化け物め：」

再び倒れそうになるがなんとか堪えた

虎堂２２００→１７００

「俺のターン、ドロー、3体のローズトークンをリリースし、手札より、『マッド・プロファイラー』を特殊召喚！」

虎堂の場にマッド・プロファイラーが召喚されるがブラック・ガーデンによって攻撃力が半分となり、アキの場にローズトークンが特殊召喚された

マッド・ファイラー
ＡＴＫ２６００↓１３００

「マッド・プロファイラーはフィールドの3体のモンスターをリリースすることで、手札から特殊召喚することができる。（もうこれは仕事じゃねぇ！金もいらねぇ！さっさと勝ってここを去る！）マッド・プロファイラーのモンスター効果！カードを1枚墓地に送り、フィールド場に墓地へ送った種類のカード1枚をゲームから除外する！」

墓地に送ったのは魔法カード。それによりブラック・ガーデンが除外された

マッド・プロファイラー
ＡＴＫ１３００→２６００

「まだまだマッド・プロファイラーの効果を使うぜ！モンスターカードを墓地へ送り、フェニキシアン・クラスター・アマリリスをゲームから除外！」

そしてまた、今度はフェニキシアン・クラスター・アマリリスが除外された

「これで破壊によるモンスターの効果の発動は無い！バトルだ！マッド・プロファイラーよ、ローズトークンを攻撃！」

「ぐぅ・・・」

マッド・プロファイラーによってローズトークンが攻撃されアキにダメージを与えた

アキＬＰ２８００→１０００

さらにアキを追い詰めたことにより会場は盛り上がっていた。

「良いぞ！もっと化け物を攻撃しろ！」

っと・・・

「思い知ったか、化け物はデュエルを汚すな！巣に帰んな！手札より装備魔法『デストラクション・インシュランス」を発動」

デストラクション・インシュランスは破壊された時、相手プレイヤーに装備モンスターの攻撃力の半分のダメージを与えるカードだ。

マッド・プロファイラーの攻撃力２６００の半分だから１３００のダメージでアキが負けてしまう

「さらに装備魔法『ライト・ロー・プロテクション』」

随分と念入りに来たものだった。ライト・ロー・プロテクションは装備モンスターの攻撃力が相手モンスターによって変化した場合、そのカードを破壊する。これはまさしくブラック・ローズ・ドラゴン対策だった

「私のターン、ドロー、『ナイト・ローズ・ナイト』を召喚、レベル2のローズトークン2体とレベル3、チューナーモンスターのナイト・ローズ・ナイトをチューニング。冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け！シンクロ召喚！現れよ『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

ついにアキのエースモンスターが現れた時、シグナー全員の痣が疼きだした

ブラック・ローズ・ドラゴンが現れたことによって実体化しているため会場が震えていた

ブラック・ローズ・ドラゴン
ＡＴＫ２４００

「魔女の切り札：来いよ！返り討ちにしてやる！親にも捨てられた化け物が！」

その言葉がアキの心の引き金となり、髪留めが落ちた。アキの目から僅かに怒りの瞳が見えた

「人の心を土足で踏み荒らすお前を許さない：痛みをその身に刻め！」

「（ふんっ：情報ってのは自分の身を守るために使うもんだ：これだけの装備魔法とヘイト・エージェントがの効果、俺が負けるはずがない：やつのサイコの力をカードで跳ね返しやる！）」

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果、墓地の植物族モンスターを1体をゲームから除外することで、モンスターの攻撃力を0にする。『ローズ・リストリクション』！」

ブラック・ローズ・ドラゴンの効果によってマッド・プロファイラーの攻撃力が0になった

マッド・プロファイラーＡＴＫ２６００→０

「そいつを待っていた！！ライト・ロー・プロテクションの効果を発動！装備モンスターの攻撃力が相手モンスターの効果によって変化したとき、そのカードを破壊する！」

ライト・ロー・プロテクションの効果によってブラック・ローズ・ドラゴンが大きな爆発と共に消えていった

その頃：阿久津は大はしゃぎだった

「トラップカード『カース・オブ・ローズ』を発動、相手フィールド場に存在するモンスターの攻撃力が変化したとき、そのモンスターの攻撃力と変化した数値分のダメージを相手プレイヤーに与える……やれ……」

虎堂が薔薇の花びらに囲まれ悲鳴だけが会場に届いていた。そして

薔薇が消えた時に全身ボロボロで倒れていた虎堂だけが残されていた

虎堂ＬＰ１７００→０

「決着！！早く救護班を！」

怪我人を早く助けるようにＭＣが救護班を呼んでいた

「準決勝進出は十六夜アキ！」

デュエルが終わった時、シグナー全員の疼きが治まった

「彼女のカードをどう読み切る‥」

「拒絶と‥怒りと‥だが‥まだ‥何かが潜んでいる‥」

「キラ：お前は棄権した方が良いんじゃないか？」

「そうだ、棄権した方が良い」

棄権した方が良いと言う遊星と氷室だがキラはそれを断った

「いえ：やります。あの人は俺と同じですから」

「「同じ？」」

「はい：同じなんです」

そうして、第7試合が終わった

第7試合　アキＶＳ虎堂（後書き）

次はキラＶＳアキです

遊星とジャックのデュエルをどうしようか悩んでます・・あと、ダークシグナー達のそれぞれのデュエルを書くか書かないかを・・・

準決勝第2試合　キラＶＳアキ（前書き）

思ったんですが第3期以降の遊星達の生活で栄養管理が出来ているのか気になりました（笑）

観た限りカップラーメンと牛尾さんに招待されたステーキだけの食事しか観てません：遊星は機械いじりが得意だが料理は不明だけど、多分見た目としては料理は出来なさそう：ジャックは：：無理だな：クロウが意外と出来るかもしれないが：：：謎だな：

準決勝第2試合　キラＶＳアキ

波乱の第7試合も終わったが観客はアキの力に怯えながらも会場に残っていた。この大会がどうなるのか‥‥と‥

アキは控え室に、遊星とキラも同じく控え室に向かうべく進むのだがばったりと会っていた

そして、お互いに立ち止まるとアキは右腕を左手で掴んだ

「何故、忌むべき印だ?痣はお前にとって何なんだ?」

「私は‥‥この印を持つ者を憎む‥嫌悪する」

話をしている途中で龍亞と龍可がやってきた

「遊星～！キラ～！……って魔女の姉ちゃん！？」

アキは龍可に目をやると、悲しい表情になり逸らした

そして、いつの間にかイェーガーまでやってきていた

「ヒッヒッヒッヒッ、これはこれは十六夜様。先程のデュエルは感服しましたよ。準決勝を前にゴドウィン長官から一言労いの言葉をと申しております。御一緒して頂けるでしょうか？」

「アキは疲れています」

イェーガーの誘いを断ったのはアキではなく、アキの後ろの通路から現れたディヴァインだった

「あなたは？」

「アキの保護者・・・と言っておきましょうか・・もっともあなた方の方でもう調べは着いているのでしょうが・・・準決勝を前にアキの体調を回復しなければなりません。お察しを・・」

そして、ディヴァインはアキを連れてどこかへと行ってしまった

イェーガーも断られたので戻って行っていた。今この場にはキラと遊星と龍可と龍亞だけだった

「キラ、やっぱり棄権した方が良い」

「いえ、俺はやります。純粋にデュエルをしたいのと・・やりたい事があるんです」

「え!?キラ魔女の姉ちゃんとデュエルするの!?怖くないの?」

「そりゃあ怖いさ。でも怖くないよ」

「何それ?それとやりたい事って何?」

「彼女を救う事‥かな‥でも、もし出来なかった時は遊星、お願いしますね」

「それって負けた時って事か?」

「はい、でも、遊星とデュエルしたいので勝ちます」

「あぁ、決勝でデュエルしよう」

「でも、魔女は怖いよな‥」

「怖くないよ‥‥」

龍亞の言葉を否定した龍可は右腕を押さえていた

「どうした？」

「痛くて‥ズキズキする‥あのお姉さんを見てると‥この腕と心が」

場所は変わってスタジアムの駐車場で、大きなトラックが二台止まっていた

トラックの周りに同じ服を着ていた者が見張りをしていた。トラックには『ＡＭ（アルカディアムーブメント）』と書かれていた

そしてその中でアキは休憩していた

「アキよ、わかっているね。我々の存在を世に明らかにしたことにより、リスクは各段に増えていく、さっきのようなアキを惑わすような輩が付きまとって来るだろう」

「無駄な事です。私の使命はアルカディアムーブメントの理想をこの世に知らしめる事。奴らの戯言など耳に入るはずもない、私の心はディヴァイン、あなたによって正しく導かれていく」

「アキは賢いな‥そう、彼等イリアステルの野望は悪しき者の象徴である赤き竜の復活にある。人々は知らない。赤き竜によって彼等を跪かせようと、それに気付いているのが神より授けられた能力を持っている我々だけだ」

「わかっています」

「もうすぐ準決勝だ。対戦相手の遊城キラだが、やつは未知数だ。だが、アキの敵ではないな。自らの力に負けそうになった時はこの髪飾りがアキの力を安定させてくれる。では、行ってきなさい」

「はい」

そして、準決勝の始まりの時間を迎えた

「さぁ！いよいよ準決勝第2試合目の始まりだ！先程のデュエルの衝撃がまだ残っている！黒薔薇の魔女！十六夜アキ！」

アキが登場すると、観客はやはりブーイングしかしなかった

「対するは一回戦の奇跡をまたも見せてくれるのか！？選ばれし英雄！遊城キラ～！」

アキの反対側にキラが現れると観客からの声援は激しかったが、「魔女を倒せ！」「化け物を追い出せ！」という言葉も混じっているのでキラには不満でしかなかった

そんな声援を貰って誰が喜ぶんだ……と、キラはそう思っていた

龍可達はキラの事が心配だった

「デュエルはスタンディングだ！デュエルディスクを起動してくれ」

キラとアキはデュエルディスクを起動させた

「「デュエル」」

キラＬＰ４０００
アキＬＰ４０００

「アキさん、楽しいデュエルにしましょう！俺のターン、ドロー、俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ　アイスエッジ』を守備表示で召喚し、カードを１枚セットしてターンエンド」

Ｅ・ＨＥＲＯ　アイスエッジ
ＤＥＦ９００

「私のターン、ドロー、手札からマジックカード『偽りの種』を発動、手札のレベル２以下の植物族モンスターである、『イービル・ソーン』を特殊召喚。そして、イービル・ソーンの効果を発動、このカードをリリースする事で、相手ライフに３００ポイントのダメージを与える」

「何！？」

イービル・ソーンが爆発して、トゲの部分がキラを襲った

「くっ……」

キラＬＰ４０００→３７００

「そして、デッキから『イービル・ソーン』を2体を攻撃表示で特殊召喚する。さらに、イービルをリリースして『ローズ・テンタクルス』をアドバンス召喚！」

イービル・ソーン
ＡＴＫ１００

ローズ・テンタクルス
ＡＴＫ２２００

「バトル、ローズ・テンタクルスでアイスエッジを攻撃！『ソーン・ウィップ』！」

ローズ・テンタクルスから弦が伸びていきアイスエッジを叩きつけるとアイスエッジは破壊された

「この瞬間！トラップカードを発動！『ヒーロー・シグナル』！自分フィールド場のモンスターが戦闘によって破壊された時、手札またはデッキから『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のつくレベル４以下のモンスターを１体特殊召喚できる。『Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン』を特殊召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン
ＤＥＦ２０００

「カードを１枚セットしてターンエンド」

１ターン目から上級モンスターを出されたが、逆転を始めようとする

「俺のターン、ドロー、スタンバイフェイズ時にフォレストマンの効果を発動する。手札に『融合』を加える。そして、リバースカードを１枚セットして手札から『融合』を発動！手札のフェザーマンとバブルマンを融合して『Ｅ・ＨＥＲＯ　セイラーマン』を融合召喚！そして、フォレストマンを攻撃表示に変更して、バトルだ！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　セイラーマン

ＡＴＫ１４００

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン

ＡＴＫ１０００

「セイラーマンの効果、自分の場に、魔法または罠カードがセットされている場合、直接攻撃が出来る！行け！『アンカー・ナックル』」

「うっ……」

アキＬＰ４０００→２６００

アキにダメージを与えた事により会場は盛り上がった。だが、それにキラはストレスを感じていた

「続いて、フォレストマンでイービル・ソーンに攻撃！」

「罠カード『棘の壁（ソーン・ウォール）』を発動、このカードは自分フィールド場に表側表示で存在する植物族モンスターが攻撃対象に選択された時に発動できる。相手フィールド場に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する」

「な・何だと！」

フォレストマンがイービル・ソーンに攻撃を仕掛けた時、突如、フォレストマンの前に棘の壁が現れフォレストマンはぶつかってしまい爆発とともに破壊された。だが、その爆風に巻き込まれセイラーマンまで破壊された

「やべー・・・ターンエンド」

「私のターン、バトル、ローズ・テンタクルスとイービル・ソーンでダイレクトアタック」

「リバースカードオープン『攻撃の無力化』！相手が攻撃を宣言した時、攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる」

ローズ・テンタクルスが攻撃を仕掛けた時に渦のような物が現れて攻撃を吸収された

「ならば、イービル・ソーンの効果を発動する。このカードをリリースする事で相手に３００ポイントのダメージを与える」

またもや、イービル・ソーンからトゲを飛ばされキラに傷をつけていった

キラＬＰ３７００→３４００

「ぐっ：さすがに痛いが：楽しくなってきた」

会場にいる誰もが驚いた。普通は身体に傷をつけられては相手を嫌悪するがキラはこの状況を楽しんでいた

「な：何が楽しくなってきただ！早く魔女を倒せ！」

今度はキラまでが嫌われてきていた

「（…この人…何故この状況を楽しんでるの…）ターンエンド」

さすがにアキも驚いていた

「俺のターン！ドロー、俺は手札から『古のルール』を発動。自分の手札からレベル５以上の通常モンスター１体を特殊召喚する！来い！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』！」

ここで、キラのエースである、ゼクスが登場した

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス
ＡＴＫ２５００

「バトルだ！ゼクスでローズ・テンタクルスに攻撃！」

ゼクスがローズ・テンタクルスに向かって素速く走り出し、蹴り飛ばした

アキＬＰ２６００→２３００

「俺はこのままターンエンド。アキさん、あなたは自分がその力を持つことに後悔をしていませんか？」

「…！？」

「先程の試合で、あのカードプロファイラーの人とのデュエルを見ていましたがあなたはその力の使い道を間違っています」

「…あなたに何がわかるの？あなたに何がわかるって言うの？」

「わかります。あなたと俺は同じだから」

「どこが同じなの…」

「道を間違っているからです」

「？あなたには私の事はわからない…わかるはずがない！私のターン、ドロー、『夜薔薇の騎士』を召喚、そしてこのカードが召喚に成功した時、手札からレベル４以下の植物族モンスターを召喚できる。『ロード・ポイズン』を特殊召喚、レベル４のロード・ポイズンにレベル３の夜薔薇の騎士をチューニング、冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け、シンクロ召喚！現れよ『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

ブラック・ローズ・ドラゴンが現れて、会場に今までで一番大きな衝撃を与えた。その衝撃に耐えられず、観客は目も開けられないほどだった。だがその衝撃によりフィールドのコンクリートが壊れていきキラに向かって飛んできた

「これが同じって言う証拠だ！ゼクス！」

ゼクスが飛んできた瓦礫を蹴り飛ばした。だが、その行動にアキと

ディヴァインは目を疑った。本来ならばソリッドビジョンであるゼクスがソリッドビジョンでない瓦礫を蹴り飛ばす事が出来ない…だが、それをゼクスをやった。この時、アキは痣が疼きだすのとキラのある2つの事に気づいた

1つ目はキラの右腕が光っていること、2つ目はキラの瞳の色…右目が橙色、左目が水色に変わってオッドアイになっている事

「あなた…その目…」

「この力が…アキさんと同じだと言うことです」

キラの瞳が元の色に変わった

「じゃあ…あなたも忌むべき印を持つ者……」

「忌むべき印?」

ふと、自分の腕に目をやると右腕が光っている事に気づいた

「な・・・何これ・・」

「・あなたも・その印を持つ者ならば、私はあなたを倒す！装備魔法『憎悪の棘』をブラック・ローズ・ドラゴンに装備、このカードを装備したモンスターの攻撃力は６００ポイントアップする。ブラック・ローズ・ドラゴンの効果で墓地の『イービル・ソーン』を除外し、ゼクスの攻撃力を０にする。『ローズ・リストリクション』。そして、ゼクスに攻撃！『ヘイト・ローズ・ウィップ』！」

ブラック・ローズ・ドラゴン
ＡＴＫ２４００→３０００

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス
ＡＴＫ２５００→０

ブラック・ローズ・ドラゴンの憎悪の棘がゼクスに伸びていき、そのままキラにダメージを与えた

「ぐっ…うぅ！！」

キラＬＰ３４００→４００

「憎悪の棘の効果で戦闘を行ったモンスターは破壊されず、攻撃力と守備力ともに６００ポイントダウンする」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス
ＡＴＫ０→２５００→１９００
ＤＥＦ２０００→１４００

「ターンを終了するわ」

キラは大きなダメージをくらい体がふらふらしていて、目も霞んでいたが、観客の声援によって目が覚めた

「おい！何やってるんだ！早く魔女を倒せ」

「そうだ！早く魔女を倒せ！」

こんな声援しか贈られてないキラに龍可達は不安と心配の気持ちだった。だが、ここで、キラはキレた

「‥ふざけるな‥‥ふざけるな！俺は魔女を倒すためにデュエルしているんじゃない！十六夜アキとデュエルしているんだ！大会が始まった時にボマーさんが言っていた事をもう忘れたのか！？アキさんもデュエリストの１人だ！魔女でも化け物でもない！暴言を言うことしかお前等は出来ないのか！？」

アキはキラの言葉に動揺していた。龍可達も感動していたが、観客は違った

「だったら、何故俺達が危険な目に会うんだよ！」

「そんな魔女がいるからだ！」

キラはさらに怒りを感じたが抑えてデュエルを続行した

「俺のターン‥ドロー、くっ‥‥ターンエンド」

何も打つ手が無くターンを終了するしかできなかった

「「「キラ！」」」

龍可達が叫ぶが、キラは手を上げるだけだった

「私のターン、ドロー…あなたは孤独じゃなかったの？」

「孤独だったさ…こんな力があったからこそ…でも、父さんがいてくれたから俺は今いるんです」

「そう…ブラック・ローズ・ドラゴンでゼクスに攻撃、『ブラック・ローズ・フレア』！」

ブラック・ローズ・ドラゴンがゼクスに向かって炎を放ち、ゼクスとキラは炎に包まれた。そこにはキラが苦しむ悲鳴しか聞こえなかった

キラＬＰ４００→０

炎が消えるとキラは傷だらけになりながら辛うじて立ち上がっていた

「アキさん・・・楽しいデュエルだった・・・ぜ・・」

そして、体力に限界がきて、倒れて気絶してしまった。そして、会場は悲鳴に包まれた

「勝者！十六夜アキ！って救護班早く早く！」

ＭＣの勝利宣言をした後、キラは担架で運ばれて行った。龍可はおもわずキラが運ばれている方向へと飛び出して行った。龍亞達も後

を追っていった

「ファイナル進出は十六夜アキに決定だ！」

アキは決勝進出が出来たのだが悲しい表情だった

準決勝第2試合　キラＶＳアキ（後書き）

何か書いてて変な感じがしましたが・気にしません！

結局キラを負けさせました！

次は決勝戦で遊星ＶＳアキです

決勝戦　遊星ＶＳアキ（前書き）

またもや疲れた・・・

朝は早起きしてワンピースの映画を観に行こうとして、電車に４０分も揺られて行ったのですが・・・本日の上映は全部満席のため観れませんでした・・・

かなり無駄足になりました・・・１６４０円を返せ！↑

決勝戦　遊星ＶＳアキ

準決勝第2試合も終わった。イェーガーはキラにシグナーの痣を持っていることに驚いていた

「彼もシグナーだったんですか」

「はい、ですが彼は竜の痣を持つ者ではないのです」

「では、どういう者・・・ですか？」

「竜の痣を助ける者とだけ言っておきましょう」

キラは医務室にいていろんな所を包帯で巻かれていてまだ昏睡状態だった。その周りに皆が集まっていた

「もしかしてさ・キラは負けることをわかってたのかな?」

「それはないと思うわよ。遊星と決勝でデュエルしたいって言ってたから」

「でもさ、もし負けた場合はって言って遊星にお願いしてたじゃん」

「多分、十六夜がキラより強いと思ったからだと俺は思うな」

氷室の言うことも一利あるが、まだ何かあるんじゃないかと遊星は思っていた。キラがデュエルをする前に言っていたこと「やりたい事があります」という言葉が気になっていた

あのデュエルの時、キラの力を見た者は少人数でゴドウィンとイェーガーとディヴァインとアキだけだった

――――――――――――――――――――――――

アキはまた、アルカディアムーブメントのトラックの中にいて、先程のデュエルでのキラの力の事を考えていた

「どうした？アキ」

「彼も‥‥遊城キラも‥私達と同じ力を‥」

「確かに‥私も彼がサイコデュエリストだとは計算外だったよ。仲間同士で傷つけ合うなんて‥酷い事をしてしまったな‥」

「‥‥‥‥‥‥」

アキはそんな事を考えていたのではなく、キラが言っていたこと、魔女ではなく、1人のデュエリストと戦っている‥つまり魔女としてではなく、十六夜アキ自身と戦っているということに心が揺れていた。だが、彼もシグナーの痣‥忌むべき印を持つ者である

「彼もまた‥我らアルカディアムーブメントの一員として後で勧誘しよう。それと、次の対戦相手である不動遊星、あの男もイリアステルの一員かもしれん。だが、アキは大丈夫だ。遊星を倒し、イリアステルの傀儡のジャックを破ったとき、人々の罵声は賞賛に変わるだろう。理想常時の時は近い」

「はい‥そろそろ行きます」

そして、アキはスタジアムへと向かっていった

――――――――――――――――――――――――

「(拒絶と怒り、二つの感情が向けられているのはあの痣‥その中

に十六夜のもう一つの感情が隠されているとしたら…この痣は確実に俺達を繋いでいる。ゴドウィン達はそれに気づき、俺達を利用しようというのか…十六夜を取り巻くあの連中も結局はシグナーとしての彼女を…俺達は利用されてはいけない。そのためにも彼女の閉ざされた心を…それをこじ開け、本当の十六夜に会わなければ…全力で行くしかない。俺の全存在を賭けて、十六夜と向き合わなければ。そして、この戦いの果てに…ジャック…お前がいる）」

遊星は全力でアキと向き合うために、スター・ダスト・ドラゴンをデッキに加えたのだった

「俺はそろそろ行ってくる」

「あぁ、遊星！頑張れよ！」

遊星は会場の方へ向かって行った後、キラが目を覚ました

「キラ！大丈夫？」

「‥龍可‥‥ここ‥は‥？」

「ここは医務室よ。でも良かった‥心配したんだから」

「本当だぞ、心配かけやがって」

「スミマセン‥‥俺‥負けたのか‥」

「うん、でも怖かったんじゃない？あんな力を目の当たりにして」

「いや‥怖くないさ‥ぐっ‥‥」

起き上がろうとしたら体に痛みを生じて、上手く起き上がれなかった

「ダメよまだ寝てなくちゃ」

「ごめん・・・それとありがとう。皆はもう観客席に戻って良いですよ。遊星の試合も始まりますから」

「ううん、ここにいる。龍亞達だけ戻って良いよ」

「そうか、後でまた来るな」

医務室にキラと龍可だけ残って、あとは観客席の方へ戻って行った

「でも、本当に大丈夫？」

「あぁ、大丈夫さ・でも、やりたい事が出来なかった・」

「やりたい事って？」

「彼女を‥アキさんを救うことだよ」

「そうだったんだ‥」

「でも、遊星がいる」

「うん」

――――――――――――――――――――――――

「いよいよ決勝戦だ！この決勝戦で勝ち残った者がキングへの挑戦権を得る！偉大なるキングに下克上のチャンスを勝ち取るのはどっちだ！１人目のチャレンジャー黒薔薇の魔女、十六夜アキ！」

アキが登場するものの罵声ばかりで、ボマーやキラが言った事は届いてなかった

「続いて、２人目のチャレンジャー、サテライトからの流れ星、不動遊星！」

遊星が登場したらブーイングではなく声援だった。だが、その声援は仕方なく応援してやるというものだった

「全ての時が今ここに交わる！デュエル・オブ・フォーチュンカップ、決勝戦！スタート！」

「「デュエル」」

遊星ＬＰ４０００
アキＬＰ４０００

「私のターン、ドロー、『アイヴィ・ウォール』を守備表示で召喚。カードを１枚伏せてターンを終了」

アイヴィ・ウォール
ＤＥＦ１２００

「俺のターン、『スピード・ウォリアー』を召喚。スピード・ウォリアーは召喚したターン、攻撃力が２倍となる。バトル！アイヴィ・ウォールに攻撃！」

スピード・ウォリアー
ＡＴＫ９００→１８００

「アイヴィ・ウォールが攻撃対象になったとき、相手フィールドにアイヴィトークンを守備表示で特殊召喚する」

遊星の場にアイヴィトークンが現れた後、スピード・ウォリアーがカポエラでアイヴィ・ウォールを蹴飛ばし、破壊した

「このトークンは・・・ターンエンド」

「私のターン、ドロー、リバースカードオープン、永続トラップ『カースド・アイヴィ』を発動。その効果により、墓地からアイヴィモンスターを特殊召喚できる。私は『アイヴィ・ウォール』を呼び戻す。カースド・アイヴィはアイヴィ・ウォールに装備され、フィールドから無くなった時、装備モンスターも破壊される」

「（またアイヴィ・ウォールを：俺の場にアイヴィトークンを増やそうというのか：このトークンが破壊された時、コントローラーは３００ポイントのダメージを受ける）」

「ターンを終了」

序盤はお互いに探り合いのような攻防で、観客は何事も起こらなかったから安心していたが、これは嵐の前の静けさだ

「俺のターン、ドロー、戦士族のスピード・ウォリアーをリリースして、『ターレット・ウォリアー』を特殊召喚。ターレット・ウォリアーは、リリースした戦士族モンスターの攻撃力分、攻撃力をアップ」

ターレット・ウォリアー
ＡＴＫ１２００→２１００

「ターレット・ウォリアーでアイヴィ・ウォールに攻撃！」

「アイヴィ・ウォールが攻撃対象になったとき、相手フィールドにアイヴィトークンを1体を守備表示で特殊召喚」

「『リボルヴィング・ショット』」

ターレット・ウォリアーから弾丸が放たれ、アイヴィ・ウォールを破壊した

「アイヴィ・ウォールが破壊された事によってカースド・アイヴィも破壊されるが、このカードが墓地に送られた時、相手フィールド場にアイヴィトークンが2体守備表示で特殊召喚される」

アイヴィトークン
ＤＥＦ０

遊星の場は、ターレット・ウォリアーとアイヴィトークン４体でフィールドを埋め尽くしてしまった

「（俺の場を埋め尽くそうというのか…）ターンエンド」

「私のターン、ドロー、手札からマジックカード『偽りの種』を発動。手札からレベル２以下の植物族モンスターを１体特殊召喚できる。現れよ『ダーク・ヴァージャー』、そしてダーク・ヴァージャーをリリース！『ローズ・テンタクルス』をアドバンス召喚！」

ローズ・テンタクルス
ＡＴＫ２２００

「ローズ・テンタクルスでターレット・ウォリアーを攻撃！『ソーン・ウィップ』」

ターレット・ウォリアーがローズ・テンタクルスによって締め付けられ破壊された

「ぐっ…」

遊星ＬＰ４０００→３９００

ターレット・ウォリアーを破壊した衝撃が会場に広がるが僅か１００ダメージだったからか、その分衝撃が弱かった

「まだだ」

「！？」

「ローズ・テンタクルスはバトルフェイズ開始時に相手フィールドに存在する植物族モンスター分、攻撃回数を増やす。そして、植物

族モンスターを戦闘で破壊した時、相手に３００ポイントのダメージを与える」

遊星の場には植物族モンスターが４体もいる。つまりあと４回も攻撃することができる。ローズ・テンタクルスの効果で１体につき３００ポイント、アイヴィトークンの効果でさらに３００ポイント、つまり合計で２４００ポイントのダメージになる。大きな衝撃が来ることを予想して、観客達は避難していた

「ローズ・テンタクルスでアイヴィトークンに攻撃！『ソーン・ウィップ１』」

ローズ・テンタクルスの攻撃でアイヴィトークンが破壊され、そのまま通過し遊星の右腕を捕らえた

「！？」

遊星ＬＰ３９００→３３００

「『ソーン・ウィップ2』」

また、アイヴィトークンを破壊しそのまま通過して今度は右足を捕らえた

「ぐっ‥これは‥」

遊星ＬＰ３３００→２７００

「『ソーン・ウィップ3』！」

今度は左足を捕らえた

「うぅ‥‥ぐっ‥」

遊星ＬＰ２７００→２１００

「（拒絶と…怒り…確かに、この痛みは十六夜の叫び…だが、感じる…お前のもう一つの感情）」

「はぁ…はぁ…はぁ…これが…『ラスト・ソーン・ウィップ』！」

今度は遊星の腰を捕まえると中に浮かべていった。遊星はもがくが、それは意味を成していなかった

「！？」

遊星はアキの表情を見てみると目を疑った…

なぜなら、彼女は笑っていたからだ

「お前：まさか：うわぁ！」

そのまま地面に叩きつけられて遊星はダメージを負ってしまった

遊星ＬＰ２１００→１５００

会場に大きな衝撃が伝わり、観客は悲鳴をあげていた

その衝撃が収まると、会場の皆は「魔女だ」と連呼して、罵声の嵐に会場は包まれた

遊星はゆっくりと立ち上がると、カードをドローした

「俺の：ターン：『シールド・ウォリアー』を：守備表示で：召喚：カードを2枚伏せて、ターンエンド」

シールド・ウォリアー
ＤＥＦ１６００

「ようやくわかった。お前の拒絶や怒り：その先にあるもう一つの感情を：十六夜アキ、お前は破壊を、その力を楽しんでいる。その力に優越を感じている」

「私が：破壊を楽しんでる？」

「龍可も龍亞達の所で遊星の応援をしてきなよ」

「でも、キラは大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。後でそっちに行くからさ」

「わかったわ、先に行ってるね」

医務室にキラを残して龍可は観客席に戻って行った。キラは龍可が行ったのを確認すると自分の右腕を見てみた

「（痣が･･･ある･何なんだろう?アキさんは忌むべき印って言ってたけど･）」

キラの右腕に渦のような痣が残っていた

―――――――――――――――――――――――――――――――

「私のターン、ドロー、永続魔法『アイヴィ・シャックル』を発動。相手フィールドに存在する全てのモンスターは、私のターンの間は植物族とすることができる。お前のシールド・ウォリアーを戦士族から植物族に変更する。そして、ローズ・テンタクルスの効果、バトルフェイズ開始時に相手フィールドに存在する植物族モンスター1体につき1回攻撃回数を増やすことができる。よってローズ・テンタクルスは2回の攻撃が出来る。ローズ・テンタクルスでシール

ド・ウォリアーを攻撃！『ソーン・ウィップ』」

ローズ・テンタクルスがシールド・ウォリアーを破壊したが、その衝撃が会場に響いていた

「現在、シールド・ウォリアーは植物族。ローズ・テンタクルスは植物族モンスターを破壊した時、相手に３００ポイントのダメージを与える」

ローズ・テンタクルスが遊星を叩きつけてダメージを与えた

「うっ：」

遊星ＬＰ１５００→１２００

アキは遊星にダメージを与えたことに喜びを感じていた

「やはりお前はそうなのか」

「？ローズ・テンタクルスで2回目の攻撃！」

「トラップカードオープン『カード・ディフェンス』。手札のカード1枚をコストに、相手のモンスターのダイレクトアタックを無効にし、カード1枚ドローする」

ローズ・テンタクルスの攻撃はカードの盾によって防がれた

「ターンを終了するわ」

「十六夜：お前は痛みを与える事を喜んでいる」

「やめろ。何を言っている？」

「俺のターン、手札より『ジャンク・シンクロン』を召喚。ジャンク・シンクロンの効果により、自分の墓地に存在するレベル２以下のモンスターを守備表示で特殊召喚する。スピード・ウォリアーを特殊召喚！そして、レベル２、スピード・ウォリアーにレベル３、ジャンク・シンクロンをチューニング！シンクロ召喚、出でよ！『ジャンク・ウォリアー』！」

２＋３＝５

ジャンク・ウォリアー
ＡＴＫ２３００

「さらに手札から装備魔法『ジャンク・アタック』をジャンク・ウォリアーに装備する。ジャンク・ウォリアーでローズ・テンタクルスに攻撃！『スクラップ・フィスト』！」

ジャンク・ウォリアーが勢いよくローズ・テンタクルスに殴り込み、破壊しアキにダメージを与えた

アキＬＰ４０００→３９００

「さらに、ジャンク・アタックの効果、装備モンスターがバトルによってモンスターを破壊した時、その攻撃力の半分のダメージを与える」

ローズ・テンタクルスの攻撃力は２２００だから１１００のダメージを与えた

アキＬＰ３９００→２８００

「ターンエンドだ」

やっとアキにダメージを与えたことにより観客も盛り上がっていた

そこへ、龍可が龍亞達の所に戻ってきた

「デュエルはどんな感じなの？」

「あっ！龍可、さっきまで押されてたけど、今押し返してる」

「やられてばかりじゃねぇぜ、遊星は」

「私のターン、ドロー、永続魔法アイヴィ・シャックルの効果により、ジャンク・ウォリアーを戦士族から植物族に、そしてチューナーの『コピー・プラント』を召喚。コピー・プラントは1ターンに1度、フィールド場に存在する植物族モンスターを選択し、レベルを同じにする事ができる。ジャンク・ウォリアーのレベルをコピー」

コピー・プラントの姿がジャンク・ウォリアーへと変わっていった

コピー・プラント
ＤＥＦ０
レベル１→５

「あれ？レベルだけをコピーして何をするつもりだい？」

「「だ～か～ら～！」」

さっきも言ったじゃないかと言うような感じで矢薙のじいさんに言う龍亞と天兵だった

「墓地に眠るダーク・ヴァージャーの効果を発動。植物族のチューナーを召喚した時、墓地より特殊召喚できる」

合計が７だからエースを召喚する条件は整っていた

「レベル２、ダーク・ヴァージャーにレベル５、コピー・プラント

をチューニング！冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け！シンクロ召喚、現れよ！『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

２＋５＝７

ブラック・ローズ・ドラゴン
ＡＴＫ２４００

その時、遊星の右腕の痣が疼きだした

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果、墓地の植物族モンスター１体を除外することで、このターンの間、相手モンスターの攻撃力を０にすることができる。アイヴィ・ウォールを除外。『ローズ・リストリクション』」

ブラック・ローズ・ドラゴンから弦が伸びていき、ジャンク・ウォリアーを捕まえて攻撃力を０にした

ジャンク・ウォリアー
ＡＴＫ２３００→０

「ジャンク・ウォリアー！」

「ブラック・ローズ・ドラゴンでジャンク・ウォリアーを攻撃！『ブラック・ローズ・フレア』！」

ブラック・ローズ・ドラゴンがジャンク・ウォリアーに向かって炎を放った

「墓地からシールド・ウォリアーの効果を発動！墓地にあるこのカードを除外することで、モンスターの戦闘による破壊を無効にする」

ジャンク・ウォリアーの前にシールド・ウォリアーが盾となって攻撃を防いだ

「だが、戦闘ダメージは発生する」

「トラップカードオープン！『スピリット・フォース』。プレイヤーが受ける戦闘ダメージを1度だけ0にする！その後墓地にある守備力1500以下のモンスターを手札に加える」

遊星へのダメージは0になったが、会場への被害は凄いものとなった。それにより、罵声やブーイングは激しくなるばかりである。そして遊星はジャンク・シンクロンを手札に加えたのだった

「カードを2枚伏せてターンを終了」

「魔女よ消えろ！」

「消え失せろ！」

「魔女の巣に帰れ！」

そんな言葉ばかりである。

そんな時、キラは会場の方へ戻ってきたが、目の前にディヴァイン

がいた。

「やっぱり…何も変わらない……」

「やぁ、遊城キラ」

「あなたは…確かアキさんの…」

「まぁ、保護者と言っていたかな。それより、君にお願いがあるんだ」

「俺に……お願い…ですか？」

「あぁ、我らアルカディアムーブメントの一員になってほしい」

「それは何故ですか？」

少しばかりディヴァインに警戒心を持っていた。アキの保護者と言っていたがアキを見る限り彼女が苦しんでいるように見えていたのでディヴァインをいまいち信用できなかった

「君の力が必要なのだよ、この差別されている世界に。君もサイコデュエリストだから味わっただろう?孤独を・差別を・だが、我らアルカディアムーブメントは違う。サイコデュエリストの理想郷だからだ」

「サイコデュエリスト?」

「おや・君は自分の力がわかってないのかい?君は神より授けられし力を持っているサイコデュエリストなのだよ」

サイコデュエリストと言われあまりピンと来なかった。キラが持つ力は父さんから遺伝によって生まれつき持っていた力だ。だが、この時代では力を持つ者はそう呼ばれるのだと解釈した

「では、もしそのアルカディアムーブメントに入ったとして、具体的に何をするんですか？」

「それは君がアルカディアムーブメントに入った時に教えてあげるよ。よくお考えに」

話を中断しては、デュエルの方に視線を向けた

「そうよ…そのとおりよ…私は魔女…痛みを与えて…それを楽しむ恐ろしい女！楽しいわ、私を孤独に追いやる者に私の力によって痛みを与えるのが…本当に楽しい！」

「（楽しんでいる…だが、その喜びを彼女自身は…）俺のターン、（プリベント・スター…モンスターを守備表示にして装備し、相手モンスターの動きを封じるカード、この流れならば）手札より『ジャンク・シンクロン』を召喚。ジャンク・シンクロンの効果でスピード・ウォリアーを特殊召喚！」

ジャンク・シンクロン

ＡＴＫ１３００
スピード・ウォリアー
ＤＥＦ４００

「いやった！これでスピード・ウォリアーの攻撃力がジャンク・シンクロンに加算される！」

スピード・ウォリアー
ＡＴＫ９００

ジャンク・ウォリアー
ＡＴＫ２３００→３２００

「『パワー・オブ・フェローズ』だね」

「遊星はどう？」

龍亞と天兵が話している中、キラが戻ってきた

「今から逆転するけど‥ってキラ大丈夫なの？」

「心配かけてごめん。もう大丈夫だから」

「（力を‥貸してくれ！）レベル５、ジャンク・ウォリアーにレベル３、ジャンク・シンクロンをチューニング！」

３＋５＝８

「集いし願いが、新たに輝く星となる、光指す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ『スター・ダスト・ドラゴン』！」

遊星の場に輝かしい光を放ちながらスター・ダスト・ドラゴンが現れた

スター・ダスト・ドラゴン
ＡＴＫ２５００

「あれが！あんちゃんのシグナーのドラゴン！」

「何で？ジャンク・ウォリアーの方が攻撃力が高かったのに」

「遊星はこのデュエルで何かをしようとしてるのよ」

会場の殆どの人がスター・ダスト・ドラゴンに見とれていた

今、シグナーの竜の２体が睨み合っていた

「忌むべき印…私はこの印を憎む…この力が無ければ私は…」

「力に喜びを感じる事は無かった。痛みに快楽を得ることも」

「そう…この痣は、そんな人を超えた怪物に刻印された忌むべき印。だから、私は私を憎む…抑えきれない破壊への思いに…私は生きてはいけないとさえ思った…でも、想いが募れば募るほど、破壊への衝動に添加されていった…そして私は私であることをやめた。もう1人の自分を作り上げた…仮面の私は私じゃない。破壊を楽しんでも、痛みを笑っても構わない。そんな時、ディヴァインが教えてくれた…仮面など必要無いと…そのままの私で良いんだと…私はその言葉で救われた…ただ生きているだけで良い、もう考えない、ただ感じるだけ…」

「考えろ！お前自身が」

「どうでも良い…ディヴァインが考えてくれる」

「逃げるな十六夜！」

「どうしようもない…私にはどうすることも出来ない」

「出来る！その喜びを否定するお前がいる。その想いがある限り、やり直せる。お前自身を救い出す事が出来る！」

「うるさい……」

「（届かせる…このデュエルで彼女の心に）スター・ダスト・ドラゴンでブラック・ローズ・ドラゴンに攻撃！」

スター・ダスト・ドラゴンが攻撃する瞬間、シグナーの全員の痣が疼きだした

「響け！『シューティング・ソニック』！」

スター・ダスト・ドラゴンの攻撃によってブラック・ローズ・ドラ

ゴンは破壊された

アキＬＰ２８００→２７００

「私は…ただ感じるだけ…お前から…痛みを…苦しみを」

そう言って、アキは仮面を着けてしまった

ここに本当の黒薔薇の魔女が現れてしまった

「十六夜……」

「私のターン、ドロー、『マジック・プランター』を発動。フィールドに存在する永続魔法を墓地に送る事で、デッキからカードを２枚ドローする」

アキが墓地に送ったのはアイヴィ・シャックルだった

「永続トラップ『ウィキッド・リボーン』。８００ポイントのライフを支払い墓地のシンクロモンスターを特殊召喚する」

アキＬＰ２７００→１９００

「私は、『ブラック・ローズ・ドラゴン』を復活させる！ウィキッド・リボーンはブラック・ローズ・ドラゴンの装備カードとなる。装備モンスターはこのターン攻撃は出来ない、そして装備カードがフィールドに存在しなくなった場合、そのモンスターを破壊する。さらに、装備モンスターがこの効果以外で破壊されたターンのエンドフェイズに特殊召喚される。ブラック・ローズ・ドラゴンの効果！特殊召喚に成功した時、フィールド場の全てのカードを破壊する『ブラック・ローズ・ガイル』」

ブラック・ローズ・ドラゴンから突風が巻き起こり会場を響かせた

「（不味い…）スター・ダスト・ドラゴンの効果を発動！破壊する効果が発生した時、このカードをリリースする事で無効にし、破壊

する。『ヴィクテム・サンクチュアリ』！」

スター・ダスト・ドラゴンがブラック・ローズ・ドラゴンを羽で包み込み共に、星屑となって消えていった

「2体のドラゴンが！」

「スター・ダスト・ドラゴンを犠牲にしてまで！」

「まだだ、『フェニキシアン・シード』を召喚。フェニキシアン・シードの効果によりこのカードをリリースし、『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』を特殊召喚する」

フェニキシアン・クラスター・アマリリス
ＡＴＫ２２００

「フェニキシアン・クラスター・アマリリスで、スピード・ウォリアーに攻撃、『フレイム・ペタル』」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスがスピード・ウォリアーを縛り付けて破壊した

「フェニキシアン・クラスター・アマリリスは攻撃した後、自らを破壊する。『スキャッター・フレイム』そして８００ポイントのダメージを与える」

「うぅ・・・ぐっ・・」

遊星ＬＰ１２００→４００

ダメージの衝撃が大きくなり、アキの仮面の口元だけ砕けた

「フフっ・カードを１枚伏せる」

「スター・ダスト・ドラゴンは効果を発動したターンのエンドフェイズに復活する！」

スター・ダスト・ドラゴン
ＡＴＫ２５００

「ウィキッド・リボーンの効果により、このターンのエンドフェイズにブラック・ローズ・ドラゴンを特殊召喚。そして永続トラップ『オーバー・デッド・ライン』を発動。墓地から特殊召喚した私のモンスターは攻撃力が１０００ポイントアップする。そして、フェニキシアン・クラスター・アマリリスも効果により守備表示で特殊召喚する。ターンを終了」

ブラック・ローズ・ドラゴン
ＡＴＫ２４００↓３４００

フェニキシアン・クラスター・アマリリス
ＤＥＦ０

「俺のターン：（『コズミック・ブラスト』：このカードは、自分フィールドのドラゴン族のシンクロモンスターがフィールドを離れたとき、その攻撃力分のダメージを与える：）」

今、遊星は今ある全てのカードを繋いでいって勝利の方程式を組み上げていった

「スター・ダスト・ドラゴンを守備表示に変更。手札から装備魔法『プリベント・スター』をスター・ダスト・ドラゴンに装備、このカードはモンスターが守備表示になった時にモンスターに装備する。１ターンに１度相手モンスターを選択する。そのモンスターは攻撃出来ず、表示変更も出来ない。俺はフェニキシアン・クラスター・アマリリスを選択！」

スター・ダスト・ドラゴン
ＤＥＦ２０００

次のターン、フェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果が発動出来ないから遊星のライフはまだ残れるのだった

「罠カード『シンクロ・バック』。自分フィールドのシンクロモンスターを1体をエクストラデッキに戻す。私はブラック・ローズ・ドラゴンを選択」

ブラック・ローズ・ドラゴンがアキのデッキの中に戻っていった

「どうしてさ？」

「このカードで戻したシンクロモンスターは次の自分のスタンバイフェイズに特殊召喚できる」

「そうか！ブラック・ローズ・ドラゴンの特殊召喚した時のモンスター効果で、スター・ダスト・ドラゴンを破壊するつもりなんだ！」

「「え！？」」

そう、スター・ダスト・ドラゴンがいなくなれば遊星にダイレクトアタックが決まり、遊星が敗北してしまうのだ

「カードを1枚セットしてターンエンド」

「私のターン、ドロー、シンクロバックの効果により、ブラック・ローズ・ドラゴンを復活させる！」

ブラック・ローズ・ドラゴンが再度現れた時、痣の疼きが増していった

「くっ・・」

「楽しくないんだろう？」

「うるさい・・」

「苦しいんじゃないのか？」

「（どうして…どうしてこの痣が疼く…どうして楽しくない…どうして苦しい…）」

「お前自身が変わる時が、やってきたんだ」

「！？」

「お前を苦しんできた破壊への痛みを…その痛みが、同じ痣を持つ俺達に共有する痛みに変わって来たんじゃないのか？俺達を導くこの印は…この痛みは何かを俺達に訴えている。その答えを得るには自分で考えなければいけないんだ。その答えをこの痣は持っているんじゃないのか…考えを預けるな！お前自身で考えるんだ！」

「魔女の私が…何を考えるの…ディヴァインが私を導いて、私を愛してくれればそれで…」

「違う！お前がお前を愛するんだ！」

「そんな事が出来れば…出来れば…出来ないから苦しんでるんじゃないか！」

アキの感情が制御出来なくなり、髪飾りが落ちて、感情が爆発してしまった

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動！『ブラック・ローズ・ガイル』！」

ブラック・ローズドラゴンから突風が起こり、先程より大きな衝撃だった

会場のあらゆる物が壊れ、観客は避難する者も現れてきた

「フィールドの全てのカードを破壊する！」

「何度でも受け止めてやる！全部吐き出せ！お前の悲しみを！『ヴィクテム・サンクチュアリ』！」

スター・ダスト・ドラゴンがまた、ブラック・ローズ・ドラゴンを包み込み星屑となって消えた

「…！…痛みが薄らいでいく…これでプリベント・スターからの呪縛からフェニキシアン・クラスター・アマリリスが解放される。お前のフィールドはがら空き、ダイレクトアタックが決まれば私の勝ちだ。全て無くなれば良い…考えさせるな…お前はやはり…忌むべき敵…」

「だったら、どうして泣く？」

アキから僅かに仮面の目の下辺りに雫が落ちていっていた

「トラップカード『コズミック・ブラスト』を発動！俺のフィールドのドラゴン族のシンクロモンスターがフィールドを離れたとき、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える」

スター・ダスト・ドラゴンがアキに突撃していって、ダメージを与えた。その衝撃により、仮面が砕けた

アキＬＰ１９００→０

仮面の奥のアキの顔は涙を流して救いを求めていた

「た・・・す・・・け・・・」

「十六夜！」

遊星がアキに話しかけようとしたが、観客の声によってかき消されてしまった。

「ざまぁみろ！魔女」

「魔女の巣に帰れ！二度と来るな！」

アキの後ろからディヴァインがやってきたアキを宥めた後一緒に退場していった

「勝者決定！不動遊星！」

遊星はまだ、アキを救い出せていないまま、決勝戦が終わってしまった

決勝戦　遊星ＶＳアキ（後書き）

かなり長くなったので次は遊星ＶＳジャックですが、前後編に分けると思います

その方が自分も書きやすいと思うので・・

ライバル対決　遊星ＶＳジャック　（前編）（前書き）

バイトと学校が忙しくて更新が面倒になる時があるが何故か指が動いてます（笑）

続きを書きたくてしょうがないんですよ↑

ライバル対決　遊星ＶＳジャック　（前編）

決勝戦のデュエルで起こった損害により会場はボロボロだった。そのためか、セキュリティの人達がそこら中でうろうろしていた

龍可が右腕をいつまでも押さえといたのでキラは気になって聞いてみた

「龍可、右腕が痛いのか？」

「ううん、さっきから疼いてたの・今は何ともないんだけど」

そう言っては袖を捲り上げると竜の痣が刻印されていた事に皆ビックリした

「龍可ちゃんもシグナーだったのかい！？」

「‥う‥うん」

「龍可も同じ痣を‥‥」

「え?も‥ってキラは‥」

龍可がキラに何かを聞こうとした時、遊星がやって来た

「皆!ここから立ち去った方が良い!」

「で‥でもあんちゃんはキングとの対決があるだろう?」

「この会場にはシグナーが４人もいる」

「4人って・・遊星と龍可とアキさん・・あと1人は誰なんですか？」

「ジャックだ。とにかくこれ以上シグナー同士が戦うのは危険だ。さっきのデュエルを見ててもわかるだろう」

確かにそうだ。遊星とアキのデュエルで会場の被害は凄いものだ

「ゴドウィンとは話をつける。皆は早くここから離れろ」

遊星はゴドウィンの所に向かったが、さすがに皆も遊星とジャックのデュエルが見たいが仕方がなかった

「あんちゃんがああ言ってるんだ。わしらも退散するとしよう」

「そうだな・・少し残念だがな」

会場を出て、廊下に出てきたは良かったが、突然ＳＰに囲まれた。
そして奥からイェーガーが現れた

「な･何だお前等は!?」

「ヒッヒッヒッヒッヒッ、残念ですがあなた達を帰すわけにはいきません。ヒッヒッヒッヒッヒッ」

「なら、腕ずくで通らせてもらう!」

氷室がイェーガーの胸ぐらを掴んだがイェーガーが氷室に何かを耳打ちした途端、氷室が気難しい顔になり手を離した

「ヒッヒッヒッヒッ、仲間想いのあなた達の事だ。そんな事は出来ませんね。さぁ、席へお戻り下さい。ヒッヒッヒッヒッヒッ」

イェーガーとＳＰ達がその場から離れていった。

「何を言われたんだい？氷室ちゃん」

「内容は話せないが、とにかく遊星にとっては悪い事になる。席へ戻るしかない」

あまり納得がいかなかったが、仕方なく席へ戻っていった

そのころ遊星はゴドウィンの下へ向かっていた

「おい！止まれ！この先は立ち入り禁止だぞ！うわぁ・」

警備員が立ち止まるように警告するが、遊星は聞く耳を持たぬように警備員を殴りとばし、先を急いだ

「長官！即刻大会を中止すべきです」

彼：セキュリティの牛尾はゴドウィンに大会の中止を申し出ていた。
今この場にいるのは牛尾とゴドウィンとキングであるジャックとその秘書の深影だった

「この会場は何かに取り付かれている」

「ほう・・・何かとは？」

「わかりません。ですが、既にそんな事が問題じゃあありません。観客に怪我人も出ています！これ以上の続行は危険です」

「なるほど：もっともな意見です」

「それでは、中止を」

「大会は続行します」

「な・何故ですか？」

「市民はこの大会を楽しみにして、心待ちにしていました。そのファイナルの中止となれば、治安維持局の面目が立ちません」

「貴様の面目などどうでもいい！」

ゴドウィンに反論したのは牛尾ではなく、たった今やって来た遊星だった

「ゴドウィン、話がある」

「貴様何のつもりだ！？」

部外者が立ち入っているので、セキュリティの牛尾としては追い出さなければならないが、ゴドウィンに止められた

「待ちなさい。話とは？」

「その前にお前は外してくれ」

「何ぃ！？」

遊星にとって牛尾は邪魔らしいが、ゴドウィンの指示によりＳＰによって追い出された

「ゴドウィン、貴様は人質をとってまで俺に大会出場を強要してきた。その理由を教えてもらおうか」

「俺が代わりに答えてやる」

ゴドウィンが話そうとしたが、ジャックが話に入ってきた

「本当の理由はこれだ」

ジャックが見せたのは自分の右腕にある竜の痣だった

「赤い竜の痣・・」

「この男の目的はこの痣をシティに集めること、そのために俺もキングとおだてられ利用されてきた」

「デュエルキングとして君臨するのは、ジャック、あなたの望みじゃなかったのですか？」

「本当に求められるキングならな：2年前に俺はお前の誘いによりシティにやって来た。だが、本当の目的は俺ではなく遊星、お前だ」

「俺に？」

「この男は、俺をシティに呼び出せば、お前も来るだろうと：そう考えた」

「それは妙ですね。彼に用があれば、直接誘えば良いこと」

「遊星は決してお前達の誘いに乗る男ではない。だから、お前達は俺を利用し、俺達にサテライトから抜け出すきっかけを与えた」

2年前にこの2人に事件が起こった。ジャックは元々サテライト出身であり、遊星とは仲間だった

だが、突然シティから誘いがあった。「シティのキングとして君臨

しませんか?」と・・・条件として、『スター・ダスト・ドラゴン』と『レッド・デーモンズ・ドラゴン』だ。だが、ジャックはスター・ダスト・ドラゴンは持っていない。

ジャックは悩んだが、仲間を捨ててまで遊星からスター・ダスト・ドラゴンを奪ってシティへ行ったのだった

「お前にこの誘いがあれば、お前はキングではなく仲間と一緒にいることを選んだだろう。だが俺は、キングの道を選んだ。だが、今となってはそんな事はどうでもいい。人質を解放しろ!遊星も今となっては逃げはしない。俺と戦うのに枷など必要無い!道化の報酬として、それ位は良いだろう」

「それがキングの意地なら良いでしょう」

その後、人質は解放され遊星とジャックのデュエルをする事になった

「Ｅｖｅｒｙｂｏｄｙ　ｌｉｓｔｅｎ!予期せぬアクシデントが発生したがデュエルは続行だ!今からキングと不動遊星のデュエルを行う!」

そして、遊星とジャックがDホイールでスタートラインで止まっていた

「やはりジャックとデュエルするのか・・」

「遊星・・」

氷室達皆が遊星の事が心配だった

「遊星、これで俺達を邪魔する者はいない」

「ジャック・・」

「このデュエルでどちらが真のキングの印を持つ者か決着をつける！」

「だが、赤い竜が現れれば俺達もただではすまないぞ」

「怖じ気付いたか?その時は赤き竜を己の力にするまでよ!」

「(そういえば矢薙のじいさんは赤い竜の痣は5つあると言ってたな…まさか!?すでにここにあと1人がいると言うのか!?)」

そして、2人は『スピード・ワールド』を発動させてライディングデュエルの準備をした

「これで、発動できる魔法はスピード・スペルのみ!いざ、ライディングデュエルアクセラレーション!」

その言葉と共にアクセルを回してスタートした。会場の人々は先程のデュエルとは違い、大盛り上がりだった

遊星ＬＰ４０００
ジャックＬＰ４０００

「先攻はチャレンジャー、貴様からだ」

「俺のターン！『シールド・ウィング』を守備表示で召喚。そしてカードを2枚伏せてターンエンド」

シールド・ウィング
ＤＥＦ９００

遊星ＳＰＣ０→１
ジャックＳＰＣ０→１

「俺のターン！『ツイン・ブレイカー』を召喚！」

ツイン・ブレイカー

ＡＴＫ１６００

「ツイン・ブレイカーでシールド・ウィングに攻撃！ツイン・ブレイカーの攻撃力が守備力を上回っている場合、貫通ダメージを与える」

ツイン・ブレイカーがシールド・ウィングを切り刻むがシールド・ウィングはこらえていた

遊星ＬＰ４０００→３３００

「ぐっ：」

「貴様が守備モンスターを召喚する事など計算済みだ！キングのデュエルとは常に相手の一歩先を行くものだ！」

「だが、シールド・ウィングは1ターンに2度の攻撃まで破壊され

ない」

「愚か者が！ツイン・ブレイカーは守備モンスターを攻撃した時、再度攻撃できる」

「何！？」

「キングの中でも俺のようなキングは二歩先を行く。行け！『ダブル・アサルト』」

ツイン・ブレイカーの攻撃をシールド・ウィングは耐えるが貫通ダメージを受けてしまった

遊星ＬＰ３３００→２６００

「カードを1枚伏せてターンエンド。（遊星よ…この手札…まさに貴様との決着に相応しいカードだ。このデュエルでキングの誇りを見せてやろう！）」

遊星ＳＰＣ１↓２
ジャックＳＰＣ１↓２

スピードカウンターも上がってＤホイールのスピードもだんだんと上がっていた

「俺のターン、（『メテオ・ストリーム』：カード達よ、お前達が出す答えは何だ？）手札から『ジャンク・シンクロン』を召喚。シールド・ウィングにジャンク・シンクロンをチューニング！」

２＋３＝５

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光指す道となれ！シンクロ召喚！出でよ『ジャンク・ウォリアー』！」

ジャンク・ウォリアー
ＡＴＫ２３００

「『スクラップ・フィスト』！」

ジャンク・ウォリアーがツイン・ブレイカーを殴って破壊した

ジャックＬＰ４０００→３３００

「ぐぅ・・」

「さらに永続トラップ『シンクロブラスト』を発動！このカードはシンクロモンスターが攻撃をしたとき、５００ポイントのダメージを与える」

ジャックＬＰ３３００→２８００

「やるようになったものだ。俺のターン！」

遊星ＳＰＣ２→３
ジャックＳＰＣ２→３

「手札より『ダーク・リペアラー』を召喚！さらにトラップを発動『強化蘇生』、このカードは、レベル４以下のモンスターを特殊召喚し、装備カードとなる」

強化蘇生の効果でツイン・ブレイカーを特殊召喚させた

「良し！ダーク・リペアラーはレベル３、ツイン・ブレイカーのレベル４！これでやつはレベル８のレッド・デーモンズ・ドラゴンを呼べない！」

「あぁ！いけるぞあんちゃん！」

確かに３と４を足しても７になるが、ジャックは次の行動に出た

「強化蘇生によって特殊召喚したモンスターは、攻撃力守備力１００ポイントアップさせ、レベルを１つ上げる」

「何だと！？」

ツイン・ブレイカー
ＡＴＫ１６００→１７００
ＤＥＦ１０００→１１００
レベル４→５

「凡人共よ！心に刻め！キングオブキングの三歩先を行くデュエルを！ツイン・ブレイカーにダーク・リペアラーをチューニング！」

３＋５＝８

「王者の鼓動、今ここに列を成す！天地鳴動の力を見るが良い！シンクロ召喚、我が魂！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン
ＡＴＫ３０００

今ここに、ジャックのエースモンスターが召喚されてしまった

「（俺はキングになるためにいろんなものを捨ててきた…故郷を…友を…この痣に導かれ！それが今、何も捨ててない貴様が、同じ道を歩もうとしている！俺にはそれが許せん！遊星…貴様だけには負けるわけにはいかない！）俺はダーク・リペアラーの効果でカードをドローする。遊星！思い知るが良い。キングの前では何もかもが無力であることを！これがキングの力だ『アブソリュート・パワー・フォース』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの手のひらに包まれた炎と勢いよく突撃して来るジャンク・ウォリアーの拳がぶつかり合うがジャンク・ウォリアーが破壊された

遊星ＬＰ２６００→１９００

「見たか遊星、キングの前では弱者の言い訳など通用しない！デュエルの後の貴様に残されるのは敗北という二文字だけだ！カードを3枚伏せてターンエンド」

いつの間にか、晴天だった空が奇妙な雲で覆われていた

「あっ…あれは？」

「さっきまでずっと晴れてたのに…」

「ま…ま…まさか、あんちゃんの言うとおり、シグナー同士が戦う呪いが有るんじゃないだろうな？」

「んなもんあるか！それより遊星をしっかり応援しろ」

氷室は遊星の話を信じていなかったようだ…

―――――――――――――――――――――

「長官、差し出がましい事をお聞きしますがよろしいですか？ヒッヒッ」

ここへきて、イェーガーは思ったことがあった

「何だね？」

「我々の目的はシグナー４人ともう１人の男を覚醒させる事です。それが達成された今、これ以上の大会続行に意味があるのでしょうか？市民の安全を思うセキュリティの意見もまんざらではないと・・ヒッヒッヒッヒッ」

「では、あなたは見たくないのですか？赤き竜の力を」

「しかし、赤き竜の力は竜の痣を持つ者が５人集まって・・・」

そこまで考えては一つの結論へと辿り着くことが出来た

「まさか!?会場に竜の痣を持つ5人目のシグナーが!?既に赤き竜の痣は完成しているのですか!?」

「どうでしょう…ですが、このデュエルが終わる頃には面白いものが見られるでしょう」

――――――――――――――――――――――――――――――

遊星ＳＰＣ3→4
ジャックＳＰＣ3→4

「俺のターン!（良し!行ける）トラップ発動『ロスト・スター・ディセント』、墓地のシンクロモンスターのレベルを1つ下げ、守備力０の状態で特殊召喚する。蘇れ!『ジャンク・ウォリアー』」

ジャンク・ウォリアー
ＤＥＦ１３００→０
レベル５→４

「そして『ハイパー・シンクロン』を召喚！レベル４となったジャンク・ウォリアーにレベル４、ハイパー・シンクロンをチューニング！」

４＋４＝８

「集いし願いが、新たに輝く星となる！光指す道となれ！シンクロ召喚、飛翔せよ『スター・ダスト・ドラゴン』！」

スター・ダスト・ドラゴン
ＡＴＫ２５００

スター・ダスト・ドラゴンが現れてから、シグナー全員の痣が光り出した。キラは何故か反射的に痣を隠して皆にはバレなかったが龍

可の痣に夢中だった

「来たか！スター・ダスト！」

今ここに両者のエースモンスターのドラゴン・・・ライバルの真のデュエルが始まった

ライバル対決　遊星ＶＳジャック　（前編）（後書き）

次は遊星ＶＳジャックの後編です

ってか、スター・ダスト・ドラゴンって戦闘で破壊されたこと無いですよね：：

赤き竜の導く未来　遊星ＶＳジャック　（後編）（前書き）

これで、フォーチュンカップ編は終わりになります

赤き竜の導く未来　遊星ＶＳジャック　（後編）

決勝戦を終えて、キングへの挑戦権を与えられた遊星はデュエルをするのだった

今、遊星の場にスター・ダスト・ドラゴンが召喚されて、エースドラゴン対決だった

「ハイパー・シンクロンの効果を発動！ハイパー・シンクロンをシンクロ素材にしたとき、シンクロモンスターの攻撃力は８００ポイントアップする」

スター・ダスト・ドラゴン
ＡＴＫ２５００→３３００

「この瞬間、トラップ発動『チューナー・キャプチャー』。相手がシンクロ召喚を行ったとき、その素材となったモンスターを相手の墓地から特殊召喚する。我がフィールドの糧となれ！来い『ハイパ

ー・シンクロン』」

遊星の墓地のハイパー・シンクロンがジャックのフィールドに現れた

ハイパー・シンクロン
ＤＥＦ８００

「スター・ダスト・ドラゴン！レッド・デーモンズ・ドラゴンに攻撃！」

「貴様のやることなど、このキングにはお見通しだ！トラップ発動『チューナーズ・マインド』！自分のシンクロモンスターが攻撃対象になったとき、そのモンスターのシンクロ素材に戻す！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンが分離するとシンクロ素材に使ったツイン・ブレイカーとダーク・リペアラーが現れた

ツイン・ブレイカー

DEF1000
ダーク・リペアラー
DEF1300

「（ツイン・ブレイカーを残していれば、次のターンで、ハイパー・シンクロンとのシンクロ召喚で、再びレッド・デーモンズ・ドラゴンが呼ばれるのは確実：ならば！）ツイン・ブレイカーに攻撃！響け『シューティング・ソニック』！」

スター・ダスト・ドラゴンが攻撃するのだが、ダーク・リペアラーがツイン・ブレイカーの盾になって破壊された

「何！？」

「言ったはずだ。貴様の戦略は全てお見通しだとな！チューナーズ・マインドで現れたチューナーは、攻撃宣言してきたモンスターと必ずバトルをするんだ」

「くっ：永続トラップ発動！『シンクロ・ブラスト』」

シンクロモンスターが攻撃をすれば相手に５００ポイントのダメージを与えるカードだ

ジャックＬＰ２８００→２３００

「くっ：ダーク・リペアラーが墓地に送られた事により、カードを１枚ドローする」

「ターンエンドだ」

遊星ＳＰＣ４→５
ジャックＳＰＣ４→５

「俺のターン！ツイン・ブレイカーにハイパー・シンクロンにチューニング！」

４＋４＝８

「王者の鼓動、今ここに列を成す、天地鳴動の力を見るが良い！シンクロ召喚、我が魂！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

再びレッド・デーモンズ・ドラゴンを場に出すが、先ほどのレッド・デーモンズ・ドラゴンではなかった

「見よ！この王しき姿を。これが我と共にキングの道を歩んできた相棒！ハイパー・シンクロンをシンクロ素材にしたことで、レッド・デーモンズの攻撃力は８００ポイントアップする」

レッド・デーモンズ・ドラゴン
ＡＴＫ３０００→３８００

再びレッド・デーモンズ・ドラゴンがスター・ダスト・ドラゴンより攻撃力が上回ってしまった

「来るか…」

「くらえ！『アブソリュート・パワー・フォース』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃を腕で受け止めて弾き飛ばした

「ハイパー・シンクロンをシンクロ素材に使用した事により、スター・ダストはバトルでは破壊されない」

遊星ＬＰ１９００→１４００

「知っているさ。トラップ発動『デモン・カノン』。バトルで相手モンスターを破壊できなかった時、５００ポイントのダメージを与える」

デモン・カノンから光が遊星に向かって放たれた

「うっ…くっ…」

遊星ＬＰ１４００→９００

ついに遊星のライフが１０００をきってしまった

だがこの時、天空から赤い稲妻がスター・ダスト・ドラゴンとレッド・デーモンズ・ドラゴンの間に落ちてきた

「来たか」

「赤い…竜」

会場のド真ん中に赤い竜が現れた。会場の皆は驚愕していた。いつの間にこんなモンスターを召喚したんた?…と

「あ‥あ‥あ‥赤い竜！」

「何‥痣が‥熱い」

龍可は痣が熱くなっていることに気づいたが、それはキラも同様だった

「やっと会えたな！赤き竜よ。俺達のデュエルをとくと拝んでいくが良い」

ジャックは赤き竜に会えた事に喜びを感じていたが遊星は違って焦っていた

「危険だジャック！これ以上デュエルを続ければ何が起きるかわからない！」

「臆したか遊星！目先の事に怯えるなど、デュエリストの資格は無い！俺はこの天地が砕け散ろうとも、デュエルを続ける！」

――――――――――――――――――――――――

「（これで全ての条件は揃った。真の力を発揮するシグナー同士が戦うとき、デュエルは新たな次元へと突入する：今こそ５つの力を束ねよ：ドラゴンヘッド）」

ゴドウィンが左手をかざすと、とある場所でドラゴンヘッドが輝きだし、全員の痣が急激に疼きだした。そして、赤き竜から突風が発生して、会場は大パニックだ。その後、赤き竜が遊星とジャックを飲み込んだ。そして、赤き竜が天空へ駆け上って大きな光を放った。

そして、遊星とジャックは光の道をＤホイールで駆け抜けていた

「ここは：」

「何だ‥」

遊星とジャックの後ろに光の球体が後から付いてきていたがそれは
龍可とアキとキラだった

「ここはどこ?‥‥アキさん!それにキラ!?」

「これはどういう事?‥遊星‥」

「どうしてキラが!?」

「今はそんな事は後だ。前を見ろ」

キラが指を差した方を向くと、前から大きな祭壇のような物が現れた

「あれは‥」

5人はよく目を凝らして見ると、祭壇の下の方にたくさんの人々が跪いて何かをお願いしていた。また、上の方では5人の人が手を大きく広げていた

「これは…いつかゴドウィンが語っていた星の民…」

「星の民？」

すれ違いざまによく見ると、5人の腕に竜の痣があったが、キラが持っている痣が無いことにキラは気づいた

「俺の痣を持つ者がいない…」

それぞれ自分の痣を確認していた

「俺達の痣が‥」

「シグナー‥俺達は遥かな時を超えて、その因縁で結ばれているとでも言うのか‥」

祭壇を過ぎていくと今度はネオドミノシティとサテライトが現れた

「あれは‥ネオドミノシティとサテライト！」

だが、サテライトの所々に青い炎が出てきて、建物が崩壊していって蜘蛛の地上絵の形になった

「サテライトが滅んでいく‥‥何だこれは‥」

「まさか‥これが未来」

「ならば、サテライトは滅びる運命にあるのか?そんな馬鹿な!」

「遊星、デュエルを続行する」

「何!?」

「俺はこのデュエルの果てがたとえ地獄へ続こうとも、貴様とは決着をつける!」

「ジャック!?」

「わからんのか!?俺達のデュエルが俺達をここへ運んだ!ならば、ここから出るには俺達のデュエルを完結させるしかない。カードを2枚伏せてターンエンド」

「くっ:俺のターン!」

遊星ＳＰＣ５→６
ジャックＳＰＣ５→６

「手札から『Ｓｐ・シルバー・コントレイル』発動！スピードカウンターが５以上ある時、風属性のシンクロモンスターは１０００ポイントアップする」

スター・ダスト・ドラゴン
ＡＴＫ３３００→４３００

「スター・ダスト・ドラゴン！響け『シューティング・ソニック』！」

スター・ダスト・ドラゴンがレッド・デーモンズ・ドラゴンに攻撃してジャックにダメージを与えた

「うわぁぁぁぁぁ！！」

ジャックＬＰ２３００→１８００

「（何だこの痛みは！？本物の衝撃が俺の全身を…これがシグナー同士の戦いなのか！？）」

そんな事も気付かず、お構いなしに遊星は続けてきた

「さらに永続トラップ『シンクロ・ブラスト』！」

シンクロ・ブラストから光が放たれ、ジャックにまたダメージを与えた

「ぐわぁぁぁあ！！うぅ…」

ジャックＬＰ１８００→１３００

「：ハイパー・シンクロンをシンクロ素材に使用した事により、レッド・デーモンズはバトルでは破壊されない！それはスター・ダストも条件は同じ、ここからは俺とお前の力と力の戦いだ！」

遊星は力の戦いの事を考え、自分の手札を確認した

「：カードを3枚伏せてターンエンド」

「（3枚の伏せカード、来るか！）」

ジャックは自分の手札を確認すると、遊星に打ち勝つ方程式を並べていった

「俺のターン！」

遊星ＳＰＣ６→７
ジャックＳＰＣ６→７

「レッド・デーモンズよ、スター・ダスト・ドラゴンに攻撃！『アブソリュート・パワー・フォース』！」

炎の拳でスター・ダスト・ドラゴンを攻撃して遊星にダメージを与えた

「うわぁぁぁあぁ！！うぅ：」

遊星ＬＰ９００→４００

「「遊星！」」

キラと龍可は遊星を心配して、アキは衝撃が自分の力と同じであることに気づいた

「はぁ…はぁ…何だ…今の衝撃は？」

「これがシグナー同士の本当の戦いだ！」

「何？」

「気を抜けば、俺達の魂の方がデュエルが終わる前に砕け散るぞ！」

「くっ…トラップ発動『クロス・ライン・カウンター』。相手ターン中にダメージを受けたとき、そのダメージの２倍を攻撃力に変えて、ダメージを与えたモンスターと再びバトルする！」

先ほどのダメージは５００ポイント、その２倍だから１０００ポイントもアップした

スター・ダスト・ドラゴン
ＡＴＫ３３００→４３００

「ふんっ、そう来なくてはな！」

「スター・ダスト・ドラゴン！響け『シューティング・ソニック』」

スター・ダスト・ドラゴンの攻撃をレッド・デーモンズ・ドラゴンは腕でガードするが、ジャックにダメージを与えてしまった

「ぐわぁぁあ！‥くぅ‥」

ジャックＬＰ１３００→８００

「ジャック！」

ジャックの体を心配する遊星だが、心配無用だった

「俺の心配をするくらいなら自分の心配をしろ！『Ｓｐ・オーバー・ブースト』発動！このターン、スピードカウンターを４増やし、１１まで加速させる」

ジャックがアクセルを全開に回して、遊星との距離が大きく開いた

ジャックＳＰＣ７→１１

「一気に１１まで加速するだと？」

「遊星！このカードで決着をつける！『Ｓｐ・ジ・エンド・オブ・ストーム』発動！スピードカウンターが１０以上ある時、フィールドの全モンスターを破壊し、そのモンスター１体につき、３００ポイントのダメージを与える」

「スター・ダストの効果を発動！フィールドのカードが破壊される効果が発動したとき、スター・ダストをリリースして無効にする！」

ジ・エンド・オブ・ストームから大きな竜巻が発生するがスター・ダスト・ドラゴンがそれを受け止めて破壊された

「そうだ遊星！そうせざるをえない！ジ・エンド・オブ・ストームの効果が発動すればお前のライフは０だからな。これでとどめだ！永続トラップ『スニーク・マイン』を発動！次の相手ターンのスタンバイフェイズにこのカードを墓地に送ることで、自分フィールドのモンスター１体につき、５００ポイントのダメージを与える！」

次のターン、このまま迎えてしまっては遊星は負けてしまうのであった

「このターンのエンドフェイズにスター・ダストはその効果により、フィールドに戻る」

スター・ダスト・ドラゴン
ＡＴＫ２５００

スター・ダスト・ドラゴンが墓地から召喚されるが、ハイパー・シ

ンクロンの効果を受けていないため攻撃力が元に戻っていた

「トラップ発動『メテオ・ストリーム』。フィールドのモンスターがリリースされ、再び特殊召喚された時、１０００ポイントのダメージを与える！」

スター・ダスト・ドラゴンが大きな風を起こして、かまいたちのような物を飛ばしてきた

「この時を待っていた！トラップ発動『クリムゾン・ヘル・フレア』。カードダメージを無効にし、相手に倍のダメージを与える！」

かまいたちをレッド・デーモンズ・ドラゴンが吸収していった

「くらえ！『クリムゾン・ヘル・フレア』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンから遊星に向かって炎が放たれた。
これを受けてしまっては負けてしまうが：

「トラップ発動『白銀のバリア・シルバー・フォース』」

遊星の周りに白銀のバリアが現れ、炎を受け止めていた

「相手のトラップによるダメージを無効にし、相手フィールドのマジック、トラップカードを全て破壊する！」

バリアから跳ね返された炎がジャックのマジック、トラップを全て破壊した

「くっ：小賢しいマネを：」

「お前はターンの終了時にオーバー・ブーストの効果が切れて、スピードカウンターは1まで減少する」

ジャックＳＰＣ１１→１

ジャックのＤホイールのスピードがいきなり減少していって、ついに遊星が前に躍り出た

「俺の：ターン！」

遊星ＳＰＣ７→８
ジャックＳＰＣ１→２

「『Ｓｐ・ファイナル・アタック』！スピードカウンターが８以上ある時、モンスター１体の攻撃力を２倍にする！」

スター・ダスト・ドラゴン
ＡＴＫ２５００→５０００

「攻撃力５０００だと！？」

レッド・デーモンズ・ドラゴン
ＡＴＫ３８００

「これでファイナルだ！俺達の絆は、誰にも負けはしない！スター・ダスト・ドラゴン！響け『シューティング・ソニック』！」

スター・ダスト・ドラゴンが攻撃をしてジャックのライフを０にした

「うわぁぁぁぁあ！」

そして、眩しい光に包まれて、現実世界に戻ってきた。ジャックはＤホイールを制御出来なく、転倒した

「ぐわぁ・・・・」

遊星はブレーキをかけてなんとかＤホイールを止める事が出来た

どちらも疲れている様子で息切れしていた

会場の皆は何が起きているのかわからない状態で周りを見渡していた

「な・何が起きたんだ?」

「赤い竜が飛んだと思ったら、目の前が光になったよ」

龍亞が周りを見渡しているとある物に気づいた

「あ・あれを見て!」

龍亞が指した方を全員が向くとジャックのライフが0になっていた

「ジャックのライフが‥」

「このデュエル‥遊星が勝ったわ」

「「「えぇ!!」」」

あまりにも驚くような結果になってしまったようだ。ゴドウィン達のいる部屋でもイェーガーは驚いていて顔が引きつっていた

「大丈夫かジャック!」

転倒したジャックが心配になって直ぐに遊星はジャックのもとに向かっていた

「ぐっ‥うっ‥うぅ‥馬鹿な‥このキングが負けるだと‥」

そのままジャックは気絶してしまった

この現状にＭＣは困った様子で周りを見渡しながら慌てていた

「ど‥ど‥どうなってんた!?」

すると、ＭＣの近くのモニターにゴドウィンが現れた

「どうしましたか?勝負はつきましたよ」

「あ‥あぁ‥つ‥ついに決着!ウィナー!不動遊星!キングのジャック・アトラスの無敗神話は破られ、ここに新たなキングの誕生を我々は見る!新たなニューキング!その名は不動遊星!サテライト出身のキングの誕生だ!」

ジャックが大きく映っていたモニターが全て遊星へと代わっていった

こうして、フォーチュンカップは遊星がキングになることによって、
結末を迎えた

赤き竜の導く未来　遊星ＶＳジャック　（後編）（後書き）

次からはダークシグナー編になります

こっからのＯＰテーマは大好きなんですよ（笑）

フォーチュンカップ終了（前書き）

一度この話を書きましたが、感想や本文を読んで色々と考え込みました。

この小説の主人公は誰か！？

何てバカな事を考えてました。

勿論キラですけどね・・・

ダークシグナー編は主にキラを中心として書きたいと思います

カーリーやクロウは終盤辺りにしか多分出ないと思いますがどうぞよろしくお願いします

フォーチュンカップ終了

「ウィナー！不動遊星！ニューキングの誕生だ！」

フォーチュンカップを優勝し、キングへと挑戦し、そしてキングに勝ってニューキングとなった不動遊星だ

観客の半数は遊星への賞賛を送っていた

遊星に賞賛が送られる中、転倒して怪我をしてしまったジャックは担架で運ばれて行った

「（ジャック…俺達が見たものは…）」

光の中で見たビジョンを思い出していると罵声が聞こえてきた

「このサテライト野郎！どんな反則を使いやがった！」

「認めないぞ！サテライト出身のキングなんて！」

遊星が周りを見渡していると龍亞と氷室と矢薙のじいさんが向かってきた

「遊星！」

「あんちゃんこのまま逃げるぞ！」

「え？」

「あれだよあれ！」

矢薙のじいさんが指を差した先には柵の奥にたくさんの記者がいて

「取材させてください！」と言っていて今にも柵が崩れそうなくらい乗り出していた

「遊星速く！」

氷室が遊星のDホイールを引っ張りながら皆その場を後にするが、すぐに記者達が追ってきた

―――――――――――――――――――――――――

遊星達が逃げるのを眺めていたイェーガーとゴドウィンだが、イェーガーは慌てた様子でゴドウィンに訪ねた

「よ、良いのですか？このまま不動遊星を逃がして！？そもそも何が起こったのですか？キングが負けるなどと」

「そんな事は些細な事です」

「は？」

「星々が今、運行したのです。やがて1つに‥その時を目指して」

「あ‥はぁ‥」

イェーガーにはゴドウィンの言っている意味がまったくわからなかった

――――――――――――――――――――――――

その頃、記者達は遊星達が逃げた場所へと来たが、そこには誰もいなかった

「どこにもいないぞ」

「どこに行ったんだ？」

「これじゃあ取材にならないわよ！」

そんな事を言っているのだが、遊星達はその下：地下通路から逃げていた

「ここはスタジアムを造るときに使った通路さ」

「へぇ～知らなかったよ」

「今じゃあ誰も使ってないからな。まぁ、雑賀の情報さ」

氷室はこの通路を雑賀と呼ばれる男から教えてもらったのだった

「それにしてもすげぇぜあんちゃんよ！本当にキングになっちまうのだからな」

「遊星なら必ずキングになるって信じてたよ！」

「そんな呑気な事も言ってられないぞ。記者達も遊星や龍可やキラを追ってくると思うぞ。とりあえずは雑賀の隠れ家で大人しくしてるしかねぇな…龍亞と龍可とキラも一緒にいた方が安全だろう」

「本当！やったー！また遊星と一緒にいられる！」

ハイテンションな龍亞とは逆で、龍可はうかない表情だった

「遊星…私見てた。遊星とジャックのデュエルをあの光の中で、サテライトが…その…」

龍可が言いたいのは遊星とキラにはわかった。サテライトに大きな蜘蛛の地上絵が浮かび上がり、サテライトが滅びることだった

「あれはいったい・・」

「わからない。ただ、あの光景がサテライトの未来なら絶対に阻止する」

「・・・シグナーって何なの・・」

「じゃ～ん！そういう話はわしの出番だ！良いかい龍可ちゃん、シグナーってのは・・・おぉっと！その前に世界を股に掛けたわしの冒険の数々を話せばならんの！」

暗い雰囲気だったが、矢薙のじいさんが入ってきた事によって少し明るい雰囲気になった

矢薙のじいさんの長々しい旅の話を聞いている間に雑賀の隠れ家に着いたキラ達は本題の赤い竜の話を聞いていて、矢薙じいさんが赤い竜の痣の集合体の絵を描いていた

「もう随分と昔の話になるからの～。うろ覚えだがこんな感じだ」

完成した絵を見てキラと遊星はそれぞれの事に気づいた

「（俺の痣が無い・・）」

「この尻尾が・・」

「どうしたの遊星？」

遊星は袖を捲り上げて皆に自分の痣を見せた。これには皆驚きだった

「龍可、お前のも」

龍可も自分の痣を皆に見せた

「龍可はこの手の部分…どういう事なの？」

「儂が聞いた星の民の伝説では、赤い竜の頭、翼、手、足、尻尾の５つの部分がそれぞれ別れてシグナーと呼ばれる人達に痣となって封印されたの事じゃった」

「待てよ…今わかってるシグナーは遊星、龍可、ジャック、それに十六夜アキの４人、でもあの赤い竜が現れたって事は…」

「５人目もどこかにいたのかもしれんの～」

この時、龍可が光の中にキラもいたことを思い出した

「５人目ってキラじゃないの？」

「「「「え？」」」」

全員がキラの方を向いては驚いていた

「キラもシグナーだったの!?」

「いや・・なんか期待を裏切るようで悪いけど、赤い竜の痣じゃないんだ」

そう言って自分の痣を皆に見せた

「渦のような形じゃの」

「ねぇ遊星、シグナーってたくさんいるもんなのかな?」

「わからない。だが、謎が多くなるばかりだ」

確かに謎に謎が重なって問題が増えるだけだ。だが、龍亞は自分にも痣があるんじゃないかと体中を調べ始めた

「俺もどっかに痣がないかな～」

龍可は痣を見ては突然倒れそうになるがキラが支えた

「どうした龍可！？」

「ううん、少し疲れただけ」

「無理もないな、この2日はいろいろありすぎたからな」

氷室の言うとおりフォーチュンカップはいろいろありすぎたものだ

その頃、ダークシグナー達が動き出しているのを遊星達はまだ知らなかった

フォーチュンカップ終了（後書き）

ずいぶんと遅い更新になってスミマセン

それと今更ですが明けましておめでとうございます（笑）

現れるダークシグナー（前書き）

そういえば遊戯王の映画を観ました！

いや～：僅か４９分であんなに面白い映画が出来るとは思ってませんでしたよ

もう１回観たいくらいの面白さでした（笑）

だけどＯＣＧのＳｉｎのカード：：非常に使いにくい：

現れるダークシグナー

その夜、皆疲れたのか遊星以外は寝ていた。遊星はサテライトの事と痣の事で悩んでいた

「くそっ‥サテライトはどうなってしまうんだ‥‥」

「‥‥どうしたんですか‥遊星?」

遊星は声の主を見てみると寝ていたはずだったキラが目を擦りながら起きていた

「すまない。起こしてしまったか」

「いえ、大丈夫ですよ。それよりサテライトの事‥ですか?」

「あぁ‥だが、あれがサテライトの未来ならば絶対に止めてみせる」

そう言って窓の方へと向かって外を見渡した

そしてこの時、キラと遊星の痣が疼きだした

「ぐっ‥何‥この疼き‥」

「今までの疼きとは違う‥えぐるような‥‥!」

ふと窓から下の方を見てみるとフードを被った男が2人いた。しかもどちらも右腕に蜘蛛の痣があった

「シグナーなのか?」

「シグナー？」

キラも窓の方に向かって遊星が見ている方向へ目を向けた

「あの2人にも痣が…それに同じ…」

急に遊星がデュエルディスクを取り出して外へ向かって行って、キラも続くようにデュエルディスクを取り出して遊星の後を追った

外へ出て、フードを被った男達が何処へ行ったのか探すと、逃げるように走っていた

「待ってくれ！」

街中を右へ左へと進んで男達を追っかけていくと3階建ての駐車場に辿り着いた

「ここか‥」

「何であいつら逃げるんですか?」

「分からない‥だが、直接聞いてみるしかない」

そう言って中に入っていって2階のところで、1人の男が立ちはだかっていた

「お前は何者だ!?」

遊星が相手に問いただすが、フードを被った男はただ笑うだけだった

「知っているのか?サテライトに何が起きるのか」

「闇のデュエルに聞け」

「闇が全てを知っている」

遊星とキラの後ろからも声が聞こえてきて振り向くと、もう1人の男が立っていた。2人の男はデュエルディスクを起動させた

「闇のデュエル・・・良いだろう纏めてかかってこい！全てを聞き出してやる」

「待ってください。こっちは俺が相手をします」

「わかった。だが気をつけろ」

「わかってます」

遊星とキラは背と背を向け合うようにして立ってデュエルディスク

を起動させた

「「「「デュエル」」」」

キラＬＰ４０００
謎の男ＬＰ４０００

４人が一斉に叫ぶと突然２つの青い炎が４人を囲むようにして燃え盛り、八の時のような形になった

「何だ？」

「フッフッフッ・我らは闇の祭壇に捧げられし生け贄、もう逃れることは出来ぬ」

「い・生け贄！？」

「俺のターン、『紫炎の影武者』を守備表示で召喚」

男の前に紫炎に仕える影武者が現れた

紫炎の影武者
ＤＥＦ４００

「そしてカードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、（伏せカードが気になるがモンスターは弱い：攻めて様子を見てみるか：）俺は『カードガンナー』を召喚！」

キラの場に足がキャタピラで手は大砲のようなロボットが現れる

カードガンナー
ＡＴＫ４００

「カードガンナーの効果を発動！自分のデッキの上からカードを３枚墓地に送り、墓地に送ったカードの枚数×５００ポイント攻撃力がアップする」

キラは３枚デッキから墓地に送り、カードガンナーの攻撃力を上げた

カードガンナー
ＡＴＫ４００→ＡＴＫ１９００

「バトル！カードガンナーで紫炎の影武者に攻撃！」

カードガンナーが紫炎の影武者に向かって大砲を放って、紫炎の影武者を破壊した

「良し！カードを１枚伏せてターンエンド」

この時、カードガンナーの攻撃力が下がった

カードガンナー
ＡＴＫ１９００→４００

「俺のターン、ドロー：永続トラップ『リビングデッドの呼び声』を発動。自分の墓地に存在するモンスターを特殊召喚する。紫炎の影武者を呼び戻す」

「（紫炎の影武者を呼び戻す……ってことはアドバンス召喚か）」

そう思っていたキラだが、半分正解で半分はハズレだった

「そしてこの時、速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動。相手にモンスターが存在し、自分が攻撃力１５００以下のモンスター1体の特殊召喚に成功した時に発動できる。特殊召喚したモンスターと同名カードを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する」

男の場に3体の紫炎の影武者が揃った

紫炎の影武者
ＡＴＫ８００

紫炎の影武者
ＡＴＫ８００

紫炎の影武者
ＡＴＫ８００

「そして相手は相手フィールド場のモンスターを１体を選択してそのモンスターの同名カードを手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。お前の場にはカードガンナーしか居ないからカードガンナーを全て特殊召喚しろ」

「カードガンナーはデッキに１枚しか入れていないから特殊召喚は出来ない・・・」

キラは落ち着いた口調で話すと相手は突然笑い出した

「クックックッ・モンスターを特殊召喚出来なかった事を後悔する

と良い。紫炎の影武者の2体をリリースして『DTカタストローグ』をアドバンス召喚！」

DTカタストローグ
ATK0

「ダークチューナー？」

闇の案内人のような悪魔が現れる

「クックックッ・残り1体の紫炎の影武者にDTカタストローグをダークチューニング！DTカタストローグのレベルは8、紫炎の影武者のレベルは2」

普通のチューナーならば光の輪が現れるが、ダークチューナーは黒い光が現れて紫炎の影武者の中に入っていった

そして、紫炎の影武者のレベルと黒い光が打ち消し合い、黒い光が

6個になった

「星が…闇に…」

「そう、光は闇になった。ダークシンクロ召喚は、チューナー以外のモンスター1体のレベルからダークチューナーのレベルから引いた数のレベルのシンクロモンスターを召喚出来る」

「はぁ？レベルをマイナスって…そんなモンスターが…」

「あるのだよ…我ら闇の世界にはレベルマイナス6のモンスターがね…」

「黒い…カード…」

「「闇と闇重なりし時、冥府の扉が開かれる！」」

後ろからも声がしてキラは振り返ってみると、遊星の相手もダークシンクロをしているようだ

２－８＝－６

「光無き世界へ！ダークシンクロ『地獄の狂戦士』！」

地獄の狂戦士
ＡＴＫ２０００　ＤＥＦ０
地　戦士族　星－６
ダークシンクロ　効果
チューナー以外のモンスター1体－ダークチューナー
このカードが相手モンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。このカードがカードの効果によって破壊され墓地に送られたターンのエンドフェイズにこのカードを特殊召喚する事が出来る

男の場に戦いを好ましく思っているような戦闘狂が現れた

「ＤＴカタストローグのモンスター効果、このモンスターをシンク

ロ召喚の素材とした時、フィールド場のカード1枚を破壊する。カードガンナーを破壊！」

DTカタストローグがカードガンナーを包み込んでそのままカードガンナーが破壊された。だが、その破壊の衝撃はソリッドビジョンではなかった

「ぐっ：（何だ：アキさんとデュエルした時と似たような衝撃か？）だが、カードガンナーが破壊された時、デッキからカードを1枚ドローする」

「バトルだ！地獄の狂戦士でダイレクトアタック」

地獄の狂戦士がキラに向かって剣を振り降ろしてきた

この時、キラは警戒すべきだった。さっきの衝撃が凄まじい事を：

振り降ろしてきた剣をデュエルディスクで盾にすることなく、その

まま右肩から左腰まで切られてしまった

「うわぁぁぁぁぁ！！」

キラＬＰ４０００→２０００

切られたの部分が浅かったのか、死に至るまでは無かった

膝が地面につき、倒れそうになるが、なんとかこらえた

「この痛み・・・！」

切られた部分に手をあてると、変な感触がした・

それは血だった

「血……何…で…？」

「だから言っただろう。後悔すると」

キラは苦しみながらゆっくりと立ち上がると後ろから倒れる音が聞こえた

振り返ってみると、遊星もダイレクトアタックを受けたようだ

「大…丈夫…ですか…？」

「ぐっ…大丈夫だ…！キラ！その傷！」

遊星もキラの心配するような声が聞こえ、振り返ってみると傷を負っているキラに驚いた

「俺は…大丈夫ですよ」

「早く決着をつけるんだ」

「わかりました」

2人はお互いの相手に向き直ってデュエルを続けた

「あいつの心配をするより自分の心配をするんだな…ターンエンド」

「くっ…俺のターン、ドロー。手札からマジックカード『融合』！手札のフェザーマンとバーストレディを融合して、現れよ！『E・HERO フレイム・ウィングマン』！」

かつて、キラの父である十代のフェイバリットカードを召喚した

E・HERO　フレイム・ウィングマン
ATK2100

「さらに、リバースカードオープン『O－オーバーソウル』。この効果でカードガンナーの効果で墓地に送ったゼクスを特殊召喚！」

E・HERO　ゼクス
ATK2500

キラのエースであるゼクスを召喚した時、周りに衝撃が走った。後ろからも同じような衝撃が走ったが、遊星が反撃のために『ターレット・ウォリアー』を召喚したようだ

2つの衝撃が重なって周りに被害が出たが今はそんな事を気にしている余裕はなかった。だが、この衝撃で遠くから女性の悲鳴が響いたが4人には聞こえていなかった

「バトルだ！フレイム・ウィングマンで地獄の狂戦士を攻撃！『フレイムシュート』！」

フレイム・ウィングマンが地獄の狂戦士に向かって炎を放った

「この時、地獄の狂戦士のモンスター効果を発動。このモンスターが相手モンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わず、相手モンスターを破壊する」

「んな…バカな!?」

地獄の狂戦士が剣を振り下ろし、フレイム・ウィングマンが放った炎を真っ二つに切り裂いて、そのままフレイム・ウィングマンも破壊した

「くそっ…（何て効果だ…戦闘では負けないって奴か…）カードを1枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー、ちなみに言っておくが、地獄の狂戦士は効果で破壊されてもそのターンのエンドフェイズに再び特殊召喚出来る」

「何!?んじゃあ、ずっとフィールドにいるって事!?」

「ダークシグナーは決して倒れることはない。黒き印と共に幾度でも蘇る。バトルだ!地獄の狂戦士でゼクスに攻撃!」

「（ダークシグナー…?）耐えるしかない…罠カード発動『ヒーローバリア』!『E・HERO』と名のつくモンスターが攻撃対象となった時、戦闘を1度だけ無効にする」

地獄の狂戦士がゼクスに向かって攻撃してくるが、2体の間に丸いバリアが現れ、地獄の狂戦士の攻撃を防いだ

「ふんっ…命を繋いだか…ターンエンド」

「頼む…俺のターン!ドロー!」

引いたカードを確認するとキラの顔に勝利の笑みが浮かんだ

「何が可笑しい？」

「このターンで地獄の狂戦士を破壊して、決着をつけてやる」

「戦闘を行ったらお前のモンスターが破壊されるだけだぞ」

「目には目を、歯には歯をだ！装備カード！『ゼクター・ハンマー』をゼクスに装備」

ゼクスがベルトから大きなハンマーを取り出した

「フォルムチェンジ！ゼクスと装備されているゼクター・ハンマーを墓地に送り、『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス・ハンマーフォルム』を特殊召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス・ハンマーフォルム
ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２０００
地　戦士族　星７
融合　効果
『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』＋『ゼクター・ハンマー』
自分のフィールド場に上記のカードが揃っている時、墓地に送ることでこのカードを特殊召喚できる（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）
１ターンに１度このモンスターが相手モンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わず破壊する。この効果を使用した次のターンのエンドフェイズまでこのカードは表示形式を変更できず、バトルを行う事はできない

ゼクスの体の色が黒から緑色へと変化していった

「そして、『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマンを召喚』！バトル！ゼクスで地獄の狂戦士に攻撃！『クラッシャー・フィスト』！」

Ｅ・ＨＥＲＯスパークマン
ＡＴＫ１６００

ゼクスがハンマーを大きく振り上げ地獄の狂戦士へと振り下ろした

「忘れたか!?地獄の狂戦士とバトルを行ったモンスターは破壊されるんだ!」

「それはこっちも一緒だ!ゼクス・ハンマーフォルムは1ターンに1度だけ、戦闘を行う時、ダメージ計算を行わずに相手モンスターを破壊する!」

「何!?」

地獄の狂戦士も剣でハンマーを受け止めるがお互いに破壊された

「だが、このターンのエンドフェイズに地獄の狂戦士は蘇る」

「もう蘇る事はない!手札から速攻魔法『リバース・オブ・ゼクス』を発動!蘇れ!ゼクス!」

キラの場に再びゼクスが現れた

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス
ＡＴＫ２５００

「何だと!?」

「リバース・オブ・ゼクスは自分フィールド場の表側表示で存在する『ゼクス』と名のつく融合モンスターが破壊された時、自分の墓地に存在する『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』１体を攻撃表示で特殊召喚する。さらに、この効果で特殊召喚したゼクスの攻撃力は１０００ポイントアップする」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス
ＡＴＫ２５００→３５００

「これで終わりだ!スパークマンとゼクスでダイレクトアタック!」

スパークマンとゼクスが一緒に男に向かって攻撃をした

「ぐわぁぁ！」

謎の男ＬＰ４０００→０

男は攻撃された衝撃で遠くへと吹っ飛んでいった。疲れと痛みが激しいのかキラは息切れしながら膝をついた

すると周りの炎が消えていった。どうやら遊星も勝ったようだった

遊星は即座に倒した相手に近寄り胸ぐらを掴んで、無理矢理起こした

「おい！起きろ！」

「うっ‥あぁ‥」

「おい！サテライトで何が起こるんだ！？答えろ！」

「サテライトだと‥？痛っ‥‥何だよこの傷‥大体ここは何処だよ？」

「何も覚えていないのか？」

遊星は男の腕を確認するが、蜘蛛の痣が消えていた

キラは1度遊星の方を見ると倒した相手と何やら眼鏡をかけた女性と話をしているようだった。どうやら女性と倒した相手は知り合いらしい。キラも倒した相手に確認をしに行った

「サテライト‥はどうなるんですか‥？」

「うぅぅ…あぁ…？サテライト？何が？」

「何も…覚えていないんですか？」

「何も…ってここが何処だかもわからないよ」

「どうなって…つっ…」

キラは切られた部分を押さえて縮こまってしまった

「おっ…おい！大丈夫か？」

「キラ！大丈夫か？」

「つぅ‥多分‥」

すると突然パトカーのサイレンが鳴り響いてこの駐車場の近くに止まった

「え？セキュリティ？」

「どうやら今のデュエルを嗅ぎ付けたらしいな」

「ど‥‥どうしよ～」

「後は任せた。キラ、捕まっとけ」

「すみません‥」

キラは遊星に抱えられてそのまま2階から飛び降りて雑賀のアジト

に向かった

「ち、ちょっと！取材が！」

女性が遊星を追いかけようとしたが見失ったようだ

その後、３人はセキュリティに連行されていったようだ

アジトに着いた時は朝日が登っていて、周りが明るくなっていた

遊星がキラを抱えながら部屋に戻ると、氷室だけがその部屋にいて、
パソコンで何かを検索していた

「よぉ！こんな朝っぱらまで・・・ってお前らその傷はどうした！？」

「とりあえず、救急箱を頼む。話はその後だ」

「わかった。ちょっと待ってろ！」

キラをソファーに寝かせて服を脱がせて、氷室が救急箱を見つけるがあくまで応急処置で、消毒をして、包帯を巻きつけただけだった

「これは病院に行った方が良いんじゃないのか？」

氷室の提案にはキラはすぐに否定した

「それはダメ・・です。多分、病院の・・方に記者達がいると・・思います」

「あぁ、ジャックが病院にいるはずだから記者達がいるのは間違い。だが、本当に良いのか？」

「記者達に…追い回される方が厄介ですから」

確かにそうだなと氷室も遊星も納得してくれたようだ

「ところで何処で何をしてたんだ？」

「俺達は腕に痣のある男とデュエルをしていた」

「何！？５人目のシグナーか！？」

「いや、そいつはダークシグナーと名のっていた」

「ダークシグナー？」

「あの痣…やつらこそが俺達が戦う敵なのかもしれない」

その後、キラは別の部屋へと移され、ベッドに寝かされ遊星と氷室によって安静にさせられた

遊星と氷室がまた部屋に戻って、遊星が雑賀から連絡がないかとパソコンをいじりだした

そして、矢薙のじいさんや龍亞と龍可も起床して、部屋に集まっていた。そして、皆にも先程の出来事の話をした

「あんちゃん、まだ雑賀から連絡が着かないのかい？」

「サテライトに戻ろうと思う。あの男が言っていた言葉が気になる」

「え？戻るって？」

「例のサテライトが消滅するってやつか？」

「あぁ」

「えぇ!?遊星もう行っちゃうの!?サテライトに帰っちゃうの?」

「俺には確かめなくてはならない真実がある」

遊星がサテライトに帰る事を止めようと龍亞と龍可は声を張り上げた

「サテライトって凄い危険な所何だろ?そんなとこに帰らずにさ、俺達と一緒にシティにいようよ」

「シグナー同士は一緒にいなくちゃって言ったの遊星じゃない」

それを聞くと遊星はしゃがんで龍可と龍亞の肩に手を置いた

「シグナー同士なら必ずまた会える」

そう言った時だった。また外からパトカーのサイレンの音が響いてアジトの下で止まった

窓を開けて下を見ると、セキュリティの人達がたくさんいた。その中で遊星を追い回すセキュリティの牛尾哲がメガホンを持って喋り出した

「聞こえるか!?サテライトの屑野郎!シティでお前にとっての安住の地は無ぇ!今すぐに突入してやるから首根っこ洗って待ってろ!」

それだけ言うと牛尾は突入の準備を始めだした

「ちっ・・こんな時に」

「いや、ちょうど良い。ゴドウィン長官に用がある」

遊星はそのままアジトから出て行って治安維持局へと連れて行かれた

現れるダークシグナー（後書き）

この後、アニメの話を何話か省略しますが、そこの所はすみません

あっちこっち描くと自分が訳がわからなくなるので・・・

やるべき事（前書き）

この話はかなり手こずりましたｏｒｚ

遊星が治安維持局に向かってからどうしようかと・・

まぁ、訳が分からないかもしれませんが、そこはスミマセン

やるべき事

キラはベッドに寝かされた後、すぐに寝ていたのだった

起きた時に外を見てみると太陽が高くあるから時間は昼頃だった

「あ・・・そういえば服・・・・」

今のキラの状態は上半身は裸だが包帯でぐるぐる巻きにされているが、血が滲んでいた。包帯を巻く前に服を脱がされたのを思い出した

部屋を出て、氷室達がいた部屋に行ったが、いるのは裂けたキラの服を縫っている龍可だけだった

「あれ?皆は?」

「皆は弁当を買いに行ったわよ。昼の分と夜の分をね。ところでその傷…大丈夫なの？」

「大丈夫だよ」

前回も同じやり取りをしたことを思い出した龍可だが、心配したときに全く同じ答えだったからなおさら心配になってきていたが、口には出せなかった

「その服…縫ってるの？」

「うん。破けたままだと嫌でしょ？はい、出来たよ」

服を着て、裂けた部分を触ってみるがちゃんと縫い合わされていた

「おぉ、ありがとう」

「どういたしまして。ところでどうしてそんな傷を負ったの」

「ダークシグナーとデュエルした時にモンスターが実体化してたんだよ」

「実体化？ダークシグナーもサイコデュエリストなのかな？」

今思えば龍可の言っていることも一理あったが、いまいちピンとこなかった。ダークシグナーについてお互いに考えてる内に龍亞達が戻ってきた

「今戻ったぞ。ってキラはもう起きてたのか」

「はい。氷室さん、ありがとうございました」

ここで、キラは戻ってきた人達を確認したが、1人足りないことに気づいた

「あれ?遊星は?」

「遊星なら治安維持局に行ったぞ。ゴドウィンに話があるらしくて…まぁ、とりあえず飯にするか」

氷室の言葉に皆が賛同し、それぞれ昼ご飯を食べた後、氷室は雑賀から連絡が来ないかとずっとパソコンをいじっていた

「あぁ~…やっぱりここじゃああまり電波を拾いにくいのかな…」

「あっちはサテライトだから仕方ないの~」

そう、シティからの電波を拾うことは出来るが、サテライトからの電波はなかなか拾いにくい。それに場所も場所だったからだ。だが、ふと龍亞はある提案を思い付いた

「だったらさ、明日俺んちに来なよ」

「あ？龍亞の家っていったら‥」

「トップスだよ。ここよりは電波の環境が良いと思うよ」

「んじゃ、明日龍亞君の家に行こうかの」

それまで何もする事も無くそれぞれがデュエルなどをやっている間にあっという間に夜になり、皆が寝た時だった

キラと龍亞と龍可が一緒の部屋で寝て、氷室と矢薙のじいさんは別の部屋で寝ていた

だが、キラと龍可の痣が急に疼きだした。痣が疼くので起きてしま

った

「‥この感じ」

「うん‥遊星が戦っているんだよ」

「あ‥相手ってやっぱり‥！」

「多分だけどダークシグナーだろうね」

「う～ん‥‥どうしたのさ‥‥ってうわっ！2人ともその痣！」

龍可とキラの話し合っていたら龍亞が起きてしまった

「遊星がダークシグナーとデュエルをしているのよ」

「えぇ！？だ‥ダークシグナーって‥キラ、大丈夫なの！？」

「俺に言われても‥遊星だから大丈夫だと思うけど、そう思うのは龍亞も同じだろ」

そう龍亞に問いただしたら、龍亞は大きく頷いたのだがキラを見ては心配になる事があった

「でもさ、キラがダークシグナーとデュエルした時にその傷を負ったんだから‥‥」

龍亞の言いたいことは分かっていた。ダークシグナーとのデュエルではサイコデュエリスト以上の衝撃が与えられるのだ。だから、遊星が無事でいられるのかは分からない

3人は黙って時が進むのを待っていられるしかなかった

そして、何分か経過した後、痣の光が消えていった

「あぁ…痣が消えてく…遊星に何かあったの!?」

「分かんない…でも…何か…嫌な感じがする…」

「ど…どうすんの!?」

遊星が大変な目にあったのではないかと思って龍亞は慌てだした

「龍亞が慌てたって仕方ないだろ。今は寝よう」

龍可は不安で、龍亞も不安でいっぱいで落ち着けないでいたが、何故かキラは冷静でいられたのだった

「寝ようって：何でキラはそんなに冷静でいられるのさ！？」

「今ここで慌ててどうなるんだよ。明日家に戻れば雑賀って人から連絡が来るかもしれないだろ？だから明日を待つしかないよ」

確かにそうだと龍亞は納得したのか寝るしかなかった。だけど、龍亞はあまり寝付けなかったが、１時間が過ぎた頃にはぐっすりだった。キラと龍可は何故か吸い込まれるように夢の世界へと入っていった

そして、夢の中で見たものは赤き竜とシグナーの竜の５体と邪神達との戦いの夢だった

赤き竜の力とシグナーの竜の力で邪神達を封じ込める事に成功したが、封じ込める直前に邪神の中の１体が最後の力を振り絞ってエンシェント・フェアリー・ドラゴンも一緒に封印したのだった

キリが良いときに目覚め、外はもう朝だった。龍亞が起きた時は昨日と同じくテンションが低かったが、龍可が夢の話をして、その中にパワー・ツール・ドラゴンに似ているのがいたって話した時には

先程とは比べられないくらいにハイテンションになった

「そんな話をして大丈夫なの？」とキラが龍可に聞いてみるが、「元気付けさせるためよ」と言っていたので納得した

氷室と矢薙のじいさんにも夢の話と遊星がダークシグナーとデュエルをした事を話した後、氷室が少し考えごとをしては「龍亞の家に行く準備をするぞ」と言うだけだった

昼過ぎになってやっと辿り着いた。氷室と矢薙のじいさんは驚くばかりだった

「ほほぉ～凄い家だの～」

「両親はどうしたんだ？」

「パパとママは世界中を飛び回ってて、偶にしか帰ってこないの」

「好きに使ってよ。いくらでも部屋は開いてるんだし」

「それは助かるぞ。ありがとな」

矢薙のじいさんはベランダに出て大はしゃぎしていた。氷室もここでは雑賀のアジトよりサテライトからの電波が拾えそうだなと言っていてパソコンを起動させた

「そういえばキラ、お前は包帯を取り替えた方が良いんじゃないか？」

「え？あぁ…いや…いいですよ！」

氷室がキラの傷を気にして、包帯を取り替えると言うのだが、キラは慌てた様子で、否定した。キラが否定するので、氷室は大丈夫だと思ったのか取り替えなかった。キラは安心して、皆には見えないように傷を見てみるが、包帯には血がかなり染み込んでいた。彼は結構無理をしていたのだった

「ねぇ、龍可とキラが感じた感触が本当なら、もう遊星はダークシグナーと戦いを始めたのかな?」

「こっちからの回線は不安定だから向こうからの連絡を待つしかない」

「遊星は勝ったかな・・・」

「分からん」

龍亞の問いに氷室は当たり前のように即答だった

「だが、遊星は簡単に負けるような男じゃない」

「そうだよね！俺にも手伝える事はないかな～ねぇ、龍可が言ってた話」

「邪神達と赤き竜達が戦う話の事か…」

「シグナーの力が龍可ちゃんとキラ君に古の戦いを見せたのかもしれんの～」

龍亞が自分のデッキを取り出して、パワー・ツール・ドラゴンを眺めて、龍可にあることをもう1度聞いてみた

「その夢にパワー・ツール・ドラゴンが出てきたって本当なの？」

「まぁ、似てた…かな…良いじゃないそんな事…」

龍可は龍亞に視線を合わさないように話した

「良いわけあるもんか！そのドラゴンのカードを持ってるって事はさ、もしかしたら俺が最後のシグナーだったりするかもしれないじゃん！」

龍亞は自分に早く痣が浮かばないかと、昨日と同じく体中を探り始めた

今の話を聞いて氷室と矢薙のじいさんは龍可とキラに小声で話しかけた

「本当にそうなのか？」

「いや、元気付けさせるためらしいです」

「古代の儀式にあんなロボットみたいな竜が出てくる訳無いでしょ」

「そりゃそうだ」

龍亞は出てこい出てこいと叫びつつ、まだ体中を探っていた時にある事が浮かんだ

「そうだよ！俺が5人目のシグナーなんだからもっとしっかりしなくちゃ！どんな事があっても龍可の事を守っていかないと！俺に皆任せときな！」

「「お・おぉー！」」

氷室と矢薙のじいさんだけが龍亞の掛け声に乗っていた

「邪神達と戦う赤き竜ってつまり、シグナーは全員仲間なの？」

「そういう事になるな。あんちゃんとジャック、龍可ちゃんとキラ君にアキって姉ちゃんか」

「俺もだって！」

「そ・・そうだったな・・」

アキの事に関しては氷室は否定した

「ありえんな。十六夜アキが仲間ならアルカディアムーブメントが仲間って事になる」

「アルカディアムーブメントって何なの？」

龍亞のアルカディアムーブメントの問いにはキラが答えた

「アルカディアムーブメントってのはサイコデュエリスト達が集まった理想郷の集団らしい……って皆どうしたの？」

キラの答えに皆驚いていた。氷室と矢薙のじいさんはよくそんなの知っているな的な感じで、龍可と龍亞は最近この世界に来たばかりなのに何で知っているのっていう顔だった

「何でキラはアルカディアムーブメントの事を知ってるの？」

「ディヴァインって人に聞いたよ」

ディヴァインの名を聞いて氷室はさらに驚いて、キラに詰め寄った

「ディヴァインだって!?お前何で!?」

「何でって‥」

キラは自分の力の事を考えた。力の話をすれば納得するかもしれない‥‥だが、今までこの力の事でどんな想いをしたか、離れられる辛さを思い出した

「は‥話をしているのを聞いたんですよ」

目を伏せながら誤魔化すように答えた。力の事はバレたくない‥絶対にと、そう思っていた。氷室は納得してキラから離れた

「そうか‥でも、キラの言っている通りだ。だが、あまり良い噂を聞かないな、サイコデュエリストを集めて怪しげな研究をしているって話だ」

「サイコデュエリスト？」

「サイコデュエリストっていうのは、稀にサイコ能力を持ったデュエリストが生まれるって聞いた事がある」

「アキさんはどうしてそんな所に？」

「さぁな・何か事情があるのかもしれん」

皆で黙って考え、またもや龍亞が閃いたのか大声で話し出した

「あっ！ねぇ、俺達でアキ姉ちゃんに協力してもらえるように頼んでみようよ」

「何？」

「変な事をしているって噂何でしょう?最初から疑う必要が無いんじゃない?」

「言われてみればそんな気がしてくるが:儂ら大人は人を疑い過ぎてるのかもしれん」

「確かに、俺達の情報を話したって損はない」

話は纏まったのだが、ここで1つ障害が出てくる。アルカディィアムーブメントにどうやって話しに行くかだ

「だけど、アルカディィアムーブメントに連絡取れんのかい?」

「雑賀のデータの中にあるかもしれない。奴は一流の情報屋だからな」

そう言ってパソコンで連絡先を調べた結果見つかって、面会をお願いした所、承諾したらしい

「良し！今からアルカディアムーブメントに行くぞ～！」

「ちょっと待て。会うときに会う礼儀ってのがある。正装して行くぞ」

氷室と矢薙のじいさんは龍亞と龍可の父親のパーティー用の服を借りて、龍可と龍亞もそれぞれ着替えた。キラはこの世界に来てから元々制服であったため、そのままだった

やるべき事（後書き）

アニメでは最後のシグナーの竜が現れましたが正直言って嬉しさ半分失望半分でしたｏｒｚ

特別企画　乙女達のデュエル（前書き）

バレンタインは過ぎてしまいましたがせっかくなので書いちゃいました

この話にはダークシグナー編より後の話になるのでちょっとしたネタバレ（？）になります

新キャラや新しい設定があります。それはちょっとした伏線という形で捉えて下さい

特別企画　乙女達のデュエル

もうすぐバレンタインデー。女性が好きな男性にチョコを愛の形として贈る素敵な1日である

だが、チョコを貰えない男性からすればジェラシーを最も感じる1日でもある

もうすぐそんな日であるが、龍亞は遊星達の家に来ていた。龍亞はDホイールのメンテナンスをしている遊星に周りを見渡してからジャックとクロウがいないかを聞いてみた

「ねぇ遊星、ジャックとクロウはどうしたの？」

「クロウは配達で、ジャックは散歩に行ったぞ。そういえば龍亞は今日はどうしたんだ？随分と暇そうに見えるが・・・それとキラは？」

「キラはバイトに行ったよ。んで、俺は龍可に追い出されたよ」

「追い出された？龍可と喧嘩でもしたのか？」

「違うよ。もうすぐバレンタインだからキッチンを占領したいから男性禁止エリアとかなんとか言って追い出されたんだよ」

「そうか、もうそんな日が近いのか」

遊星はあまり気にする事なくDホイールのメンテナンスを続けていた。龍亞は家には帰れない。それにキラもいない。皆忙しい事が少し羨ましいと思いながら遊星の作業を見ていた

そして、龍可の家では女性が3人：龍可とアキとカーリーがバレンタインのチョコを作るための大量の具材と向き合っていた

「さぁ！愛しのジャックのために頑張ってチョコを作るわよ～！」

「「ハハ：」」

カーリーのあまりの張り切り具合に苦笑をする2人である。カーリーの意気込みが落ち着くと3人は調理を始めた。調理の最中にカーリーはふと思った

「ところで2人は誰にチョコをあげるの？」

「私は皆にあげるわよ」

「私もそんな感じよ」

アキと龍可はお互いに同じ答えだった。だが、顔が少し赤い事にカーリーは気づいた

「ほほぅ：ちゃんと本命がいると」

ニヤニヤしながら言うと2人はさらに真っ赤になっていた

「カ：カーリー！手が止まってるわよ！」

「ちゃんと手を動かしてるんだから」

アキは誤魔化すために話題を変えたが、見透かしたようにカーリーは楽しそうだった。一応分かっているが、アキは龍可に誰に渡すのか聞いてみた

「龍可の本命は誰に渡すの？」

「キ・・・キラに・・」

耳まで真っ赤にして答えた龍可を見て、アキは可愛いと思っていた。
ガールズトークをしながら調理をしていると時間はあっという間に過ぎて、チョコは完成してラッピングを始めていた

「ふんふふん♪あっ！どういうシチュエーションで渡そうかな～」

突然カーリーがそんな事を言うと龍可とアキは「（そうだよ、どうやって渡そう・・）」と思い、手が止まった

「カーリーはどういうタイミングで渡すの？」

「え！？私！？え～っとね・・」

カーリーの妄想

時は茜色に染まった夕方。そして場所は風水広場。ジャックとカーリーは向かい合っていた

「ジャック・・これ私の愛の形なんだから・・」

照れながらチョコをジャックに差し出すとジャックはそれを受け取った

「ありがとうカーリー。だが、こんな物はいらん」

「え！？」

バッサリと断るとカーリーはがっかりしたように目に涙を浮かべた

「俺が欲しいのはカーリー…お前だ」

「え？私？」

「そうだ…お前以外は何もいらん」

ジャックはカーリーの腰に手を回して抱き寄せたそして、そのまま
ジャックは顔を近づけて来て…

「そして、そこでキスを！あぁ！ジャック～！」

顔に手をあてて首を横に揺らしながら悶えていた。カーリーの話を聞いた2人はカーリーを見ないように横を向いてた

とても自分達では想像出来る世界ではないからだ

時間はもう夕方になっていた。キラはローラーブレードを走らせながら、遊星達の家に向かっていた

「よぉ！キラ！」

横から自分の名前を呼ばれて横を向いたら、クロウがDホイールで走っていた

「クロウ！配達だったんですか？」

「あぁ、今日も疲れたぜ・・そういうキラはバイトだったのか？」

「はい、結構大変でしたよ。そういえばジャックのバイトは見つかったんですか？」

「いいや・・あいつは「俺様を分かっていない！」とか言ってどこへ行ってもクビばっかりだよ」

「ハハハ・・ジャックもある意味大変なんですね」

と2人はそんな話をしながら遊星達の家に帰り着いた。キラは龍亞を迎えに来たのだが龍亞は暇で暇だったため、2階のソファで寝ていた

「遊星！今帰ったぜ」

「クロウ、お疲れ様」

「キラも一緒だぜ」

クロウはDホイールのエンジンを切ると、キラはからやって来た

「キラ、ローラーブレードの調子はどうだ?」

「最高に良いですよ。作ってくれてありがとうございます。ところで龍亞は来てませんか?」

「龍亞なら2階で寝ているぞ」

2階に上がっていくとスヤスヤと寝ていた。もう時間が時間なので龍亞を起こした

「龍亞、もう帰るよ。明日は学校だよ」

「う～ん…キラ…お疲れさん…そしておはよー」

「おはよう。さっ、帰るよ」

眠たそうな龍亞を連れ出して、遊星達にお別れを言うと、帰っていった

帰り着いた頃にはカーリーとアキはもう自分達の家に帰っていた。
飯や風呂などいろいろ済ませると、それぞれ寝たのだった

そして、時は経ってバレンタインデーの朝。龍可はキラにどうやってチョコを渡そうかと、まだ悩んでいた

「龍～可～早く行くよ！」

龍亞が学校に行くよう龍可を急かすと、チョコを鞄の中にしまい込んでキラと3人で登校した

途中でアキと会って4人で登校するが、龍可とアキはこそこそと話をしていた

「ねぇ、何の話をしてるんだろうね」

「さぁな、人には隠し事の1つや2つはあるだろ」

龍亞は龍可達のどんな話をしてるのか分かって、キラに聞いてみるが、キラには興味が無かった

「今日は幾つ貰えるかな～」

龍亞はバレンタインデーというイベントを楽しみらしい。

デュエルアカデミアに着いたらそれぞれ高等部、中等部、小等部へと別れた

キラは教室に入ると、それを確認した女の子がダッシュで向かってきた

「おっはよ～キラ！」

「おはようリア、朝からハイテンションだね」

「そうなんだよ！今日という日が来たんだよ！というわけではいこれ」

リアが渡してきたのはラッピングされた小包だった。周りの男子は嫉妬や殺気の目でキラを睨むがキラはそれに気付いてなかった。それに今日という日が何なのかも分かっていなかった

「？まぁ、ありがとう」

小包を受け取るとそのままリアは顔を赤くして逃げるように廊下へと出て行った。キラは席に着くと今度は男子がやって来た

「キ～ラ～！良かったな！チョコを！貰えて！」

いちいち決めポーズを取りながら話してくるカイである

「あぁ、これチョコなんだ・・」

「そうだ！ロマンを感じないか！？」

「今日も熱いね～カイは・・ってか、チョコがロマンなのかな」

「ロマン・・チョコを貰えるのは男のロマンじゃないか！」

熱く熱くとキラに語り掛けるが、ロマンなのかなと考えていた

授業が始まると、キラの隣の席であるリアは終始顔が赤かった

昼休みになると、キラは小等部の方に向かった。その途中でアキに会い、一緒に向かった

龍可達の教室に着くと昼食に誘うと、今度は食堂へと向かった

それぞれ食べたい物を取って、席に着いた。アキと龍可はまたもや小声で話をしていた

「ねぇ、もうキラには渡したの？」

「ううん‥タイミングというか機会というか‥心の準備がまだなの」

「早く渡さないと時間はあっという間よ」

「で‥でも‥」

俯いていた視線をキラに向けるとちょうど昼食を食べ終わっていた

「ふぅ〜‥食べた‥でも何か物足りない」

龍亞も食べ終えたがまだお腹が空いているようだった。ここで、キラは自分が持っている物を思い出した

「チョコあるけど‥龍亞食べる?」

ポケットからリアに渡された小包を出した。すると3人は驚いた

「「「え!?チョコ!?」」」

チョコという単語に反応した3人だが、食堂にいる男子も反応し、嫉妬の念に食堂は包まれた

「チョコ‥キラに渡す人って‥‥」

この学園で、キラにチョコを渡す人は限られている。龍亞は思い当たる人が1人浮かんだ

「もしかして‥それってリアから?」

「良く分かったな。朝教室に入ったらいきなり渡されたよ」

それを聞いた龍可は先を越されたとショックを受けていた

ちなみに、リアという単語にも男子は反応し、殺気まで放つがやはりキラはそれに気付いてなかった

「リア：あのリアから：食べる！絶対に食べる！」

キラの手から小包をひょいと奪い取り中を広げて、チョコを食べ始めた

「うんめ～！超美味しい！」

「ちょっと龍亞！それはキラが貰ったチョコでしょ！」

パクパクと食べる龍亞をアキは手で止めたが、小包の中は空っぽだった

「たはは･･ごめんごめん。美味しかったからさ･･」

苦笑しながら謝るが別にキラにとっては気にする事では無かった。
何故なら今日という日を理解していないからだ

昼休みの終了のチャイムが鳴り始め、また、それぞれの教室に向かった

そのまま、いつも通り授業を受けて、学校が終わるとまた皆で校門で集まっていた

「私と龍可は遊星の所に行くんだけど、龍亞とキラはどうする?」

「俺はバイトがあるので遠慮しときます」

それだけ言って靴をローラーブレードに履き替えると、バイトに向

かっていった

「相変わらず大変だね・・」

「仕方ないわよ、私達に迷惑をかけたくないって言ってバイトを始めたんだから。それで、龍亞はどうするの？」

「行くよ。アキ姉ちゃんの反応が面白そうだから」

ニヤニヤと見てくる龍亞に少しイラッとしたアキだった

「もう龍亞にはあげないから」

怒ったように先に歩いて行って、それに龍可と龍亞も続いた

「あんまりからかうとアキさん本気で怒るかもよ」

「でも、キラに渡す時の龍可の反応も見てみたい」

「「龍亞には絶対にあげないから！」」

龍可もアキも怒って、龍亞に怒鳴って早歩きで遊星の所へと向かった

「わ…悪かったって！ごめんって！」

さすがに反省したのかチョコが貰えないのが嫌なのか、謝る事にした龍亞だった

遊星の家へと着くと先にカーリーがジャックにチョコを渡してる最中だった

「はいジャック、これを受け取って」

「何だこれは？」

「何って：今日はバレンタインデーよ！私の愛を今渡したんだから！」

「ふむ、そうか」

カーリーの愛という言葉を耳から入っていって耳へと出て行く感じにスルーし、チョコを食べてこう言った

「甘い：」

「そう！私達の愛はとろけるように甘いのよ！」

もうすでに自分の世界に入ろうとしているカーリーだが、次の言葉で現実へと引き戻された

「甘過ぎるぞ！こんな物俺の口に合わん！」

「え・・・」

今妄想していた世界がガラスのように砕けていったのだった

ジャックはチョコをカーリーに返すとどこかに行ってしまった

「あぁ～！甘かったのか～！甘過ぎたのか～！私の考えが甘かったのね・・いや・・でも、もう１つあるんだから！ジャック～待って～」

なにやら1人芝居を始めたと思ったら前向きに考え、ジャックを追っていった。それを見送ったアキと龍可と龍亞は苦笑していた

「皆、今日はどうしたんだ?」

声の主の方を向くと遊星がいた。質問には龍亞が答えた

「アキ姉ちゃんがちょっとね～・・」

そんな事を言うと凄い形相でアキは龍亞を睨みつけた

「と・・ところでクロウは?」

「今日も配達に行ったよ」

「遊星、これ3人で食べてね」

先に龍可がチョコを3つ遊星に渡すとありがとうとお礼を言って受け取った

「さ、アキさんも」

応援するようにアキに声をかけたら、アキは真っ赤になっていた

「ゆ・・遊星・・私からもなんだけど・・はい・・」

声が裏返りながらも顔を赤らめチョコが入った小包を3つ遊星に渡したら、同じようにお礼を言って受け取った

受け取った事を安心したが、重要事項を思い出した

「いい遊星！１つだけ違うのがあるから！それが遊星のだからね！絶対に遊星が食べるのよ！」

ズイズイと遊星との距離を詰めて言葉を発していった。遊星は何か恐怖を感じたのか後退していた

「アキ姉ちゃん随分と張り切ってるね・違うのってどんなの」

「龍亞には関係ないでしょ」

ジト目で龍可は龍亞を睨みつけて冷たく言った

最後には遊星が「分かった」と言ったときにアキは自分と遊星の顔が近いことに気づいてとっさに離れた

「後はキラだけね・・」

龍可は鞄の中にある小包を見て、俯きながら言った

「ちゃっちゃと渡しちゃえば良いのに」

「それが出来ないから龍可は困ってるのよ」

「どうして出来ないのさ？簡単だろ？」

「「龍亞に乙女の気持ちは理解出来ないわ」」

またもや声を同時に揃えて龍亞を攻めた

「それに・・受け取らないかもしれないじゃない」

「キラはそんな事しないと思うぞ」

龍可がだんだんとネガティブになっていくが遊星は否定した

「分からないじゃない。リアさんから貰ったチョコを龍亞にあげたし：しかもバレンタインチョコと分かってるうえで全部食べた本人もいるし」

痛いことを言われたのか、「うっ：」と龍亞はうめき声あげた。バレンタインにチョコを他人にあげる行為をどうかと思ったが、遊星はキラの事を考え、思い当たる事があった

「もしかしてキラは今日がバレンタインって事を忘れてるんじゃないか？」

「え？」

「それはあり得るかもね」

遊星の考えにアキは賛同した。キラの事を思えばバレンタインというのを忘れている可能性は大だった

「龍可、絶対に今日渡すのよ！」

「うん・・」

暗い顔で頷いたが、受け取って貰える自信はあまりなかった。その後それぞれ帰っていった

キラはバイトが終わると、家に帰る途中でアキと会った

「アキさん！今遊星の家からの帰りですか？」

「うん、そうよ。そういえばキラは今日が何の日か分かる？」

「今日ですか？今日・・・誰かの誕生日・とか？」

考えた結果が誕生日だった。やはりバレンタインというのを忘れているとアキは思った

「違うわ・まぁ、何でもないわよ。気をつけて帰るのよ」

「はい、アキさんも」

別れを告げてキラは帰った。家に着くと龍亞はいつものように出迎えてくれたが、龍可は暗かった

「どうした龍可？何かあったの？」

悩みの種がそれを言うなと2人は思った

「ねぇ・・キラは今日が何の日か分かる？」

「今日？さっきアキさんからもそんな質問されたけど・・分からん」

やっぱりそうじゃん！と龍亞は思って龍可に小声で話しかけた

「やっぱり忘れてるんだよ。頑張れ」

それだけ言うと龍亞は自分の部屋へと戻った

「あ・・あのさ・・今日はバレンタインなんだ・・」

バレンタイン…その単語がキラの頭の中で響いて今朝の事を思い出した

「あ！だからリアがチョコを渡してきたんだ！」

「それで…これ…」

龍可は勇気を振り絞って、小包を差し出した。キラはそれを受け取った

「ありがとう。2回目…ってリアからのは龍亞に食べられたんだっけ…」

ここで、キラは自分の過去を思い出し、あることに気づいた

「バレンタインで初めてチョコを貰った……」

「え？初めてって‥」

「ありがとう龍可！大切に食べるよ！」

初めてチョコを貰えたのが嬉しいのか、龍可の手を取ってお礼を言った

この時、龍可はキラが喜んでくれたのが嬉しいから、今日1番の幸せの笑顔だった

余談

「なぁ遊星、十六夜は1つ違うのが遊星のだって言ったんだよな」

「あぁ…」

クロウと遊星とジャックはアキと龍可から渡されたチョコを食べようとしていた

「これは…遊星…の…だな」

一発で分かるように分かりやすかった。何故なら遊星のだけチョコの形がハートだったからだ。しかも大きい

「これは苦すぎるわ～！」

ジャックはカーリーに渡されたビターチョコを一口食べて叫んだ

特別企画　乙女達のデュエル（後書き）

楽しんで頂けたなら幸いです

このようなイベントはやっていこうかなと思います

飛んで火にいる夏の虫達（前書き）

まだ2月ですが、こっちの地域は段々と暖かくなってきました。十分半袖で過ごせるくらい暖かいです（笑）

ちょっと意味不な部分があるかもしれませんが、どうぞ

準備が整いアルカディアムーブメントの本社に向かったら、それはとても大きなビルだった

改めてアルカディアムーブメントが如何に大きな組織だということを思い知った5人だった

中に入ると、そのまま部屋へと案内されて席に着くと、後からディヴァインが入ってきた

ディヴァインがキラと龍可がいることを確認すると口元がつり上がったが誰も気付かなかった

「それで、話とは?」と聞かれたので龍亞がダークシグナーについて知ってる事を話した

サテライトが危険であること遊星がそれに立ち向かって行ってる事、シグナーであるアキの力が必要であること、全部を話した

「面白い話ですね…そのダークシグナーと呼ばれる連中がこの童実野シティを狙っていると…」

「そう！そいつらと戦うためのシグナーなんだ！だからアキ姉ちゃんの力を貸して欲しいんだ。きっと同じ痣を持っている姉ちゃんなら遊星を助けられるよ」

「それで、遊星君からの連絡は？」

「まだだ…」

「ふ～…良いでしょう。我々の力を全面的にお貸ししましょう」

「本当！？」

必死の説得ではあったがまさかこんなあっさりと承諾するとは思っても見なかった事態だった

「アルカディアムーブメントは純粋にサイコデュエルの研究を行っているのですが、最近は変な噂を立てられて困っていたのです。我々が皆さんのお役に立てるなら喜んで」

「やった！」

「良かった！」

龍可と龍亞はお互いに顔を合わせ喜んでいた。そしてディヴァインが席を立った

「そうだ！彼女を呼びましょう。すぐに戻ります。失礼」

アキを連れてくると言って、そのまま出て行った

「どうよ！俺の思った通り。あの人悪い人じゃないって！」

「こんなに話がトントン拍子に進むとはの～」

「意外だな・だが油断しないかも良いかもしれん」

「あぁ～あ～やだやだ、大人は疑い深くって」

「でも氷室さんの言うとおりだよ。油断はしないようにしないと」

「キラまで大人の味方なの！？それじゃあ先に進めないよ。それより料理は？俺お腹減っちゃった！」

「龍亞、静かにしてなさい」

信じてもらえた事が嬉しいのか、テンションが上がってきた龍亞である。だが、氷室とキラが言っているとおり、油断大敵であるが、この時催眠ガスがこの部屋に充満しているとは誰も気づかずに全員いつの間にか眠ってしまった。するとガスマスクを付けたディヴァインと側近の人達が部屋に入ってきた

「フフフ…龍可、いずれアルカディアムーブメントに加えようと思ってたよ…そして遊城キラ…君の方から来るとはね。飛んで火にいる夏の虫とはこのことかな…」

氷室と矢薙のじいさんは倉庫の中に閉じ込められ、龍亞はデュエル場へ、龍可はその見学席へ、そしてキラは別室へと移された

何時間か経過したか分からないが、キラは目を覚まし、体を起こした

「‥あれ‥‥何で眠ったんだ‥」

「やっとお目覚めかい？キラ」

「ディヴァイン‥っ！龍亞や龍可達はどこですか！？」

この部屋に自分とディヴァインだけだという事に気づき、龍可達の居場所を訪ねた

「彼らは別室さ。尤も、氷室と矢薙ってやつは帰ったがな」

「氷室さんと矢薙のじいさんが帰った？‥‥そんなはずない！」

「君と龍可の力を教えたら顔を真っ青にして帰っていったよ。だから君は見捨てられたんだよ」

「そんな!?」

ディヴァインはキラをアルカディアムーブメントに引き入れるために真っ赤な嘘を言った

「どうだ?サイコデュエリストは差別されてるんだよ。そのうち君も居場所を無くすだろう。だが、その前にここに来なよ」

「っ……だけど……」

ディヴァインが言っている事が信用出来ない。だが、言っている事は間違ってはいない。龍可と龍亞の事も心配であり、答えが出せなかった

「まぁ良いさ。いずれ君もここの一員になるさ。そうだ、デュエルをしないかい?」

「デュエル？」

「君の力をもう1度確かめてみたい。君の力を私にぶつけるだけさ」

「力は…使いたくないです…」

キラは力を使う事を拒んだ。昔、自分が力を使って人を傷つけた時に父親の言った言葉を思い出した

《人を傷つけるために使うな！人を守るために使え！》

その言葉がキラが精霊の力をあまり使わない理由だった。だが、ディヴァインはそんな事は知らない。とある条件を言ってきた

「んじゃあ、条件を出そう。君が私に力を使って勝ったら龍亞と龍可に会わせてやろう。負けた場合は会わせない…どうだい？」

「そんな条件…呑めません」

「だったら、さっきのダークシグナーってやつの話は無しにしようか？」

「…分かりました…受けて立ちます」

悔しそうに唇を噛み締めながらデュエルの申し込みを受けた。場所をデュエル場へと案内され、所定の場所に着くとデュエルディスクを起動させた

「「デュエル」」

キラＬＰ４０００
ディヴァインＬＰ４０００

「私のターンから始めるよ。ドロー、『テレキアタッカー』を召喚。

そしてカードを2枚セットしてターンエンド」

テレキアタッカー
ＡＴＫ１７００

「俺のターン、手札からマジックカード『融合』を発動！手札のスパークマンとクレイマンを融合して、現れよ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダージャイアント』！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダージャイアント
ＡＴＫ２４００

「ほぉ：結構手強そうだな：」

「さらに、サンダージャイアントの効果発動！手札を1枚墓地に送り、フィールド場の表側表示で存在する元々の攻撃力がこのカードの攻撃力より低いモンスターを1体選択して破壊する。よって、テレキアタッカーを破壊！」

キラは手札のフェザーマンを墓地に送って、サンダージャイアントの効果を使ってテレキアタッカーを破壊した

「そして、『カードガンナー』召喚！カードガンナーの効果でデッキの上からカードを3枚墓地に送り、カードガンナーの攻撃力をアップさせる」

今度はデッキから3枚墓地に送って、カードガンナーの攻撃力を高めた

カードガンナー
ＡＴＫ４００→１９００

「バトル！サンダージャイアントでダイレクトアタック！」

サンダージャイアントがディヴァインに向かって突進してきた

「速攻魔法『緊急テレポート』を発動。デッキから『メンタルプロ

テクター』を守備表示で特殊召喚する」

メンタルプロテクター
ＤＥＦ２２００

「バトルは続行！サンダージャイアントでメンタルプロテクターに攻撃！『ヴェイパー・スパーク』！」

サンダージャイアントがメンタルプロテクターに雷を落として破壊した

「この瞬間私の場のサイキック族が戦闘で破壊された事により罠カードオープン『念導力』を発動。サンダージャイアントを破壊して、その攻撃力分私はライフを回復する」

メンタルプロテクターの思念がサンダージャイアントを包み込んで破壊し、その欠片がディヴァインの下へ向かって行ってライフを回復した

ディヴァインＬＰ４０００→６４００

「っ・・・カードガンナーでダイレクトアタック！」

カードガンナーがディヴァインに砲撃を開始してダメージを与えた

ディヴァインＬＰ６４００→４５００

「・君はまだ力を使ってないようだね・どうしたんだい？」

そう。まだこのデュエルでキラは１度も精霊の力を使っていなかった。

「（・・・どうしても傷つけるためには使いたくない・）このエンドフェイズ、カードガンナーの攻撃力が戻る。ターンエンド」

カードガンナー
ＡＴＫ１９００→４００

「答えないか：私のターン、ドロー。私は『サイコ・ウォールド』を召喚」

サイコ・ウォールド
ＡＴＫ１９００

「さらに手札からマジックカード『最古式念導』を発動。サイキック族が表側表示で存在する場合、フィールド場のカードを1枚破壊する。よってカードガンナーを破壊！」

最古式念導の効果によってカードガンナーが破壊された

「だが、俺は１０００ポイントのダメージを受ける」

ディヴァインＬＰ４５００→３５００

「何でわざわざライフを削ってまで…」

確かにそうだ。ライフを削ってまでモンスターを破壊し、ダイレクトアタックをするより、そのまま攻撃をした方がライフを削らずにダメージは少し少ないが与えられたはずだ

「フフ…君を本気にさせたいんでね…あまりライフの差が有りすぎると諦めるんじゃないかと思ってね」

「どんなにピンチな状況でも諦めないさ！カードガンナーの効果！カードガンナーが破壊され墓地に送られた時、自分はデッキから1枚ドローする」

「君のデュエルの本気を見たいんじゃない…力の本気を見たいのさ！サイコ・ウォールドでダイレクトアタック！」

サイコ・ウォールドの触覚の部分から雷を放ち、キラの体を貫いた

「ぐっ・・・あぁ・」

キラＬＰ４０００→２１００

胸に手を当てながら膝を着いてしまった。アキより力は劣っているが、キラは傷を負っているため予想以上のダメージだった

「もうダウンかい？私はこれでターンエンド」

キラはゆっくりと立ち上がりデュエルディスクを構え、自分のターンを始めた

「俺のターン！ドロー！」

キラは自分の手札を確認するが、血を流しすぎたせいで手札が霞ん

で見えた。だが、やっと確認出来たが、今の最高の手は通常召喚をしない事だった

「俺はカードを2枚セットしてターンエンド」

「私のターン」

ディヴァインがデッキからカードを引いたとき、入り口の扉が開いてアキが入ってきた

「おや：アキ、彼の様態は？」

「はい、龍亞ならただ眠っているようです。命に別状は無いです」

「そうか。なら良かったよ。彼を失っては龍可を説得出来ないからね」

「命の別状って・・・お前！龍亞に何かしたのか！？」

キラは２人の会話を聞いて龍亞の身に何かあったのではと思い感情が高ぶった

「ちょっと荒っぽいテストをしたまでたよ。さぁ、続きをやろうか。私は『メンタルマスター』を召喚。そして、レベル４のサイコ・ウォールドにレベル１のメンタルマスターをチューニング！心の深淵に燃え上がる我が憎しみの炎よ、この黒き世界に降りて蹂躙せよ！シンクロ召喚、現れよ『マジカル・アンドロイド』」

４＋１＝５

マジカル・アンドロイド
ＡＴＫ２４００

「この攻撃が決まれば私の勝ちかな。マジカル・アンドロイドでダイレクトアタック！」

マジカル・アンドロイドが杖を構え光の球を放ってきた

「罠カードオープン！『ヒーロー見参』を発動！相手が攻撃を宣言した時、自分の手札を相手はランダムに選択する。それがモンスターだった場合特殊召喚出来る！俺の手札は1枚、よって必然的にこのカードになる！『ヒーロー・キッズ』を特殊召喚！さらに、ヒーロー・キッズが特殊召喚に成功した時、デッキから同名のカードを任意の枚数特殊召喚する」

キラの場にヒーロー・キッズが3体守備表示で並んだ

ヒーロー・キッズ
ＤＥＦ６００

ヒーロー・キッズ
ＤＥＦ６００

ヒーロー・キッズ
ＤＥＦ６００

「これはこれは……バトルは続行！マジカル・アンドロイドでヒーロー・キッズに攻撃！」

マジカル・アンドロイドの攻撃によってヒーロー・キッズが1体破壊された

破壊された衝撃がまたキラを襲った

「くっ……ゴメン…ヒーロー・キッズ」

破壊され墓地に送られたヒーロー・キッズに対して謝罪を述べたら、ヒーロー・キッズは「今から反撃だ！」と言っていた

「追い討ちをかけるか…マジックカード「火炎地獄」を2枚発動！私のライフは１０００ポイントのダメージを受けるが、君は２０００ポイントのダメージだ」

キラの周りから巨大な炎が燃え盛り、大きな悲鳴が轟いた

「うわぁぁぁーー！！」

キラＬＰ２１００→１００
ディヴァインＬＰ３５００→２５００

「ディヴァイン！やりすぎです！」

ここで、あまりに酷いと思ったのでアキが口を挟んだ

「ピンチの時に力を発揮するかもしれないからさ。これくらいは当然さ」

炎が消えると、ぐったりとしているキラの姿だった

「アキさん‥俺は‥大丈夫‥です‥‥」

「でも・・」

「アキ、キラは大丈夫と言っているのだから大丈夫だろう」

アキは前回のデュエルの時もこんな感じだと思い出し、心配だった

「このエンドフェイズ、マジカル・アンドロイドの効果により、私はライフを６００ポイント回復する。君の力を見ずに終わりたくはないんだから力を出しておくれよ。ターンエンド」

ディヴァインＬＰ２５００→３１００

「こんなこと・・で・・力を・・使いたくない！俺の・・ターン」

引いたカードを確認すると『ラスト・アタック』だった。これではまだ勝つためには不十分だ。ボロボロの体で次の賭けに出た

「リバース：カードオー：プン：『ホープ・オブ・フィフス』を：発動。墓地の：Ｅ・ＨＥＲＯ５体：をデッキに戻して：シャッフルし：カードを２枚ドローする」

墓地のサンダー・ジャイアント、フェザーマン、スパークマン、クレイマン、そして、カードガンナーの効果で墓地に送った『Ｅ・ＨＥＲＯ　フラッシュ』をデッキに戻してシャッフルしカードを２枚ドローした。そして、引いたカード２枚を確認すると勝利の笑みを浮かべた

「いったい何がおかしいのかい？」

「今から：見せるよ：俺は：ヒーロー・キッズ：２体をリリース：して：『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』を：アドバンス召喚：」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス
ＡＴＫ２５００

「そして…マジック……」

この時、キラの中で何かが途切れた……そう、血を流しすぎて、さらにダメージも多大であるため、その場に倒れ込み、気絶した

「「キラ！」」

あまりにも突然であるためアキとディヴァインは動揺し、倒れ込んだキラに駆け寄り、アキはキラの異常を確認した

「ディヴァイン！彼、血を流してます！」

「それはマズい！おい！救護班！」

ディヴァインは即座に携帯を出して救護班を呼び寄せた

ふと、ディヴァインはキラの最後の笑みが気になり、手札を見てみた。手札にあるのは『ラスト・アタック』と『Ｈ－ヒートハート』だった

「（あのまま行けば、まず彼は『Ｈ－ヒートハート』でゼクスの攻撃力を５００ポイントアップさせる…そして『ラスト・アタック』で攻撃力を倍にして攻撃してくる…）…私の負けだったのか…」

そう、ヒートハートでゼクスの攻撃力は３０００になる。そして、ラスト・アタックの発動したらゼクスの攻撃力が６０００になる。ゼクスで２４００のマジカル・アンドロイドに攻撃していれば、確実にディヴァインの負けだった。だが、それは出来なかったのだ

その後、すぐに救護班が到着して、キラは運ばれた。アキは心配だったが、ディヴァインが大事な会議があると言って一緒に会議室に向かわされたのだった

この日、アルカディアムーブメントに来たのはキラ達だけではなかった。そして、この後、あんな事件が起こるなど誰も予想してなかった

飛んで火にいる夏の虫達（後書き）

そういえば新しいパックがやっと出ましたね！

ですが、まだ買ってません！お金がヤバいですから（笑）

お金がヤバいとか言いつつも、最近ウルトラマンの映画を借りた遊です↑おい

ちなみにネクストです↑聞いてない

早くバイト代を・プリーズ！！

崩壊するアルカディアムーブメント（前書き）

最近ＤＳのワールドチャンピオンシップ２０１０を買ったのですが、ジャックとクロウが強すぎ・・・

初期デッキでは厳しすぎますよｏｒｚ

ＢＦデッキ（未完成）で連戦デュエルをしたら、何回かジャックで敗北（笑）

さすがは元キング：現キングはより強い↑

あと、詰めデュエルは悩みました：状況を制作した人が凄いと思いましたよ

崩壊するアルカディアムーブメント

それは突然起きた…物凄い地響きが起きて、人が立っていられない程の揺れだった

「な…何だ!?」

「えらくデカいぞ!」

氷室は扉を叩いて誰かいないかと叫ぶが、誰も来なかった

そして地響きが止み、落ち着いたと思ったら、また地響きが起きた。
今度は地面に伏せて身の安全を優先した

地響きが止むのを確認すると2人はゆっくりと立ち上がった

「じいさん、大丈夫か？」

「あぁ、なんともない。何だったんだい？さっきの余震かな？」

「分からんが俺達にとってはありがたい事だぜ」

氷室は扉に近づいた。地響きのせいで、いろんな物が崩れたが、そのせいで扉が少し歪んでいた。２、３回体当たりをすると扉が開いたのだった

「でかしたぞ氷室ちゃん！」

「じいさん、とにかく龍亞と龍可とキラを探すんだ」

「おぉう」

2人は今いる階の扉という扉を全部開けていったが龍可と龍亞とキラはどこにもいなかった

「氷室ちゃん！そっちはどうだった！？」

「ダメだ‥上に行くぞ！」

一刻も早く3人を見つけるため、急いで階段を上った

だが、次の階‥次の階‥次の階と上へ上へと登っていったが全然見つからなかった

「クソッ‥‥いったい何階まであるんだ‥」

「ハァハァ‥氷室ちゃん‥わしゃあ‥限界が‥ハァ‥近いぞ‥」

「じいさんはゆっくりで良い！とにかく探すぞ！」

さすがに年寄りのせいか、矢薙のじいさんにとって長い階段はキツかった。氷室はゆっくりで良いと言って階段をダッシュで駆け上った

何階か上がった時に扉を開けようとしたが、鍵が掛かっているため開かなかった

「鍵が掛かってるぞ・・」

「多分ここなんじゃよ」

「じいさんちょっと下がってろ」

矢薙のじいさんに下がるよう指示をすると、扉に向かって体当たりをした。結構頑丈であったため、7回目辺りでようやく開いた。そ

の部屋には龍可がいた

「龍可ちゃん！」

「矢薙のおじいちゃん！」

「無事だったか！キラと龍亞はどこだ！？」

「龍亞ならそこに」

龍可がいた部屋の隣の部屋に龍亞はいた。ガラス越しだったため、龍亞の姿が確認出来たが、龍亞は眠っていた

「龍亞！」

氷室は周りの物を見渡し、ソファーを掴んで持ち上げた

「龍可、じいさん退いてろ！」

ソファーをガラスに向かって振り降ろすと、ガラスが割れた。割れた音によって龍亞は目を覚ました

「龍亞、しっかりしろ」

「‥う‥ん‥あれ？氷室のおっちゃん」

「大丈夫か？怪我はないか？」

「うん‥俺は‥そうか！ディヴァインとのデュエルに負けて‥あ！そうだ！龍可は！？」

「目の前にいるじゃない」

「あ～龍可！無事だったんだな！？」

「もぉ～それはこっちの台詞よ・・」

やはり龍可は龍亞を。龍亞は龍可が心配だった

「でも、何でこんな所に？」

「分からんがここに居ては危険だ。それとキラは一緒じゃないのか？」

「え？氷室のおっちゃん達と一緒じゃなかったの？」

「んじゃあ他の部屋だな・急いで探すぞ！」

部屋を出て、また扉という扉を開け、また階段を上っていった

その途中で龍可の痣が疼きだした。何事かと思い何かを感じ取った

「どうしたの龍可？」

「誰か：デュエルしてる（このデッキ：アキさん！）」

「待て龍可！はぐれたら危険だ！」

龍可は氷室の言うことを無視して階段を駆け上がりアキのいる方へと急いだ。はぐれるのは危険なため、氷室達も後を追った

何か物凄い音がしたため、キラは目を覚ました。自分の周りを見渡すと、またどこかの部屋にいると推測した。ベッドから降りようとすると、すぐに立ち眩みがしてその場に膝を着いた

「くっ‥‥血を‥流しすぎたかな‥」

傷口を確認すると、傷口は少し雑だが縫ってあり、包帯も新しい物だった。壁に手をあてて立ち上がった時に、腕の痣が疼きだした

「アキさん?‥‥この感じ、ダークシグナーとか!」

今の状態で走るのは困難なため、壁に手をあてながらゆっくりとアキのいる方へと急いだ

広い廊下に出た時だった。下の階から声が聞こえたので手すりに捕まり、下の階に目をやると龍可達がいた

声をかけようとした時に、痣から激痛が走った。痣から光の球体が現れ、キラを包んだ

「何だ…これ？」

自分の身を包んでいる球体を見て、そして龍可達の方を見ると龍可も同じように赤い球体が龍可達を包んでいた

そして、いきなり下から沢山の光が外に向かって集まりだした。ドーンと何かが落ちる音がして、その方向の窓へと目を向けると、普通は外の風景が見えるはずだが、ただ真っ暗だった

僅かに窓の隅の方から白いのが見えてくると、それが広がっていき、最後にはそれが何なのか分かった

それは目だった。この高層ビルに届く程の巨大なモンスター：『地縛神　Ｃｃａｒａｙｈｕａ（コカライア）』が現れたのだった

「龍可！何があったんだ！？」

龍可達のいる方に叫ぶと、皆上を向いてキラに気づいた

「キラ！そこにいたのか！」

「今アキさんがダークシグナーとデュエルしてるの！」

「やっぱり・・」

キラの感じた通り、アキはダークシグナーとデュエルしていた。しかもすぐ真下で

そして突然上から叫び声が響いた

「うわぁぁぁ～！！」

上から瓦礫などが沢山落ちてくる中、ディヴァインまで一緒に落ちてきた。その光景は驚きだった。ディヴァインの体は沢山の傷だらけだった

「ディヴァイン！！」

アキは思わず叫んだがディヴァインの姿は遠くなっていった

「キラ！十六夜！早く逃げろ！」

「俺に構わず先に行ってください！」

「分かった！キラも早く戻って来いよ！」

氷室は、龍亞と龍可を抱えて矢薙のじいさんと一緒に階段を下りて、出口へと向かった

キラも急いで下の階に下りると、アキとデュエルしていたダークシグナーはいなくて、膝を着いて放心状態のアキがいた。アキの上から大きな瓦礫が落ちて来た。キラはそれに気づくと、目はオッドアイになり、すぐに決闘盤を起動させてモンスターを召喚した

「ゼクス！頼む！」

アキを守るようにゼクスは落ちてくる瓦礫を全て受け止めた

「アキさん！しっかりしてください！」

アキに近づき肩を掴んで揺らすが、ディヴァインがいなくなったのが余程のショックだったせいで反応が無かった

また突然、下の階からこっちに向かってくる誰かの足音と声が聞こえてきた

「誰か！誰かいないのか！？」

キラは今いる階にたどり着いた人物を見ると同時に力を解除した。
そしてそこに居るのはジャック・アトラスだった

「あなたは：ジャック・アトラス！」

「お前は確か：遊城キラ！それに十六夜！」

「ジャック、何故あなたがここに？」

「その話は後だ！ここを出るぞ！」

ジャックがアキを抱えて階段へと向かった。キラも後を追うように急ごうとするが、まだフラフラであるため追い付けなかった。ジャックがそれに気付いたのか、戻ってきた

「どうした?早くしろ!」

「スミマセン…」

やはり歩くだけでもキツいため、ただ謝って先に進むしかなかったが、それでも遅かった

「えぇい!まどろっこしい!」

さすがにキラが怪我をしているのに気付いたのか、キラも抱えられて、ジャックは急いだ

アルカディアムーブメントを出た時には、アキとキラは気を失っていた

ジャック近くに停めていたDホイールに乗ると、病院へと向かった

この日、たくさんの人が消えた事、そしてアルカディィアムーブメント本社の周りが炎に包まれ、いろんな建物が崩壊したなどと、物凄い事件になった

だが、この事件はただのダークシグナーとの戦いの始まりにすぎなかった

崩壊するアルカディィアムーブメント（後書き）

この話で氷室と矢薙のじいさんは多分最後だと思います

お疲れ様でした↑

真相（前書き）

遅い更新になってスミマセン

どう続けようか迷ってました

説明が多い話になってしまいました・・

真相

キラとアキは別々の治療室に運ばれ、キラは傷を縫い直され、輸血を行っていた

時が何日経過したかは分からない。だが、この病院内で物凄い騒音が起こった。その騒音でキラは目覚めた

「（あれ・・・ここは・）」

自分が病院にいることに気付いた。アルカディアムーブメントを出る前にジャックに運ばれてる途中で気を失ったのを思い出した

「何か・情けないな・」

この世界に来て龍亞と龍可の家でお世話になっているが、精霊の声

を聴く事が出来る事について2人は知っているが、精霊の力の事はまだ知らない。この力を知った時恐れられていつ追い出されるか分からない。

だが、龍可と龍亞がそんな事をするはずはないとは思っているものの、自分の経験上恐れられてばっかりだった。ただ、父・十代の友人達だけは友だちのように接してくれた

だけど、恐れているのはキラ自身だった。龍可達に知られるのが怖かったのだ

そして始まったフォーチュンカップ。成り行きで自分も出ることになったが、この大会でいろんな人に出会えた。皆から信頼されてる遊星。皆から恐れられているアキ。遊星のライバルのジャック。そして氷室と天兵と矢薙のじいさんだ

1回戦はギリギリだったがなんとか勝利。だが、準決勝で自分と同じ立場であるアキ・・・魔女だ魔女だと、差別され続けて歪んでしまった心を正せると思っていたが、負けてしまった

なおかつ怪我までした。アキの心を遊星が開いたが、失敗とまでは言えないがダメだった

フォーチュンカップが終わった後はダークシグナーだ。このデュエルでキラは重傷を負って遊星達に迷惑をかけてしまった

そして、アルカディアムーブメント…ダークシグナーを一緒に倒すと約束したが、それは嘘だった。龍可とキラをアルカディアムーブメントに介入させるためにアルカディアムーブメントに招いただけだった。ディヴァインとのデュエルで勝利目前と思いきや、傷がさらに悪化してしまい中断してしまった

アルカディアムーブメント崩壊の時も脱出しようとするが、結局はジャックに運ばれた

この世界に来てただ怪我をしてばっかりだ。そしてこの世界に来た意味は何なのだと思った

だが、答えは分からない。ただ、右腕の痣が原因なのは確かだ。アキとはまた別だが自分の痣が憎かった

痣の部分を強く掴みながら自己嫌悪していた

っとそんな事を思いこんでいるとまた騒音がした。気になったので騒音がする部屋へと向かった

だんだんと音がする方に向かうと治療室の中にアキと遊星、そしてジャックと龍可と龍亞と見知らぬ人が2人いた

「嫌だ！パパを傷つけたくない！」

どうやらアキと遊星がデュエルをしていた。アキのサイコデュエルでカードが実体化して遊星達を襲っていた時、見知らぬ男性が遊星とアキの間にいて何かを訴えていた時、アキが傷つけたくないと言った

どうやら見知らぬ2人はアキの父親と母親らしい。アキはこの2人を嫌悪していたが、今和解したようだった

デュエルの決着は遊星が勝利した。ディヴァイン亡き今、アキの居場所は無かったと思ったが、本当の居場所を取り戻した瞬間だった

アキが居場所を取り戻した事に皆安心し喜んだ。決着がつくと即座に龍亞と龍可が遊星達の所に近づいた

「やっぱりあの印は仲間の絆なんだよ！俺には無いけどね・・」

「皆、この絆に引き寄せられる。そして仲間になっていく。忌むべき印じゃない」

「でも・・でも私にはかつて信じた仲間がいた・・・その想いはまだ私の心にある・・」

アキの言っている仲間はやはりディヴァイン達の事だ。やはり想いは消えるものではなかった

「俺にもそんな仲間がいた…やつの想いと俺の想いが擦れ違い、心を削っていく。今は見えないその想いがどんな決着を突きつけるのかは…だが、かつて仲間と呼んだ同士ならその覚悟を背負い俺は進んでいく」

遊星の言葉を聞くと遊星にも何か合ったらしい。だが、遊星はそれに向かう覚悟を決めていた

キラが病室に入った時、ジャックがキラに気づいた

「もう平気なのか？」

「はい、助けていただきありがとうございます」

「ふん…ジャック・アトラスとして当然の事をしたまでだ」

ちょっとツンとしているがジャックが助けた事はありがたかった

ジャックに何故アルカディアムーブメントの中にいたのか聞いてみたが、関係無いと冷たく言われたのだった

「シグナーの皆さん、全員お揃いのようですね。ゴドウィン長官がお呼びです」

病室の入口から声がすると、全員が振り向いたらジャックの秘書の深影がいた

「それとアキさん、龍可さん、キラさんは1度治安維持局へ来てください。車を用意してあるのでこちらへどうぞ」

深影が案内するかのように病室から出て行った。ジャックは鼻で笑って後に着いていった

少し沈黙したものの、龍可と龍亞と遊星がキラの所に向かってきた

「気がついたんだね。もう大丈夫なの？」

「うん、大丈夫だよ。それよりお呼びみたいだから早く行こう」

自分の体調の話題を逸らすように話を変えたが、龍可はまた同じやりとりだと思っていた

キラ達４人も深影とジャックの後を追って病室から出た

アキは両親と少し話をしてから遅れてやってきて全員車に乗って治安維持局へと向かった

治安維持局に到着すると遊星も一緒に行くと言って車の中にジャックと龍亞を残して５人は中に入り、モニタールームへと案内された

「これを観てください」

深影が話し出すと同時に人物リストがモニターに表示された

そして、ナンバー１０９の少年の所で止まるとある実験をしている
映像が映し出された

映し出された映像に４人は驚愕だった。中でもアキが１番驚いていた

少年がモルモットのようにたくさんの人体実験を行われている映像
だったからだ

「これは、先日半壊したアルカディアムーブメント本部ビルから発
見された物です。アルカディアムーブメントによって攫われた子供
達と施設内で行われていた人体実験の関する詳細が記されています。
この件は治安維持局も調査を続けてきましたが、これを裏付ける証
拠です。ディヴァインはより能力の高い者をより選り、デュエル以
外でも能力を発揮できるように改造して兵士として紛争地域に送り
込む計画を建てていたようです。アキさん、あなたもその中に」

深影の話が余程のショックなのかアキは表情を曇らせるとモニタールームから逃げるように出て行った

「目を背けても耳を塞いでも事実は変わらないわ！ディヴァインはあなたの力を利用しようとしていただけなのよ！アキさん！」

深影は聞いてくれないか…と思うように溜め息をついた。遊星も聞くだけ聞いてアキを追っていった

「ところで俺達を呼んだ理由は何ですか？」

アキにディヴァインがやっていた事を教えるのは分かったがキラと龍可を呼んだ理由を聞いてみた

「あなた達もアルカディアムーブメントの一員だから話しておこうと思って…」

「え?私達アルカディアムーブメントじゃないわよ」

「でも、このリストに2人共記されているわ」

リストの1番最後の所を提示するとキラと龍可の名前が載っていた

「これに名前が載っていたとしても俺達はアルカディアムーブメントじゃありません。第一俺にそんな能力はありません」

「そう…それならごめんなさい。この話は終わりにして早く長官の所に行きましょう」

モニタールームの電源を落とすと部屋から出て行った。深影の後ろに着いて歩く時、龍可が小声で話しかけてきた

「ねぇ、何で精霊の事を黙ってたの?」

「あんまり話したくないんだ…自分の事…」

悲しい表情で言うキラにこれ以上は聞けないと思って龍可も黙った

治安維持局の入口の所で遊星とアキはいた。アキは先程のような落ち込みはなく、寧ろ安心しているようにも見えた。どうやら遊星が落ち着かせたようだった

また車に乗り込むと何故かジャックと龍亞が言い争いをしていたが、出発するとだんまりだった

言い争いをしていた理由を聞くとジャックのポケットの中にあった眼鏡を龍亞が見つけて触ろうとするとジャックが怒鳴って、何で触ったらいけないのか聞くが「お前には関係無い」と言われたが龍亞はしつこく聞いてくるので言い争いになったのだった

しばらく時間が経つとゴドウィン邸に着いた。ゴドウィン邸は思わず声が出そうなくらい大きな屋敷だった

「はぁ～でっかいお屋敷だな～」

車から全員降りると龍亞は思わずそう言っていた

屋敷の扉が開くとゴドウィンが現れた

「お待ちしてましたよ。ようこそシグナーの諸君、随分と回り道をしてしまいましたが、やっとこうして皆さんをお迎え出来たことを喜ばしく思います」

「ふん：どこまでも胡散臭い男だな」

ゴドウィンが深々と頭を下げるとジャックが鼻で笑った

「なあなあ、俺達にようって何だよ?」

「君を招待した覚えは無いが」

龍亞は招待してないと言うように冷たく見下ろし言い放った

「えぇ・・・そんな固いことを言わないでさ」

「シグナーでない者に用はありません。お引き取りを願いましょう」

「龍亞が一緒じゃないと私は行かないわ！」

龍可が龍亞の腕を掴んでそう言うと、ゴドウィンは仕方のないように溜め息を吐くと一緒に来るのを許可した

「では、早速邸内へ案内しましょう。こちらへどうぞ」

ゴドウィンに案内されるがままに皆着いていくとエレベーターに乗り、地下へと下りていった

そして、地下に到着すると古い建物のような場所に着いて、ゴドウィンが先行して案内した

「キングは1度お連れしたことがありましたね」

「あれは他人だ。俺はもうキングではない」

「ならばこれからは、敢えてジャック・アトラスと呼ばせてもらいましょう」

向かう先に大きな扉があり、それを抜けると真っ暗な部屋だった

そして灯りがついたと思ったら地面に赤き竜の痣が現れ、目の前に赤き竜のビジョン内で見た建物だった

「こ‥これは赤き竜の痣！」

「そう、それは星の民の伝説として語り継がれてきたシグナーの証」

すると遊星、ジャック、アキ、龍可の４人の痣が光り出した

「あの時、俺達が誇りを賭けてデュエルをした」

「そしてその時、この赤き竜が現れた」

「そう、あの時君達はこの赤き竜に導かれてこのネオ童実野シティへとやって来た」

「赤き竜に導かれただと？あれはお前が仕組んだはずだ！」

「俺達は俺達の因縁に決着をつけたまで！赤き竜など関係無い！」

遊星とジャックはお互いにライバルと認め合い、それに決着をつけたと言い、赤き竜は関係無いと言い放った

「だが、それが赤き竜によって導き出された運命だったのです。私自身も赤き竜の導きに従ってるまでです」

「信じろと言うのか？そんな話を」

「信じるか信じないかはあなた達次第です。ですが、あなた達シグナーである限り、その宿命から逃れる事は出来ません。決して！」

「シグナーとしての宿命：周りの人間から恐れられ忌み嫌われてきた私の力は私の中をくすぶる怒りの炎となってどんどん火出していった：」

「だが、その力が無ければあなた達は出会う事は無かったでしょう。その痣は赤き竜によって選ばれた人にだけ与えられた印。シグナーとしての宿命が君達1人1人の運命を結び付け、導いているのです。それは龍可さん、キラ、あなた達も同じですよ」

龍可には思い当たる節があったのだが、キラには思い当たる事が無かった

「目を背ける事は出来ないでしょう。君達は同じ痣を持つ者達、伝説のシグナーの生まれ変わりなのです。好むと好まざるに関わらず。運命に翻弄されながら、こうして巡り会うよう数千年前から約束されていたのです」

皆、ゴドウィンの話に聞き入っていて痣の光が消えた時、龍亞が気まずそうに話し出した

「ねぇ：肝心な事を2つ忘れてない？1つはキラの痣の事、もう1つはシグナーは確か5人いるはずじゃなかった?」

「順序良く話しましょう。もう1人はとっくに目覚めています」

最後の1人がとっくに目覚めていることには皆ビックリだった

「君達が本当に瀕して来たとき、その者は赤き竜と一緒に現れるでしょう」

「どういう事だ?」

「今に分かります。そして彼もシグナーですが、赤き竜の痣を持つシグナーではありません」

それについては遊星とキラと龍亞と龍可は察しがついていたため驚きはしなかったが、ジャックとアキは驚いていた

「シグナーというのは他にもたくさんいるのか?」

「それは私にも分かりません。ですが、１つ言えるのは、彼はあなた達の助けになります」

「ふん：こいつの助けなどいらん」

ジャックにまた冷たくされたが、キラはただ苦笑するだけだった

ゴドウィンが指をパチンと鳴らすと赤き竜の建物が変わってナスカの地上絵に変わった

「数千年前、赤き竜がこの地に降臨し、悪の化身共を大地に封じました。その封印こそナスカの地上絵と呼ばれる物です。その真実は我々以外にの者達には、語り継がれる事が決して許されぬ禁断の歴史とされました。そして現在、地上絵がナスカの平原から忽然と消える怪奇現象が頻発しています」

ナスカの地上絵のほとんどが青く光って消えていった

「これは全てダークシグナーによる仕業です。彼らは君達同様にダークシグナーである痣を持っています」

遊星、ジャック、キラ、アキはそれぞれダークシグナーとデュエルしたことを思い出した

「やつらが作り出す特殊なフィールドからは決して逃れる事は出来ない。そして、その攻撃は実体となって襲いかかってくる。そしてあのダークシンクロモンスター…ダークチューナーによりレベルがマイナスとなるモンスターをシンクロ召喚するダークシンクロ。これまでの常識を覆すようなデュエルだ」

「そう、我々のデュエルが生命に基づく物なら、彼らの力は冥府の力と呼ぶに相応しい。御存知の通り、ダークシグナーが現れる時、必ず地上絵も現れる。彼らの出現により、ネオ童実野シティ全体が存亡の危機に晒されています」

「あぁ：俺ははっきりと見てきた：サテライトで多くの人々が奴らの犠牲になっている所を」

遊星は1度サテライトに戻った時、ダークシグナーとデュエルをしていた。キラと龍可が夜中に感じたのはその時のだ

「お前の言う生贄としてな！」

「すでに彼等の行動は我等の予想の範囲を越えていると言って良いでしょう。現にこの地上絵はシティにも現れ、多くの犠牲者が出ました」

ナスカの地上絵から場面が変わって、今度はネオ童実野シティのアルカディアムーブメントの上空の映像になった

「地上絵から現れたモンスターによってシティにいた数百人の人々が現在行方不明になっています」

アルカディアムーブメントのビルの近くに2体の地縛神・アスラピスクとコカライアが出現した

この2体のモンスターによってアルカディアムーブメント崩壊の事件：そして数百人の行方不明になったのだ

「あれも：地縛神……」

「そう、地縛神は人々の魂を生贄にする事で召喚されるダークシグナーの神」

「生贄になった人々はどうなった!?」

「私にもそれは分かりません。事態は一刻を争います。手を拱いていればシティとサテライト：全ての住民達がダークシグナーの手に落ち、ネオ童実野シティは崩壊してしまうでしょう。君達が見たビジョンのように」

その後も話は続き、ダークシグナーは闇、そしてシグナー光という対立する関係であり、避けられない戦いなのだ

そして本当のダークシグナーは全員死人であると、そして地縛神は恐ろしい能力を持つ事、皆驚く事ばかりだった

「運命は動き出しています。もう後戻りは出来ません。ダークシグナーを倒すか、世界が滅びるか・・・それは君達の手に委ねられています。自分達がどうすべきなのか良くお考え下さい。ただし、あまり時間はありませんがね」

映像が終わり、元の赤き竜の建物と痣が現れた

そしてゴドウィンが部屋を出て行く時、キラは今しか聞けないと思って思う事を口に出した

「ちょっと待ってください！俺はまだ聞きたい事があります！何であなたは俺がこの世界に来ることを知っていたのですか！？」

この世界という事にジャックとアキは疑問に思った。ゴドウィンが立ち止まると「それが知りたいなら着いてきて下さい」と言ってその場を後にした

皆少し考えとから地下から地上へと戻った

キラはどうしてもこの世界に来た理由を聞きたいためゴドウィンの所に向かおうとしたら龍可と龍亞が着いて来ようとしたが、「来ないでくれ」と拒絶した

ゴドウィンに案内されたのは普通の部屋だった

ソファーに座るように促されて、座ると話し出した

「さて、まずは先に君に言っておきます。先日約束した件に関しては大丈夫です。君がこの世界で暮らす事の最低限の事はしました」

「そんな事は今はどうでも良いです！何であなたは俺を知っているんですか！？」

「少し落ち着いて下さい。君が来ることは星の民によって記されていました」

簡単に纏めすぎだと思ったが、他に答えが無いのだとも思った

「そして、本来君は存在してません。この世界では存在してはいけないのですよ」

存在してはいけないと言われた時、ショックな表情だが、考えればそうだと思った

「・・・俺が・過去から来たからこの世界は本当は無いって事ですよね・・・・」

「そうです。我々にとっては今は現在、キラにとっては過去が現在です。君が過去から居なくなったせいでこの世界は無かったはずなのです」

簡単な事を言えば、自分、息子、孫と存在しているならば自分が消えれば息子、そして孫が生まれる事は無く、息子と孫の存在は無かったという事だ

「でも、あなた達にとっての今は存在しています」

「そう、それはキラが持つ痣のおかげです」

ゴドウィンがキラの痣を指してそう言った

「赤き竜の痣を持つシグナー達はそれぞれシグナーの象徴であるドラゴンのカードがあります。遊星には『スターダスト・ドラゴン』ジャックには『レッド・デーモンズ・ドラゴン』アキさんには『ブラック・ローズ・ドラゴン』龍可さんには『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』・・・ですがキラの象徴となるカードはドラゴンではありません」

一呼吸するとまた口を開いた

「その痣のからして融合系統でしょう。その痣がこの世界と融合してキラとこの世界が存在しているのです。あなたの持つ融合系統のカードを全てお見せ下さい」

キラは言われた通り融合に関する魔法カードを見せた。その中で1枚のカードでゴドウィンは目を止めた

「ほぉ：これは珍しいカードをお持ちのようですね：私は初めて見ましたよ」

ゴドウィンが目を止めたカードは『超融合』だった

「このカードを使った時、突然痣が出て来て渦の中に吸い込まれてこの世界に来ました」

「それは17年前に起きたゼロリバースと次元が融合してあなたは導かれたのでしょう」

「ゼロ：リバース？」

ゼロリバースとは１７年前にＭＩＤＳがモーメントを制御システムが不完全なまま作動させたことで起きた大事件だ。ゼロリバースで起きた巨大なエネルギーによって『超融合』が反応し、無理矢理次元の扉をこじ開けて、キラが来ることになったのだ

そして、ゼロリバースに遊星の父、そしてゴドウィンが関わっている事もキラは教えてもらった

「んじゃあ過去に：俺がいた世界に帰れるんですか？」

「多分：としか言えません。巨大なエネルギーを発生させないと過去の世界の次元の扉が開きませんからね」

多分と言ってもキラにとっては大きな情報だった。巨大なエネルギーと超融合があれば過去に帰れるのだと

だが、それはいつ帰れるのかは全く分からない事だ

しばらくすると、キラは今回いつ助けになるかは分からないとゴドウィンは言ったため、キラはゴドウィン邸にいる事になった

真相（後書き）

多少キラに関しては無理矢理な設定だと思いましたが辻褄は合うと思いこんな設定にしました

この次の話からは一気に話を飛ばしてダークシグナー終盤にすると思います

太陽が沈んだ（前書き）

話をかなり飛ばしたせいで訳が分からなくなってしまったかもしれません

何故か連投になってしまいました（笑）

太陽が沈んだ

遊星達は皆、それぞれの戦う意味を考え、決断が出たときに事件は起きた

キラ以外の全員がまた治安維持局に呼び出され、サテライトの監視映像を行っている部屋に招かれモニターに映し出されているのは黒い霧に包まれたサテライトだった。人が全くといっていない…なおかつ人の気配すら無いような場所だった

「これがサテライト……いつも霧が深いの？」

「いや…こんなはずは…」

サテライトから帰ってきたばかりの遊星は戸惑いの表情を浮かべていた

「おい、いったい何があった!?」

「詳細は不明ですが、サテライト最深部に・何か異常が発生したようです」

深影がサテライトで何があったのかデータで捜索してはいるが、あまり良い情報は無かったが、誰が原因であるのかは察しがついていた

「サテライトのセキュリティとは通信が繋がりません・この映像もいつまで保つか・・・」

しばらく映し出されていた映像が全て遮断されてしまった

すぐにサテライトに向かうと言ってゴドウィンに連絡を取ると屋上へと来るように言われた

先にゴドウィンは屋上にいてヘリを待っている様子だった

「サテライトを覆った霧は旧モーメント跡地が発生源のようです」

「旧モーメント？何なの？」

「やはり、運命が導いているのでしょう。旧モーメントの開発者：不動博士の息子」

「開発者の息子：遊星が！？」

アキと龍可と龍亞は知らなかったのか驚いていた

「運命の歯車は大きく旋回し始めています。あなた達の使命はダークシグナーを倒し、旧モーメントを正しい方向へと回転させる事なのです」

ゴドウィンが言葉を言い終わった時にヘリが到着して全員がヘリに乗ろうとした時、遊星がそれを止めた

「どうしたの遊星？」

「ゴドウィン、１つ約束してほしいことがある」

「何ですか？」

「俺達がダークシグナーを倒し、全てを元に戻す事が出来たなら、ダイダロスブリッジを繋ぐと約束してほしい」

ダイダロスブリッジとはサテライトとシティを繋ぐサテライトの住民にとっては希望の橋だったが完成出来なかった橋の事だ

ゴドウィンは少し考える仕草をして目を閉じるが、目を開けて口を開いた

「よろしい、約束しましょう」

それだけ聞くと遊星達はヘリに乗り込んでサテライトへと向かった

キラはゴドウィン邸の屋根に登って外の景色を眺めていて先程までの話の事を考えていた

ゴドウィンが言っていた話では今日と言う日に太陽が沈むまでに４つの制御装置を作動させなければならない

作動させるには遊星達4人が持つシグナーの竜のカードが鍵らしい。
だから、キラが行く必要はあまり無かったのだ

時間はゆっくりとだが段々と過ぎていって、太陽はもう天高い位置
まであった。遊星達は制御装置の作動に成功したのか気になった時、
サテライトのあちこちで何かの形をした青い光が見えた

「どうやら始まったようですね」

下から声がしたと思ったらゴドウィンが治安維持局から帰ってきて
いた

「勝ちますよね。皆」

「さあ…それは分かりません。それより私はサテライトに向かわ
なければなりませんので失礼します」

サテライトに何か用事があるのか、ゴドウィンはサテライトに向か

った

また1人になったと思って、サテライトを眺めるしかなかった

上空に浮かび上がる青い光が消えると、また別の場所に青い光が浮かび上がっていた

――――――――――――――――――――――――

時間はあっと言う間に経過してしまい、皆は体と心と共にボロボロになりながらダークシグナーとデュエルをしてそれぞれが勝利し、アキが最後の制御装置を作動させた時には、もうすでに太陽は沈んでいた

遊星と龍亞と龍可とアキと深影とヘリの操縦で同行した牛尾はダイダロスブリッジに集まってジャックが来るのを待っていた

「太陽が沈んちゃってる・・・」

「くそっ・日暮れには間に合わなかったようだ・」

「でも、これであのフィールドに吸収された人達は街に戻っているはずよ」

ダークシグナーを倒すと地縛神に吸収された人達が解放されるようで安心していたが、突然大きな地響きがした

「な・何なんだ!?」

「あれは・・・シティの方角!」

遊星達から見てシティの方角に大きなコンドルの地上絵が浮かび上がっていたのだ

「遊星～！ジャックを連れてきたぜ！」

コンドルの地上絵を見ていると、Dホイールが2台接近していた。片方はジャックだ。もう片方は遊星とジャックの昔からの仲間であるクロウだ

彼は顔にたくさんのマーカーがあるが、ダークシグナーを倒すのに貢献していた

「ジャック！クロウ！」

「何だあれは！？」

「デュエルに勝ったがいったい何が起きてるんだ？」

また大きな地響きがして今度は旧モーメントの方から大きな光が出てきた。旧モーメントを止めたはずだったがどうやら失敗だったらしい

光から出てきたのは冥界の扉が開いて出て来た冥府の王だった

その姿はとても奇妙な悪魔の姿だった

冥府の王はシティにあるコンドルの地上絵の方へとゆっくりと進み始めた

「あの黒いの：シティを目指しているんだわ」

「遊星、確か４つの塔の封印に失敗した時、冥界の王が現れるとダークシグナーの１人が言っていたな」

クロウの言葉を肯定するように遊星は頷いた

「あれが…冥界の王…」

「んじゃあもうこの世界はおしまいなのか!?冥界の闇に閉ざされちまうってのか!?」

「でも、まだ私達はここにいる!完全に閉ざされた訳じゃない!」

牛尾の言うことを深影が否定した

龍可の痣が急に疼くとクリボンが現れた

『クリリ～ン…』

「クリボン！どうしたの？」

『クリクリ～…』

どうやらクリボンが龍可に何かを伝えたようだった

「駄目…あれをコンドルの光に向かわせてはいけない！クリボンが訴えてる！」

「どういう事なんだ！？」

皆どう冥界の王を止めたら良いか分からない時、シグナー４人の痣が光って、上空から赤き竜が現れた

「あれは…赤き竜…何でここに…」

赤き竜が遊星達に光を放つと赤き竜の体内に飲み込まれた

そして次にいた場所はゴドウィン邸の前だった

皆何故ここにいるのか分からないと思っていた時だった

『龍可！逃げろ！』

突然デュエルモンスターズの精霊であるレグルスが怒鳴った

上空から黒い光が龍可に向かって落ちてきたのだ。レグルスはもう間に合わないと思って龍可のデッキの1番上のカードを・・・クリボンのカードを引くとどこかに投げ飛ばした

そして、龍可が黒い光に包まれるとその場から消えたのだった

「「龍可！！」」

遊星と龍亞が同時に叫んだがすでに遅かった

太陽が沈んだ（後書き）

ダークシグナー編はもう終盤です

遊星達のそれぞれのデュエルを全部省略しました

期待外れだった人達には謝ります。すみません

もう大丈夫だ（前書き）

アニメの方はＷＲＧＰが開催されましたね

なかなか面白くなってきたと思ってるのですが、いつもパソコンでしか観れない・・・ｏｒｚ

もう大丈夫だ

太陽がもうすぐ沈みそうな時だった

ゴドウィンがサテライトから帰ってきたようだ。たが、何か様子がおかしいとキラは思った

何か力を手に入れたような不気味な笑みを浮かべていたからだ

「サテライトで何かあったんですか？」

「私は神の力を手に入れたのだよ。後はもう1つの神の力を手に入れるだけだ」

何の事だかさっぱりだった。ゴドウィンはエレベーターに乗って地下に行ったようだ

もしダークシグナーを倒したなら皆はもうすぐ帰って来るだろうと思って部屋の中で待っていたが一向に帰って来ない

そして、太陽が完全に沈んで数分が経過した時だった

何か嫌な感じがして外に出てみると遊星達がいた。だが様子がおかしかった

「皆～！何かあったんですか？」

「キラ！何か黒い光が落ちてきたと思ったら龍可がいなくなったんだよ！」

「龍可が！？」

龍亞の龍可がいなくなった説明をした時、突如キラが先程までいたゴドウィン邸が崩壊して、地下にあったはずの神殿が出て来た

「どうなっているんだ!?あれはゴドウィン邸の地下にあった神殿だぞ!」

「サテライトから見えた光はここから見えていたの?」

「サテライトの光って・・・」

キラが後ろを振り返ってみるとコンドルの地上絵が神殿の上空に浮かび上がっていた。そして、神殿からゴドウィンが出て来た

「待っていましたよ。シグナーの諸君:まぁ、1人足りませんがね。どうやらダークシグナーとのデュエルには勝利したものの、冥界の扉を閉ざす事は出来なかった」

「ゴドウィン！教えてくれ！俺達は負けてしまったのか？世界は終わりなのか！？」

「終わりです」

即答だった。遊星の問いに迷う事も考える事も無くゴドウィンは即答した

「何：だと？」

「冥界の王は刻一刻とこちらに向かっています」

「冥界の王が何故ここへ向かっている？」

「この神殿が神聖なる儀式の地だからです」

「儀式？」

「そう、その儀式のために赤き竜を使い、私があなた方を呼んだんです」

ゴドウィンが手に持っているカプセルを全員に見せた

それには皆驚いた。何故ならカプセルの中に入っていたのは左腕：5人目のシグナーの痣だったからだ

「それが：最後の痣：ドラゴンヘッド：」

「それを何故貴様が持っている！？」

「これが答えです」

ゴドウィンが背中を向けると、背中にコンドルの痣が浮かび上がった

そして体全体に黒い痣だらけになり、最後には目が黒色に染まった

「私はダークシグナーとなったのだ！」

皆驚きの表情を浮かべ、ただ見ているしかなかった。さらにゴドウィンは自分の機械であった左腕を引きちぎった。そして、カプセルの中にある左腕を取り出し自分の左腕にくっつけた

「ダークシグナーの力でこの腕を自らの物にする！」

左腕にくっついたものの、ドラゴンヘッドが抵抗して左腕の感覚がまだ麻痺していた

「ふん：ドラゴンヘッドが抵抗するか：だが、直に我が物となる」

「ゴドウィン！お前は何をしようとしているんだ！？」

「我は神となる！赤き竜と邪神！この２つの力を得て究極の神となるのだ！」

左腕を高らかに上げると、神殿がさらに上空へと伸びていった

ゴドウィン邸の瓦礫がこちらに吹き飛ぶくらいの勢いで伸びている

「皆！避難するんだ！」

ジャックが皆を避難させてる時だった

『クリリ～ン！』

どこからかクリボンの声がキラには聴こえた。声がする方を見ると１枚のカードがあった

それを拾うとやはりクリボンのカードだった

「キラ！急げ！」

遊星に急かされ、皆が避難している方向に走っていった

途中クリボンが必死に龍可がどこに消えたのを必死に訴えていた

龍可が連れて行かれたのは精霊世界だと言っていた。龍可が守るはずの精霊世界に何故連れて行かれたのをキラは考えた

そして、皆が神殿から一定の距離を保った所で止まると、シグナー全員の痣が光った

「何だ‥この感じ‥」

「かなり遠くだけど確かに何かを感じるわ」

遊星の言葉を肯定するかのようにアキが言った

「龍可だ：精霊世界で龍可がデュエルしてるんだ」

「何だって!?どういう事だ!」

「クリボンが教えてくれたんです。龍可は今精霊世界にいます」

「クリボンって：あなたは龍可と同じで精霊が見えるの？」

「：：：はい、見えます」

話して良いか少し迷ったが今は緊急事態のため信じてもらえるかは分からないのだが、この答えしかなかった

だが、龍可の事もあるのだが、ゴドウィンの事もある。ゴドウィンは神殿のデュエルディスクが現れるのを確認すると口を開いた

「これより冥界の王を迎える儀式を始める！それはこのコンドルの地上絵によるライディングデュエルによって執り行われる。そう、私がシグナーであるあなた達を完膚無きまでに叩き潰し、冥界の王の生贄とするのです！さぁどうします？冥界の王がもうすぐ来ますよ？」

今ライディングデュエルが出来るのは遊星とジャックとクロウの３人である。だが、龍可の事もあってかなかなか答えが出せなかった

するとキラが口を開いた

「俺が龍可を助けに行きます！」

「助けに行くってどうやって行くのさ?」

「精霊世界に行くんだよ」

「んじゃあどうやって精霊世界に行くんだよ!?」

龍可がいなくなってか、龍亞は冷静さを失って熱くなっていた

「クリボンと…俺の力で精霊世界に行く」

「なら俺も連れてってよ!俺は龍可を守ると約束したんだ!」

「無理だ…俺1人しか行けない」

この言葉に皆は沈黙した。龍可が精霊と話せるのは皆知っている。
だが、キラが精霊と話せるのは龍亞以外は初耳だが、説得力があった

「分かった。頼んだぞキラ」

遊星がキラを信じて龍可の事を任せたと言ってDホイールにまたがりエンジンをかけた。ジャックとクロウも何も言わずにDホイールのエンジンをかけた。ある意味キラの事を信じての行動だった

遊星達3人はゴドウィンとライディングデュエルをするための準備だった

龍亞も遊星がそう言うのなら‥とキラに任せた

「俺の変わりに龍可を守ってよ！」

「分かった」

「龍可を絶対に連れて帰ってきてよ！」

「分かった」

「約束だからな！」

「あぁ、約束だ」

龍亞が拳を突きつけ、キラも拳を突きつけた

「行くよ、クリボン」

キラの目がオッドアイになり、全員が驚いた。キラの体が光に包まれるとその場から消えたのだった

「・・・ここ・・どこ・・龍亞！・遊星！・皆！」

龍可が今いる場所は辺りは何も無い荒野だった。龍亞達の名前を呼んでも返事は無い

「ようこそ、シグナーよ」

「誰！？」

龍可の後ろから声が聞こえ、振り返ると年はキラと一緒くらいなのか、少年がそこにいた。だが、ただの少年ではなく右腕に痣があり光っていた

「痛っ！」

龍可の痣も光ったがダークシグナーと戦う時の痛さを感じたのだった

「あなたダークシグナーなのね？」

「ふん、俺にとってはシグナーだのダークシグナーだの関係無い：
お前が精霊と話せるのが関係しているんだ！」

とても憎しみのこもった目つきで睨まれ、龍可は相手が怖くなってきた

「さぁ、デュエルをしようじゃないか」

少年が右腕を空へと掲げると痣が光って、周り炎が出てきて、ラク

ダのような形になった

「（怖い・・・でもこのダークシグナーを倒さないと・・）分かったわ」

お互いにデュエルディスクを構えた

「「デュエル」」

龍可ＬＰ４０００
ダークシグナーＬＰ４０００

「私のターン、ドロー、私は『レグルス』を召喚！そしてカードを１枚セットしてターンエンド」

レグルス
ＡＴＫ１７００

「俺のターン、ドロー……ちっ…」

龍可は一瞬目と耳を疑った。相手のダークシグナーがもの凄く嫌な顔をし、舌打ちをしたからである

「俺は『ゲート・ディフェンダー』を守備表示で召喚し、カードを1枚セットしてターンエンド」

ゲート・ディフェンダー
DEF2000

龍可にとっては初めて見るカードだった。だが、遊星に1度だけ聞いた話を思い出した。確かあれはセキュリティが持つ特集追跡デッキにしか入ってないカードだと

「何であなたがセキュリティのカードを持ってるの？」

問いただと、相手龍可を睨んで、ゆっくりと口を開いた

「お前には関係無い‥」

龍可は少し考えたが、今はデュエルに集中する事にした

「私のターン、ドロー、手札からマジックカード『ソウルテイカー』を発動！相手フィールド場に存在するモンスターを1体を破壊する！この効果で破壊した後相手は１０００ポイントのライフを回復する！」

ソウルテイカーの効果でゲート・ディフェンダーが破壊された

「１０００ポイントとは‥嬉しいもんだな‥」

「まだよ！罠カード『シモッチによる副作用』を発動。相手のライフポイントが回復する効果は、ダメージを与える効果になる！」

「何!?」

ダークシグナーＬＰ４０００→３０００

「そして私はチューナーモンスター『メンタル・カウンセラー　リリー』を召喚!レベル４のレグルスに、レベル３のメンタル・カウンセラー　リリーをチューニング!聖なる守護の光、今交わりて永久の命となる。シンクロ召喚!降誕せよ!『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』!」

３＋４＝７

早くも３ターン目で龍可のエースモンスターであるエンシェント・フェアリー・ドラゴンを召喚した

エンシェント・フェアリー・ドラゴン
ＡＴＫ２１００

「さらに墓地のメンタル・カウンセラー　リリーの効果を発動！このカードがシンクロ召喚に使用され墓地に送られた場合、ライフを５００支払う事でこのカードをシンクロ素材としたシンクロモンスターの攻撃力は、このターンのエンドフェイズ時まで１０００ポイントアップする！」

龍可ＬＰ４０００→３５００

エンシェント・フェアリー・ドラゴン
ＡＴＫ２１００→３１００

「この攻撃が決まれば私の勝ち。エンシェント・フェアリー・ドラゴンでダイレクトアタック！『エターナル・サンシャイン』！」

エンシェント・フェアリー・ドラゴンが羽を大きく広げ、眩しい光を放った

「決着はまだ早いよ。罠カードオープン『和睦の使者』。このターン、相手から受ける戦闘ダメージを０にする」

ダークシグナーに光は届くことは無かった。龍可は1度手札を確認して、エンドフェイズを宣言した

「・・・ターンエンド」

エンシェント・フェアリー・ドラゴン
ＡＴＫ３１００→２１００

「俺のターン：ドロー」

相手はドローしたカードを見ては不気味な笑いをしていた。龍可はその笑いを見て、急に不安になった

「俺は『サーチ・ストライカー』を召喚」

サーチ・ストライカー
ＡＴＫ１６００

「さらにマジックカード『二重召喚』を発動。俺はこのターンもう1度通常召喚が可能となる。出でよ、チューナーモンスター『ジュッテ・ナイト』を召喚！そしてレベル４のサーチ・ストライカーに、レベル２のジュッテ・ナイトをチューニング！シンクロ召喚！『ゴヨウ・ガーディアン』！」

ゴヨウ・ガーディアン
ＡＴＫ２８００

「ゴヨウ・ガーディアン！？そんな！？」

龍可はゴヨウ・ガーディアンを見て驚いた

何故あの少年が特集追跡デッキを持っていて、そのデッキの切り札である『ゴヨウ・ガーディアン』を持っているのか…

「ゴヨウ・ガーディアンでエンシェント・フェアリー・ドラゴンに攻撃！『ゴヨウ・ラリアット』！」

ゴヨウ・ガーディアンがエンシェント・フェアリー・ドラゴンを破壊した

「きゃあああぁ！！」

龍可ＬＰ３５００→２８００

「まだだ、ゴヨウ・ガーディアンの効果を発動。このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、そのモンスターを自分フィールド場に守備表示で特殊召喚する！来い！『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』！」

エンシェント・フェアリー・ドラゴン
ＤＥＦ３０００

「そんな…エンシェント・フェアリー・ドラゴン…」

相手のフィールド場に特殊召喚されたエンシェント・フェアリー・ドラゴンを見て龍可は絶望的だった

「俺はターンエンドだ」

ダークシグナーは相変わらず不気味な笑みをしていた。龍可は絶望的だったが、諦める気持ちは無かった

「くっ…私のターン！手札から『黄金の天道虫』の効果を発動！手札にあるこのカードを相手に見せる事で私は５００ポイントライフを回復するわ」

龍可ＬＰ２８００→３３００

「私は『サニー・ピクシー』を守備表示で召喚してターンエンド」

サニー・ピクシー
ＤＥＦ４００

龍可は次のターンのドローカードに逆転出来る事を願ってこのターンを終えた

「俺のターン・・・手札からマジックカード『守備封じ』を発動」

守備封じを発動された時、龍可は地面に膝をついた。負けを確信した瞬間だった

「サニー・ピクシーを攻撃表示に変更する」

サニー・ピクシー
ＡＴＫ３００

「ゴヨウ・ガーディアンでサニー・ピクシーに攻撃！『ゴヨウ・ラリアット』！」

サニー・ピクシーは反撃する間も無く破壊された

「いやぁああ！！」

龍可ＬＰ３３００→５００

「エンシェント・フェアリー・ドラゴンの攻撃で俺の勝ちだな‥」

龍可の痣が急に痛み、腕を見ると、痣が跡形もなく無くなっていた

「そんな‥痣まで‥‥龍亞‥助けて‥」

目に涙を溜めて龍可を守ってくれる存在である龍亞の名前を呼んだが、龍亞は現れる事はなかった

「エンシェント・フェアリー・ドラゴンでダイレクトアタック：『エターナル・サンシャイン』」

龍可の体全身が震えだし、自分の肩を抱くように肩に手を置いて瞼を強く閉じた。誰か助けてと強く願い、涙を流した

エンシェント・フェアリー・ドラゴンが羽を広げて眩しい光を放った

龍可はもうダメだと思った時だった

「もう大丈夫だ」

そんな誰かの優しい声がして、その誰かに抱き寄せられた

もう大丈夫だ（後書き）

相手のダークシグナーの名前は次話で出ます。あとダークシグナーのデッキが特殊追跡デッキにしたのはちゃんと理由があるのであしからず・・・

作者はそろそろ引っ越しの準備をしないといけない時期になってきたので更新が遅くなる可能性もありますが、今後もどうぞよろしくお願いします

全ての決着　シグナーの力（前書き）

引っ越しの日が近いとか言いながら更新しちゃいました（笑）

全ての決着　シグナーの力

「もう大丈夫だ」

優しい声で抱き締められた。この声は聞いたことのある声だ

自然と震えが止まっていた。龍可は抱き締めてくれる人に体を預け、安心していた

龍可は抱き締めてくれる人の顔を見ると震える声で名前を呼んだ

「キラ・・・」

「もう大丈夫。俺が龍可を守るから」

龍可はキラが守ると言ってくれる事が嬉しかった。だが、キラの雰囲気がいつもと違うのに気付いた

「（どこかが違う・・・）」

キラがオッドアイになっているのに気付いた。何故こんな目をしているのかと疑問に思った

「その目：どうしたの？」

質問されると、一瞬困った顔をすると、答えずにクリボンのカードを渡してきた。あまり触れられたくないという表しだった

「これ龍可のカードでしょ？」

「クリボン！？何でキラが持ってるの？」

「ゴドウィン邸に落ちてたんだよ」

「落ちてたって‥‥何で‥」

『申し訳ありません龍可。私がやったのです』

龍可の隣にレグルスが現れ、謝罪した

「いや、レグルスとクリボンのおかげでここに来れたんだ。ありがとう」

『あなたがエンシェント・フェアリー様が言っていた‥どうか龍可をお助けください』

「分かってる。そのために今ここにいるんだから」

「それで、クリボンは？」

「クリボンなら・・」

キラが振り返って「あそこだよ」と言って、その方向を見ると、クリボンがエンシェント・フェアリー・ドラゴンの攻撃を堪えていた

「もう良いよクリボン」

『クリクリ～ン』

クリボンは疲れた様子でカードの中に戻っていった

「クリボン・・ありがとう」

龍可はクリボンのカードを見つめてお礼を言った

「さて、後は俺に任せろ」

キラはデュエルディスクを起動させると、ダークシグナーの方を向いた

「選手交代・・・だ・・」

キラはダークシグナーの顔を見るや、目を大きく見開いた

「（あれ・・・あの顔・・どっかで見たことが・・）」

「選手交代か、まぁ良い。お前も精霊と通じ合えるようだな・・お前も消すまでだ」

キラは相手の顔に見覚えがあった。だが、誰なのかいまいち思い出す事が出来ない

「お前：名前は？」

「……アラン」

「その下は？」

ダークシグナーの名前はアランという少年だ。キラがアランの下の名前を聞こうとするとアランが怒りを露わにした

「お前か：やっと見つけたぞ：父さんと母さんを殺したのはお前だな！」

キラは身に覚えも無いことを言われ困惑の表情を浮かべる

「俺はお前の父さんと母さんを知らない！第一にお前とは初対面だ」

「そんな言い訳が通じると思うな！デュエルだ！」

話が噛み合わず、デュエルをする事になった

キラＬＰ４０００
アランＬＰ５１００

フィールド場はアランの場にゴヨウ・ガーディアンとエンシェント・フェアリー・ドラゴンがいて、アランの手札は2枚、そしてキラのフィールド場には何も無く、手札5枚からでキラの先攻のスタートだ。だが、アランのライフはクリボンの効果でエンシェント・フェアリー・ドラゴンの攻撃力分回復していた

「俺のターン！ドロー、俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を召喚！そして、エアーマンの効果で、デッキからスパークマンを手札に加える」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン
ＡＴＫ１８００

「そして手札からマジックカード『融合』を発動！フィールドのエアーマンと手札のスパークマンを融合して『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』を融合召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ
ＡＴＫ２８００

「さらに、このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド場に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力と守備力を半分にする！『タウン・バースト』！」

「何！？」

グレイトトルネードが巻き起こす嵐によってゴヨウ・ガーディアンとエンシェント・フェアリー・ドラゴンが弱体化していった

ゴヨウ・ガーディアン
ＡＴＫ２８００→１４００
ＤＥＦ２０００→１０００

エンシェント・フェアリー・ドラゴン
ＡＴＫ２１００→１０５０
ＤＥＦ３０００→１５００

「グレイトトルネードでゴヨウ・ガーディアンに攻撃！『スーパーセル』」

グレイトトルネードが突風を巻き起こし、ゴヨウ・ガーディアンを切り刻んだ

「くっ……」

アランＬＰ５１００→３７００

「俺はカードを1枚セットしてターンエンド」

キラが僅か1ターンでゴヨウ・ガーディアンを倒せた事に龍可は凄いと思った

シンクロを使わないが融合を使うからこそ倒せる戦法だった

「やってくれるじゃないか…俺のターン、カードを1枚セットしてターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

アランは攻撃力が低くなったエンシェント・フェアリー・ドラゴンを守備表示にする事なく、ターンエンドをした。キラは挑発していると思ったが攻めに転じる事にした

「バトル！グレイトトルネードでエンシェント・フェアリー・ドラ

ゴンに攻撃！」

「罠カードオープン！『サンダー・ブレイク』を発動！手札を1枚を捨てて、グレイトトルネードを破壊する！」

「な・・・グレイトトルネード！」

グレイトトルネードに空から雷が落ちてグレイトトルネードは消滅した

「くっ・・俺はマジックカード『古のルール』を発動して、『E・HERO　ゼクス』を特殊召喚してターンエンド」

E・HERO　ゼクス
ATK2500

「俺のターン・・・来たぞ！最高のカードが！フィールド魔法『死皇帝の陵墓』！そして、俺はライフを2000支払い、出でよ！『地縛神　Lrama（ルラマ）　rama（ラマ）』！」

「キラ！ダークシグナーのエースモンスターよ！」

「来るか・・エースモンスター・・」

アランＬＰ３７００→１７００

フィールドが死皇帝の墓に変わり、上空に地縛神の心臓が現れ、周りには何も無いはずだが、どこからか光の玉が地縛神の心臓に集まっていった。全部吸い込むと地上にラクダのような地縛神が現れた

地縛神　Ｌｒａｍａ　ｒａｍａ
ＡＴＫ２６００　ＤＥＦ２４００
闇　星１０　獣族
効果
「地縛神」と名のついたモンスターはフィールド場に１体しか表側表示で存在出来ない。フィールド場に表側表示でフィールド魔法が存在しない場合このカードの効果は無効化とする。相手はこのカードを攻撃対象とする事ができない。このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。このカードが直接攻撃に成功した時、相

手フィールド場に存在するカード1枚を破壊する事ができる

「何あれ・ラクダ？」

「違う、あれはリャマだ。ラクダと似ているがコブが無いんだよ」

ナスカの地上絵にリャマの地上絵がある。ラクダ科の動物である

「地縛神　Ｌｒａｍａ　ｒａｍａで攻撃！」

「ゼクス！」

Ｌｒａｍａ　ｒａｍａが口から光線を放ってきて、ゼクスはそれを堪えようとしたがゼクスをすり抜けてキラに向かってきた

「え？何で？」

「地縛神は直接攻撃が出来るんだよ！攻撃対象はお前だ！」

キラは地縛神が自分に放った光線が、後ろにいる龍可にまで被害が出ると思い、龍可を自分の胸に抱き寄せ、地縛神に背を向けた

「え！？キラ！？何！？」

「動くな！」

龍可はいきなりの行動に戸惑った。だが、これは龍可を庇う行動だった

「うわぁぁああ～！！」

キラＬＰ４０００→１４００

「キラ！」

キラと龍可がいた周りには大きな穴が開いていた

「このダイレクトアタックが成功した事により、地縛神　Ｌｒａｍａ　ｒａｍａの効果を発動！相手フィールド場に存在するカード１枚を破壊する。ゼクスを破壊！」

ルラマ　ラマの効果でゼクスが破壊された

「マズい・・」

龍可を抱き寄せる力をさらに強めた

「エンシェント・フェアリー・ドラゴンでダイレクトアタック！』

エターナル・サンシャイン』！」

エンシェント・フェアリー・ドラゴンが放つ巨大な光を浴びて、キラはさらにダメージを負った

「ぐっ……」

キラＬＰ１４００→３５０

「キラ！何で！？」

何で私を庇うのと言おうとしたが言葉に詰まった

「言ったろ・・龍可は俺が守って・・」

龍可はこの言葉に衝撃を覚えた

「それに龍亞と約束したんだ。龍亞の代わりに俺が守ると・遊星達にも龍可の事を任されたんだ。だから、龍可は俺が守る」

皆が龍可の帰りを待ってると言うような言い方だった

「俺はターンエンド」

アランのターンが終了してキラにターンが回ってきた

キラは龍可を離すと立ち上がって、カードをドローした

「俺のターン！」

引いたカードは『ホープ・オブ・フィフス』だ。だが、まだ墓地にはＨＥＲＯが５枚揃っていなかった。だが、まだ最初のターンに伏

せたカードが鍵となった

「罠カードオープン！『針虫の巣窟』を発動！自分のデッキの上からカードを5枚墓地に送る」

頼む！とそう願って、デッキからカードを5枚墓地に送るとＨＥＲＯが3枚も墓地に行った

「良し！手札からマジックカード！『ホープ・オブ・フィフス』を発動！墓地に存在する『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のつくカードをデッキに戻してシャッフルし、2枚ドローする！」

キラは墓地のゼクス、グレイトトルネード、エアーマン、スパークマン、フェザーマンをデッキに戻してシャッフルさせた

デッキが自動にシャッフルされるのとピタッと止まった

もし、この2枚のドローで逆転出来るカードが無ければキラは負けてしまう。キラは目を閉じた

「ふん、さっさとドローしろ！俺は早くお前に復讐したいんだ！」

キラにはそんな言葉は耳に入らなかった。ただワクワクする気持ちと龍可を守れる力を！と願った

すると痣が今まで以上に輝きだし、皆驚いた

キラは目を開けて、２枚のカードをドローした

「来た！墓地に存在するネクロダークマンが墓地に存在する時、１度だけＨＥＲＯはリリースなしで召喚出来る！現れよ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス
ＡＴＫ２５００

「それがどうした！そいつでは俺には勝てないぞ！」

「そう、ゼクスだけではお前には勝てない」

「はっ：んじゃあどうするんだ？」

アランが鼻で笑ってキラを見下した

「龍可：お前の力を借りるぞ！」

「私の力？」

何を言っているのか分からない時、龍可の腕に竜の痣が戻ってきた

「手札1枚をコストにして、速攻魔法『超融合』を発動！」

キラとアランの間に大きな渦が現れた

「お前の場の『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』と俺の場の『E・HERO　ゼクス』を融合！」

「何だと！？」

大きな渦の中にエンシェント・フェアリー・ドラゴンとゼクスが吸い込まれていった

「これが、俺のシグナーとしての力の1つだ！現れよ！『フェアリー・ゼクス』！」

キラの場にエンシェント・フェアリー・ドラゴンの羽を持ち、エンシェント・フェアリー・ドラゴンのカラーを彩るようなゼクスが現れた

フェアリー・ゼクス
ＡＴＫ２６００　ＤＥＦ２５００
光　星８　戦士族
融合　効果
『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』＋『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』
このモンスターの融合召喚は上記のカードでしか行えず、融合召喚でしか特殊召喚できない。１ターンに１度、フィールド魔法を破壊する事が出来る。破壊した場合自分は１０００ポイントライフを回復し、このカードの攻撃力を１０００ポイントアップする

「綺麗・・・」

龍可は思わず、キラの姿とフェアリー・ゼクスの姿に見惚れていた

すると、また龍可の痣が消えた。だが、今度は仲間である誰かに集まっていくような感覚だった

「ちっ・・シグナーの竜が奪われたか・だが、まだ俺は負けない！」

「いいや、このターンで終わりさ！フェアリー・ゼクスの効果を発動！フィールド魔法を破壊する！」

「何！？」

フィールド魔法である死皇帝の陵墓が消え去っていった

「そして、フィールド魔法を破壊した事により俺はライフを１０００ポイント回復し、フェアリー・ゼクスの攻撃力は１０００ポイントアップする！」

フェアリー・ゼクス
ＡＴＫ２６００→３６００

「くそっ：ルラマ　ラマの効果が：」

そう、フィールド魔法が無くなったせいで地縛神は効果を失うのだ

った

「これで最後だ！手札からマジックカード『ラスト・アタック』を発動！フィールド場に存在する『ゼクス』と名のつくモンスターの攻撃力を2倍にする！」

「何だと！？」

フェアリー・ゼクス
ＡＴＫ３６００→７２００

「バトル！フェアリー・ゼクスで地縛神　Ｌｒａｍａ　ｒａｍａに攻撃！『シャイニング・レイ』！」

フェアリー・ゼクスが大きく羽を広げると羽から無数の光の光線が放たれ、全てルラマ　ラマを貫通していった

「うわぁぁああ！」

アランＬＰ１７００→０

「俺の勝ちだ！」

「キラ！」

龍可は嬉しさのあまりにキラに飛び付いた

まだアランの姿は残っていた。だが、体中が炭のように黒くなっていった

「貴様…覚えてろよ……」

最後に一言言い残すとアランの姿が完全に消えた

「龍可、帰るよ」

「うん！」

キラとフェアリー・ゼクスの力でキラと龍可の体が光となって消えた

だが、この精霊世界でキラとアランがデュエルをしていた事を龍可以外で誰かが見ていたなんて知らなかった

キラと龍可が現実世界に帰り着くと、遊星とジャックとクロウの３人の姿はボロボロだったが、ゴドウィンに勝利を収めた後だった

空から無数の星屑がこぼれ落ちていた

綺麗な雨のように

そして、太陽が登り始めていた

「キラ！龍可！」

「「龍亞！」」

龍亞が2人に気付いて近付いてきた

「やったんだなキラ！」

「あぁ！約束は守ったよ」

キラと龍亞は2人で笑い合った。龍可はふとキラに違和感が無くなったと思い、キラの目を見るとオッドアイではなくなっていた

皆も集まって来て、ダークシグナーとの戦いに勝利したことを皆で喜び合った

だがこの後、龍可とキラにそれぞれ違った変化が訪れているなんて、龍可は少しだけ気付いて、キラはまだ知らなかった

全ての決着　シグナーの力（後書き）

これでダークシグナー編は終わりです

あっという間に終わらせてしまってスミマセン

この後はオリジナル編を書きたいと思います

イリアステル：遊星とゴーストがデュエルするまでの話を書きます

次は多分キラの人物紹介になるかと思います

～遊城を受け継ぐ者～主要人物資料（前書き）

引っ越しをしてだいぶ落ち着きました

今回はシグナー＋αの人物紹介です

度々人物設定を追加をすると思います

～遊城を受け継ぐ者～主要人物資料

遊城キラ
融合のような形を持つシグナーであり、いろんな意味で矛盾している存在

名前：遊城キラ
年齢：１３歳
身長：遊星と龍亞のちょうど真ん中
髪型：キ〇・ヤ〇トだと思って良いです↑
服装：遊戯やＧＸの第１話の十代が着ているような制服（未来に来てから他に服が無い）ダークシグナーとのデュエルで所々ボロボロである
容姿：若干十代に似ている
性格：熱血のぬるま湯のような感じ（熱い感じではなく温かい感じ）
両親：父親は十代。母親は不明であるが、キラを産んだと同時に亡くなっている。
備考：年上の人に対して普段は敬語で話すが、デュエルをする時に敬語が抜ける癖がある。ちなみにファザコン

本来キラは遊星達の世界では存在してはいけない存在だが、キラが持つ痣の力によって矛盾を無理矢理正しくしている

龍亞に対しては兄弟とも言えず、友だちとも言えない微妙な関係で

はあるが、お互いに仲間意識はある

精霊と話が出来る事はほとんどの人物が知っているが、精霊の力を使える事はアキとイェーガーしか知らない

精霊の力がいつ目覚めたのかは不明だが、この力によって孤独を感じ、アキと同じ道を歩んだ者だが、十代がいたため立ち直る事が出来た

エースモンスターは『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』。攻撃力２５００の守備力は２０００のレベルは7、戦士族の闇属性であり、十代のエースのネオスとほぼ同じである。ちなみにネオスはウルトラマンをモチーフにしてますが、ゼクスは仮面ライダーです

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス
装備魔法と一緒に墓地に送る事でエクストラデッキから融合モンスターを融合召喚出来るというちょっと変わった融合方法である

融合する時の掛け声は「フォルムチェンジ」と言う

今現在ゼクスのフォルムはソードとハンマーの3種類存在するが・・・

ゼクスのカラーは黒で、ソードフォルムは赤、ハンマーフォルムは

緑色

シグナーの力によって1度だけエンシェント・フェアリー・ドラゴンと融合した事がある

ちなみにゼクスは遊星達の未来の世界には存在しない。キラのいた時代にはあったカードではある。いわゆるパラレルワールドからやってきた存在

超融合

十代から御守り代わりに貰ったカードだが、このカードは世界に1枚しか存在しない。

最後にキラは巨大なエネルギーの発生を心待ちにしている

龍可

赤き竜の痣を持ち、精霊と会話が出来るシグナーである。

キラがネオ童実野シティに来て1番最初に出会った少女（出会うと言うより龍可に助けられた）

アランとのデュエルの時にキラに助けられた事によってキラに惚れる。だが：

キラの事をしばしば心配しているが、必ず「大丈夫」と言うので余計に心配になっている

龍亞

自称シグナーだった。龍可の双子の兄。そしてムードメーカー

遊星の事をなにより信頼して龍可を守っている存在。自分では龍可を守れなかった（アランとのデュエルの事）が、キラが龍可を守った事により、キラの事も信頼している

十六夜アキ

サイコデュエリストであり、シグナーの美少女

孤独で信頼出来るのはディヴァインだけだったがキラと遊星の言葉により心が揺れる（遊星の方が影響が大きい）ディヴァインが死んで居場所を無くしたが嫌っていた両親と遊星の言葉により改心し、元々あった居場所を取り戻した。皆の事を仲間だと思っている

遊星

皆から信頼されて絆を大事にしているドラゴンヘッドの痣を持つシグナー。遊戯王５Ｄ'ｓ本編の主人公

ジャック

孤高のキングだった。シグナーの痣を持つ者。遊星のライバルである

クロウ

遊星とジャックの昔からの仲間であり、シグナーでなかったが、ダークシグナー終盤で5人目のシグナーとなる

～遊城を受け継ぐ者～主要人物資料（後書き）

オリキャラ以外の主な主要人物は龍可と龍亞とアキになると思います

次からはオリジナルストーリーに入ります

新生活（前書き）

ちょっと遅くなりましたが更新です

今回から新章に突入です。いろいろとキャラが少しおかしいと思います

新生活

ダークシグナーとの対決から数日が経った。シティの人達やサテライトの人達はダークシグナーが起こした事件を誰も覚えていないらしい。覚えているのはダークシグナーと深く関わった人間だけだった。ゴドウィンはダークシグナーと対決する前に遊星と約束した事を守り、シティとサテライトをダイダロスブリッジで繋いだ

これでサテライトの差別も終わり、サテライトの住民は喜んだ

ダークシグナーとなったアラン達は人間として蘇ったらしい。ダークシグナーのカーリーとアラン以外の人達は旅に出たらしい。カーリーはジャックと知り合いらしく、新聞記者でもあったので、よくジャックと絡んでいるのをキラ達は見かけている。カーリーがダークシグナーの事件を一面トップにデカく掲げるのと思いきや、ダークシグナーになった時の記憶はあまり無いらしい

アランは両親がいないためか、施設にいるらしかった。ただ、キラと龍可がアランの持っているデッキについてセキュリティの牛尾に話すと、アランの父親はセキュリティだったらしい。だが、アラン

の両親は何者かに襲われ命を落としたようだ。あくまでキラの予想だが、両親を亡くなる瞬間をアランは目撃してその後襲われ、アランまで命を落としたが、その時にダークシグナーになったのだと思った

遊星とジャックとクロウはサテライトの子供達の親的存在であるマーサの友人であるゾラが提供してくれた家に住むことになった

アキは自分の居場所である両親の所に戻っていった

キラと龍可と龍亞は3人で暮らしている。部屋がいくつもあまりがあるのでキラにも自分の部屋を貰うことが出来たのだが、生活用品が無いため、服などを買ってもらった。だが、ダークシグナーとの対決の後、キラは龍可とまともに話せていなかった。なぜなら龍可がキラを避けてるからだ

そしてキラが精霊の力については会話が龍可と同じで会話が出来るという事でアキ以外は納得した。アキはキラがまだ何かを隠しているのだと思っていたのだった

そして学校が始まり、龍可と龍亞とアキはデュエルアカデミアネオ童実野校に行っている。キラは龍可達がいない時間は遊星達の所にいた

遊星は修理屋を営んでちょくちょくお客さんが来るようだ。ジャックとクロウは修理屋をやってみようかと思いきや、全然ダメだったため、バイト先を探しているようだ

「それで、ジャックとクロウはどこか見つけたんですか？」

「あぁ、Dホイールがあるから配達をやろうと思ってな。まぁ面接に受かればの話だがな」

「ふん、面接などこのジャック・アトラスと対面した時点で受かるに決まってる」

相変わらず強気なジャックである

「配達…ですか、俺もやろうかな」

「良いかもしんね～けど、お前ライセンスとDホイールは持ってるのか？」

「それなんですが、遊星にお願いがあって」

「俺に？」

「はい、ローラーブレードって作れます？」

「「「ローラーブレード？」」」

3人は何故ローラーブレードなんだと思った。自転車でも良いのではないかと

「別にローラーブレードじゃなくても自転車で良いじゃねぇか」

「俺自転車に乗ったことないんですよ・・」

苦笑混じりに言うキラが自転車に乗れない事が意外だと思った3人

「だが、練習すれば大丈夫だろ」

「それは自転車があればの話ですよ」

「それもそうだな・だが、何故ローラーブレードなんだ?」

「フォーチュンカップの時に遊星が使ってた『スピード・ウォリアー』を思いだしたんですよ。それにローラーブレードなら乗れますから」

なるほどと、遊星は顎に手を当てて少し考え、口を開いた

「時間がかかるかもしれないがそれでも良いか？」

「はい、お願いします」

「それにしても『スピード・ウォリアー』を思い出してローラーブレードか：よく思いついたな」

ジャックは何かと褒めていた

「移動の時に便利だと思って」

「んじゃあ、今度案内してやるよ」

「ありがとうございます。もうそろそろ龍亞と龍可が帰ってくる頃なんで帰りますね」

「おう！」

クロウが返事をした矢先に入口から『ガンッ！』っという何かを打った音が響いた

ドアの方を見ると、キラが頭を打ったようだ

「おい！大丈夫か？」

「っ：はい、大丈夫です」

今度こそキラは出て行った。遊星達は何が起こったのか分からなかった

一方龍可達は下校中だった。アキも高等部が早く終わり、龍可達と一緒だ

「そういえば思ったんだけど、キラは何でデュエルアカデミアに行ってないの？」

『キラ』という単語に龍可はビクッとし、アキの問いに龍亞が答えた

「あぁ～・・・まぁ、ちょっといろいろと事情があるんだよ」

「ふ～ん・・」

龍亞が曖昧に答えたら、アキは少し考え込んだ。アキの反応を伺うと龍亞は龍可に小声で話し掛けた

「ねぇ、過去の人って事アキ姉ちゃんに言って良いのかな?」

「わ・分からないわよ・それはキラが決める事なんだから」

いきなりだったので慌てて答えたが、龍亞は冷たい反応だと思った

「なぁ、龍可さ~最近キラに冷たいんじゃない?」

「そ、そんな事ないわよ!」

「何がそんな事ないの?」

龍可がムキになって龍亞に言ったのが大声だったので、アキにまで聞こえたようだ

「それがさ～最近・え～っと・・・ダイダロスブリッジが完成した頃からだったかな。龍可がキラを避けてるんだよ」

「避けてる？どうして？キラが何かやったの？」

「やってない！キラは何もやってないわよ！」

「んじゃあ何で避けるんだよ？」

「別に避けてる訳じゃあ・・・」

最後辺りは『ごにょごにょ』と何を言っているのか分からない程小さい声だった

「その否定の仕方だったら嫌ってはいないようね」

「んじゃあ、惚れたとか？」

龍亞が言った言葉で、龍可は顔を真っ赤にして立ち止まった。だが、龍亞はそんな事に気付かずに続けた

「まぁ、予想じゃあダークシグナーとの対決の時かな、あの時キラが龍可を助けに行ったし、ＨＥＲＯデッキを使ってるからヒーローのように助けに来て・・・」

龍亞が予想の説明をしている時、アキは龍可が立ち止まっているのに気付いた

「どうしたの龍可？龍可？」

様子がおかしいと思い、龍可の顔を見ると真っ赤で口を閉ざしてい

た。まさかと思い、龍亞の方を向いた

「ちょっと龍亞」

「帰ってきた時にはボロボロだったし、龍可を庇いながらデュエルに勝った！……なんて事だったりしてね」

「龍亞！」

アキが怒鳴るように龍亞を呼び止めると、龍亞はビクッとした

「な…何だよアキ姉ちゃん」

「龍可がね…」

「龍可がどうしたのさ？」

気付きなさいと言いたげに視線を送ると、龍亞も龍可の顔を覗き込んで気付いた

「え・・・マジで？」

「どうやら龍亞の予想は当たりのようね」

「ねぇねぇ、キラのどこに惚れたんだよ？」

ニヤニヤとしながら聞いてくる龍亞に龍可は悔しそうにぼそりと呟いた

「龍亞にだけは知られたくなかったのに・」

「私も気になるんだけど、龍亞抜きで聞いて良い？」

「アキさんなら構わないけど‥」

アキにだけ話そうとする龍可に龍亞は不満だった

「え～!何で俺はダメなのさ!俺達兄妹だろ!」

「兄妹だからこそよ!それに龍亞が余計な事を言っちゃいそうだし‥」

「言わないよ!絶対に言わないからさ。教えて下さい龍可様～」

いきなり称えるように頼んでくる龍亞に、龍可は呆れた。仕方ないと

「分かったわよ‥さっき龍亞が言ってた通りよ‥」

2人に目を合わせないように目線をずらし、顔を真っ赤にして言った

「ほおほお～なるほど、俺の推理がバッチリと当たっていたようだね龍可君」

龍亞の言い方にちょっとイラッとした龍可だが、ここは堪えた

「で、でも、ヒーローのようには助けてもらってないよ」

「ちぇ：外れたか：まぁ、やっぱり庇ったりはしたんだ」

「うん、もうダメかと思ったら『もう大丈夫』って言って助けてくれたのよ」

「へぇ～、んじゃあ抱き締めたりしたの？」

龍亞のとっさの質問に、龍可の顔が沸騰したように首から上昇するように真っ赤になって、最後には『ボン！』っと音を立てた

「どうやら当たりのようね」

「まさか当たってるとは思わなかったよ。多分双子だから分かったのかな：」

「でも！1回目は私を落ち着かせるためにやって、2回目は私を庇うためにやってくれたんだから！」

2回もやったんだ～と言いたげに龍亞は楽しそうに龍可の表情を伺っていた

「とりあえずいっそのこと告っちゃえば？」

「「こ‥告白!?」」

突然の発言に龍可とアキは驚いて聞き返した

「ん〜‥でも、今のままじゃあねぇ‥」

龍亞の言いたい事はアキには分かった。それはキラを避けている事だ

「ところでどうしてキラを避けるの?」

「避けてないわよ‥‥ただ‥顔を合わせずらいのよ‥」

「それを避けてるって言うんだよ」

心臓に矢が刺さったように「うっ‥」と声を漏らした龍可だ

「それで、キラは龍可が好意を持っている事と避けてる事に気付いてるの？」

龍可に聞くのだが、自分では分からないよと言うように口を閉ざしている

「いや、それはないよ。だって、普通に接しているからさ」

龍可の代わりに龍亞が代弁し、アキの質問を否定した

「普通に…ね…好意の事は気付いてないと思うけど、避けてる事は気付いてるんじゃない？」

「いやでもさ、それだったら気まずい空気にならない？」

「慣れてない人間ならそうなるのよ」

「「慣れてない人間？」」

何に慣れて何に慣れていないのか龍亞と龍可には分からなかった

「うん、私には分かるような気がする。キラの気持ちが…」

「何がどう分かるってのさ？」

「避けられる気持ちに慣れるって事よ」

アキは今まで人々から嫌われ避けられてきた人間だったので龍可と龍亞は何も言わなかった

「それに、キラは私とデュエルした時、『あなたは俺と同じだから』って言ってたし」

「え？んじゃあ、キラは今まで避けられてきたって事？」

「多分よ多分、それに、キラは何か隠してると思うのよ」

「「隠し事？」」

「えぇ、でもそれは本人が言った方が良いみたい」

アキが言いたい事は、キラが持っている精霊の力の事だった。精霊と会話が出来るとは言っていたもののアキのように実体化出来るとは言っていないので、キラが言った方が良いとアキは考えた

「キラは昔どんな人間だったの？」

龍亞と龍可はお互いに顔を合わせ、少し考えて龍可が口を開いた

「私達は知らないのよ…つい最近会ったばっかりだから」

「会ったばかり？じゃあ何で龍可達の家に住んでるの？」

「それはちょっとした事情があるのよ。私達はキラに何があったのか分からない」

「そう…私達はキラの事何にも分かってないのね…」

そう言われればそうだと2人は思った。知っている事が多いか少ないかではなく、知らない事が多いからだ。何故痣を持っているのか。両親はどうしているのか。昔何があったのかなど…

「とりあえずこのままじゃあ、危ないんじゃない？」

「危ないって何が？」

「キラが龍可達の家から出ていくんじゃないかって事よ。龍可が避けている事は気付いてると思うけど、キラ自身が否定していると思う。龍可を信じていると思うから」

キラが信頼している事は嬉しかったが、今のままではいずれ、出て行くのではないかと言われ、龍可は否定出来なかった

「今は龍亞が2人をフォローしてあげてね」

「うん、そうするよ。龍可の性格じゃあ昔の状態に戻すのは難しいし、俺が何とかするよ」

さすがは兄だとアキ言った

「それと、私キラに用があるんだけどそっちに行って良い？」

「用って何なの？」

「キラと話をする時に言うわよ」

「まぁ良いよ、行こう」

3人はそのまま下校し、龍亞と龍可の家に着くと、リビングの前で頭を押さえてるキラの姿があった

「ただいま～！：って、キラどうしたの？」

「ちょっと、そこで頭を打っただけだよ。お帰り2人共」

龍可はやはり顔を合わせられず「ただいま」と小さく言った

「ねぇキラ、ちょっと話があるんだけど良いかな？」

「アキさん。良いですよ」

「何でデュエルアカデミアに行ってないの？」

突然だったのでポカンとしていた

「えと・・・信じられない話ですけど信じますか？」

「嘘と思うような話じゃない限り信じるわよ」

「俺が過去からタイムスリップしたんです」

キラが真面目な顔をして言うので真実だとは思うのだが、信じられ

る話ではない。だが、キラが冗談を言うような人物ではないのは分かっている

「本当なの？」

半信半疑なので、龍可と龍亞に聞くことにした

「まぁ、よく知ってるのは龍可だけど、デュエルディスクとか見ればそうなんだよ」

「うん。ベランダにいきなり現れたがらビックリしたわよ」

2人が：特に龍可が言うのには説得力があったので信じるしかなかった

「分かった、信じるわよ」

「話ってそれだけですか？」

「ううん、ねぇデュエルアカデミアに編入しない？」

「編入：ですか？」

新生活（後書き）

デュエルアカデミアの話や恋愛に日常の話をだんだんと絡ませていきます

不安（前書き）

題名に意味があるのか・・と思いました。少しはあると思いますが、題名を付けるのって大変ですねｏｒｚ

不安

「編入…ですか？」

突然だったので、キラはポカンとしていた。まさかそんな事を言われるとは思ってなかったと

「えぇ、過去に帰れるのなら話は別だけど…もし帰れないのならデュエルアカデミアに行った方が良いと思って」

「デュエルアカデミア…か…」

キラはこの世界に来る前の事を思い出した。デュエルアカデミアの入学試験の途中で、事件が起こった事を

「どうしたの？」

少しぼんやりしていたようだ

「いえ、デュエルアカデミアの入学試験の最中にこの世界に来た事を思い出したんですよ」

「へぇ～、んじゃあ再試験って感覚で編入試験を受けたら良いじゃん」

「まだ編入するって言ってないよ。学費とか手続きとか必要だから」

あぁ・・・っと龍亞と龍可が納得した。キラにはお金が全く無いのだからだ

「その辺はパパに頼んでみるから。受けてみなさいよ」

「すみませんがそんな事出来ません。親でもなく親戚でもないのに俺のために大金を費やす事は止めてください。それに何で俺なんかのためにそんな事を言うんですか？」

「キラは私に言ったでしょ？『あなたは俺と同じ』だって」

確かに言ったが、それが何の意味を成しているのか分からない

「確か言いましたが、その話とどういう関係があるんですか？」

アキは言って良いのか少し迷ったが、納得させるために口を開いた

「キラには『友だち』がいなかったでしょ？」

龍可と龍亞は驚いた：まさかと言うように。キラは少し悲しい表情になったのをアキは見逃さなかった

「やっぱり・・そうなのね」

「でも、それとどういう関係があるんですか？」

「デュエルアカデミアでいろいろ学びなさいって事よ。学ぶのは勉学だけじゃないのよ」

キラは何も言えなかった。過去の世界でデュエルアカデミアに入学試験を受ける時も『学ぶのは勉学だけじゃない』と思っていたから。だから・・・・

「・・分かりました・・編入試験を受けてみます」

アキの言いたい事は大切な事を学びなさいって言っているようなものだった。それがキラに伝わり、迷った末に承諾した

「そうと決まればパパに教えてくるわ。じゃあね」

「さよなら、アキさん」

龍可と龍亞も挨拶した後、アキは帰っていった。アキが帰った後はやや沈黙が走っていた

さすがの龍亞も何も話題が出て来なかった。まさかキラに友だちがいなかったなんて思ってなかったからだ

「今日のアカデミアはどうだった？」

キラが沈黙を破り、龍亞と龍可に話題を振った

「う、うん・・いつも通りだよ。眠かったよ・・あはは・・」

「そうか・・」

それだけ言ってキラは自分の部屋に戻って行った。龍可と龍亞はその場で安堵の息を吐いた

「何か無駄に緊張感を持った感じだったよ」

「うん・・確かにそうだけど・・アキさんが言ってた『慣れる』の意味が分かったかも・・」

「俺もだよ。避けられ嫌われるって事だよね、でもさ、別に性格が悪いって訳でもってないし、嫌な事をするやつでもないから何で友だちがいなかったのか分かんねぇよ」

「アキさんが言ってたように何か隠してるのね・・それと・・私もキラに対して同じ事をしてる・・」

最後辺りは罪悪感に陥っている感じで落ち込んでいた

「龍可が避けてる理由は逆の意味なんだから大丈夫だって！」

「うん・・」

龍可は少しだけ元気が出てきた。元気づけてくれる龍亞に心の中で感謝してた

だが、結局夜になっても龍可はキラと会話が出来なかった

キラは晩飯と風呂を済ませた後は特になにもする事が無いので、部屋に戻り寝る準備をしていた時だった

コンコンっとドアをノックする音が聞こえた

ドアを開けると龍亞がいた

「どうした？」

「まぁ…ちょっと話があってね…」

今日は結構忙しいなと思うキラだった。中に入り、キラはベッドへ、龍亞は椅子に腰掛けるとキラが口を開いた

「それで話って？」

「龍可の事なんだけど…」

「あぁ…うん、俺も龍可の事で悩んでたんだ。ここを出て行った方が良いかなって…」

「出て行かなくたって良いよ！嫌って避けてるんじゃないんだから」

「そう信じたいよ。でも、信じれない・・」

「何か盾矛してない？」

「違う、正しくは矛盾だ。まぁ、確かに矛盾してるよ」

「と、とにかく出ていくなよ！ずっとここにいて良いからな！」

熱く言う龍亞にキラは驚いた。何故こうも引き止めるのかと

「分かったよ・・でも、１番信頼してた人に裏切られるとさすがに辛いよ」

龍亞は初めてキラの気持ちを聞いたと思った。だが、キラの気持ちを聞いてちょっとニヤッとした

「龍可は裏切ってないよ。ところで龍可を1番信頼してたって所を詳しく聞きたいんだけど」

「この世界に来て初めて会ったのが龍可で良かったって事だよ。正直初めてが龍亞だったら、龍亞が俺を信じてないかもしれない。でも、逆に俺が龍亞を信じてなかったかもしれないから」

「え？んじゃあどうやって打ち解けたの？」

「龍可が精霊を通じて俺を信じてくれたんだよ：」

「俺だってキラを信じたよ！」

「そういう事じゃないんだよ。龍可にあって龍亞に無いものがあるだろ？」

龍可にあって龍亞に無いもの。それは精霊と会話出来ることだ。龍

亞はその事を思ったが、キラの気持ちが分からなかった

「何でさ!?俺は確かに精霊と会話が出来ないけど、龍可だって俺と同じ人間だろ?」

龍亞の言っている事は確かに正しい。だが、それでもキラにとって違う所があった

「そう、龍亞と龍可は力があろうが無かろうが1人の人間だ。でも、俺は・・・」

キラは何かを言いかけて口を閉じた。それ以上は言いたくない・・と

「ごめん、もうこの話は止めよう。俺は寝るよ」

「・・分かったよ・・でも、キラは出て行かなくたって良いからな。おやすみ」

「あぁ、ありがとう。おやすみ」

おやすみと言った後龍亞は部屋から出て行った。ドアが閉まると同時にキラは溜め息を吐き、小さく呟いた

「俺は、龍亞達のような普通の人間が信用出来なかったからだよ……」

この言葉は言いたくなかったから、あの時言うのを止めたのだ

そして、朝を迎えた。龍亞と龍可は今日もアカデミアに登校していった

キラは、遊星達の所に行って、クロウの紹介によって配達のアルバイトの面接を受けに行った。結果は3人一緒に通知すると店長が言った

また遊星達の所に戻って暇を過ごしていると、アカデミアが終わる時間帯になると、1台の車が外に停まっていた。しかもかなり立派な物だ

ドアが開くとアキとアキの父親である英雄が入ってきた

「やっぱりここにいたのね」

「ちょっと失礼するよ。君がキラ君だね」

いきなり入ってきてはキラに名前を聞いてきた英雄に驚いているキ

ラである

「はい、遊城キラです」

「少しキラ君の事を調べさせてもらったが、まさかこんな事があったとはね…」

英雄が1枚のデータを見してきた。遊星達も気になり集まった

そして、その内容は、数年前に1人の少年がデュエルアカデミアの入学試験中に行方不明なった内容だった

だが、1つ気になるのが、行方不明者が出たって小さな話を出しただけのような小さい見出しだった

キラの写真、名前があるのだが、大きな話題となっていなかった

「おい、この記事なんだよ?」

「キラの事について書いてあるようだな」

クロウが気になり、ジャックが内容を読んでみた

「やはり事件になってたんだな‥」

「遊星は何か知ってるのか?」

「‥まあな‥」

「どういう事なんだ?」

「あぁ‥それは‥」

行って良いのかとキラを見ると、「別に良いですよ」と言っているような感じであるため、遊星はジャックとクロウにキラが過去の人物である事を説明した

信じるか信じないかで言うとジャックとクロウは信じた。記事が決定的な証拠だからだ

「それでこの記事が何なんだ?」

ジャックが英雄にそう言った

「いや、事実確認をしたかったんだよ。アキが言ったとおりキラ君が過去の人なのかをね。それとキラ君を編入させる話だが、受けるんだね?」

「はい・・受けますけど本当に良いんですか?」

キラが本当に良いのかと聞くと、英雄は少し困った顔をすると、優しい表情になった

「あぁ、良いんだよ。アキからのお願いでもあるし、君も『サイコデュエリスト』だから学ぶ事があるだろう？」

サイコデュエリストという言葉な遊星とジャックとクロウは疑問に思った。キラは精霊と会話が出来るが、サイコデュエリストじゃないと言っていたからだ

そして、キラは慌てて否定した

「ち、違います！とにかくその話は外でしましょう！」

アキと英雄を外に促すようにキラは出て行った

残された5人は皆、疑問符を浮かべていた。アキと英雄はキラの後を追った

遊星達の家から少し離れたベンチにキラは座っていた

「アキさん・・・話したんですか？」

「えぇ、パパには納得がいくように言っておきたかったから」

キラはそれなら仕方ないとは思い、小さく溜め息を吐いた

「ねぇ、キラの力の事を教えてくれない？」

やっぱり中途半端は嫌だよね・・とキラは心の中で思い、話す決意をして口を開いた

「分かりました。でも、今から話すのは3人の秘密にしてもらえませんか？」

アキと英雄は顔を見合わせ、キラの方を向くと、頷いた

「約束ですよ：」

どこから話そうかと、少し迷い、さっきのを説明した方が良いと思った

「最初に言っておきます。俺はサイコデュエリストではありません」

「どうして？キラは私とデュエルをした時にモンスターを実体化させたじゃない」

「俺はアキさん達のような力を持っていません。ただ、精霊の力を操っているだけです」

「「精霊の…力…？」」

アキと英雄が同時に聞き返した

「それでも納得が出来ないわ。私がモンスターを実体化出来る事と、キラがモンスターを実体化させる事に違いがないわよ」

「そうかもしれません。でも、違いはあります。モンスターの行動…つまり、アキさんの場合はモンスター達を実体化させるだけです。でも、俺の場合はそれを操ります」

アキと英雄は尚更分からなくなってきた。キラは一体何を言いたいのかと…

「じゃあ、キラがモンスター達を操る時に目がオッドアイになるのは何で？」

その言葉を待っていたかのように、重々しく口を開いた

「それは、俺がデュエルモンスターズの精霊だからです」

不安（後書き）

次回はキラ自身からのキラについて、何でモンスターを実体化出来るのか。何故オッドアイになるのかの説明になります

遊城十代と遊城キラ（前書き）

今回は説明ばっかりです。とにかく長いです。理解出来たら幸いですが、多分ごっちゃになってますｏｒｚ

遊城十代と遊城キラ

「それは、俺がデュエルモンスターズの精霊だからです」

少し言いずらそうに口を開いたと思ったら、信じられない事を言うのである

アキと英雄は半信半疑だ。キラが言う事、存在自体がまず驚くべき事ばかりなのに、さらに「自分は精霊だ」と言われても、簡単に信用出来なかった

「すまない・・キラ君。君の言っている事は本当かもしれないが、私にはあんまり信じられないよ・・」

「まぁ、確かにそうですよね・簡単には信じられないとは思ってました」

「でも、キラがデュエルモンスターズの精霊だとしたら、龍可には見えるけど、私達には見えないはずよ」

「それは、俺が人間と精霊のハーフだからです」

「ハーフ?でも、キラ・・え?・・訳が分からなくなってきたわ・・」

アキの頭の中は混乱していた。説明が下手だとかじゃなく、話に付いていけてないだけだ

キラは分かりやすく納得出来る話はないかと考え、父親の事を思い出した

「・・・かなり昔、デュエルアカデミアに精霊と会話が出来る1人の生徒が入学しました」

いきなり何を言い出すのかと、アキと英雄は思ったが、聞いてみる

ことにした

「彼はデュエルが大好きで、いつも楽しむデュエルをやっていました」

ここで、アキはキラの事ではないかと思った。何故なら、キラとデュエルをした時に「楽しいデュエルをしましょう」と言っていたからだ

「1年目に彼はたくさんのデュエリストと出会いました。そして、三幻魔と呼ばれるカードを死守するためにセブンスターズと戦いました。これは、7人：いや、6人のデュエリストによって守られました。でも、セブンスターズのトップに三幻魔は奪われましたが、さっき言った1人の生徒によって奪い返しました」

キラが言っている事は、キラ自身の父親、最も尊敬し、大好きな父親の遊城十代の話だ。十代とその仲間達とセブンスターズと七星門の鍵を賭けた戦いの事だ。そして、最後は影丸理事長と十代がデュエルをして、三幻魔を奪い返したのだ

「そして、彼は2年生に進級しました。2年生なって、さらに仲間も増えましたが、1人のプロデュエリストとデュエルをして、彼は負けました。その時、彼の身に異変が起きました。カードが全て真っ白に見え、さらに精霊と会話が出来なくなりました」

アキと英雄はキラの話をしているのかと、思ったが、ハズレだった

そして、キラは続けるようにまだ話を続けている

「彼は苦しくなって、デュエルアカデミアから出ていきました。だけどその時、彼に隕石が落ちて、彼は木星に瞬間移動されました」

なんかSF的話になってきたなと思うアキと英雄だった

「そこで、彼は新たな精霊と出会いました。宇宙の波動を受けた戦士、『ネオスペーシアン』と・・・」

「聞いた事はあるわ・確か『E・HERO　ネオス』だったわよね

：それと『ネオスペーシアン』と呼ばれる6体のモンスターよね？」

「そうです。『ネオスペーシアン』と『ネオス』は彼が小さい頃に海馬コーポレーションが子供達に、新しいカードを考えてほしいと企画して、彼がそれに、応募して『ネオスペーシアン』と『ネオス』が誕生したんです」

「でも、何で時間差が出て、出会ったの？」

アキが言いたい事は、十代が幼い頃に応募したカードが何故、十代が高校生になった時に出会ったのかと言う事だ

「それは、『ネオスペーシアン』と『ネオス』に宇宙の波動を受けてもらう為に、宇宙に飛ばしたからです。それと、出会った時期が、宇宙で正しき闇と破滅の光が激突していて、彼が正しき闇の力を持つものだったからです」

「正しき闇の力？」

「光が正義で、闇が悪とは限らないんです。ただそれが逆だっただけです。彼は悪ではなく、正義の闇と言うやつです。話を戻しますね：彼は新しい力を手に入れ、精霊とまた会話が出来るようになりました。彼がデュエルアカデミアに戻る頃に、デュエルアカデミアでは異変が起きていました。破滅の光を持った者が、光の結社と呼ばれるグループをデュエルアカデミアの生徒と結成しました。破滅の光を持つ者にデュエルアカデミアが段々と支配されていっていたのです」

「破滅の光を持つ者が敵って事ね」

「そうです。でも、彼がデュエルアカデミアに戻ってきて、破滅の光に染まっていっている生徒を少しずつ解放しました。後は解放された仲間によって光に染まった生徒達が解放されました。そして、最後は彼と破滅の光を持つ者がデュエルをして、彼が勝利し、破滅の光は消滅しました」

これで、二区切りがついたとアキと英雄は思った

「彼は3年生に進級した時に、４人の留学生と1人の教師が来ました。その中に、精霊と会話が出来る留学生が1人いて、彼とは親友

の間柄になったんです。3年生になって1人の教師によって、とあるシステムが導入されました。名前は確か・・・デスデュエル・だったかな」

「デスデュエルって？」

「デスデュエルってのは腕にデスベルトという腕時計みたいな機械を装着して、その日に行ったデュエルの成績を親機にデータを送るんです。そして、学業などを成績にするのではなく、デュエルだけを成績に取り入れるシステムです」

「デュエルだけを成績って・横暴じゃないの？」

「確かに横暴ですよ。でも、機械自体に問題もありました。デュエルを行った後、気だるさを訴える生徒が続出したんです」

「そのデスベルトってやつから気力を吸い取ってたって事ね・」

アキは少しは話に着いて来れてるみたいだが、英雄は全く話に着いていけてなかった

「多分そうです。まぁ、そこら辺の事はあんまり教えてもらってないです。とりあえず話を続けます。デスデュエルに彼とその仲間達も参加していて、彼等はデスデュエルの異変に気付いて、デスデュエルシステムを行った先生の下へ行ったんです。でも、途中に彼は1人の教師とデュエルをした時に言われたそうです。『君には背負うものが無い』っと・・・」

「背負うもの？彼はただ楽しくデュエルをしていただけって事？」

「そうです。でも、先生の下へたどり着いてデュエルをした時に、彼は親友に『俺達の希望をお前は背負ってる』って言われたんです。そして、デュエルには勝ったんですが、異変が起こったんです」

「異変って？」

「デスデュエルシステムを行った先生は、左腕に精霊を宿していたんです」

「左腕に精霊って…どういう事なの？」

「俺には分かりません。先生は、精霊の言われるがままにいろんな事をしてきたんです。ただ左腕の精霊が言っていた亡くなった養子に会うために…でも、結局願いが叶うことなく、先生は彼等の目の前で亡命しました」

「亡命って…何で！？」

「転落死です。場所が場所だったようです。そして精霊の力によって、彼等とアカデミア本校は精霊世界に飛ばされたんです」

「キラや龍可が行ったような世界ね」

「う～ん…ちょっと違います。精霊世界はこの世界を含めて１２の世界に別れてるんです。その内の１つに飛ばされたにすぎません。精霊世界に飛ばされた彼等は現実世界に戻るためにいろいろと探っ

たんです」

「それで、戻れる方法が見つかったのね」

「はい、より大きなエネルギーを発生させると戻れるんです…でも、彼等を精霊世界に飛ばした精霊が邪魔をしたんです。彼等は難関を潜り抜けて現実世界に戻れたんです。でも、現実世界に帰る前に彼の親友は現実世界に戻ってこれず、彼は昔、精霊世界に飛ばした精霊のカードを持っていたことを思い出したんです。それが『ユベル』のカードです」

「ユベルって、あの悪魔族のモンスターよね。でも何で昔なの？」

「彼が幼い時のエースモンスターがユベルだったんですよ。でも、彼は負ける事が多かったんですが、ユベルが力を使って対戦相手を意識不明の重態にさせたんです。それが何度も繰り返されましたが、海馬コーポレーションの力を借りてユベルのカードに宇宙の波動を与えるために宇宙に飛ばしたんです」

「宇宙に飛ばしたって…何だか話が大きくなったわね」

「すまないキラ君・私には全然分からないよ」

「すみません、んじゃあちょっと話を省略します。精霊世界に取り残された親友を助けるために彼等はまた精霊世界に行ったんです。そこでまたいろいろと事件が起きたんです。彼の仲間達がデュエル中に消えて、それが『超融合』を作るための材料だったんです」

超融合・・・アキは聞いた事はあるが、幻のカードであるため、実際に見たことがなかった

「仲間達が消える瞬間を目の当たりにした彼は、心を閉ざした時に、心の中に眠っていた覇王の力が目覚めたんです。正義の闇の象徴でもある覇王の力が・・・でも、彼が目覚めた力は悪の方だったんです・・・覇王の力によって、超融合のカードを完成させて、精霊世界を混乱させたんです。しかし、まだ消えてない彼の仲間が助けに来て、彼の心を開かせたんですが、また仲間は消えたんです」

「待って、その仲間が消えるってどうやってなの?」

「デュエルですよ、超融合の材料された仲間達は別として、デュエルに負けると別の世界に飛ばされるんです。まぁ、俺には分からないんですけどね：そして、彼は親友と再会する事が出来たんですが、親友はユベルに操られてたんです。でも、超融合の力によって、親友は助かりました」

「助かりましたって何か引っかかる言い方ね：」

「肝心なユベルが残っているからですよ。最終的に、彼とユベルはデュエルを行ったんです。そして、デュエルの最中に覇王の力を我が物にする事で、彼の仲間達を助ける事が出来る事を知り、彼は再び覇王の力を目覚めさせたんです」

「覇王の力がそんなに関係あるの？」

「あるんです。彼はまだ幼かったんです。覇王と彼は2つで1人の人間です。覇王の力は破滅の光に対抗出来るんです」

「破滅の光って…んじゃあ、まさか…ユベルが…」

「う～ん…半々って所です。ユベルは宇宙に飛ばされた時に、破滅の光を浴びたんです。そしてユベルは元々彼と彼の前世の彼を守らなければならない者だったんです」

「何か色々と複雑ね…」

悩んでるように顎に手を当てるアキを見て、「（理解してるんだ）」と思ったキラ

「彼は前世の事を知り、ユベルと決着をつけたんです」

「決着って、やっぱり彼が勝ったのね」

キラは悲しい表情で首を横に振って否定し、ゆっくり口を開いた

「・・・超融合の力を使って、彼とユベルが融合したんです」

「融合って・・・人間と精霊が融合したの!?」

「そうなんです。そして彼とその仲間達は現実世界に帰れたんです。その後彼は卒業しました。その卒業生の名前は遊城十代」

この時アキと英雄の中に何かが引っかかった。そして、先に英雄が気付いた

「もしかして:遊城十代って、君の父親かい?」

「そうです。俺の父さんはユベルと融合した人間です」

アキと英雄は今の話がまさかキラの父親の話だとは思っていなかった。キラはデッキから超融合のカードとデッキが入ってるデッキホルダーとは別のホルダーからカードを1枚取り出した

「これが、『超融合』のカードです」

超融合のカードをアキに渡すとマジマジと眺めていた

そして、あまり言いたくはなかったが、話すと決めたからには話すと思い、もう1枚のカードを見せた

「そして・・・これが、精霊の姿の俺です」

アキと英雄はキラが見せたカードを見て驚愕した

「これ・・・本当にキラ・なの？」

「本当です。こうすればそのカードと同じです」

キラの両目がオッドアイになった。アキはカードとキラの目を確認すると目の色が全く一緒だ

「どうです？『ライア』としての俺の姿は醜いでしょう？」

カードの：キラの精霊としての名前はライアだ。キラの質問に2人は答える事が出来なかった。否定しても慰めにもならず、肯定する事など出来ない

「何で名前が『ライア』なの？」

「嘘をついてるからです。俺は人間の姿と精霊の姿の2種類を持つ者です。片方は本当の姿でも、片方は偽りの姿。って事で、ユベルが命名してくれました」

「さすがに名前をライアって：酷いわよ：」

「酷くないです。父さんは反対しましたが、俺はユベルが正しいと思うからライアって名前にしたんです。ちなみに、このカードのデザインはペガサス会長さんがやってくれました」

「ペガサス会長って!?あの昔のインダストリアル・イリュージョン社の社長さん!?」

「はい、まさかペガサス会長さんに会えるとは思ってませんでしたよ」

「キラって・本当に何者なの・・・?」

「俺はキラでもあり、ライアでもあるんです。とりあえず纏めると、俺はライアとして、サイコデュエリストではなく、精霊の力を使っているんです」

「一応は理解出来たわ・パパは?」

「アキよりは理解してないが、キラ君がサイコデュエリストではなく、精霊の力を使っている事は理解したよ」

キラは分かってくれたと、安堵の息を吐いた

「そこまで分かってくれて良かったです。とりあえずこれからお世話になります」

ベンチから立ち上がり、英雄に向かっていろんな意味を込めて一礼した

「良いよ。これから頑張るんだよ」

「はい！」

そして、これからキラの編入するための勉強が始まるのだった

遊城十代と遊城キラ（後書き）

次からは編入するまでの準備期間です。龍可との微妙な関係も書きたいと思います

勉強（前書き）

あんまりサブタイトル関係ないと思います。

そして、長らくお待たせしました。久しぶりの更新です。

遅い更新になってすみません

勉強

編入の準備を英雄が着々と進める中、やるべき事が２つある

１つ目は、編入届に記入をしなければいけないのだが、いろいろと偽って書かなければいけないからだ

２つ目は、勉強だ。キラの成績が良いのか良くないのか分からない以上、勉強をさせなければいけない

２つの問題を解決させる為に、いつものメンバー全員が十六夜家に集まっていた

遊星とアキとジャックとクロウが、ダイニングで４人で試行錯誤しながらテストを作っていた

英雄達はリビングで編入届にいろいろと書く中、龍可と龍亞が住所などを教えて、キラが年などを教えていた。

キラの年齢が１３歳なので、それに合わせて生年月日を変更した。

順調に進める中、保護者欄の所で英雄が自分の名前を書こうとした時、キラに止められた

「ちょっと待って下さい。そこは、俺の父さんの名前を書いて下さい」

「でも、キラ君。今この時代にキラ君の父親はいないのだろう？」

「それでも、俺の親は遊城十代ただ１人です！」

「ちょっとキラ落ち着きなよ。保護者だよ？キラの父さんの名前を書かなくても・・」

「いや！絶対にそこは父さんだ！」

龍亞と龍可は呆気にとられた。キラがデュエル以外で熱くなってるのを初めて見たからだ。

「確かにキラ君の父親は1人だけど、あくまで保護者なのだよ。だから‥」

「それでも、保護者は‥っつ‥」

後を言いかけた時に、急に頭を押さえる。

「どうしたの？」

「いや、なんでもないよ‥」

何があったのか疑問に思った時に、遊星達がリビングに入ってきた

「急に騒がしかったんだが、どうしたんだ？」

「それがね、キラの保護者の所で問題があったの」

遊星の問いに、龍可が答えた。どんな問題かは４人は予想がついたが、そんなに問題なのかと思った

「私が保護者欄の所に自分の名前を書こうとした時に、キラ君に止められてね・・。どうしてもキラ君の父さんの名前を書いて欲しいらしい」

「そうですか・・ですが、あなたはアキの父親です。それに、議員の仕事も忙しいでしょうから、キラの保護者の名前は俺の名前を書いて下さい」

英雄は遊星の言葉に説得され、「分かった」と言うのだが、やはりキラは納得がいってなかった

「キラ、お前の父親に対する気持ちは分かるが、我慢をするんだ。キラの父親はどうであろうと変わらない」

遊星に説得され、キラはあまり納得がいってなかったが、渋々了承した。龍可達は遊星とキラの姿を見て、遊星が保護者でぴったりじゃないのかな：むしろ兄弟みたいだと思っていた。

問題が解決したと見て、クロウが口を開いた

「話は纏まったみてぇだから、テストをやるぞ」

「テストって：もう出来たんですか？」

「あぁ、俺ら４人で考えたテストだ。ちょっとばかり難しいかもし

れねぇが、頑張れよ」

「この俺様が、試行錯誤して考えた問題もあるからしっかりと答えろよ」

「ちなみに龍可と龍亞の分もあるわよ」

いきなり振られて、龍亞は思いっきり嫌な顔になった

「え？何で俺達の分まであるんだよ？」

「別に良いじゃない。勉強になるわよ」

龍亞は嫌そうでも、龍可は普通だった

「勉強って・・・俺は筆記より実技の方が良いよ・」

「ぶつぶつ言ってないでさっさと始めるわよ」

アキの一言で、龍亞は押し黙った。3人は筆記用具を取り出すと、テストをする準備を整えた

「じゃあ、私はこの編入届を届けてくるよ」

英雄はそれだけ言って、編入届をデュエルアカデミアに届けに行った

アキが3人にテスト用紙を配って、スタートの合図を言うと、キラ達はテストに目を通した

時間になって、終わりの合図を出す前に、３人ともペンは置いていた。アキが３人のテスト用紙を回収すると、早速採点を始める

「そういえば、キラってこっちの世界に来る前って、入学試験だったんでしょ？その時の順位って何番だったの？」

「あの時は・・・確か３２番でした」

「何人中？」

「え～っと、約１００人中です」

「って事は、勉強は少しは出来るって事なのね」

キラが少しは勉強が出来ると思ったアキだが、クロウは疑問に思う事があった

「ちょっと待てアキ、キラがいた時代と、この時代じゃあ、勉強の内容が変わってるから分かんね～じゃねぇか？」

「そう言われればそうね：シンクロ召喚の事も私が教えたし：」

アキが、龍亞と龍可の採点が終わり、キラのテストの採点をしてる時にペンが止まった

「うん：ちょうどシンクロ召喚及びシンクロモンスターの問題の所なんだけど、キラの解答は全部空欄になってるわ」

キラ以外全員が、キラのテストを覗き込んだ

「すみません。教えてもらった時は感覚で覚えたんです。まだ、説明とかは出来ません」

「うん…まぁ、一応筆記テストは合格かもしれないけど、念の為勉強する必要があるわね…龍可は良いとして、龍亞はしっかりと勉強しなさい」

アキの厳しい一言に龍亞は苦笑するしかなかった

「たはは…んまぁ、それはそれとして、次は実技だね！遊星！デュエルだ！」

「龍亞！今はキラの為にやるのよ。キラ、私達の中でデュエルしたい相手を選びなさい」

キラは、遊星、ジャック、クロウ、アキ、龍可、龍亞とそれぞれを見渡して考える。

「遊星とは、フォーチュンカップで言っていたようにデュエルをやりたい。ジャックのパワーデッキのデュエルもしたい。アキさんと

は1度デュエルをして、負けてますからリベンジとしてデュエルをしたい。龍亞とはいつデュエルをやっても楽しいから龍亞ともやりたい。龍可の妖精デッキともデュエルをしたい」

それぞれの顔を見ながら、一言一言言っていた。そして、クロウの所で顔を止めた

「でも、クロウのデッキがどんなのかは知りません。だから、今1番クロウとデュエルがしたいです」

「おう！俺もキラがどんなデッキか知らねぇからな。わくわくするじゃないか」

勉強（後書き）

前回辺りのあとがきに書いてたと思いますが、訂正します。龍可とキラの関係の修復はもう少し後になります

次はキラとクロウのデュエルです

久しぶりのデュエルだ・・・

キラVSクロウ　実技模擬試験（前書き）

久しぶりの更新です。

そして、更新がかなり遅くなってすみません

今回のデュエルで納得がいかない部分があると思いますが、そこはご了承下さい

キラＶＳクロウ　実技模擬試験

皆外に出て、キラとクロウは決闘盤を起動させて、距離を取った

「準備は良いか？」

「はい、いつでもどうぞ」

「じゃあ、実技模擬試験を始めるぜ！」

「「デュエル！！」」

キラＬＰ４０００
クロウＬＰ４０００

「先攻はチャレンジャー、キラからだ」

「楽しいデュエルにしましょう！俺のターン、ドロー、（クロウがどんなデッキか分からない：最初は防御に徹してみよう）俺はクレイマンを守備表示で召喚し、カードを1枚セットしてターンエンド」

E・HERO クレイマン
DEF2000

「キラ完全に防御に徹してるね」

「多分小手調べをしてるんだろう。相手がどんなデッキか調べてるんだ」

「だが、クロウはあの壁モンスターを貫く」

上から龍亞、遊星、ジャックと思い思いの事を口にした

「行くぜ！俺のターン！ドロー、相手フィールド場にモンスターが存在し、自分フィールド場にモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで召喚ができる！『ＢＦ－暁のシロッコ』を召喚！」

ＢＦ－暁のシロッコ
ＡＴＫ２０００

「リリースなしでレベル５のモンスターを召喚！？（でも、攻撃力はクレイマンの守備力と同じ・・・）」

キラは暁のシロッコにクレイマンが破壊できないと思っていたが、その考えは甘かった

「さらに！自分フィールド場に『ＢＦ－黒槍のブラスト』以外の『ＢＦ』と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる。『ＢＦ－黒槍のブラスト』を特殊召喚！」

ＢＦ－黒槍のブラスト
ＡＴＫ１７００

「モンスターをさらに召喚!?モンスターが2体揃ったって事は…シンクロ召喚か?」

「いいや、俺の場にはチューナーモンスターがいないからシンクロが行えないんだよ」

「え?んじゃあ何の為にモンスターを2体召喚したの?」

キラの言葉を聞いて、クロウは口元をニヤつかせた

「今からやってやるぜ!暁のシロッコのモンスター効果を発動!自分フィールド場の『ＢＦ』と名のつくモンスター1体を選択、つまり黒槍のブラストを選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力はそのモンスター以外のフィールド場に表側表示で存在する『ＢＦ』と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする。だが、この効果を発動したターンは、選択したモンスター以外のモンスタ

ーは攻撃が出来ないけどな」

ＢＦ－黒槍のブラスト
ＡＴＫ１７００→３７００

「こ・・攻撃力３７００！？」

「バトル！黒槍のブラストで、クレイマンに攻撃！『デス・スパイラル』！」

通常より遥かに大きくなった黒槍のブラストがクレイマンに向かって、槍で貫いた

「くっ・・・・」

キラＬＰ４０００→２３００

「黒槍のブラストは貫通ダメージを与えるぜ」

「貫通ダメージか：リバースカードオープン！『ヒーロー・シグナル』！自分フィールド場のモンスターが戦闘によって破壊され墓地に送られた時に発動できる。『Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン』をデッキから守備表示で特殊召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン
ＤＥＦ２０００

「へっ…やるじゃねぇか。カードを1枚セットしてターンエンド」

ターンエンドと聞いて、キラは安堵の息を吐いた。まだ、クロウのデッキを把握してないが、いきなり膨大なダメージを受けたが、なんとか堪えてるからだ

「クロウのやつ、最初から飛ばしてるな：」

「でもさジャック、あれは多分試験官よりデッキが強いんじゃないの？キラが凄く押されてるよ」

「確かに、キラにとって初めての相手でもあるし、クロウはかなり強い」

ジャック、龍亞、遊星がまた、今の現状を語っていた

「下手をすればキラはコテンパンにされるかもしれないな」

そして、ジャックが一言言った時、龍可がそれを否定した

「コテンパンになんかされないわよ」

「どうしてだ？」

「遊星とジャックと龍亞が思っている以上にキラは強いからよ」

「確かにそうだな…俺達はキラの事をあんまり分かってないな…」

「それに、龍可を助ける程の実力を持ってるからね…」

龍亞がからかいを入れると、顔を真っ赤にして龍可は黙る

「俺のターン、ドロー！（あのモンスター…2体とも『ＢＦ』って名前がある。って事は、クロウのデッキはＢＦデッキだ。それに、あの2体はお互いにお互いをサポートしあってる…さらに出されたら厄介だ）スタンバイフェイズに、フォレストマンの効果を発動！デッキから『融合』を1枚手札に加える。そして、手札から融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合して、『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』を融合召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン
ＡＴＫ２１００

「融合召喚!?（キラのデッキは『Ｅ・ＨＥＲＯ』：って事は、『融合』を主に使うって事か）」

「バトル!フレイム・ウィングマンで暁のシロッコに攻撃!『フレイム・シュート』!」

フレイム・ウィングマンが自身に炎を纏って、暁のシロッコに突撃して破壊した

「くっ……」

クロウＬＰ４０００→３９００

「さらに、フレイム・ウィングマンのモンスター効果を発動!戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える」

「何!?」

クロウＬＰ３９００→１９００

「良し！カードを１枚セットしてターンエンド」

ライフポイント、そして、フィールドの逆転を行う事が出来て、キラはガッツポーズをした

「まさか逆転されるとはな…俺のターン、ドロー！俺はチューナーモンスター！『ＢＦ－銀盾のミストラル』を召喚！」

「チューナーモンスターって事は…今度こそシンクロか！？」

「そういう事！レベル４の黒槍のブラストに、レベル２の銀盾のミストラルをチューニング！漆黒の力、大いなる翼に宿りて新風を巻き起こせ！シンクロ召喚！吹きすさべ『ＢＦ－アームズ・ウィング』！」

２＋４＝６

ＢＦ－アームズ・ウィング
ＡＴＫ２３００

キラは遂に、クロウにシンクロ召喚を許してしまった。

「そして、手札からマジックカード『アゲインスト・ウィンド』を発動！自分の墓地に存在する『ＢＦ』と名のついたモンスターを１体を手札に加え、そのモンスターの攻撃力分のダメージを受ける。俺は黒槍のブラストを手札に加える」

クロウＬＰ１９００→２００

「またその貫通モンスターか…」

「行くぜ！黒槍のブラストを特殊召喚！」

ＢＦ－黒槍のブラスト
ＡＴＫ１７００

「バトル！黒槍のブラストで、フォレストマンに攻撃！」

「フォレストマンの方が守備力が高いのに…また攻撃力を高めるのか！？」

「その通りだ！ダメージステップ時に手札の『ＢＦ－月影のカルート』を墓地に送って効果を発動！自分フィールド場の『ＢＦ』と名のつくモンスター１体の攻撃力をエンドフェイズ時まで１４００ポイントアップする！」

「何！？」

黒槍のブラストの槍がフォレストマンを貫いて破壊した

「くっ…」

キラＬＰ２３００→１２００

「続いてアームズ・ウィングでフレイム・ウィングマンに攻撃！『ブラック・トルネード』！」

「この攻撃を受けたらマズい…罠カード発動！『ドレインシールド』」

アームズ・ウィングが襲いかかって来た時に目の前に光の壁が現れ攻撃を受け止め、それが光となってキラを包んだ

キラＬＰ１２００→３５００

「ちっ…止められたか…俺はターンエンド」

「俺のターン、良し！手札からマジックカード『融合解除』を発動！フレイム・ウィングマンをエクストラデッキに戻して、墓地に存在する融合素材とされたフェザーマンとバーストレディを特殊召喚！」

フレイム・ウィングマンが光に包まれ、２つに分裂して、フェザーマンとバーストレディが姿を現す

「融合解除？狙いはアドバンス召喚か」

「その通り！フェザーマンとバーストレディをリリース！さぁ、エースの登場だ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』をアドバンス召喚！」

クロウはシンクロ召喚、逆にキラはエースモンスターであるゼクスを召喚した。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス

ＡＴＫ２５００

「行くぜ！ゼクスで、アームズ・ウィングに攻撃！『ラスター・オブ・ゼクス』！」

ゼクスがアームズ・ウィングに向かって走り出した

「そう簡単にやられないぜ！リバースカードオープン『フェイク・フェザー』！手札から『ＢＦ』と名のついたモンスター１体を墓地に送り、相手の墓地に存在する通常罠カードを１枚を選択して発動する。このカードの効果は選択した通常罠カードの効果と同じになる！俺はキラの墓地の『ドレインシールド』を選択するぜ！」

「何！？」

ゼクスがアームズ・ウィングを蹴ろうとした時に光の壁に止められ、攻撃が中断された

クロウＬＰ２００→２７００

「そんなカードがあるとは思わなかったよ・カードを１枚セットしてターンエンド」

「俺も実際はヒヤヒヤしたよ。俺のターン、ドロー：黒槍のブラストとアームズ・ウィングを守備表示に変更、そしてカードを１枚伏せてターンエンド」

ＢＦ－黒槍のブラスト
ＤＥＦ８００

ＢＦ－アームズ・ウィング
ＤＥＦ１０００

「俺のターン、ドロー。バトル！ゼクスでアームズ・ウィングを攻撃！『ラスター・オブ・ゼクス』！」

今度はゼクスの攻撃を防ぐ術が無く、ゼクスがアームズ・ウィングを蹴り上げて破壊した

「（念には念をだ・・）ゼクスに『ゼクター・ハンマー』を装備！そして、フォルムチェンジ！『ゼクス』と『ゼクター・ハンマー』を墓地に送って、『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス・ハンマーフォルム』を融合召喚！」

ゼクスがベルトからゼクター・ハンマーを取り出すと、カラーが緑に変色した

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス・ハンマーフォルム
ＡＴＫ２５００

「そしてターンエンド」

「ねぇ、前々から気になってたんだけど、キラのエースカードの『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』ってカード知ってた？」

突然のアキの問いだが、遊星達は顔を横に振った

「皆知らないようね…キラは過去の人だけど、あのカードも過去にあるカード。でも、キラにとって未来の人達である私達はゼクスというカードを知らない…これってどういう事なの？」

「あぁ…ごめんアキ姉ちゃん。言ってる意味が分かんないよ」

龍亞だけが、アキの言っている意味を理解してなかった

「龍亞。つまり、こういう事だ。龍亞の持っている『パワー・ツール・ドラゴン』を昨日まで持っていたとする」

「何行ってんの遊星？パワー・ツールは今も持ってるよ」

「これはあくまで仮定の話だ。龍亞の持ってる『パワー・ツール・ドラゴン』が昨日まであって、今日は無くなっているんだ」

「え？それって何があったって言うの」

「分からない。だが、アキの言っているのはこういう事だ」

遊星の説明で、アキの言っている意味を理解した龍亞だった

「俺のターン！ドロー！へっ、行くぜ！『ＢＦ－そよ風のブリーズ』を召喚！レベル４の黒槍のブラストに、レベル３のそよ風のブリーズをチューニング！黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！シンクロ召喚！『ＢＦ－アーマード・ウィング』」

３＋４＝７

ＢＦ－アーマード・ウィング
ＡＴＫ２５００

「バトルだ！アーマード・ウィングでゼクスに攻撃！『ブラック・ハリケーン』！」

アーマード・ウィングが、拳を構えて、ゼクスに飛んでくる

「攻撃力が同じなのに攻撃!?同士討ちか?」

「残念だが、アーマード・ウィングは戦闘では破壊されないんだぜ」

クロウは得意気にアーマード・ウィングの効果を説明するが、キラにも秘策があった

「クロウ。残念ってのはこっちの台詞だよ。ゼクス・ハンマーフォルムの効果を発動!ゼクス・ハンマーフォルムが戦闘を行う場合、1ターンに1度だけダメージ計算を行わず、相手モンスターを破壊する!」

「んな!?なんだとぉ!?」

「ゼクス！迎撃だ！『クラッシャー・フィスト』！」

ゼクスのハンマーとアーマード・ウィングの拳がぶつかり合い、アーマード・ウィングが力負けして破壊された

「くそっ、そんな効果があったとは：ターンエンド」

「（行ける！）俺のターン！バトル！ゼクスでダイレクトアタック！」

今度はゼクスが攻撃を仕掛けてきたが、またもやクロウは次なる一手を発動した

「まだまだ終わらないぜ！罠カード発動！『ＢＦ－バックフラッシュ』」

ゼクスがクロウの目の前まで接近した時に、５体のブラックフェザ

ー達が現れ、ゼクスと共に爆発し、ゼクスが破壊された

「なっ・・」

「『ＢＦ－バックフラッシュ』は自分の墓地に『ＢＦ』と名のついたモンスターが5体以上存在する場合、相手の直接攻撃宣言時に発動できる。相手フィールド場のモンスターを全て破壊するぜ」

「（この巧みの戦術・・）」

「（魔法、罠、モンスターの使い方・・）」

「（そして、素早いシンクロ・・）」

「（そして、巧みな融合・・）」

「（クロウは・・）」
「（キラは・・）」

「「（・・・強い！）」」

互いが互いに認め合い、強さを意識した瞬間だった

「俺はこのままターンエンド」

「俺のターン！『ＢＦ－疾風のゲイル』を通常召喚！」

ＢＦ－疾風のゲイル
ＡＴＫ１３００

「キラ！お前が何かをしない限り、このターンで終わらすぜ！」

クロウの突然の勝利宣言にキラは驚き焦りだした

「（このターンでクロウの勝ち？クロウの手札は０。フィールドには疾風のゲイル１体のみ、俺のライフの３５００には届かない・・・）って事は墓地か！？」

「良い読みしてるじゃねぇか！墓地にある『ＢＦ－大旆のヴァーユ』の効果を発動！墓地に存在するこのカードとチューナー以外の『ＢＦ』と名のついたモンスター１体をゲームから除外して、そのレベルと同じレベルの『ＢＦ』のシンクロモンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する！」

「墓地からシンクロ！？」

「ちょっと違うな。シンクロ召喚じゃねぇんだ。大旆のヴァーユの効果で、特殊召喚されたモンスターの効果は無効化されるんだ。行くぜ！墓地の大旆のヴァーユとアーマード・ウィングをゲームから除外！出でよ！『ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド』！」

ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド

ＡＴＫ２８００

「このまま攻撃されたら負けだ！罠カード発動！『スピリッツ・フュージョン』！ライフを１０００ポイント払って墓地に存在するモンスター２体をゲームから除外して融合する！」

「な！？．俺と同じ事を！？」

キラＬＰ３５００→２５００

「墓地のフェザーマンとバーストレディをゲームから除外！『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』を融合召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ
ＡＴＫ２８００

「（罠融合とは・・・こいつは予想外だったぜ・・）攻撃力は一緒だが、疾風のゲイルで攻守を半分にするぜ！」

「それはこっちも同じだ！グレイトトルネードが融合召喚された時、相手フィールド場の表側表示で存在する全てのモンスターの攻守を半分にする！」

「そこまで一緒なのかよ！？」

やるべき事はお互いに似ていた。クロウは墓地からチューナーとチューナー以外のモンスターをゲームから除外して、シンクロモンスターを特殊召喚。キラは墓地からモンスター2体をゲームから除外して、融合モンスターを融合召喚。そして、お互いに攻守を半分にした

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ
ＡＴＫ２８００→１４００
ＤＥＦ２２００→１１００

ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド
ＡＴＫ２８００→１４００
ＤＥＦ２０００→１０００

ＢＦ－疾風のゲイル

ＡＴＫ１３００→６５０
ＤＥＦ４００→２００

「ここまで来たらやるしかねぇか：バトルだ！孤高のシルバー・ウィンドで、グレイトトルネードを攻撃！」

「迎撃しろ！グレイトトルネード！」

孤高のシルバー・ウィンドとグレイトトルネードがぶつかり合い、攻撃力が同じなので、相討ちになった

「疾風のゲイルでダイレクトアタック！」

疾風のゲイルがかまいたちを放って、キラにダメージを与えた

キラＬＰ２５００→１８５０

「俺はターンエンド」

「俺のターン！マジックカード『ホープ・オブ・フィフス』！墓地に存在する『Ｅ・ＨＥＲＯ』を5体デッキに戻してシャッフルする」

墓地にある『Ｅ・ＨＥＲＯ』はクレイマン、フォレストマン、ゼクス、ゼクス・ハンマーフォルム、グレイトトルネードの丁度5体。
デッキに戻して、自動的にシャッフルされ、そして止まった

「そして2枚ドローする！」

引いたカードを見るなりキラは勝利の笑みを浮かべた

「クロウ、このターンで終わりだ」

「なるほど・・融合か・・」

クロウは分かってるように予想している事を言った

「当たり！手札からマジックカード『平行世界融合』を発動！除外されているフェザーマンとバーストレディをデッキに戻して、『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』を融合召喚！」

「融合する素材はどこからでも出来るのかよ！？」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン
ＡＴＫ２１００

「そして、『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』を通常召喚」

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン
ＡＴＫ１６００

「さぁ！舞台は整った！フレイム・ウィングマンで疾風のゲイルに攻撃！『フレイムシュート』！」

フレイム・ウィングマンが炎を放ち、疾風のゲイルが破壊された

「くっ…」

「さらに！フレイム・ウィングマンの効果を発動！」

「破壊したモンスターの攻撃力分のダメージってか…」

クロウＬＰ２７００→６００

「とどめだ！『スパークフラッシュ』！」

スパークマンがクロウにとどめの一撃を放ち、クロウのライフを０

にした

クロウＬＰ６００→０

「まさかクロウが負けるとはな・・」

「ジャック達の想像を凌駕してるくらいキラは強いのよ」

「確かにそうだな・キラとデュエルするのが楽しみになったよ」

遊星の言葉に全員が納得した

クロウとキラはお互いに向かい合って、笑い合ってこう言った

「「楽しいデュエルだったぜ！」」

クロウがキラに対する実技模擬試験の結果は合格だった

だが、あくまで実技『模擬』試験である。編入試験はもう間近に迫っている

キラVSクロウ　実技模擬試験（後書き）

っというわけで、キラを勝たせました

納得がいかなかった方は本当にすみません

次は編入試験です

特別企画　1周年記念（前書き）

何だこのグダグダとした話は・・・書いてて楽しかったが、あんまり意味が分からん・・

この話にあるこの日というのは１０月５日の事です。ちょっと遅めな更新になりました

特別企画　1周年記念

ばば～ん！っと言うわけで「遊戯王５Ｄ'ｓ～遊城を受け継ぐ者～」を連載して1周年が経ちました！

キ「1周年って・・・あっと言う間だったね」

可「ぜんぜん更新してないけどね」

おっと・・グサッと来る言葉を言うね。

可「だってそうじゃない」

いや・・まぁ、いろいろあるんだよ↑単なる言い訳だと願いたい

とりあえず皆さん。おはようございます。こんにちは。こんばんは。
どうも作者の遊です

キ「主人公のキラです」

可「え～っと：龍可です。って私の立ち位置って何？」

そりゃあヒロインでしょ。カップリング的にも勝手に決めちゃってるし

可「わ：私がヒロインで良いの！？」

いや、もう勝手に決めちゃってるし

可「で、でも私は良いとしても：キラがどうか分からないし：／／／」

っとの事ですが、キラはどうなの？

キ「カップリングって何？」

あ～・・・まぁ、予想はしてたけど、遊城十代の息子だから仕方ないか（ボソッと

キ「え？父さんが何？」

遊城十代の名前に反応するな！

ア「それほどお父さんが大好きなのよ」

おっと・・ここでアキの登場ですか。では、自己紹介をどうぞ

ア「龍可はヒロインだとして私の立ち位置は？」

ん～…５Ｄ’ｓ本編では、ヒロインだけど、この物語では…準ヒロインでしょ。カップリングは遊星とだし

ア「遊星とだなんてそんな／／」

いや、照れてないで自己紹介を

ア「そうね。準ヒロインの十六夜アキです」

亞「ねぇ、皆して何してんの？」

龍亞まで登場かい！

可「龍亞、自己紹介だって」

キーー！ドン！！

亞「キラ！あの人ヤバいんじゃない！？」

キ「それは事故紹介だよ‥」

可「つまらないギャグは良いから自己紹介しなさいよ」

亞「わりぃわりぃ‥ヒロインの龍可の双子の兄！準主人公の龍亞だ！エースモンスターは『パワー・ツール・ドラゴン』！尊敬してる人は遊星だ！あとは‥‥」

はい、長い自己紹介をありがとう。

ア「ところで、1周年記念だから何かあるの？」

いや～：何も考えて無いけどさ。改めて考えてみると、この日ってキラの誕生日になるよね

可「そう言われてみるとそうね」

ア「小説が誕生した日だから、キラが誕生した日でもあるわね」

亞「ってな訳で誕生日おめでとう！」

可・ア「おめでとう！」

キ「ありがとう」

何か軽い返事だな：

ア「だって、キラはそういう性格なのよ」

可「アキさんの言うとおりよ。キラの性格はちょくちょく変わるのよ」

亞「え?そうだっけ?普段はぬるいけど、デュエルの時は熱いから暖かい感じじゃないの?」

可「それだけじゃないのよ。冷めてる時は冷めてるし、わくわくしてる時の目は凄く輝いてるのよ」

ほうほう…結構キラの事を見てますね~龍可は

可「う‥うるさい!／／」

ア「まあまあ、龍可は落ち着きなさい。ところでこの小説の進行方針って考えてあるの？」

う～ん…だいたいはあるんだけど、1回目の特別企画に出したオリジナルキャラクターのリアのデッキを何にするかは決まったんだけど、カイの方が決まってないんだよ…

キ「あぁ…デュエルをするのが楽しみになってきたよ」

…キラはデュエルと遊城十代の事しか頭にないのかな…

亞「他にもあるんじゃない？」

？…例えば？

亞「そりゃあもちろんライディングデュエルだよ！」

結局デュエルじゃないかよ！ってかまだキラをライディングデュエルをさせるのか決まってないよ！

キ「俺はやりたいな」

いや、本人の意見が通るとは限らんぞ

ア「ライディングデュエルのどこが良いのか私には分からないわ」

亞「分かってないな～アキ姉ちゃんは・・・デュエリストにとってライディングデュエルは必ずやりたいよ！」

ア「分からないわって最初に言ったじゃない・・・」

キ「見てて本当にわくわくするよ！スタンディングデュエルで味わえない世界を味わいたい・・」

可「どうやら、私達には分からないわね」

ア「そうね。」

っと話を戻すけど、カイのデッキが決まらないんだよ。どうすれば良い？

亞「そういう時は『ディフォーマー』が良いよ！」

いや、それは龍亞のデッキだろうがよ。

ア「なんだかんだ言っても、考えるのは結局あなたよ」

はい：

可「まぁ、話を進めていくうちに良いデッキが決まるわよ」

そだね！っとまぁ、話を最初に戻すけど、1周年なんだけど、特別企画として何かやる？

亞「コラボとかは？」

ア「無理よ」

速攻却下！？

ア「だってそうじゃない・不定期更新だし、キャラ崩壊もしかねないじゃない・」

ぐっ・・・否定が出来ん・コラボは却下だね

亞「んじゃあ、人気キャラ投票！」

キ「それも、無理だよ」

まぁ、それも確かにね

亞「え？どうしてさ？」

キ「だって、ほとんどが原キャラで、オリキャラがだいたい３人だよ（特別企画に登場したリア達は抜いてる）原キャラでほとんどＴＯＰ１０は確実に埋まるよ」

随分と否定的だが、まぁ、そんな所だよ。っと言うわけで人気キャラ投票も却下。まぁそのうちやると思うけど

可「結局何もしないって事になるね」

そうなります。ってな訳でこの話は終わり！

ア「何の為に私達がここにいるのか分からなくなってきたわ…」

可「同感」

んじゃあ、そこの2人！最後に一言どうぞ

可「一言って…」

ア「急に言われても…」

亞「んじゃあ、変わりに俺が！俺の『パワー・ツール・ドラゴン』の活躍を見逃すなよ！」

自分のエースモンスターで占めるな！

キ「舞台はクライマッ・・・」

ぜんぜんクライマックスじゃないからね！終わりはまだまだ先だよ！勝手に終わらそうとしないで！

キ「いや・・この特別企画だけでも締まりのある終わり方をしたかったから」

あぁ～そういう意味ね。ならどうぞ

キ「次回をお楽しみに！」

結局変わってるじゃん！

可・ア「はぁ……」

（終わります）

特別企画　1周年記念（後書き）

ってな訳で次回こそは編入試験の話です

いざ本番！編入試験！と…（前書き）

やっと書けた編入試験。自分的に書けた～！って思えたデュエルでした

いざ本番！編入試験！と…

クロウから合格を貰ってから数日が経ち、編入試験の当日になった

龍可と龍亞とアキは授業があるため、アカデミアに行っている

キラは皆から「頑張れ」とエールを貰った。龍可からは少しぎこちなかったが…。試験会場のデュエルアカデミアに行って、まずは筆記試験からだ

「では、行ってきます」

「おう。しっかりとな」

保護者である遊星は急用があったため来れなかったが、代わりにクロウとジャックが一緒に来てくれているのだ

とある教室にキラは入って、クロウとジャックは実技試験会場のデュエルスタジアムで待っていた

「‥」

「‥‥‥」

「‥‥‥‥」

「‥‥‥‥‥」

暇なのかお互いに無言‥‥というか、別の意味でキラが心配なのかクロウはあまり落ち着きがなかった

「なぁ、ジャック？」

「何だ」

「キラは大丈夫だろうか・・」

「心配しなくともキラなら大丈夫だろ」

「いや、そういう意味じゃなくてな・・」

「じゃあ、何だ？」

「キラのやつ、朝から様子がおかしくなかったか？」

言われてみればそうだと、ジャックは考え込む。キラは朝から様子がおかしかった。ぼ～っとしてる感じだった

だが、ジャックの結論はこうだった。

「緊張してるだけだろ」

そうなのか？・・・っと考え込むクロウ。少し時間が経過すると、キラがスタジアム内にやって来た

客席の方からクロウが声をかけると、キラは振り向くが、いつものような感じではなかった

「キラ！どうだったか？」

「・・・はい・多分大丈夫だと思います」

「多分」、キラが言いたいのは筆記試験の問題にあったシンクロの内容であった。いまいちシンクロに自信がなかった

「次は実技だったか」

「あぁ、実技試験が勝負所だな」

「だが、龍可のお墨付きもあって、心配ないだろ」

「そうだな、でも、相手のデッキにもよるな」

「ふん、試験用に作られたデッキなどたかが知れてる」

ジャックはキラが試験用デッキに負ける訳がないと思っていた

「まぁ、それもそうだな」

ジャックとクロウが話してる間、キラはデッキ調整をしていた

クロウ達が試験官はまだかと思った瞬間に1人の教師……ハイトマン教頭がスタジアムに入ってきた

ハイトマンはなにやらぶつぶつ言っていた

「何でこんな時に皆忙しいんでありますか?私も忙しいってのに…」

ハイトマンはデュエルの準備をするなりデュエルする位置へ立った

「受験者である遊城キラ。只今から実技試験を始めるであります」

自分の名前を呼ばれて急いで返事をしてデュエルする位置へ立った

「では、始めるであります」

「はい、よろしくお願いします」

「「デュエル」」

キラＬＰ４０００
ハイトマンＬＰ４０００

「先攻はそちらから始めなさい」

「はい、俺のターン」

この時、クロウはふと思った。キラがデュエルをする時にいつも言う言葉を言わなかったからだ。

《楽しいデュエル》

ほとんどのデュエルの時にこの言葉を言っていた。考えすぎなのか？とさえクロウはキラの体調が心配になっていた

「俺は手札からマジックカード『E－エマージェンシーコール』を発動。デッキから手札に『E・HERO　エアーマン』を加え、そして、エアーマンを召喚」

E・HERO　エアーマン
ATK1800

「エアーマンの効果で、デッキから『E・HERO　スパークマン』を手札に加える」

「資料にあった通り『HERO』デッキでありますか」

ＨＥＲＯデッキを嘲笑うようにハイトマンは呟いた

「そして、手札から永続魔法『未来融合－フューチャー・フュージョン』を発動。デッキから『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』を選択」

フレイム・ウィングマンに必要な融合素材であるフェザーマンとバーストレディをデッキから墓地に送った

「そして、カードを1枚セットしてターンエンド」

「私のターンであります。ドロー！手札から永続魔法『古代の機械城』を発動であります。そして『古代の機械騎士』を召喚！」

古代の機械騎士
ＡＴＫ１８００

「『古代の機械騎士』が召喚された事により、『古代の機械城』にカウンターが1つ乗るであります」

「（この戦法！：あの時と一緒だ）」

あの時：それはキラがいた過去の世界で、試験官とデュエルした戦法と一緒だった

そしてキラは自分の手札を確認すると、1つの希望が出た

「（もしかしたら帰れるかも！）」

「キラのやつ笑ってるな」

「考えすぎだったか：やっぱりキラはデュエルを楽しんでるな」

クロウが言っている事とキラが考えてる事は違っている

「さらにマジックカード『二重召喚』を発動！このターン、私はもう1度通常召喚が行えるであります。『古代の機械騎士』をデュアル召喚！これにより、古代の機械城にカウンターがもう1つ乗って2個になったであります。バトル！古代の機械騎士でエアーマンに攻撃！」

「エアーマンと古代の機械騎士の攻撃力は互角……じゃない！」

古代の機械騎士がエアーマンを貫いて破壊した

キラＬＰ４０００→３７００

「そうであります。古代の機械騎士は古代の機械城の効果で攻撃力は３００ポイントアップしてるでありますよ」

古代の機械騎士

ＡＴＫ１８００→２１００

「（古代の機械騎士の効果でバトルフェイズでは魔法、罠カードが使えない…『攻撃の無力化』は発動出来ない……でも！同じ…あの時と…）」

「何が可笑しいのでありますか？私はこのままターンエンド」

「俺のターン、ドロー。（あの時と同じだったら、この次に……）『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』を召喚！そして、フィールド魔法『摩天楼　―スカイスクレイパー―』を展開！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン
ＡＴＫ１６００

デュエル場のフィールドが変わり、摩天楼へと変わった

「スカイスクレイパーの効果で攻撃力を上げる戦法でありますか」

「バトル！スパークマンで古代の機械騎士に攻撃！『スパーク・フラッシュ』！」

ハイトマンの言っていたようにスカイスクレイパーの効果でスパークマンの攻撃力が上がった

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン
ＡＴＫ１６００→２６００

スパークマンが古代の機械騎士に光を放ち、破壊した

ハイトマンＬＰ４０００→３５００

「俺はこのままターンエンド」

「やってくれるでありますね。私のターン、ドロー。永続魔法『古代の機械城』の効果を発動であります！『アンティーク・ギア』と名のついたモンスターをアドバンス召喚する場合、必要なリリースの数以上のカウンターが乗っていれば、このカードをリリースの代わりに出来るであります！古代の機械城をリリースし、『古代の機械巨人』をアドバンス召喚！」

やはり…とキラは思った。古代の機械巨人が出て来た時、『帰れる！』と内心で喜んでいた

古代の機械巨人
ＡＴＫ３０００

「何で試験用のデッキにあんなレアカードが入ってるんだ！？」

「あれは明らかにおかしいぞ！」

そう。ハイトマンが使っているデッキは試験用ではなく、自分の勝ち組デッキだ

「このモンスターが出たからにはあなたに勝ち目は無いでありますよ！『アルティメット・パウンド』！」

スパークマンは迎撃する暇もなく、古代の機械巨人の拳で潰された

キラＬＰ３７００→２３００

「私はカードを１枚セットしてターンエンドであります」

「（ちょっと違うけど状況はあの時同じ！）俺のターン！スタンバイフェイズに永続魔法『未来融合－フューチャー・フュージョン』の効果で『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』を融合召喚！さらに、手札からマジックカード『Ｏ－オーバーソウル』を発動！この効果で『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』を特殊召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン
ＡＴＫ２１００

E・HERO　スパークマン
ATK1600

「さらに『R－ライトジャスティス』を発動！自分フィールド場の『E・HERO』の数だけフィールド場の魔法・罠カードを破壊する！俺はスカイスクレイパーとお前のセットカードを破壊！」

「私に向かってお前って！トラップカードオープン『和睦の使者』！このターン相手から受ける全ての戦闘ダメージは0になり、自分のモンスターは戦闘では破壊されないであります！」

スカイスクレイパーの風景がデュエル場の風景へと変わり、ハイトマンと古代の機械巨人に、特殊な光が包まれた

「（和睦の使者なんてこの際どうでもいい！これで帰るんだ！）手札を1枚コストにして速攻魔法！『超融合』！」

フレイム・ウィングマンとスパークマンの間に大きな渦が発生した

「（帰れる！これで！）」

キラはこれで、帰れると思っていた。だが、何も起きる事無く『Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン』が融合召喚された

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン
ＡＴＫ２５００

「え？何で・・・」

キラはゴドウィンが言っていた事を忘れていた。膨大なエネルギーが必要だということを

希望が絶望に変わり、キラは唖然としていた

「攻撃力の高いモンスターを召喚して防御を高めたでありますか」

シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力は墓地に存在する『E・HERO』の数×３００ポイントアップする

E・HERO　シャイニング・フレア・ウィングマン
ATK２５００→４０００

キラはシャイニング・フレア・ウィングマンを召喚したのは良いが、和睦の使者が発動されているので、攻撃をする意味は無い。手札も無い今、なにも出来ない状況である

「何もしないのなら、私のターンであります」

「あ…あぁ…」

「ふんっ…これは良い手札であります。私も手札からマジックカード『融合』を発動！フィールド場の古代の機械巨人と手札の『古代の兵士』と『古代の機械獣』を融合であります！融合召喚！『古代の機械究極巨人』」

古代の機械究極巨人
ＡＴＫ４４００

「バトル！古代の機械究極巨人でシャイニング・フレア・ウィングマンに攻撃！」

ぼんやりしているキラ。シャイニング・フレア・ウィングマンに指示を出す事が出来ず、呆気なく古代の機械究極巨人に破壊された

キラＬＰ２３００→１９００

「ヤバいぞあの状況！おいキラ！しっかりしろ！ボケッとするでない！」

「キラ！諦めるな！諦めないのがお前だろ！」

ジャックとクロウに声援を貰い、ハッとした

「戻れなかった…過去に…」

「私はターンエンドであります」

「…俺の…ターン」

気はある。だが、心ここにあらずという感じだ。自分のターンを始めるが、本能的にやっている

「…マジックカード『ホープ・オブ・フィフス』を発動。墓地に存在する『E・HERO』と名のついたモンスターを5体デッキに戻してシャッフルした後に2枚ドローする」

墓地にシャイニング・フレア・ウィングマンを残して、残りの5体をデッキに戻し、デッキがシャッフルされ2枚ドローした

「墓地にある『H－ヒートハート』『E－エマージェンシーコール』『R－ライトジャスティス』『O－オーバーソウル』をゲームから除外して、手札からマジックカード『ヒーローフラッシュ！！』を発動。自分のデッキから『E・HERO』と名のついた通常モンスター1体を特殊召喚する。『E・HERO ゼクス』を特殊召喚」

E・HERO ゼクス
ATK2500

「『H－ヒートハート』をいつの間にか……！！『超融合』を発動した時のコストに使ったでありますか…でも、『ヒーローフラッシュ！！』の効果で直接攻撃が出来てもそんなモンスターでは私のライフには届きませんよ！」

ハイトマンのライフは3500。ゼクスの2500の攻撃力ではまだ届かない。だが…

「さらにマジックカード『ラスト・アタック』。フィールド場の『ゼクス』と名のつくモンスターの攻撃力を倍にする」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス
ＡＴＫ２５００→５０００

「んなっ！……こ…攻撃力５０００でありますか！？」

「ゼクスでダイレクトアタック」

古代の機械究極巨人という巨大な壁があるのも関わらず、それをスルーしてゼクスはハイトマンを蹴り飛ばした

「くっ……こんなデュエルなど…」

ハイトマンＬＰ３５００→０

「よっしゃー！」

「ナイスだキラ！」

ジャックとクロウが直ぐにデュエル場に降りてきてキラの所にやって来た

「あ・・・はい・勝ったのか」

「どうしたんだ？緊張の糸でも切れたのか？」

「ま、まぁそんな所です」

その後、ハイトマンから「結果は後日贈るであります！」と言ってどこかへ言ってしまった。何故か終始イライラしてた人だなと、３人は思った。

一方その頃、龍可達も授業が終わり、アキと一緒に帰っている

アキが龍可に聞こえない程度に龍亞に話しかけた

「ねぇ、最近龍可とキラはどう？」

「う～ん：変わらないというか：悪化してるというか：結論から言うと成果は全く無いよ」

「そう：ギクシャクした関係のままじゃあ、私も嫌だし、なんとか元の関係に戻らないかな：」

「難しいとは言い難いけど、龍可次第だね」

龍亞とアキは2人して悩んでいた。でも、龍可は2人以上に悩んでいた

キラとは仲良くしたいけども、恥ずかしいというか何と言うか…理由は恋。だけれども顔を合わせずらい。

はぁ…っと溜め息を吐いた。今日キラに「頑張れ」とは言えたものの、ぎこちなかった。今日の試験の事も気になっていた

「ねぇ、龍可。キラとの関係が今のままじゃあ嫌じゃない？」

「え？…う、うん。嫌だけど…嫌だけど…」

「なぁ、だったら前みたいに普通に話してみれば良いじゃん」

「それが出来ないから龍可は悩んでるのよ」

「でも、悩んでても前に進まない。一歩を踏み出さないと」

確かにとアキと龍可は思った

「そうね。今日前みたいに…とは出来ないとは思うけど、面と向かって話してみれば？」

「うん、頑張る！で…でも、どんな話をすれば良いのかな！？」

「そりゃあ、今日の事とか？」

「今日と言えば試験の事ね。実際私も気になるわ」

「まっ、そういう事だ。どうせならキラがいつ帰ってくるか分からないけど、アキ姉ちゃんうちに来る？」

「えぇ、じゃあお邪魔させてもらうわ」

「決まり！んじゃあ『龍可とキラの仲直り大作戦』始めようか！」

「ネーミングが普通‥」

龍可とキラを仲直りさせるべく、気合い入れた3人。キラより先に帰っていた

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

キラ達は、帰っても良かったので帰っていた
ジャックとクロウとは直ぐに別れた。どうやらあの2人も用事があったらしい
キラは帰宅しながら、何故元の世界に帰れなかったのか考えていた
「（あの時と同じように『超融合』を使ったはず…でも、帰れなかった…何で…何で！）」
マンションのエレベーターに乗った時にゴドウィンが言っていた事を思い出した
「そうだ！エネルギーだ…（でも、あの時発動したエネルギーって…）…痣…」

あの時は痣が光っていた。そして、こちらの世界でのゼロリバースが生み出した膨大なエネルギーが発生していた

『超融合』『痣』『ゼロリバース』の3つのエネルギーが重なり、次元の扉が開き、キラを未来であるこの世界に導いた‥‥足りないのは‥

「エネルギーか‥くそっ‥」

顔に手を当てた。どうすれば帰れるんだ?ゼロリバースに匹敵するほどのエネルギーってどうすれば見つけられるんだ?いろんな事がキラの頭の中で渦巻いていた。龍可の事ももちろんある

最上階にある家に着いた。ドアが開いた時に目の前に龍可がいた

「‥キ‥キラ!あ‥あのね!」

龍可が何かを言おうとしている。だが、今のキラにはそれは耳に入

らない

「（どうすれば良い！どうすれば！・・・・）」

プツンっと何かがキラの中で切れた。緊張の糸ではない

龍可を押し倒す形となってキラは倒れたのだった

いざ本番！編入試験！と‥（後書き）

はいっと言うわけで、キラは倒れちゃいました

次回で、龍可とキラの関係を回復出来たら良いな‥と思う自分‥

帰りたい…帰りたいんだ！（前書き）

遅くなってすみません。リアルで忙しくなってきました。

今回で、日常編の序章（仮）は終了です

帰りたい‥帰りたいんだ！

龍可は今の現状を確認したい。でも、頭の中は沸騰寸前

顔を真っ赤にして、口をパクパクしている。助けを呼びたい。でも、声が出ない

数秒前、龍可は仲直りするために玄関の前にいた。キラが帰ってきた瞬間に話しかけるために

アキと龍亞は龍亞の部屋にいて、アキは龍亞の宿題を手伝っているため、今はいない

そして、運命の瞬間。エレベーターが自分達の階である最上階で止まった。中からキラが現れた

「‥キ‥キラ！あ‥あのね！」

そして、事件は起きた。キラが突然倒れてきて、龍可もそのまま押し倒されるように倒れた

よって、今の現状である。キラの顔が近い…だから、いっきに頭の中が真っ白になり、顔が真っ赤になった。大好きな人にいきなり押し倒された

「（じゃなくて！）る…龍亞！アキさん！お願い早く来て！」

やっと、声が出て、助けを呼べた。自分もこのままでずっといたらどうにかなってしまいそう

何事がと、バタバタと玄関の方に急ぎ足で龍亞とアキがやって来た

「うぉ！キラ！龍可を押し倒して何するつもりなの！？」

「馬鹿言ってないで、キラを起こすわよ！」

アキと龍亞が龍可からキラを離した時に気がついた。キラと龍可には意識が無い。お互いに共通している事は顔がもの凄く赤い。でも、キラの様子は変だ：息遣いが荒く、苦しそうだ。反対に龍可は目を回して頭から煙が出ているように見えた

「部屋に運ぶわよ！」

「お、おう！」

アキが龍可を、龍亞がキラをそれぞれ部屋に運び、ベッドに寝かせた

「（…あれ？…ここって…私の部屋）」

あれから数分経ち、先に目覚めたのは龍可だった。ベッドから起きて、リビングへ向かうと、龍亞がいた

「おっ…龍可起きたんだ」

「うん…私どうなってたの？」

「キラに押し倒されて、顔が超真っ赤で蒸発して気絶してた」

「押し…お…押し倒され…／／」

あの時の記憶が蘇って、再び真っ赤になった

「そうそう、そんな感じだったよ」

「も‥もういい！／／」

龍可は一呼吸置いて、キラの事が気になった

「ところでキラは？」

「それが‥高熱を出したんだよ」

「高熱？」

「うん、アキ姉ちゃんが言うには疲労って言ってたけど、かなり熱があったよ」

「キラは大丈夫なの！？」

「多分大丈夫だよ。それに今アキ姉ちゃんが看病してるよ」

それを聞いて、龍可はキラの部屋へと行った。ドアを開けたときに、アキがキラの熱を計っていた

「あら？龍可はもう大丈夫なの？」

「私は大丈夫よ。それよりキラの熱は？」

「それが、全く下がらないのよ」

「・・・疲労の原因って・」

「やっぱり、この世界に来た時からでしょう。考えると、こっちの世界に来てからキラにとってはハードよね‥」

確かに‥‥と龍可は思った。フォーチュンカップ、アルカディア・ムーブメント、ダークシグナー、そして編入試験

龍可と龍亞よりは年上。でも、アキ達からすれば年下。いろんな事があって、いろんな傷を負った

疲労でいつ倒れたっておかしくはないはずだ

でも、ずっと我慢していたが、その結果が今の現状

「無理し過ぎよ‥」

龍可の切ない声が部屋に響いた

そして、夜になる頃にアキは家へと帰った。キラが心配なため、今日は看病をするために泊まる為に、家に荷物を取りに行っただけだった。そして、アキは遊星達に連絡を取ると、遊星達もやって来て、全員が泊まり込みだった

結局、その日に決行した『龍可とキラの仲直り大作戦』は失敗に終わった

次の日の朝、キラは目を覚めた。

「（‥うっ‥頭が‥痛い‥）」

ゆっくりと体を起こすが、頭痛がする上に、体がかなりダルい。それに、まだ熱は下がらないままだ

部屋を出て、階段を降りようとすると、立ち眩みがして、思いっきり階段から転げ落ちた

「いっつ……」

「おい、大丈夫か？」

何事かと、クロウが駆けつけてきた

「あれ：クロウ来てたんだ：」

「来てたんだって：そういう場合じゃないだろう。皆キラが心配で来たんだから」

「皆？」

キラを抱えてソファに座らせた

「遊星もジャックもアキもいるぜ」

「遊星…？」

ハッと思い出した。遊星にはどうしても聞きたい事がある

「遊星は？」

「遊星なら龍亞を起こしに行ってるけど…っておい！」

言い終わる前にキラは龍亞の部屋に向かった。クロウが無理するなと止めようとしたが、それを振り払った

「遊星！」

龍亞の部屋に入ると、龍亞はまだ起きたばかりなので、遊星の名を呼んだ時に目が覚めたようだ

「どうしたんだ？」

「ゼロリバースについて教えて下さい！」

「ゼロ・リバース・」

ゼロリバースの名を言った時に遊星の表情は曇った

「キラ落ち着け！」

「お願いです！教えて下さい！」

「キラ、何でゼロリバースを知ってるんだ？」

「質問してるのはこっちです！」

「だから、落ち着け！」

クロウが怒鳴って、部屋の中が静まり返った。龍亞だけは、あたふたしていた

「おい、何の騒ぎだ？」

ジャックと龍可とアキが騒ぎを聞きつけて部屋に入ってきた

「キラ頼む、これだけは聞かせてくれ：何でゼロリバースを知ってるんだ？」

「俺が：この世界に来るきっかけになった事件だってゴドウィンから聞いたからです」

その場にいる全員が驚いた。何より遊星の胸に深く響いた

「ゼロリバースと痣と超融合のカードが共鳴して、次元の扉が開いて俺はここに来たんです」

「親父の研究はサテライトの皆だけでなく：キラまでも巻き込んだのか：」

「だ、だが：ゼロリバースを知ってどうするんだ？」

「それは聞かないと分からない…とにかく…帰りたい…帰りたいんだ！父さんに会いたいんだ！」

ゴドウィンから話を聞く前だと、何もヒント無しで帰れる見込みも無い。だが、話を聞いた後だと、帰れる希望があり、ヒントも貰った！だが、早く帰りたいと思う気持ちが高まり、焦らせ、ストレスも高まっていた

いろんな事がもう限界だった

「父さんに…父さんに会いたい……会いたいんだ…」

それだけ言うとその場に倒れた。言われるだけ言われた遊星は何も言い返せない。親の研究でキラまでも巻き込んだショック……遊星は心の闇をダークシグナーだったレクス・ゴドウィンの兄、ルドガー・ゴドウィンにどう償えば良いと聞いた。だが、ルドガーは答えず、変わりにクロウが答えた。１７年前のゼロリバースで、親は亡くなったが、変わりに遊星とジャックと出会い、掛け替えのない絆で結ばれる事ができたと……だが、キラにはどう償えば良いのだ…

クロウが再びキラを部屋に寝かせに行った

「遊星、あまり気に病むな」

「だが、俺はどうすれば・」

「バカやろう。何のための仲間だ」

遊星はジャック、龍亞、アキ、龍可のそれぞれの顔を見た

「そうだよ。俺達は仲間なんだよ」

「えぇ、キラが探してるのを私達も一緒に探せば良い」

「私達は大切な絆で結ばれてるもの・・」

「皆・・・・そうだな・俺達がキラに協力すれば良い。ありがとう」

「「おう！」」
「うん！」
「えぇ」

ゼロリバースで悩まないんだとダークシグナーとの決戦の時に決めた。それを思い出した

前に進まなければならない。そう思った

「キラ、熱あんだからあんまり熱くなるな」

「すみません…どうしても聞きたかったんです」

「遊星にもいろいろあるんだ。後で俺からも言っておくから今は休んでろ」

「でも！俺は…」

「いいから休め。お前が心配で皆ここにいるんだ」

キラを部屋まで運んで、ベッドに寝かせた

「俺は…立ち止まりたくないんです…」

「はぁ～…無理をしたって、倒れたら意味がないだろ。休む時間も必要なんだよ」

「やっと見つけたヒントなんです。ここで…」

「言いたい事は分かる。でもな、お前は1つ見ていない事がある」

「見ていない事…？」

クロウの質問の意味が分からずキョトンとする。キラは帰る事だけを考えていて、見ていない事があった

「キラにとって俺らは何だ」

「…仲間…ですよね」

「そうだ。少しは俺らを頼れ」

ニッと笑うと、キラは曖昧な表情だった。頼って良いのか、これは自分の問題なのか・・・それに・龍可の事

「とりあえず今は寝ろ」

それだけ言ってクロウは部屋から出て行った

クロウがリビングに戻ると皆集まっていて、龍可達はアカデミアに

行く準備が整っていた

「おぉ、もうアカデミアに行く時間か」

「それよりキラはどうだったの？」

「いや～：正直ビビったぜ。落ち着きが無いって言うか、熱くなりすぎてるな：これじゃあ、しばらく熱は下がらないかもな」

「そうだな：ほとんどキラと一緒にいるけどあんなキラを見たのは初めてだよ」

「今日は俺達がここでキラを見てるからお前等はアカデミアに行ってこい」

「：うん。じゃあお願いね」

3人とも心配そうな面持ちでアカデミアに登校した

行ってらっしゃいと遊星達は見送った

「さて、俺達はどうするんだ？」

「そんなの決まってるだろジャック、キラの看病だよ。それと、遊星はキラにゼロリバースの事を話した方が良いぜ」

「俺が知っている事で何かヒントがあるんだろうか・・」

「有ろうが無かろうが今は知っている事を話して納得させるしかないぜ」

「分かった・話してくる」

そう言って遊星はキラの部屋に向かった

「さて、俺らはやるべき事をやるぞ？」

「やるべき事？」

「家事だよ、ジャックは風呂掃除して風呂を沸かしとけ」

「何で俺がそんな事をしなければいけないんだ。第一に誰が入るんだ」

「お前も手伝えよ。それに、キラが入るじゃねぇか」

「・・・はっ、仕方のないやつだ」

ぶつぶつと文句を言いながらジャックは風呂掃除をしに行った

「さて‥っと、俺はお粥でも作るか‥」

クロウはキッチンへと向かった

「キラ、ちょっと良いか？」

「遊星‥」

「ねぇ、結局キラとは話せたの？」

「ううん。玄関で待ってたんだけど、キラが突然倒れてきて話せなかった」

龍可は昨日の事をかなり悔いていた。アキと龍亞も仕方ないと思っていた

アカデミアに着くと、アカデミア中が騒がしかった

「龍亞～！」

龍亞と龍可の同級生である天兵とパティとボブがやって来た

「どうしたのさ天兵？」

「龍亞はまだ聞いてないのか？」

「聞いてないって：まだ俺達来たばっかりだぜ」

「何かあったの？」

「何かあったも何も教頭先生を倒した人が今度編入するらしいのよ！」

ハイトマン教頭を倒した人。思い当たる人はいないが、編入する人といえば：

「「「キラ！」」」

3人同時に思い付いたようだ。

「え?俺会った事あるよね?」

天兵はフォーチュンカップの時にキラと面識がある

「そうそう!その人だよ!」

「編入が決まったんだ」

「ね・ねぇ、そのキラって誰?」

「フォーチュンカップに出てた人よ」

「あの人・・?」

ボブもパティもピンと来たようだが、少し浮かない顔だった

「どうしたのさ?浮かない顔して?」

「そのキラって人の良い噂をあまり聞かないからさ‥」

「悪い噂って事?」

アキ、龍亞、龍可は顔を見合わせるが、全く分からない。言いづらそうにパティが口を開いた

「言いづらいんだけど、悪い噂って言うんじゃなくて、ちょっと偏見を持ってるっていうか‥‥フォーチュンカップの時に怒鳴ったでしょ?」

≪‥ふざけるな‥‥ふざけるな!俺は魔女を倒すためにデュエルし

ているんじゃない！十六夜アキとデュエルしているんだ！大会が始まった時にボマーさんが言っていた事をもう忘れたのか！？アキさんもデュエリストの１人だ！魔女でも化け物でもない！暴言を言うことしかお前等は出来ないのか！？》

あの時キラはアキとのデュエルの最中で観客達に怒鳴った言葉だ。誰もが覚えている出来事でもあった。ある者は感動するが、またある者は反感を買う者もいる

「あれは忘れられないわ。あんな事を行ってくれたのはキラだけだったから」

当人であるアキは１番覚えていた

「反感を買う人がいるかもしれないけど、キラはとっても良い人よ」

「まぁ、龍可がそういうなら良い人よね」

パティとボブは龍可を信じてくれた

っとその瞬間にチャイムが鳴り急いでそれぞれの教室に向かった

――――――――――――――――――――――――

遊星からゼロリバースについての説明があった後、キラは風呂に入っている

「帰れる可能性はあるけど・・・全然条件が整ってない・・か・・」

湯船に浸かって考えていた。遊星からあった説明はゴドウィンから聞いた話とそんなに変わってなかったから新しい事は聞けなかった

「ここに来た理由が分からない。何かあるはずだとは思うんだけど、何も分からない」

はぁ・・・っと溜め息を吐いた。まだ熱も下がらない。体を洗ってすぐに出た

寝間着に着替え、リビングに戻るとクロウとジャックしか居らず、遊星がいなかった

「あれ？遊星は？」

「遊星ならデュエルアカデミアに行ったぞ」

「アカデミアから電話があってな・多分昨日の結果じゃないのか？」

早すぎないかと思ったが時代が時代なのかなとキラは結論付いた

「それより栄養を取って早く元気になれ」

クロウがお粥を作ってくれて机の上に置いた

「はい、いただきます」

「おう。召し上がれ」

お粥は熱かったが、味はかなり美味しかった。むしろこうして父親である十代に看病されてた事を思い出していた

完食してクロウにお礼を言ってまた自室に戻って寝た

――――――――――――――――――――――――

「ん‥‥あぁ‥」

時があっという間に過ぎ、起きるともう夜だった

「そんなに寝てたんだ、俺」

額に手を当てるとまだ熱はあるが、ちょっとはマシになっていた

ゆっくりと立ち上がりふらふらとリビングに向かった

ちょうど龍亞と龍可は夕食の準備に取り掛かっていた

「龍亞、龍可おかえり」

「ただいま！もう大丈夫なのか？」

「うん。大丈夫だよ」

龍可は遠目で龍亞とキラの会話を聞いているが、キラは本当に大丈夫なのかと思った

「ねぇ、キラはその…お粥…食べれる？」

「（作ってくれたんだ…）うん、いただくよ」

「分かったわ。龍亞手伝って」

「ＯＫ！」

夕食をテーブルに運んで、それぞれ食べた。クロウが作ってくれた物とは違った味がした

不味いわけではない。むしろ美味しい。何が違うのかな…と思った。そんなキラを龍可が見てただなんて気付かなかった

夕食を済ませ、それぞれ風呂に入った後、寝ようとした時だった

コンコンとノックする音がして、ドアが開くと枕を持って龍可がやって来た

「‥き、今日一緒寝て良いかな?話したい事もあるし‥」

「‥うん、良いよ」

ベッドを半分ずつ使い、2人で入った。向かい合うのではなく、お互いに反対側を向いて

何かあるのかなと思いきや、沈黙‥‥

「話したい事って?」

「あ、えっと‥その‥」

言葉を必死に考えている様子が伺えた。まぁ、キラ自身も龍可に話があった

「ねぇ、龍可。俺さ‥ここを出て行った方が良い？」

「え？何で？」

「だって、最近俺を避けてるからさ‥」

「それは‥」

言えない。恥ずかしくて言えない。キラが好きだから真っ正面から向き合うのが恥ずかしくなってるなんて。でも、それでは決意した

意味がない。ちゃんと話そうと決めたのだから

「出て行かなくていい。ううん、出ていかないで‥」

「え?」

「キラが出て行くのは嫌‥お願いだからここにいて‥」

「でも‥」

「私ね‥恥ずかしかった、キラと向き合うのが。ダークシグナーとの戦いで私を助けてくれたキラが輝いて見えたの」

突然何を言い出すのか疑問に思うが、キラと龍可の関係がぎこちなくなったのはその後だ

「私は…私はね…その時キラに惚れたの。キラの事が大好きになったの」

お互いに反対に向いてるから分からなかったが、この時龍可の顔は真っ赤であった

「それで…キラと向き合うのが恥ずかしくなった。だから避けてた…ごめんなさい」

龍可はぎこちない関係はもう嫌になり、自分の気持ちをキラに伝えた

「前にさ、アキさんが俺に言った事覚えてる?」

「慣れるって話?」

「うん。俺のいた時代はさ、風景や技術は違うけどここととそんなに変わりはないんだよ。異様の力ある者が忌み嫌われるこの時代と…

龍可もそれを恐れて外に出る事を嫌がったんでしょ？」

「うん：とっても怖かった。でも、龍亞がずっと居てくれたんだ」

「俺も父さんがずっと居てくれた。でも、心配はかけたくなかった。父さんも父さんで忙しいから：だから、友だちを作ろうと必死だった。でも、力はバレるんだ。精霊と話せる事を偽りたくなかった」

それに、精霊の力のコントロールもその時は出来ていなかった。そして十代に言われた《力を傷つけるために使うな！》っと。その事があってコントロールが出来るようになった

「友だちは結局出来ず、同い年くらいの友だちは出来なかった」

「同い年くらいって年上ならいたの？」

「っと言っても、父さんの友だちだけどね：万丈目さんやヨハンさん達がよくデュエルの相手をしてくれたんだ」

だからキラはデュエルが強いんだと龍可は思った。大人とよくデュエルをして強くなったのだと

「そんな日々が続いて、デュエルアカデミアの入学試験の日に、この時代に来た。そして龍可と出会った。俺はこの時代に来て1番最初に出会ったのが龍可で良かったと思ってる」

「何で？」

「龍亞にも言ったけど、龍可も俺と同じで精霊と話せる力を持ってるからだよ。もし最初に出会うのが龍亞だったら俺は龍亞を信じてなかった。龍可だからこそ信じる事が出来た。俺は前にいた時代では諦めてた・友だちを作る事を。でも、龍可と出会えた」

「じゃあ、私は友だち1号って事？」

「うん、多分・。俺は人間関係が上手い方じゃないからよく分から

ない。本当にこれが友だちなのか分からないんだ。でも、龍可が友だちと思ってくれるならそれで良い…いや、そう思って欲しい。ダークシグナーと戦う時も龍可は負けそうだったでしょ？」

「うん。もう本当にダメかと思った。でも、キラが来てくれた」

「あの時、友だちを失うのが怖かった。龍可を失うのが怖かった。龍亞との約束もあった…龍可が精霊界を守る事も知ってた」

「知ってたって…何で知ってるの？」

「フォーチュンカップの時に龍可とフランクって人がデュエルした時に龍亞を通して見てたんだよ。龍可がエンシェント・フェアリー・ドラゴンと精霊界を守る約束をしてた事を。だから、俺は龍亞と精霊界のために龍可を守った。でも、それだけじゃない…自分自身のために守ったんだ」

「……」

「でも、ダークシグナーとの戦いの後、俺達はぎこちなくなっただろ？俺は龍可に嫌われたんだと思った。だから出て行った方が良いと・・」

「私は出て行って欲しくない。キラが嫌いじゃない・・私はキラが大好きだから・・」

「そう言ってくれて嬉しいよ。ありがとう・・でも、俺の帰るべき場所はここじゃない」

「ここに居てよ・・帰れるとしても・・」

「父さんに会いたいんだ」

「っ・・・・・」

「帰れる方法は分かったんだ。でも、条件を満たしてない・・」

「分かった・それじゃあ私にも手伝わせて！その代わりそれまでここにずっと居て！」

「うん。そうさせてもらうよ本当にありがとう」

お互いに本音を言い合い、ぎこちない関係に終止符を打つことが出来た

「俺も龍可が好きだ」

「え！？」

「龍亞も遊星もアキさんもクロウもジャックも皆好きだ」

あれ？っと何かキラは勘違いをしてるんじゃないかと龍可は思った

龍可の好きとキラの好きは違った。そこでまたすれ違いが出来たが、そこがキラらしい。というよりも恋愛に疎いのは父親譲りだ

「これからもよろしくねキラ」

「うん、よろしく龍可」

2人はそこで寝た

――――――――――――――――――――――――――――――

次の日の朝、いつまでたっても龍可とキラが起きて来ない。龍亞は龍可を起こそうと部屋を訪ねるがいない

「龍可～！龍可！」

名前を呼んで見るが返事が返ってこない。仕方なくキラの部屋に行くとびっくりだった

キラと龍可が一緒に寝ているなんて驚きではあるが、仲直り出来たのだと安心出来た

何故なら2人は向かい合って寝ていたからだ

帰りたい…帰りたいんだ！（後書き）

龍可とキラの関係の修復完了っと……

次からは多分アカデミア編になると思います

自己紹介は難しい（前書き）

やっと特別企画に出したオリキャラを正式的に登場させる事が出来る！

ってな事でオリキャラが何人か登場します

今までとは少し違って若干コメディ調になってます

自己紹介は難しい

目の前に、悲しいような嬉しいような曖昧な表情をした男の子がいる。彼はこちらに近付いて何かを言っている

視界がだんだんとぼやけてきた。涙が溢れて彼をよく見る事が出来ない

彼が5枚のカードを差し出して、それを受け取った。最後に笑顔で一言言った後、彼は光の中へと消えた。手を伸ばすが届かない

手は彼に届く事はなかった

「……――――――可！……龍可！」

バッと龍可は飛び上がるように起き上がった

「大丈夫か？」

「キラ…うん、大丈夫。ありがとう」

あれから数日経ち、キラと龍可は仲直りが出来た。そして、次の日にキラの熱もだんだんと冷めてきて翌日には元気になった。

いろいろ抱え込んだ事を吐き出した結果、気持ちが落ち着いたようである

そして、アカデミアから合格通知を貰い、キラは晴れて学生生活を送れるようになる。そして、今日が編入日

合格通知を貰った日には全員がキラを祝った。遊星から合格祝として、以前からお願いしてあったローラーブレードをプレゼントして貰った。

それを見て龍亞は羨ましがったが、試しにローラーブレードを履いてみると、全く進まず転けてばかりだ。龍亞にはローラーブレードは無理だという事で諦めた。だが、反対にキラは上手く使いこなしていた

アカデミアから制服の採寸やらなにやら準備期間があり、何度かキラは遊星やアキの父親の英雄と一緒にアカデミア行った

そしてその全てが終わり、今日という日だ

「うなされてたみたいだけど、どんな夢を見たの？」

「……はぁ…はっきりと覚えてないわ。でも…悲しい夢だった」

「悲しいね…それより早く準備しないと遅れるよ」

「あっ…うん、今支度するから」

キラはリビングに戻り、龍可は制服に着替えてからリビングへと向かった

「ちゃんと見てなかったけど、制服似合うわ」

「なんか違和感があるけどね…」

「昔の時代の制服を着てたからじゃない？」

「まぁ、そうかな」

キラが着ている制服は龍亞と同じ物である。以前着ていた学ランとは違い、ブレザーである。でも、案外似合っているものだ

「でも、ピッチリ着るとなんかキラらしくないな‥」

龍亞もここで、一言感想。確かにと龍可も同意。なので、龍亞のように少し着崩しをしてみると、らしくはなったようだ

3人は朝食を済ませ、アカデミアへと向かった

アカデミアの前では、アキが3人を待っていた

「おはよう皆」

「「おはようアキさん」」
「おはよーアキ姉ちゃん」

「やっとこの日ね」

「はい」

「緊張してる？」

「いいえ、なんかそういう感覚を経験した事が無いんです」

「緊張した事が無いって凄いな」

「でも、それがキラらしいじゃない」

「それもそだな」

龍亞と龍可は小等部の方へ行って、アキはキラを職員室へと連れて行った

「担任の先生の名前って分かる？」

「え～っと・・・高杉先生だったかな」

キラの担任の先生の名前を聞くと職員室に入っていく。アキに案内されるがままに着いて行くと、１人の先生の前で止まった

「高杉先生ちょっと良いですか？」

「おう、何だ十六夜・・・と、遊城キラの案内か？」

「はい、そうです。職員室の場所が分からなかったから」

「そうか。それにしても意外だな、十六夜が遊城を連れてくるなんて」

「アキさんと俺は知り合いなんですよ」

「なるほどね。っと十六夜はもう戻った方が良いぞ」

「はい、それでは失礼します」

「ご苦労さん。んじゃあ行くぞ」

「行くぞ‥ってどこへですか？」

「どこって教室に決まってるだろ」

なるほどと椅子から立ち上がった高杉先生の後を着いて行く

少しだけクラスの状況を説明してもらうと、どうやら難有りの生徒が何人か居るらしい。暑苦しい生徒・大金持ちの生徒・有名人の生徒・なかなかアカデミアに来ない生徒などなど…

教室の近くまで来ると、遠くから1人の生徒が走っていた

「おぉ…難有りの生徒その1がやって来たぞ」

急いで教室に向かっている様子であるが、高杉先生とキラに気付くと、猛ダッシュで走ってきた

「遅刻ですか？」

「まぁ、あいつはいろいろと忙しいからな…おい！廊下は走るな！」

高杉先生が注意しても止まらない

「ぐぉ！……」

教室に入ると思いきや、ドアを通り過ぎてキラに抱き付くようにタックルした

いきなりすぎて変な声が出てその場に倒れた

「はぁ……はぁ…はぁ……」

「いつつ…あの～」

「あなた！」

「はい？」

「あなた遊城キラよね！？」

その生徒は青い髪のツインテールであり、瞳も青い美少女だった

――――――――――――――――――――――――――――――――

「今日から編入してきた遊城キラだ。皆仲良くしてやれよ。ほい、自己紹介しろ」

「あ・はい、え～っと遊城キラです」

しばらくの沈黙・周りを見渡すと、興味の眼差しや、熱い眼差し、

嫌悪の眼差しなどなどだった

「他には？」

「他って言われても・・・」

高杉先生から質問されるが、何を言えばいいか迷っていて自己紹介は難しいと思った。すると、とある生徒から質問される

「お前はロマンを感じているか！？」

「ロ・ロマン？」

「そうだ！ロマンだ！」

「（この男子生徒が先生が言っていた暑苦しい生徒か・）まぁ、多

分‥」

「そんな変な質問があるか」

「だが、先生！ロマンを感じる事は大切だぞ！」

「はいはい‥他に質問はないか？‥‥って後で良いか。っと席は‥」

「先生先生！ここ！」

キラの席をどこにしようか迷ってると、先程の女子が自分の隣が空いてるよとアピールした

「んじゃあ、そこで良いか。キラの席はそこな」

キラの席がその女子の隣に決まった瞬間にいろんな男子生徒から殺

気が放たれていた。だが、キラはそんな事に全く気づかず、隣に座った

「私は藤原(ふじわら)リアって言うの、リアって呼んでね。よろしくねキラ」

「うん、よろしく」

リアがキラの名前を呼ぶと、先程よりもデカい殺気がキラに向けられた。だが、それに気付かないキラである

HRが終わると、授業が始まった。教科書がまだ無いキラは隣のリアに見せてもらっていた。授業が終わると、いろんな人達が集まって来たが、男子生徒達に拉致・屋上に連れ去られた

「え～っと・あなた達は？」

「俺の名前は陸谷昴(りくやすばる)だ。そして、俺の周りに居るカイを除いた者達は舞姫のファンクラブだ！」

「（ファンクラブ？）それで……何か用？」

「何か用…だと…貴様！舞姫に気安く近付くな！」

「舞姫？」

「な！？……舞姫を知らないのか！？」

「いや…まぁ、知らないな…」

「俺から説明してやる！それはロマンだ！」

「カイは黙ってて」

何度も何度もロマンと言い続けるこの男子生徒の名前はカイだ。そ

してカイが説明した瞬間に昴によって止められた

「知らんのか。ならば説明してやろう。舞姫こと藤原リアとは今このネオ童実野シティの人気急上昇のアイドルだ！」

「へぇ～…リアがね…」

「だから気安く名前で呼ぶな！」

「だって、本人が呼んでって言ってるから」

本人から呼んで……この言葉に男子生徒全員に衝撃が走った。

「ロマンか！？」

「だからカイは黙ってろ！」

「用がそれだけなら戻って良いかな？そろそろ授業だし・・」

「ダメに決まってるだろ！舞姫に近付くな！これを誓ったら戻って良いぞ！」

「そんなこと言われても、席は隣だし・・」

またも、衝撃が走った。席は隣・・ただでさえ席替えが楽しみで楽しみで仕方がない彼等。隣になれなかった悲しさ。だが、キラはクジを引くことなくリアの隣の席だ羨ましい限りだ

全員（カイを除く）がショックを受けている間にキラは教室に戻ろうと思った。すると、カイも着いてきた

「遊城キラ！俺の名前はカイだ！よろしく！」

「うん、よろしく」

「好きな言葉はロマンだ！」

「まぁ、それはカイを見てたら分かるよ」

「そうか。ならロマン＝俺！俺＝ロマンと思ってくれ！」

「う・うん、分かった」

あまりの熱さに苦笑するしか無かった。教室に戻り、授業が始まった。ただ、男子生徒の人数が少なかった・キラとカイを除く生徒はまだ屋上でショックを受けていた

あっという間に昼休み。キラはとりあえず龍可達がいる所に行こうとすると、リアがやって来た

「キラ、どこに行くの？」

「小等部の方だよ」

「小等部？友だちでもいるの？」

「うん、一緒に昼食を食べないかって誘われてるから」

「ふ～ん…私も一緒に良いかな？」

「良いよ」

リアとキラは一緒に小等部に行くことになった

「そういえばリアって有名人らしいね」

「らしいねって私の事知らないの？」

「いや、さっき陸谷昴って人に教えてもらった」

「昴ね・・・何もされなかった？」

「一応何もされなかったけど、リアに近づくなって言われただけ」

「近づくな・ねぇ・・・キラはそれを真に受ける？」

「受けないよ」

「良かった。それで、ちょっと言いたいんだけど・・・こっちは高等部よ」

「え‥本当に？」

全く小等部の場所を知らないキラは適当に進んだだけだった

「ちょうど良いや。アキさんを呼ぼうかな」

「アキさんって‥あの十六夜アキさん？」

「うん、そうだよ」

リアにアキのクラスを教えて案内してもらった。アキのクラスを教えた時のリアの表情は複雑そうだった

「ここよ」

リアに一言お礼を言ってドアを開けて入った

「ち、ちょっとキラ！」

キラを引き止めようとしたが、既に中にいた。キラを追っ掛けるようにリアも後に続いた

キラはアキを見つけて話しかけていた。その光景を他の生徒が不審そうに見ている。中等部の男子生徒が何故十六夜アキに会いに来ているのか・・・と

「キラ、どうしたの？」

「小等部に行くつもりが、高等部の方に来ちゃって・アキさんを呼んで昼食に誘おうと思って」

「まだアカデミアを把握しきれてないみたいね・まぁ良いわ。行きましょう」

「ちょっと待った！」

キラとアキが移動しようとしたら1人の女子生徒に止められた

「大庭さん。どうしたの？」

「私が誘おうと思ったのに、何で中等部の訳の分からないそこのあんたが先に誘うの！？」

「何か今日って一難去って…ってまだ去ってないけどいろいろとある日だな」

「何かそっちであったの？」

「はい、クラスの人達といろいろとあって」

「何かやったの？」

「それは私絡みよ」

今まで会話に入ってこなかったリアが入ってきた

「あなた・舞姫。何でここに？」

「キラと一緒に来たからよ」

「あなたとキラが一緒のクラスなんてね・・・まぁ、そのあなた絡みってのはだいたい分かったわ・・・」

「って私を無視しないでよ十六夜さん！」

既に3人の会話になっており、大庭は蚊帳の外になってた

「ごめんごめん。でも、キラは今日と一緒じゃあ駄目かしら？」

「駄目よ！そんな不潔な男子と十六夜さんが一緒なんて！」

「キラは不潔じゃないよ！」

「いいえ、男子は皆不潔よ！」

リアと大庭がいがみ合って、キラとアキはただ見ているしかなかった

「ちょっと騒がしいわね・何やってるのリア」

「お・お姉ちゃん・」

「お姉ちゃん？」

更にまた人が増えた。リアがお姉ちゃんと呼んだ人の登場でリアはたじろいだ

「あら、見かけない坊やね」

彼女の名前は藤原雪乃（ふじわらゆきの）。リアの姉であり、学生でありながら学生とは思えない色気を持つ美女である。女優としてデビューしている存在だ

「リアがこんな可愛らしい坊やを連れて来るなんてね。私も混ぜてもらって良いかしら？」

雪乃がキラの頬に手を当ててゆっくりと近づいてきた。それを阻止しようとリアが2人を引き離した

「ダメダメ！絶対にダメ！お姉ちゃんは入って来ないで！お願いだから！」

このリアの慌てっぷりは何だろうかとキラは思った

「（舞姫ってもしかしてキラの事・・・でも、一目惚れ？いや、でもそれは無いと思う。キラと会った事があるのかしら・・・もし舞姫がキラの事が好きだったら・龍可、強敵が現れたわね・）」

リアと雪乃の会話を聞きながらアキはそんな事を考えていた

「と！に！か！く！十六夜さん！一緒に昼食に行きましょう」

「ごめんなさい大庭さん。私はキラの方を優先するわ」

ガーンとそんな音が聞こえた気がした。大庭の誘いを断り、雪乃の

誘惑（キラには全く無意味）もリアが全力で阻止した後、キラとアキとリアの３人は小等部に向かった

自己紹介は難しい（後書き）

キラが緊張しないって言うのはちょっと嘘になります。キラは緊張しないのではなく、緊張する＝ワクワクとなっているからです。緊張している事を楽しんでいるキラです。

オリキャラが何人か出たのですが、２人程はタッグフォース５に出て来るキャラです。

持っている人はお気付きですか？

ちなみに藤原雪乃と大庭ナオミです

ナオミはゲーム内でもアキに夢中であり、男を不潔と言っているキャラです。

雪乃は：まあ、お姉さんキャラ：ですかね。上から目線なキャラです：ゲーム内では

リアは雪乃の妹っていうオリジナル設定のオリキャラです

両手に花（？）（前書き）

サブタイトルは龍亞とアキの主観です

約1週間ぶりの更新・・・いつもより早いな・・・って自分にびっくり

ですが、今回はデュエルはありません。期待してた人達には申し訳ないです

アニメ本編の遊戯王5D's ももう終盤ですね・・・チーム・ユニコーンだったり、チーム・カタストロフ（あってるかな？）だったり、プラシドがDホイールと合体したり（自分かなり唖然としてた）遊星がクリア・マインドに到達してアクセルシンクロしたり、ジャックがデュエマの如く手が燃えてバーニング・ソウルを発動してダブルチューニングしたりして、いざ！イリアステル！

クロウには無いんかい！って思いましたよ。まぁ、ブラックフェザー・ドラゴンも出たばっかりでしたしね。友だちと「何とかハートを発動するんじゃね？」って話もしました。遊星がマインドでジャックがソウル。じゃあクロウはハートだなって感じで

んでもってチーム・太陽。「眠れる巨人ズシン」を召喚した時に観客が全員カードを持ってる事に突っ込みました。何故今持ってるんだよ！って（笑）

そしてズシンの攻撃名・・・・（笑）

次がチーム・ラグナロク。あの神３体は異常だろ！って思いながら観てて、遊星はよくあの場から勝てたなって思いました。神３体が攻撃力０のままで除外は爆笑（笑）

でも、ＯＣＧだったら神じゃない悲しさ・・・でも、まぁあの３体は普通に強いです

んで、チーム・ニューワールド。ルチアーノ普通・・プラシドはもう見慣れた。そしてホセ・・・まさかのダッシュ！そして合体！腹筋崩壊するくらい爆笑してました

そういえば、未来の世界のアポリアとゾーンの仲間の中にパラドックスがいた事にビックリ！でも、彼も滅んだ未来から来た事だから辻褄があってた。

でも、三代主人公に負けましたけどね。

まだまだ遊戯王が楽しみでたまらない！

両手に花（？）

キラ達は小等部に向かっている。３人が通る度にいろんな人が振り向いている。何故ならリアはネオ童実野シティのアイドル。アキはアカデミアＮｏ．１の生徒であり美少女。その両手に花の状態であるキラに男子生徒は羨ましがっていた

小等部に着くと真っ先に龍可と龍亞の所にキラは向かった

「龍可、龍亞！食堂に行こう」

「キラ、アキ姉ちゃん：それにリア！？」

教室が凍り付いた。只でさえ小等部の中でも龍可はフォーチュンカップに出て有名人になってるのに、今教室の中にアカデミアを代表とする生徒が４人もいる。フォーチュンカップに出た３人、アイドルのリアだ

「な‥何でリアまで‥」

「一緒に食事をしたくてね」

リアが微笑むと龍亞はデレデレしていた。龍可は何でキラと一緒にいるのか疑問だった

「早く行こう。俺お腹空いたよ」

「う‥うん」

「ねぇ、アキさん何でリアとキラが一緒なの?」

「私も分からないわよ。私の教室に来た時も一緒だったから」

5人は食堂に移動している。龍可は何故リアがキラと一緒にいるのかアキに小声で話しかけていた

キラとリアと龍亞は3人で話をしている。それを後ろから見ていて龍可は複雑だった

「食堂ってさ、何があるの？」

「何って：基本何でもあるわよ。カレーやラーメンやオムライスだったり」

「じゃ：じゃあさ！エビフライあるかな！？」

「あ、あるんじゃない」

急なキラのテンションの変わりように４人は驚いた。そんなにエビフライが好きなのかと

「キラってエビフライが好きなの？」

「そりゃあ好きさ！父さんといたころ１ヶ月に１回しか食べれなかったけど、エビフライだけは物凄く美味しかったよ！」

「（父さんがいたころ・・・って、お父さんは今いないのかな・）」

５人は食堂に着くと、それぞれ食べたい物を注文をした。キラはやはりエビフライを選んで、更には「大盛で！」っと注文していた

キラの隣に龍可が座り、その隣に龍亞。キラの向かい側にリアで、その隣にアキが席に着くなりすぐに食べており、アキと龍可と龍亞はキラの新たな一面を見た気がしていた

エビフライを食べている時にリアを見て、ふと思い出した。リアは何故自分を知っているのかを

「ねぇ、俺とリアって初対面だよね？」

「うん、そうだよ」

「じゃあ何で俺の名前を知ってたの？」

「自分じゃあ気付いてないかもしれないけど、キラって有名人よ」

「俺が有名？」

自分何かしたっけ・・っと思い返すが、特に何かやった事と言えばデュエルくらいだ

「そうよキラ。あなたフォーチュンカップに出たじゃない」

「でもアキさん、俺デュエルをしただけですよ」

「そこが大事な事よ。フォーチュンカップは……今はもういないけど、ゴドウィン長官に選ばれたデュエリストだけが出れる大会だったのよ。：ある理由で集められた人達もいるけどね」

最後の方はボソッと呟いた。アキに龍可、それに遊星はシグナーとして、キラはイレギュラーのシグナーとして集められたのだから

「それもあるけど、十六夜さんとデュエルした時皆に怒鳴ったじゃない」

「あぁ：あの時か：」

その事をキラはしっかりと覚えている。アキを救うためにデュエルをしたのだが、何も出来ずに負けたデュエルだったからだ

「それで私はキラに惚れたのよ・・」

「「「・・・・・え？」」」

「ふ～ん・・あっ、たくあん美味しい」

場の空気が凍りついた。リアがまさか大胆告白をするとは予想も出来ず・・っというか予想出来ない。龍亞は「まさか・・」っと、アキは「やっぱりね・・」。龍可はすぐにキラの方を向いて反応を伺った。当の本人は全く興味が無くたくあんを食べていた

「ねぇ、キラって好きな人っているの？」

「好きな人って言えば・・龍可にアキさん、龍亞とクロウと遊星とジャックやアキさんの両親と・・やっぱり父さんかな」

「い、いや‥そうじゃなくて好きな異性‥‥っと言うか‥ｌｉｋｅじゃなくてｌｏｖｅな人はいないの？」

「ｌｏｖｅね‥う～ん‥」

エビフライを食べながらｌｏｖｅの意味を必死に考えるが、全く分からない

「キラは恋をした事が無いのよ」

「え？え～っと‥龍可ちゃんで良い？」

「う‥うん」

「キラって恋をした事が無い‥ねぇ‥でも、分からないって訳じゃないよね？」

「いいえ、キラは分かってないわよ」

リアは何かを決意したのか、真面目な顔付きになって：

「ねぇ、キラ」

「ん？」

「私はキラが好きです。だから私と付き合って下さい」

それこそ大胆告白だった。キラにとっては何を言ってるのか意味が分からない。好き（キラ解釈でｌｉｋｅの方）なのは分かった。でも、付き合うって何を：ってな感じだ。それを言おうとしたら龍可に遮られた

「付き合うって‥‥」

「ダメよ!絶対にダメ!」

「何で龍可ちゃんが断るの?」

「え?だってそれは‥‥わ‥私だってキラが好きだからよ!」

「おぉ‥これは修羅場だね」

「何を呑気な事を言ってるのよ龍亞は‥それに当の本人は食べる事に夢中みたいだし」

アキの言うとおり、リアと龍可で火花が散ってる中、キラは食べる事に夢中だった

「ふぅ‥ごちそうさまでした」

「本当に食べる事だけに夢中だね」

「もう鈍感ね‥どこかの人と一緒で‥」

「‥‥くしゅん！」

「どうした遊星？風邪か？」

「いや、体調不良って訳じゃないんだが‥」

キラは食べ終えて、リアと龍可が睨み合ってるのに気付いた

「何をそんなに睨み合ってるの？」

「キラ、これは彼女達にとって譲り合えない問題なのよ」

「譲り合えない問題？」

「2人はキラと一緒にいたいのよ。それだけは分かってあげて」

「一緒にって：龍可とは一緒に暮らしてるじゃないですか」

「え！？龍可ちゃんとキラって：一緒に暮らしてるの？」

「うん、キラにはいろいろと事情があったから・・」

キラにとって過去の人間である事を話すのは嫌らしく、事情って言葉で龍可は纏めた

「それに、リアは席が隣じゃないか」

「え・・隣？」

「「羨ましい・・」」

ここで2人はハモった。キラと少しでも一緒にいたい2人にはお互いに羨ましかった

「ねぇ、キラ！私の家で暮らしてみない？」

「リアの家？」

「そうよ。龍可ちゃんの家がどんなのか分からないけど、私の家に来ない？」

「ダメよ！キラは私達の家が1番落ち着けるのよ！」

「だったら龍可ちゃん。私とデュエルしない？」

「え？デュエル？」

「私が勝ったらキラは私の家で暮らしてみる。龍可ちゃんが勝ったらキラは龍可ちゃんの家でそのまま暮らす。どう？」

「良いわよ！」

「あれ？本人の意見は？」

キラの意見を聞くことなく、勝手に話が進んで龍可とリアでデュエルをする事になってしまった

「ってか、キラってぶっちゃけ両手に花だね」

「そうね。リアと龍可で取り合いになってるわね」

「俺にとっては羨ましいけどね・・・」

「大丈夫よ。龍亞にも春は来るわ」

両手に花（？）（後書き）

っと言うわけで短くてすみません。ちょっと区切りが良かったんで、ここで次話って事にしました

次回は龍可ＶＳリアです。

リアのデッキって多分分かっている人っているんじゃないですかね・・・・

まぁ、また次回に

譲れない想い　龍可ＶＳリア（前書き）

今回何か変な感じがしました…っでも、デュエルは満足しちゃってます。

リアのデッキについては分かってる人がやっぱりいましたね。クイズ感覚でちょっと面白かったですよ

ちなみにカイのデッキは決まりました

譲れない想い　龍可ＶＳリア

龍可とリアがデュエルをする事になり、食堂から場所をデュエル場に移動した

この２人がデュエルをする事を誰かが聴いていたのか、デュエル場の観客席にはたくさんのギャラリーで溢れている

デュエル場に立つ前にキラは龍可一言に「頑張れよ」とエールを送った。それに龍可は嬉しいと思い、リアは羨ましく思っていた

デュエル場に立って周りを確認するとやはり人はかなり多かった

「こんなに人がいるなんて：」

「人がいない方が良いの？」

「別にそんなんじゃなくて：あまり目立ちたくないのよ」

「私は注目される事は慣れてるんだけどね」

「だってリアはアイドルじゃない」

注目されたいリア。注目されたくない龍可。反対の２人であり、周りの人の多さに何故か緊張してしまう龍可だ

「ふふ、そうよね。じゃあ行くわよ！」

「「デュエル」」

龍可ＬＰ４０００
リアＬＰ４０００

「リアってどんなデッキを使うの？」

リアの事…っと言うよりも、いつも一緒に過ごしているメンバー以外の人のデッキを全く把握仕切れてないキラだ。だから、どの生徒がどのデッキを使うなど全く知らないのである

「舞姫って名前で何も思いつかない？」

「舞姫ねぇ…全然だよ」

「龍亞、キラはこの世界のカードをまだ全部把握仕切れてないからきっと知らないわよ」

「そっか…リアのデッキは結構強いよ。くぅ～龍可が羨ましいよ！リアとデュエル出来るなんて」

「へぇ～強いのか・・」

キラ達３人は龍可の後ろの客席に座っている。逆に他のギャラリーはリアの方にいる。「これがアイドルの力ね・・」っとアキは呟いた

「先攻は龍可ちゃんからどうぞ」

「それじゃあ、私のターン、ドロー。私は『ローズ・バード』を召喚、カードを１枚セットしてターンエンド」

ローズ・バード
ＡＴＫ１８００

「私のターン行くよ！せーの！」

「「「ドロー！！」」」

「え、何事？」

突然キラとアキと龍可を除く全員が叫んだのだ。これにキラはびっくりしている

「あなたはどっちの応援をしてるのよ」

「たはは・・ごめんごめん。つい・・ね」

「アキさんどういう事なんですか？」

「あれが舞姫よ。アイドルとしてデュエルをする時に会場の皆と一心同体のようにやるのよ」

「何か凄いデュエリストですね・・」

「アイドルデュエリストって言うのよ」

「ふ～ん・・・」

ギャラリーも一緒に叫んだのにびっくりしたのはキラだけではなく龍可もだ

「やっぱりキラはやってくれないか・私は『氷結界の武士』を召喚！」

氷結界の武士
ＡＴＫ１８００

「行くわよ！「「バトル！」」氷結界の武士でローズ・バードに攻撃！『氷刃の一閃』！」

「同士討ち狙い！？」

氷結界の武士とローズ・バードがぶつかり合い、バトルの末にお互いに破壊された

「この瞬間！ローズ・バードの効果を発動！表側攻撃表示で存在するこのカードが相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地に送られた時、自分のデッキから植物族チューナー2体を守備表示で特殊召喚出来る。『スポーア』を2体特殊召喚！」

スポーア
ＤＥＦ８００

スポーア
ＤＥＦ８００

「伏せカードが何なのかを見たかったのにダメだったか…なら私はバトルフェイズからメインフェイズ2に移行し、手札からマジックカード『氷結界の三方陣』を発動！手札の『氷結界』と名のつくモンスター3種類を相手に見せる」

リアが見せたのは『氷結界の水影』『氷結界の風水師』『氷結界の

虎将　グルナード』の3枚

「そして相手フィールド場のカード1枚を選択して破壊し、自分の手札から『氷結界』と名のつくモンスター1体を特殊召喚する。私が選択するのはスポーア！」

グルナード、風水師、水影がスポーアを囲んで3体のモンスターが呪文を唱えるとスポーアが破壊された

「私が特殊召喚するのはグルナードよ！」

氷結界の虎将　グルナード
ＡＴＫ２８００

「さらに手札からマジックカード『強欲なウツボ』を発動。手札の水属性モンスター2体をデッキに戻し、シャッフル。そして3枚ドローする」

先程見せた水影と風水師を戻してカードを3枚ドローする

「ターンエンド」

「私のターン、ドロー。（グルナードの攻撃力は２８００、とてもじゃないけど倒せない…）私は『サンライト・ユニコーン』を召喚！そしてサンライト・ユニコーンの効果を発動。デッキの１番上のカードを１枚めくり、それが装備カードだった場合手札に加える。私が引いたのは『一角獣のホーン』。それをサンライト・ユニコーンに装備！」

サンライト・ユニコーン
ＡＴＫ１８００→２５００

「攻撃力を高めてもまだグルナードには届かないよ」

「スポーアを攻撃表示に変更し、カードを2枚セットしてターンエンド」

スポーア
ＡＴＫ４００
攻撃力の高いグルナードを相手に武力勝負は出来ない。だから他の策を練るしかなかった

「リアのデッキって『氷結界』なんですか？」

「そうよ。デュエルターミナルの世界のカードと呼ばれてるわ」

「デュエル・ターミナル・・」

「デュエルターミナルってのは色んなシリーズがあってね・例えば『氷結界』や『ナチュル』、『Ｘセイバー』などたくさんあるのよ」

「その中に『魔轟神』っていうカードってありますか？」

「あるけど、知ってるの？」

「はい…」

いつもなら新しいカードに興味を引くキラだが、デュエルターミナルと聞いては深刻な表情だ。その表情にアキは印象に残った

「私のターン！せ～の！「「ドロー！」」」龍可ちゃん、『一角獣のホーン』を装備したのは間違いだったんじゃない？」

「ううん、リアの動き次第ではグルナードを倒すわ」

「んじゃあ見して貰いましょうか！『氷結界の舞姫』を召喚！」

氷結界の舞姫
ＡＴＫ１７００

氷結界の舞姫が出現した時、会場がどっと盛り上がった。何故ならリアが舞姫と呼ばれる理由は氷結界の舞姫そっくりであり、自分を象徴とするモンスターだからだ

「うわっ！『氷結界の舞姫』ってリアにそっくりだね」

「それがリアが舞姫って呼ばれる理由だよ。アイドルカードとしても人気の高いカードだからね。それにリア自身もアイドルだしね」

「って事は龍亞もファンなのね」

「ま、まぁね：」

リアが舞姫と呼ばれる理由にキラは納得していた。

「舞姫の効果を発動！手札『氷結界』と名の付くカードを任意の枚

数見せる事で、相手フィールド場にセットされたカードを任意の枚数手札に戻す。私は『氷結界の虎将　ガンターラ』を見せて、龍可ちゃんの左側のカードを選択するわ！」

「私はそれにチェーンしてリバースカードオープン！永続トラップ『神の恵み』。舞姫の効果はセットされたカードのみ。だから、選択された『神の恵み』は手札に戻らないわ」

「やるねぇ。んじゃあ行くわよ！「「バトル！」」」舞姫でスポーアに攻撃！」

「この瞬間！罠カード『ガリトラップ－ピクシーの輪－』を発動！私の場に表側攻撃表示でモンスターが2体以上存在する場合、相手は攻撃力の1番低いモンスターを攻撃対象に選択する事が出来ない！」

スポーアの周りに光の輪が現れ、舞姫は攻撃する事が出来なくなった

「っつ：舞姫のバトルを中止！グルナードでサンライト・ユニコーンに攻撃！」

「リバースカードオープン！『ホーリー・エルフの祝福』！自分の場のモンスターの数×３００ポイントライフを回復する！」

グルナードによって切り刻まれてサンライト・ユニコーンは破壊された

「うぅ・・」

龍可ＬＰ４０００→４６００→４３００

「一角獣のホーンがフィールドから墓地に送られた時、デッキの１番上に戻るわ」

「次は反撃って事ね。ターンエンド」

「私のターン！神の恵みによってライフを５００回復」

龍可ＬＰ４３００→４８００

「私はスポーアをリリースして、『妖精王オベロン』をアドバンス召喚！さらに『一角獣のホーン』を装備」

妖精王オベロン
ＡＴＫ２２００→２９００

「バトル！オベロンでグルナードを攻撃！『フェアリー・ライン』！」

「くぅ：予告通りって訳ね：」

リアＬＰ４０００→３９００

「ターンエンド！」

状況的には龍可が有利に見えるが、手札の差で負けている。

「私のターン！「「ドロー！」」」チューナーモンスター『氷結界の術者』を召喚！」

「シンクロ召喚！？（しまった・舞姫に攻撃していれば・）」

龍可が危機的状況だという事に今気付いた。グルナードではなく、舞姫を攻撃していればシンクロ召喚は出来なかったかもしれない・・だが、どちらを攻撃していても一緒だとリアは思っていた。グルナードが残っていれば、グルナードの効果で、氷結界のモンスターを2体召喚し、シンクロを行う作戦でもある

「レベル4の舞姫に、レベル2の術者をチューニング！封印解除！レベル6。封印されし5本の切っ先で貫く稲妻となる龍よ！汝の下に現れよ！シンクロ召喚！『氷結界の龍　ブリューナク』！」

氷結界の龍　ブリューナク
ＡＴＫ２３００

「ブリューナクの効果を発動！手札を任意の枚数墓地に送る事で相手のフィールド場のカードを送った枚数分手札に戻す！私は手札を１枚墓地に送り、オベロンを手札に戻す。そして装備カードの一角獣のホーンの効果が発動されてデッキのトップに戻る」

「そんな！？」

オベロンが手札に戻った事によって龍可の場ががら空きになってしまった

「んじゃあ、せ～の！「「「バトル！」」」」ブリューナクで龍可ちゃんにダイレクトアタック！『雷槍ブリューナク』！」

雷の光線を放たれ、龍可のライフを一気に削った

「きゃぁぁぁ！」

龍可ＬＰ４８００→２５００

「ターンエンドよ。さぁ、この場をどう乗り切る！？」

「私のターン：」

引くカードは勿論『一角獣のホーン』手札には『妖精王オベロン』と『白魔導士ピケル』の３枚：これじゃあどうしようもない：

龍可ＬＰ２５００→３０００

「（どうしよう：どうすれば・・・）」

龍可に焦りの色が見えてきた。このままじゃあキラがリアの所に行ってしまう。キラと離れるのが嫌なのだ

「『白魔導士ピケル』を守備表示で召喚」

白魔導士ピケル
ＤＥＦ０

「私はターンエ「龍可！まだだ！」え？」

ターンエンドを宣言しようとした時、キラがそれを止めた。

「諦めるな！龍可はまだこのターンで出来る事があるはずだ！手札とフィールド場が全てじゃない。墓地だ！」

「墓地・・・そうか！」

墓地を確認して気付いた。まだ、やれる事があったからだ

「（ありがとう、キラ。）」

心の中で感謝をすると、表情が笑顔に変わった。

「キラに応援されるなんて…龍可ちゃん、あなたが羨ましいよ」

「ふふっ…キラは私達に楽しいデュエルをしてほしいのよ。私は墓地の『スポーア』の効果を発動！このカードが墓地に存在する場合、このカード以外の自分の墓地の植物族モンスター1体をゲームから除外して、このカードを特殊召喚する。この効果を発動するために除外したモンスターのレベル分だけこのカードのレベルをアップさせる。私は墓地のローズ・バードを除外して、スポーアを特殊召喚！」

スポーア
星1→5

「レベル2のピケルに、レベル5のスポーアをチューニング！聖なる守護の光、今交わりて永久の命となる。シンクロ召喚！降誕せよ『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』」

エンシェント・フェアリー・ドラゴン
ＡＴＫ２１００

「よくスポーアの効果を知ってたわね」

「いや、勘ですよ。自分がよくやるので…それに、楽しいデュエルが出来る時には楽しいデュエルをしないと」

「それもそうね。それにアドバイスのおかげで反撃出来るわ。一角獣のホーンがあるわけだし」

「ヨッシャ～！行け～龍可～！」

ダークシグナーとのデュエルのように苦しんでデュエルをしてほし

くはないと思って、キラは龍可にアドバイスを送ったのだ

「私はエンシェント・フェアリー・ドラゴンに一角獣のホーンを装備！」

エンシェント・フェアリー・ドラゴン
ＡＴＫ２１００→２８００

「エンシェント・フェアリー・ドラゴンでブリューナクに攻撃！『エターナル・サンシャイン』！」

エンシェント・フェアリー・ドラゴンの聖なる輝きにより、ブリューナクが耐えきれず破壊された

「ブリューナク：」

リアＬＰ３９００→３４００

「ターンエンド」

龍可はまだ安心仕切れてない。リアのライフをあまり削れてないからだ。リアのライフは３４００、龍可のライフは２５００。もし回復してなかったら大きな差が開いていただろう。

「私のターン！「「ドロー！」」」私はマジックカード『貪欲な壺』を発動！墓地のモンスター５体をデッキに加えてシャッフルしてカードを２枚ドローする」

リアは墓地の『氷結界の武士』『氷結界の舞姫』『氷結界の術者』『氷結界の虎将　グルナード』と先程ブリューナクの効果で墓地に送った『氷結界の虎将　ガンターラ』をデッキに戻してシャッフルし、２枚ドローした

すると勝利の笑みを浮かべた

「私は永続魔法『ウォーターハザード』を発動！自分フィールド場

にモンスターが存在しない場合、手札からレベル４以下の水属性モンスターを１体特殊召喚出来る。『氷結界の修験者』を特殊召喚！
そしてチューナーモンスター『氷結界の風水師』を通常召喚！」

氷結界の修験者
ＡＴＫ１５００

氷結界の風水師
ＡＴＫ８００

「まさかチューニング！？」

「そう：レベル４の修験者にレベル３の風水師をチューニング！封印解除！レベル７！封印されし神の槍となる龍よ。汝の下に現れよ！シンクロ召喚！裁きの時は来た！『氷結界の龍　グングニール』！」

氷結界の龍　グングニール
ＡＴＫ２５００

「グングニールの効果って……」

「そう。私は最後の１枚となった手札を墓地に送って、エンシェント・フェアリー・ドラゴンを破壊！」

グングニールの咆哮によってエンシェント・フェアリー・ドラゴンは破壊された

「さぁ、行くわよ！グングニールで龍可ちゃんにダイレクトアタック！『裁きの一撃グングニル』！」

龍可のライフは３０００、グングニールの攻撃力は２５００。この攻撃が決まれば確実に龍可のライフは５００になる。だが、次の引くカードも決まっている：

「いやぁぁぁぁ！」

龍可ＬＰ３０００→５００

「ターンエンド」

「私のターン、ドロー・・・っつ・・・ターンエンド」

龍可ＬＰ５００→１０００

引くカードは勿論『一角獣のホーン』これでは何も出来るはずがない

「私のターン！「「バトル」」」これでとどめよ！グングニールでダイレクトアタック！」

龍可は為すすべもなく負けてしまった

龍可ＬＰ５００→０

リアが勝利して、会場はさらに盛り上がった。さすが舞姫だっと・・・

龍可はその場に膝をついた。キラがリアの家に行ってしまう・勝敗条件だ。だけど、悔しかった

龍亞は「リアが勝った～！」っと喜んでいる人達を見て、勝敗条件の事を思い出した

「ねぇ、リアが勝った時の条件をあっちの人達に言ったらどうなるのかな？」

「止めなさい。暴動が起きて被害が出るわ」

「あぁ～・確かに・・」

「主にキラに・・」

キラに対する暴動が起きるのは目に見えていた。だから、条件の事は黙った方が安全だろう。っとキラがいない事に龍亞は気付いた

「って、キラ！どこに行くのさ！？」

「下だよ」

それだけ言って階段を降りて行って、龍可の隣に立った

「龍可、見てて面白いデュエルだったよ」

「でも・私が負けたから・キラは・」

「さぁ！今日はキラは私の家にカモンだよ！」

「ごめん。俺は今の家が落ち着くんだ‥」

「え?‥あ‥ぇ‥ぁ‥あぁ‥そういえばキラの意見を聞いてなかった‥」

「あ‥確かにそうね‥」

「(今思い出したのねあの2人‥‥っていうか、ギャラリーが騒いでて条件の話が聞こえてなくて良かったわ‥)」

未だにギャラリーは騒いでてキラ達の会話は聞こえてないようだ

「じゃあ、無意味だったわね‥」

「いや、違うよリア。見てて面白いデュエルだったよ。だから俺もリアとデュエルがしたい」

「私が勝ったら今度こそ！」

「良いよ。俺が勝ったらその話は無しだ」

「じゃあ行くわよ！」

「「デュエル！」」

譲れない想い　龍可ＶＳリア（後書き）

龍可が負けてキラが奪われると思いきや続いてキラとリアのデュエル

ってか、『一角獣のホーン』を使い回しし過ぎだと思いました（笑）

今年最後の更新になります。今年１年この小説を読んで頂きありがとうございます。次回は来年の更新になりますので来年もよろしくお願いします

次回はキラＶＳリアです

氷結界ＶＳゼクス（前書き）

かなり遅くなって本当にすみません！
約４ヶ月の間お待たせしました。
不定期更新とはいえ、ここまで遅くなるとは、申し訳無いです。

今回はキラとリアのデュエルです。

今回はとあるカードはアニメ効果のカードを使ってます。ＯＣＧ効果ではありません。

氷結界ＶＳゼクス

リアＬＰ４０００
キラＬＰ４０００

「先攻は頂くわよ。私のターン、せ～の「「「ドロー！」」」」

「うおぉ・・・間近で聞くと凄まじいな・・龍可はこれを受けてたんだ」

「結構気圧されるのよ。プレッシャーも大きいし」

「まぁ、今は楽しむ事と・・・」

最後に何かを言っていたが、龍可は聞き取れなかった。

「私は『氷結界の決起隊』を攻撃表示で召喚してターンエンド」

氷結界の決起隊
ＡＴＫ１５００

「俺のターン、ドロー！俺は手札から永続魔法『マジック・クロニクル』を発動。デッキからカードを5枚選択してゲームから除外する！このカードは相手が魔法カードを発動する度にクロニクルカウンターを乗せ、２つ取り除く事で、除外したカードを1枚相手が選択して自分の手札に加える。でも、このカードがフィールド場から離れた時、このカードの効果でゲームから除外されているカード1枚につき、自分は５００ポイントのダメージを受ける」

「そんな危険な賭けをして良いの？手の内を晒してるのと同じなのよ」

リアの言うとおり、まだ何も仕掛けてないキラが5枚デッキから選択して除外する。キラのデッキ内容を晒すようなものだ。さらにもしリアが『マジック・クロニクル』を破壊すればキラに大ダメージも与える

「そう簡単に行かないさ。デッキから『ゼクター』と名の付く『ブ

レイド』『ハンマー』『ガントレット』『ウィング』『キャノン』を除外する。そして『E・HERO　プリズマー』を召喚！」

E・HERO　プリズマー
ATK1700

「プリズマーのモンスター効果を発動！エクストラデッキから『E・HERO　ゼクス・パルマフォルム』を選択し、その融合素材であるゼクスを墓地に送り、プリズマーはゼクスと同名カードとして扱う」

「E・HERO　ゼクス？何そのカード」

「今から見してあげるさ！除外されている『ゼクター・ガントレット』の効果を発動！自分の手札を1枚墓地に送る事でこのカードを手札に加える！」

「『マジック・クロニクル』を使ったのってそのため！？」

「そうさ。『ゼクター・ガントレット』をプリズマーに装備！さらにフォルムチェンジ！現れよ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス・パルマフォルム』！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス・パルマフォルム
ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２０００
風　戦士族　星７
効果　融合
『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』＋『ゼクター・ガントレット』
自分のフィールド場に上記のカードが揃っている時、墓地に送ることでこのカードを特殊召喚できる（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）
このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、戦闘を行った相手モンスターの攻撃力分このモンスターの攻撃力に加える

キラの場にゼクスが現れ、ベルトから紫色のガントレットを装着し、緑色に変色した

「それが…ゼクス」

「バトル！ゼクスで氷結界の決起隊に攻撃！『グラビングホールド』！」

ガントレットで決起隊の頭を掴み、そのまま握り潰して破壊した

「っ……1ターン目からこんなに…」

リアＬＰ４０００→３０００

「ゼクス・パルマフォルムの効果を発動！戦闘で相手モンスターを破壊した時、破壊した相手モンスターの攻撃力をゼクスの攻撃力に加える」

「決起隊の攻撃力は１５００、ゼクスが２５００だから合計で……攻撃力４０００！？」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス・パルマフォルム

ＡＴＫ２５００→４０００

「俺はこれでターンエンド」

「私のターン！せ～の「「ドロー！」」：（まさかキラがこんなに強いなんて・・・）」

リアにとって序盤からエースを出されるのは予想外だった。さらに言うならリアの持つ氷結界のデッキでは攻撃力で４０００のゼクスを超える事は不可能

倒すなら効果でしか倒せないが、今はゼクスを倒す手段が無い

「私は永続魔法『ウォーターハザード』を発動！ウォーターハザードの効果で、自分フィールド場にモンスターが存在しない場合、レベル４以下の水属性モンスターを特殊召喚出来る。私は『氷結界の御庭番』を守備表示で特殊召喚し、『氷結界の破術師を守備表示で召喚してターンエンド」

氷結界の御庭番
ＤＥＦ１６００
氷結界の破術師
ＤＥＦ１０００

「なるほど。ゼクスの攻撃力を上げさせないために攻撃力の低いモンスターを…」

「ゼクスの攻撃力を上げさせるとこっちが厄介よ」

リアは焦っていた。もしキラが『Ｈ－ヒートハート』をデッキに入れているならば負ける確率が高い。だが、『Ｅ・ＨＥＲＯ』デッキに『Ｈ－ヒートハート』を入れる人は少ない。むしろ『Ｅ－エマージェシーコール』や『Ｒ－ライトジャスティス』の方しか入れない。だが、キラの場合、『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』という通常モンスターを入れてるから『Ｏ－オーバーソウル』を確実に入れている。もしかしたら『ヒーローフラッシュ！！』のために『Ｈ－ヒートハート』を入れていてもおかしくない。とそう読んでいた

「リア！頑張って～！」

「負けるな～！」

いろんな人達がリアを応援し、それにリアは手を振って応える

「俺のターン。『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』を召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン
ＡＴＫ１６００

「（やった！スパークマンの攻撃力と御庭番の守備力は同じ。だからゼクスは確実に御庭番にしか攻撃出来ない！）」

まだリアにもチャンスがあるようだ

「バトル！ゼクスは御庭番に、スパークマンは破術師に攻撃！」

ゼクスは先程同じ方法で御庭番を破壊し、スパークマンは光を放って破術師を破壊した

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス
ＡＴＫ４０００→４１００

「俺はカードを1枚セットしてターンエンド」

「私のターン！せ～の「「ドロー！」」来た！手札からマジックカード『氷結界の三方陣』を発動！私は『氷結界の修験者』と『氷結界の守護陣』と『氷結界の舞姫』を見せ、マジック・クロニクルを破壊！」

マジック・クロニクルを破壊され、除外されているカードは４枚。だからキラに２０００のダメージだ

キラＬＰ４０００→２０００

キラに初ダメージを与えた事によって、観客は大喜びだ

「さらに『氷結界の三方陣』の効果で『氷結界の舞姫』を特殊召喚！さらにチューナーモンスター、『氷結界の守護陣』を召喚！レベル４の舞姫にレベル３の守護陣をチューニング！封印解除！レベル７！封印されし神の槍よ。汝の下に現れよ！シンクロ召喚！裁きの時は来た『氷結界の龍　グングニール』！」

氷結界の龍　グングニール
ＡＴＫ２５００

「来たよゼクス」

『あぁ・・だが、氷結界はグングニールまでしか封印を解いてないようだ』

「グングニールまでって・・ブリューナク・・だったかな。他にもいるの？」

『後、ドゥローレンとトリシューラがいる。トリシューラの封印が解かれたらあの世界はおしまいだ』

「世界が終わる…か……それを食い止めるんでしょ？」

『そのためにキラに協力してもらってる』

「でも、まさかゼクスが言っていたデュエルターミナルの世界のカードがこの時代にあるなんてね……それもシンクロモンスターで」

龍可にはキラとゼクスが何の話をしているのか全く分からなかった

『来るぞ！』

「グングニールの効果を発動！手札を1枚を墓地に捨てて、ゼクス・パルマフォルムを破壊する！」

「速攻魔法『フォルム・アウト』を発動！自分フィールド場に表側表示で存在する『ゼクス』と名の付いた融合モンスターをエクストラデッキに戻し、エクストラデッキに戻したモンスターに記された融合素材モンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、『ゼクス』をフィールド場に特殊召喚し、装備カードを手札に戻す！」

ゼクスからガントレットが離れて、緑色から黒色に変色し、グングニールの破壊効果を回避した

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス
ＡＴＫ２５００

「ここまでしてゼクスを倒せないなんて：（手札はもう無い：フィールドにはグングニールしか：次のターンを待つしかない！）行くわよ！グングニールでスパークマンに攻撃！『裁きの一撃！グングニル』」

グングニールの放つ雷がスパークマンを破壊した

キラLP2000→1100

「リア、忘れてるよ」

「あっ・・・」

リアは皆と一体となってデュエルをする事を忘れていた。アイドルとしてやってはいけない事だったが、今はキラとのデュエルに夢中になりすぎてしまっただけだ

「っ・ターンエンド」

「俺のターン」

リアはマネージャーから《デュエルに夢中になりすぎるな》と注意された事がある。それは何時でも忘れてはならない。だが、それを忘れてしまった。その事にリアはショックを受けている。だが、それを表に出してはならない

「俺は手札3枚を墓地に送り、除外されている『ゼクター』と名の付く『キャノン』『ブレイド』『ハンマー』を手札に加える」

「そんなに加えて何を・・・」

「決まってるさ・舞台はクライマックス！『ゼクター・キャノン』をゼクスに装備！フォルムチェンジ！現れよ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス・ガンナーフォルム』」

ゼクスがベルトから巨大なキャノンを取り出すと、体が青色に変色した

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス・ガンナーフォルム
ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２０００
水　戦士族　星７
効果　融合
『Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス』＋『ゼクター・キャノン』
自分のフィールド場に上記のカードが揃っている時、墓地に送ることでこのカードを特殊召喚できる（この特殊召喚は融合召喚扱いと

する）
自分フィールド場のカードを1枚数墓地に送る度に、このカードに弾薬カウンターを1つ置く。以下の効果のどちらかを使用出来る。
・弾薬カウンターを任意の数取り除く事で、取り除いた数分相手フィールド場のカードを破壊する。
・弾薬カウンターを任意の数取り除く事で、このターンのエンドフェイズまで取り除いた数×１０００ポイント攻撃力をアップさせる。

「ゼクス・ガンナーフォルムに『ゼクター・ソード』『ハンマー』『ガントレット』を装備して、効果を発動！装備カードを全て墓地に送り、送った枚数分弾薬カウンターを置く！」

ゼクターの装備カードが全てキャノンの中に装填されていった。

「何をする気なの？」

「何って：勝つ事さ！ゼクス・ガンナーフォルムの効果！弾薬カウンターを全て取り除いて、取り除いた数×１０００ポイント攻撃力をアップさせる！」

E・HERO　ゼクス・ガンナーフォルム
ＡＴＫ２５００→５５００

「攻撃力：５５００！？」

リアにとってキラは圧倒的過ぎた。キラはこの時代に来てから新しい目標を見つけた。ゼクスとデュエルターミナルの世界の戦争を終わらせる事。今までは帰る事だけで、他は何も無かったが、この時代にいる理由が出来た

「ねえリア。今楽しい？」

「楽しいけど：何で？」

「だって、デュエルの勝ち負けではない何かに悔しがってるじゃないか」

「うっ……」

「俺にアイドルデュエリストってのは分からない。ただ、リアは皆を楽しませてるのは分かる。でも、俺はリアをアイドルデュエリストじゃなくてただのデュエリストとしてデュエルをしてるんだ。アイドルとかフォーチュンカップに出場できたとかサイコデュエリストとか特別だけど、デュエルをする時はただのデュエリストだ。周りなんて関係ないよ」

キラはリアをアイドルではなくデュエリストと見ていた。それはアキの時も同じで黒薔薇の魔女とは見ていなかった

「ごめん・・・何かいつもアイドルとしてのデュエルをしちゃうの。じゃないと私は・・・」

「皆を楽しませるにはリア自信が最高に楽しまないと、な」

キラが言葉を投げてそれをリアとして受け止めた。

「バトル！ゼクス・ガンナーフォルムでグングニールに攻撃！『ウ

ォーターハーマー』！」

ゼクスが水のレーザー砲をグングニールに放って破壊した

リアＬＰ３０００→０

――――――――――――――――――――――――――――――――

「ねぇ龍可、何を拗ねてるの？」

「知らない」

「アキさん！」

あれから色々あったが、放課後になった。キラは何で龍可が拗ねているのか分からない。龍可はぷいとキラから逸らした。もう何がなんだか分からないキラはアキに聞くしかない。

「まぁ・・・あんなことがあればね・・・」

あんなこととは・・・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――

「キラ！」

龍可はキラが勝った事に喜び、キラのデュエルが凄いと思った

「ははっ」

キラも楽しかったのか、満足そうに龍可の頭にポンと手を乗せた。

「キラ！！」

ここでデジャブを感じた。リアが顔を真っ赤にして、キラに走って向かって来て、思いっきり抱き付いた。キラはそれに耐えられず倒れた。

「いつつ・・・何？」

前回は先生1人だけで問題は無いが、今はファンなどいろんな人が見ている。

そして、先程言った言葉をもう1度・・・

「キラ、私はあなたの事が本当に大好きなの！私と付き合って！」

大胆告白とはこの事だ。これでキラはシリアス的な意味でも、ラブコメ的な意味でもいろんな人を敵に回してしまった

「うん、いいよ。でも、何に？」

これで敵が多くなったのは確定事項だ。本当の意味が伝わっていないにも関わらず、キラ思考意外の人から見ればキラとリアが恋人関係になった事になるでも、キラはその事に全く気付いてない

「ありがとう！」

リアはキラを思いっきり抱きしめた。だが、キラは何に付き合うのかも分からないがとりあえず「どう致しまして」っとしか言えない。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「アキさん、あの事って何ですか！？」

「ごめんねキラ。私は龍可の味方だわ・・」

「龍亞！」

「ごめん。龍可を応援している身としては龍可の味方で‥」

これでキラの味方はデュエルアカデミアにはいない。

「もうどうなってんの！？」

知らないとは罪だ

「キラって罪作りよね‥はぁ‥‥」

龍可の呟きに龍亞とアキは同意見だった。

氷結界ＶＳゼクス（後書き）

アニメ効果を使ったのは『マジック・クロニクル』です。ＯＣＧ効果では、手札を全部墓地に捨ててデッキから5枚の魔法か罠カードを墓地に送る効果ですが、手札を捨てる効果は無しで、墓地にじゃなく除外にしてます。

まぁ、『ゼクター』との相性は良いですけどね。

今回初登場の2体のゼクスはちょっと効果が強すぎたと思いますが……まぁ…ね…

本日更新するまで、５Ｄ'ｓが終わってＺＥＸＡＬになりましたね。

自分は遊馬君と小鳥ちゃんが大好きです。そしてエクシーズにハマってます。

でも、やっぱり自分は十代君と融合が好きですね～

それではまた次回に

動き出した者達（前書き）

またも遅くなってすみません。本格的に忙しくなってやっと夏休みで一息つける時間が取れて更新しました

今回から少しずつ展開を進めてます。学園編は続けますが、オリキャラ少しずつ出してキラ達とデュエルさせます

動き出した者達

「はぁ～……いったいどうなってんのか教えて欲しいよ‥」

あれからキラ達は遊星達の所にいた。
未だに今の状況が分かってないキラは、遊星達に相談してみるものの、遊星達も龍可の味方だと言っていた。

「なぁキラ。リアの言った事をよ～く考えてみなよ」

「よく考えろって……買い物に付き合うだけじゃないんですか？」

「「「はぁ～……」」」

それを聞いてキラを除く全員が溜め息を吐いた

「キラの事だからそんな事だろうと思ってたけど・・・完全にリアに誤解させてるね」

「ねぇキラもう1度よ～く考えてみて」

自分の為にもリアの為にもじっくりと考えてほしい龍可。流石に龍可にここまで言われたらもう1度考えるしかないが、結論は同じだ

「う～ん・・・・・」

「じゃあ昼休みの時にリアが言った言葉を思い出しなさい」

「好きな人は誰っていう質問でしたよね。アキさん」

「えぇ、ただしｌｉｋｅじゃなくてｌｏｖｅの方よ」

「そのｌｏｖｅ：つまり愛してるってのが分かりません」

そんな事を言われると他の言葉を探す一同。

「じゃあやっぱりこういう時は今実際に好きな人が・・・」

「「龍亞は黙ってね」」

龍亞を背後から龍可とアキの2人が黙らせた。龍亞は振り返らずとも分かる恐怖を感じ黙るしかなかった

「はぁ・・・簡単に考えさせるしかないのね：キラには一緒に居て心がドキドキするような相手っていないの？」

「父さん」

それは即答だった。考える素振りを見せるどころか、１＋１＝２と答えるようにすぐに答えが頭の中にあったのかと思わせるかのような即答だった。それも満面の笑みで

「と・父さんね・どんなところが？」

「デュエルの相手をしてくれてる時かな。全力でぶつかって、凄く楽しくて、お互いがお互いにターン事によって形成を逆転していく所が楽しいんだ！次の父さんのターンになってどんなモンスターを出して今の状況を逆転させるのかが楽しみなんだ！それから・・・」

止まらない。父さんの話になると止まらないキラだ。でも、キラがここまで好いている父さんを皆は会ってみたいと思った

「キラそこまでにして。話がそれたから戻すけど・・・じゃあこのメンバーの中で１番安心出来る人は？」

「安心出来る人ですか？」

「そうよ」

この場にいるのは遊星と話に全く参加していないジャックとクロウとアキと龍可と龍亞だ。全員を一通り見て、じっくり考え‥

「龍可とアキさんかな‥‥」

出た答えはこの2人

「私と龍可？どうして？」

「似た者同士‥‥だからかな」

決して仲間と言わず、似た者同士‥つまり力を持つ者だからこそ一緒にいて安心しているのだ。

「似た者同士って：サイコデュエリストって事か？」

「半分正解です。俺はサイコデュエリストではありませんから：龍可と大体一緒でデュエルモンスターズの精霊が見えるんです」

「龍可もサイコデュエリストだろ。龍可と一緒ならキラも同じじゃないか」

「違います。俺は父さん達からの遺伝なんです：」

父さん達：この言葉にユベルが含まれているのはアキにしか分かっていない。

ここで一旦沈黙が続いた。だが、リアの事はまだ解決していない。遊星が沈黙を破った

「今は別の方向で考えてみよう。キラは恋人って分かるか？」

「まぁ：一応」

「じゃあキラの好きな人は？」

「ここにいる皆ですけど：」

1つ1つ遊星がキラに質問している姿を見てて、やはり兄弟みたいだと皆は感じていた

「カップルは分かるな？」

「カップル？：：男の人と女の人が一緒にいる事ですよね？」

「半分正解だ。男の人と女の人がお互いの事を好きだと言う事だ」

う〜ん……と考えて過去の事を振り返ってみてうん？っと頭を捻った

「じゃあ、俺と龍可はカップルって事ですか？」

ギョッと全員が龍可に注目した。

「龍可もうキラに告白したのか？」

「し、したけど／／／／！その時はちゃんと伝わってなかったの！キラも恥ずかしい事言わないで！」

「何で？俺は龍可の事好きだけど」

意味は違うけれども、好きと言われた龍可はキュンと来るはずだが、あまりにもストレート過ぎて龍可は顔が真っ赤になってダウンした

「あら龍可はダウンみたい。2階に寝かせて来るよ」

「あぁ。頼む」

龍亞が龍可を2階に運んで行くのを見届けると、話を再開させた

「キラは無自覚なのか？」

「多分そうなんだろう」

「キラって本当に罪作りよね」

クロウ、遊星、アキの3人の言っている意味が分からないキラだ

「話を戻そう。そのリアって子が言っている好きの意味をキラは分かるか？」

「好きの他に何かあるんですか？」

「リアって子が言っている好きはキラの考えている好きとは違う。キラの好きという気持ちの遥か先の何倍もの気持ちが愛してるに繋がる」

「遥か先の気持ち？じゃあリアは俺の事を愛してるの？」

その質問は率直過ぎないかと全員頭を抱えた

「それはリア自身だけが知っている。他の人は多分そうなんだろうと考えれるだけだ」

「そうですか‥じゃあリアに聞けば‥」

「それは止めなさい」

「え？でも‥‥」

「止めなさい」

言葉を遮ってまで止めるアキに「はい‥」としか言えない

――――――――――――――――――――――――――――――

結局は何も進まなかった。夜に近くなったので、キラ達は帰る事にした

「ねぇ龍可大丈夫？」

「大丈夫だけど‥あんなにストレートに言われるとこっちが恥ずかしいわ／／」

「ははは‥‥まぁ、キラもその内分かるさ」

「その内‥ねぇ」

前の方を歩いてるキラとアキを見た。本当に分かる日が来るのだろうか分からない

「それじゃあまたね」

「はい」
「またね」
「ばいばい」

いつもの別れ道で別れ、キラ達はトップスに向かった

マンションのエレベーターに乗った時、キラの痣だけが急に疼いた

「な・何・・・この痛み」

「どうしたの？」

「分からない・でも、何かが起きてる」

最上階に着くと急いでベランダに向かって外を見渡すと、とある場所で大爆発が起こった

「爆発！？」

「あの方向って‥‥アキ姉ちゃん家に近いじゃん！」

嫌な予感が3人を襲った。キラはローラーブレードに履き替えると同時にエレベーターに乗った

「キラ！どこに‥‥」

行くの？っと龍亞は聞こうとしたが、ドアが閉まって下に向かっていた

―――――――――――――――――――――――――――――――――

「ゼクス、どの方向？」

『真っ直ぐ行って、そこの交差点を右だ』

「分かった」

ゼクスの指示に従ってローラーブレードを走らせている

「ねぇ、何で俺の痣だけが光ったの？」

『何かが起きてるとしか考えられない…だが、この感じは…私とキラは感じた事があるぞ。そこを左に曲がれ』

「俺とゼクスが？デュエルターミナル絡み？」

『違う。今向かっている所に痣が光っているのが関係しているはずだ』

ゼクスが言い終えるのと同時に痣の光と疼きが収まった

「痣が…」

『急げ！真実が分からなくなるぞ！』

「うん」

爆発が起きた現場の近くまで来るとあらゆる場所がボロボロだった。
だが、現場に着くと嫌な予感は的中した

「アキさん！」

その場にアキが倒れていた。アキに近寄ってみると絶句した。体中がボロボロだ。決闘盤が起動していたのを見るとデュエルを行った後だと言うのが分かる

だが、キラにはアキがボロボロの姿でいるのが見ているに絶えなかった

周りに誰もいない‥だから誰が犯人なのかも分からない。だけど今はそれ所ではない、急いでアキを担いで病院に向かった

――――――――――――――――――――――――

「キラ君何があったんだ?」

「分からないんです。でも、アキさんをあんな姿にしたのは多分相手もサイコデュエリストです」

アキは今手術室で治療中。アキの父と母が来て何があったのかをキラは知っている限りの事を説明した。

後から遊星とジャックとクロウが集まると今説明した事を説明する。

説明された事を遊星は考えた。

「これは最近起きてる事件と同じ犯人かもしれない」

「最近起きてる事件？」

キラには分からない。配達等でニュースを全く観ていないからだ。

「デュエリスト狩りってやつか・だが、何故十六夜が狙われなければならんのだ」

「無差別ってやつか？」

「いいや、それは違う」

「牛尾！」

聴いた事のある声がするとそれは牛尾と深影だった

「違うとはどういう事だ？」

「これはセキュリティの内密な話なんだが十六夜に被害が及んだ以上話さない訳にもいかんな。これはキラと龍可にも関わる事だ」

「俺と龍可に？」

自分と龍可に関係があると言われると、今この場にいない龍可が心配になった

「そうだ。十六夜の他にも被害者が出てるんだが、その全員がサイコデュエリストなんだ」

「な！？」
「何だと！？」

皆驚きが隠せないでいた。

「ここは病院だ。静かに」

「あぁ：すまん」

牛尾に注意され、ジャックが黙った

「サイコデュエリストの数は全員把握出来てないが、サイコデュエリスト全員が容疑者だ」

「だが、キラはサイコデュエリストじゃないぞ。それに龍可は精霊と通じてるだけだ」

「私達だって2人を疑いたくはないのよ。でも‥」

「サイコデュエリストは異様な力を持つ‥‥龍可が精霊と通じてるだけとはいえ、それだけとは言えないんでしょう?まだサイコデュエリストの全ても解明されてない。俺の力も分からないからこそ俺達が疑われてるって事ですか」

「そう‥その通りよ」

ただただ唇を噛み締めるしかない。なにせこのネオ童実野シティは広い。だから犯人を探すのは至難の業だ

「被害者達の話とかはないんですか?犯人がどんな人なのかとか」

「それが‥」

深影と牛尾は同時に溜め息を吐いた

「全員まだ意識が戻ってないんだ」

「意識が戻らないだと？じゃあアキも・・・」

「そんな！？・・・・」

もしかしたらアキの意識が戻らないと知るとアキの母は絶句し、それを支える英雄だ

手術室から医師が出て来るが、結果は予想通り。意識は回復していない

既に病室に運ばれているアキの所に皆で向かった。

アキの体には至る所に包帯が巻かれている。見てるだけでも痛々し

いだけだ。だがキラだけはアキの体に異変がある事に気付いた

「ねぇ皆さん、アキさんの体の周りにある白いような黒いようなオーラは何でしょうか？」

「オーラ？そんな物ねえけど？」

「あるでしょう。ここに：っつ！」

オーラに触れた途端に激痛が走った

「お、おいどうした？」

「いえ：ちょっと：（これって：見える者だけに反応するのか？アキさんのお母さんはずっとそばにいるし：）」

アキの周りあるオーラを見ているとゼクスが現れた

『こういう時に龍可や十代、それとユベルとハネクリボーが居てくれたらな‥』

「うん。俺だけじゃあ判断出来ないよ……うん？……龍可は置いといて、父さんとユベルにハネクリボー？」

『あぁ、彼等ならこれが何なのか分かるんじゃないのか？』

「父さん達なら分かる事‥黒いオーラに白いオーラ……もしかしてダークネスの心の闇と破滅の光じゃないのか？」

『それだ！だが、この時代にダークネスの心の闇や破滅の光など‥』

「時代は関係無いと思う。特にダークネスは人の心に闇がある限りあり続けるって父さんが言ってたよ」

『じゃあ犯人は破滅の光と心の闇を持つ者か…誰なんだ…』

「（破滅の光…心の闇…それにサイコデュエリスト……いた！サイコデュエリストを狙う人物が！）」

ゼクスの姿が見えない遊星達はキラが独り言を言っているようにしか見えない。だが、キラが精霊と話をしているのは皆百も承知だ

「なぁ、キラ何の話をしてるんだ？」

「クロウ…それに皆。犯人は……」

ここで名前をだそうと思ったが、相手の事を考えると名前を出せないでいる

「犯人はどうしたんだ？」

「……いえ…何でも無いです」

「もういいよキラ君。夜も遅いし明日もアカデミアがあるだろう。もう帰りなさい」

「でも、アキさんが……」

「キラ、帰ろう」

「はい……」

アキが傷だらけの姿でも、キラは一緒に居たいと思った。だが、遊星に家族だけにしようと目で訴えられて反論出来ない

「また来ます」

っと言い残して病室を出て、皆帰った

マンションのエレベーターに乗って最上階に着いた

「ただいま」

夜中の0時を過ぎていて龍可と龍亞は寝ているが一応ただいまと言った

「あぁ・・お帰りだね」

「!?・・何でお前がここに」

帰ってくるはずの無い言葉がソファーに座っている相手から帰ってきて驚いた。だが、それは龍可と龍亞の声ではない

「いやね…お前に用があってわざわざ俺が出向いたんだ」

「俺に？……まぁリア絡みか…」

「それもあるな…お前が舞姫と付き合うなど断じて許さん！俺と今すぐデュエルしろ！」

「っと言ってももう0時過ぎてるよ。この時間に…」

「そういえばこの家に龍亞って子と龍可って子がいたね」

「！……龍可！龍亞！」

急いで龍亞と龍可を探すがどの部屋にもいない。

「お前！2人をどこにやった！？」

「大丈夫さ。ちゃんと保護してあるさ。俺の屋敷でね」

「（屋敷って事は…こいつが先生が言ってた大金持ちの生徒か…）」

「アンティーだ。お前がもしも万が一百億分の一の確率で俺に勝ったら2人を返そう。それとお前が望む者もやろう。だが、俺が勝ったら舞姫とは永遠に関わるな。それとお前が持っているＨＥＲＯデッキを貰う」

「な…何で！？」

あまりにも衝撃だった。負けたら人間関係所か大事なデッキまで渡さなくてはならないなんて納得出来ない

「そんなの納得出来ない」

「じゃあ2人は返さない」

「くっ・・・」

「この家に招き入れたのは彼らだ。俺はただインターホンをならしただけさ。その後は俺のＳＰ達に任せた」

「ズルいぞ・・」

「デュエルはちゃんとやるさ」

「分かった・デュエルしよう。でも何で俺のＨＥＲＯデッキが欲しいんだ？」

「それは舞姫とのデュエルを見てる時に俺の知らないＨＥＲＯを使っていたからさ。俺はそれが欲しいんだ。欲しくなったらすぐに行動あるのみだ。普段ならお金で交渉と行きたい所だが、相手がお前だからな…こてんぱんにしないと俺の気がすまん。さぁ、始めようか。陸谷昴が相手してやる」

「いいよ…俺はお前が謝ったって許さない！」

いつもは温厚なキラが怒っていた。我を忘れてオッドアイになった目で昴を睨み付けた

動き出した者達（後書き）

本当にアキにはいろんな意味で申し訳無い役割を与えました。キラは本当にｌｏｖｅの意味を理解してないんです。

３つの事が同時に発生してます。

１つ目はリアとの問題
２つ目はサイコデュエリスト狩りの事
３つ目は昴の事

次はキラＶＳ昴です

激突！ＨＥＲＯｖｓＨＥＲＯ（前編）（前書き）

はい。キラｖｓ昴のデュエルです。ちょっと短いですが、前編になります。
今回はアニメルールとアニメカードとオリジナルカードを出してます

そういえばＺＥＸＡＬを毎週観てるんですが、私は遊戯王が１番好きなアニメなんです。ＺＥＸＡＬが始まる前はあんまり期待してなかったんですが、とある番組でＺＥＸＡＬの特殊をやった時に遊馬君の声優さんが果てしなく面白い人だったんでＺＥＸＡＬが一気に自分の中の株が上々したんです。さらに言うと天城カイト……彼の声優さんは自分の最も大好きな声優さんなんです。
だからさらに株が急上昇したんです。
最も大好きなアニメに最も大好きな声優さんが出る。これだから遊戯王はいつまで経ってもやめられない！

すみません長くなりましたがどうぞ。

激突！ＨＥＲＯｖｓＨＥＲＯ　（前編）

ベランダに移動して昴とキラは距離を取って向き合った。そして、決闘盤を起動させた

「俺達は今仲間の事で忙しいんだ。でも、更にお前が問題を持ってきたせいで・・・」

『キラ落ち着け！』

「あ、あぁ・・・」

ゼクスに一喝されて、キラは落ち着きを取り戻して、目を通常通りに戻した。だが、まだ表向きは穏やかだが、内心は穏やかではない。アキの事、犯人の事、龍可と龍亞の事、そして昴の事

「「デュエル！」」

キラＬＰ４０００
昴ＬＰ４０００

「俺のターン。バブルマンを攻撃表示で召喚。そしてバブルマンの効果！バブルマンが召喚に成功した時、フィールドに他のカードが無い場合デッキから2枚ドローする」

キラは最初のターンからドロー加速をし、次の手に出る

「マジックカード『融合』を発動！フィールドのバブルマン、手札のフェザーマンとスパークマンを融合して、現れよ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター』！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター
ＡＴＫ２８００

「カード2枚セットしてターンエンド」

「俺のターン、ドロー。最初のターンからテンペスターとはやるじゃないか…でも、ＨＥＲＯデッキからしてその伏せカードは『ヒーローバリア』と『融合解除』だろうな……」

「な…（何で俺の伏せカードが……）」

昴の予想は的中していて、キラは驚いた。何故伏せカードが分かったのかはこのターンで分かる

「俺もバブルマンを召喚し、フィールド場に他にカードが無いから2枚ドロー。さらに手札からマジックカード『二重融合』を発動！自分のライフを５００ポイント支払ってこのカード1枚で2回の融合が可能だ」

Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン
ＡＴＫ８００

昴ＬＰ４０００→３５００

２度の融合：このターンで2体もモンスターを召喚するのか？っと疑問に思うが、そもそも融合素材が全て手札に揃っているとしたら厄介だ。だが、テンペスターを超える融合モンスターは少ない。昴の予想と昴の言っていた言葉を思い出すと、キラはある結論に辿り着いた。

「お前のデッキはＨＥＲＯデッキで、出すのはシャイニングの名を持つＨＥＲＯのどちらかだ！」

「当たり！良く分かったね。俺は手札のフェザーマンとバーストレディを融合して『Ｅ・ＨＥＲＯ　フェニックス・ガイ』を融合召喚！さらにスパークマンとフェニックス・ガイを融合して、現れよ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フェニックス・ガイ』！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フェニックス・ガイ
ＡＴＫ２５００

「シャイニング・フェニックス・ガイのモンスター効果。墓地のＨＥＲＯの数だけ攻撃力を上げる」

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フェニックス・ガイ
ＡＴＫ２５００→３７００

「さらにマジックカード『Ｒ－ライトジャスティス』を発動。俺のフィールドにＨＥＲＯは2体いるからどちらも破壊させてもらうよ」

「くっ……リバースカードオープン！『融合解除』シャイニング・フェニックス・ガイの融合を解除する！」

まさかここでＲ－ライトジャスティスを使って来るとは思ってもいなかった。キラの伏せカードは無いが、フェニックス・ガイとスパークマンではテンペスターには勝てない

Ｅ・ＨＥＲＯ　フェニックス・ガイ
ＡＴＫ２１００

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン

ＡＴＫ１６００

「バトル。フェニックス・ガイでテンペスターを攻撃！」

「迎え撃て！『カオステンペスト』！」

お互いのモンスターがぶつかり合うが、攻撃力の高いテンペスターが一方的に押している

フェニックス・ガイとテンペスターが激しい戦闘を続けている

「お前は俺がミスを犯したと思っているだろう？お前は馬鹿だ。シャイニング・フェニックス・ガイの融合を解除させたのは大きな過ちだ。テンペスターの融合を解除させた方が良かったものを・」

「何が言いたい？」

「言っただろう。お前は馬鹿だと。速攻魔法『瞬間融合』を発動。フェニックス・ガイとスパークマンを再び融合させ、シャイニング・フェニックス・ガイを融合召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フェニックス・ガイ
ＡＴＫ３７００

再びシャイニング・フェニックス・ガイが召喚され、再び戦闘が行われて今度はテンペスターが破壊されてしまった

「テンペスター！」

キラＬＰ４０００→３１００

「そしてバブルマンでダイレクトアタック」

防ぐ術もなくまともに受けるしかない

「ぐ・・・」

キラＬＰ３１００→２３００

「これで分かっただろう融合解除が無駄だって事が」

昴の方が1枚上手だったようだ。そのせいでキラはダメージを受けてしまった。だが、考え方を変えれば・・・

「いいや。今の行動は無駄ではないよ。お前は1ターン目からカードを使いすぎた。瞬間融合を使ったお陰でお前の手札は減っている。それに瞬間融合のもう1つの効果を忘れてる訳じゃあないよな？」

「くっ：減らず口を：『月の書』を発動してシャイニング・フェニックス・ガイを裏側守備表示にする」

キラの手札は2枚。昴の手札は0枚。これは明らかな差が出ていた

「ターンエンド」

月の書を使っていなければこのエンドフェイズに瞬間融合の効果でシャイニング・フェニックス・ガイはエクストラデッキに戻っていた。これではっきりとした。何故昴がキラの伏せカードを見破ったのかを：これは同じタイプの対決。ＨＥＲＯｖｓＨＥＲＯなのだ

「俺のターン！手札から『死者蘇生』を発動！バブルマンを選択して特殊召喚！さらにバブルマンのモンスター効果！バブルマンが召喚、特殊召喚、反転召喚された時、他にカードが無ければデッキから2枚ドロー！」

相手の伏せモンスターはシャイニング・フェニックス・ガイだ。戦闘破壊が出来ないから何とか繋げるしかない。だが、キラの引きは良かった。

「良し！マジックカード『古のルール』を発動！この効果でレベル

5以上の通常モンスターがリリース無しで特殊召喚出来る！現れよゼクス！」

E・HERO　ゼクス
ATK2500

ここでキラのエースであるゼクスが登場し、逆転劇を開始する

「現れたな…俺の知らないカード…俺が欲しいカード！」

「装備魔法『ゼクター・ウィング』をゼクスに装備して、フォルムチェンジ！『E・HERO　ゼクス・ウィングフォルム』を融合召喚！」

E・HERO　ゼクス・ウィングフォルム
ATK2500　DEF2000
光　戦士族　星7
効果　融合
『E・HERO　ゼクス』＋『ゼクター・ウィング』
自分フィールド場に上記のカードが揃っている時、墓地に送る事で

このカードを特殊召喚出来る（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）
このカードが戦闘を行う時、相手モンスターの効果を無効に出来る

ゼクスの背中から光の翼が展開されると、カラーが黒から白に変わった

「バトル！ゼクスでセットモンスター。つまりシャイニング・フェニックス・ガイに攻撃！『スピニング・シェル』！」

ゼクスに光の翼が包むと体を回転させてセットモンスターを破壊した。

「馬鹿な！シャイニング・フェニックス・ガイは戦闘では破壊されないはず！」

「ゼクスの効果だ。ゼクスと戦闘する相手モンスターの効果は無効となるんだ。続いてバブルマンでバブルマンを攻撃！」

E・HERO　バブルマン
ATK800

E・HERO　バブルマン
ATK800

攻撃力は互角なので同士討ちの結果に終わった

「ターンエンド」

フィールドはあっという間にキラが占領した。だが、ここで油断してはならない。例え昴の場と手札が無くても、墓地にはカードがある。さらに次のドローで何を引くかは分からないからだ

「俺のターン！ふん：マジックカード『ホープ・オブ・フィフス』を発動！墓地のバブルマン、フェザーマン、スパークマン、フェニックス・ガイ、シャイニング・フェニックス・ガイの5枚をデッキに戻す。そして俺の手札は0だ。だからカード3枚ドロー！」

「ここでそのカードを引き当てるとは・・」

「さらにバブルマンを通常召喚！このカードが召喚された時、フィールドに他のカードが無ければ2枚ドロー」

Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン
ＡＴＫ８００

昴は更にドローして手札は４枚になってしまった。

「マジックカード『ＨＥＲＯ' Ｓ　ボンド』を発動！フィールド場にＨＥＲＯがいる時、手札からレベル４以下のＨＥＲＯを2体特殊召喚出来る！フェザーマンを召喚！さらにチューナーモンスター！『Ｅ・ＨＥＲＯ　キッズ』を特殊召喚！

Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン
ＡＴＫ１０００

Ｅ・ＨＥＲＯ　キッズ
ＡＴＫ３００

場にフェザーマンとキラは初めて見るモンスター、ヒーローキッズに似ているモンスターが現れた

「チューナーモンスター…って事は…」

「そう。シンクロだ！お前がエースの登場なら俺もエースの登場だ！レベル４のバブルマンとレベル３のフェザーマンにレベル１のキッズをチューニング！月の照らす今宵の舞台に、美しき夜の光が舞い降りる！シンクロ召喚！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ストライクルナ』！見参！」

月から新たなるＨＥＲＯがゆっくりと降りて来た。舞台はクライマックスに近づいていき、両者のエースの激突が始まる

激突！ＨＥＲＯｖｓＨＥＲＯ　（前編）（後書き）

ストライクルナの攻撃力や効果は次回に持ち越しです。

そしてバブルマンの使い回しが激しい回です。でも多分次回もバブルマン使うかも…

せっかくの夏だし特別編を書こうかなと思ってます。あえて言うならプールか海か…書くならプールの話でも書こうかな。

キラと偽りの怒り　（後編）　（前書き）

前回の続きです。今回もアニメルールを適用しているカードを使っています。

それとオリカも・・・

キラと偽りの怒り　（後編）

「これが…ＨＥＲＯのシンクロモンスター…」

「ＨＥＲＯのシンクロは初めて見るのかい？無知だね。ＨＥＲＯ使いならこのモンスターを知ってて当然だよ。ＨＥＲＯのシンクロモンスターは他にもあるんだから」

キラは知らなくて当然…とは言えない。少しでも勉強をしていればＨＥＲＯのシンクロモンスターを知っていたのかもしれなかったからだ

「ストライクルナは俺のお気に入りでエースであり、美しいカードだ」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ストライクルナ
ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ２５００
闇　戦士族　星８

効果　シンクロ
『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名の付くチューナー＋チューナー以外の『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名の付くモンスター１体以上
このモンスターがフィールド場に表側表示で存在する限り、フィールド場の全てのモンスターの攻撃力と守備力を入れ替える

「ストライクルナのモンスターが発動される。ストライクルナがフィールド場に表側表示で存在する限り、フィールド場の全モンスターの攻守を入れ替える！」

「って事はゼクスの攻撃力が…」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス・ウィングフォルム
ＡＴＫ２５００→２０００
ＤＥＦ２０００→２５００

「さらに装備魔法『アサルトアーマー』をストライクルナに装備！これによりストライクルナの攻撃力が３００ポイントアップする」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ストライクルナ

ＡＴＫ２５００→２８００

「バトル！ストライクルナでゼクスに攻撃！『ルナティック・デストラクション』！」

「くっ：ゼクス・ウィングフォルムのモンスター効果！このカードが戦闘を行う時、相手モンスターの効果を無効にする！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス・ウィングフォルム
ＡＴＫ２０００→２５００
ＤＥＦ２５００→２０００

ゼクス・ウィングフォルムの効果を使うのだけれど、ストライクルナの攻撃力と守備力は同じ。アサルト・アーマーの効果で上がるのは攻撃力。だから負けるのは分かっていたにしても、ダメージ軽減の事を考えるしか無かった

ストライクルナの放つ閃光をゼクスは太刀打ちしようとするが、やはり攻撃力に差があり、破壊された

「ゼクス！」

キラＬＰ２３００→２０００

「俺はこれでターンエンド」

今の状況はとても不利だ。手札にあるのは『ラスト・アタック』と『Ｈ－ヒートハート』の２枚だ。ここでいつものように『Ｏ－オーバーソウル』を引いてゼクスを召喚し、『Ｈ－ヒートハート』で攻撃力をアップして『ラスト・アタック』で２倍にしたいが、昴のライフには届かないのだ。次に繋げようにもそのターンのエンドフェイズに『ラスト・アタック』の効果でゼクスは破壊される。キラの場ががら空きになり、昴にターンを移してしまう。ストライクルナの効果さえなければ勝利への確率は高かった。だが、ストライクルナの効果でフィールドを制圧されている

「（負ける訳にいかない：負けたら俺のデッキが：それに龍可と龍亞が・・・？）おい、何で俺がここに住んでるって分かったんだ？」

キラが龍可達の家に住んでる事を知っているのは極僅かの人だ。少なくとも昴が知っている筈はない。だが、キラがここに帰ってきたら昴はそこにいた

「急に何だ?お前は知らない事が多いな。舞姫の事も知らん。俺の事も知らん。ＨＥＲＯ使いなのにＨＥＲＯのシンクロモンスターも知らん。本当に無知なやつだな。まぁいい:俺は陸谷企業の息子だ」

「陸谷企業?」

「情報の会社だ。誰もが知らない事も知っている。皆が知っている事の裏の事も知っている会社だ」

「じゃあそれで俺の事も:」

「あぁ、知っている限りの事は知っている。ネオ童実野シティのチャンピオンの不動遊星や元チャンピオンのジャック・アトラスの知り合い。それにサイコデュエリストの十六夜アキやあの龍可ってや

つとも知り合い。フォーチュンカップにゴドウィン元長官に選ばれて出場し準決勝で敗退。だがこの時にこの町で差別されている事を否定した」

「あの時の事か…」

「これはあくまで俺の予想だが、お前もサイコデュエリストなのだろう」

見透かされたように言われるが、半分は正解だが半分は不正解だ。

「俺は…サイコデュエリストじゃない…」

射抜かれた感覚があり、弱々しい否定になり説得力が無い

「嘘をついているような目はしてないけど、お前には何か裏がありそうだな…遊城キラ。それにお前はかなり昔の新聞に名前が記載されている。だがお前は『今』ここにいる。お前の方がいったい何な

んだろうな」

「（こいつ・何なんだ・）」

昴の睨む目に怖じ気づいてしまう。その内自分の正体がバレてしまうんじゃないかと・でも、昴が情報屋の息子だったら知りたい事があった

「お・お前は犯人の居場所を知ってるのか？」

「犯人？何の事件のだ」

「最近の事件の事。無差別に負傷者を出してる事件だ」

「いいや・知らんな。目撃情報は無いし、被害者は全員意識不明だしな・。そういえば十六夜アキも被害者らしいな」

「何で!?今日起きたばかりの事なのに‥」

「だから言っただろ‥情報屋だと。これ以上聞きたいのならお金が必要になるぞ」

「だったらこのデュエルに勝ったらチャラにしてもらうから話せ!」

「良いだろう。だが、お前に勝ち目は薄いだろうがな‥‥」

ふぅ‥っと昴は一息ついて続きを話し始めた

「この事件が起きたのはダイダロスブリッジが完成したすぐ後だ。被害者は全員意識不明なのは話したが、デュエルをした被害者達は全員負傷もしている。よって相手はサイコデュエリストだ。だが被害者も全員サイコデュエリストだ。だから無差別ではない。サイコデュエリスト狩りって事になる‥まぁ、勝手に潰し会えば良いさ」

「潰し会う？どういう事？」

「俺はサイコデュエリストは大嫌いなんだ・気持ち悪い。だから勝手に潰し会えば良い。勝手に傷つけ会えば良い。死んでも構わん・あぁだが意識不明はやっぱり困るな。情報が貰えないからな。死んだ場合は情報が貰えないって諦めがつくんだけどな・」

「お前・人の命をなんだと思ってるんだ！？」

「人の命？あいつらは人ではないだろう。お前の周りにいる龍可ってやつも十六夜アキも」

「・・・・・俺はやっぱりお前を好きにはなれない・」

「それは嘘だ遊城。お前は俺が嫌いなだけだ。もっとも、俺はお前が大嫌いなんだがな」

『嘘』・これをキラ自身に言われると僅かに心が揺れてしまう。何

故ならキラは『ライア』だからだ

「俺のターン、ドロー」

「そういえば俺はお前に聞きたい事がある」

「俺に？」

「サイコデュエリスト狩りの容疑者はサイコデュエリストだ。セキュリティの容疑者リストの中にサイコデュエリストではないお前の名前がある。それは何故だ？お前はさっきサイコデュエリストじゃないと言った。だが、容疑者リストの中に名前はある・・・」

「っ・・・・・」

「アンティの追加だ。俺が勝ったらお前の全てを話して貰う。包み隠さず、全てをだ！」

「……嫌だ…」

「だったら龍可ってやつに聞こうかな」

「やめろ…」

「やめないさ。情報屋の息子だ。あの会社は俺が引き継ぐんだからな。だから知りたい事は全て調べるどんな事をしてでもな」

「やめろ…」

キラの怒りを堪えながら小さく呟くが、昴は止まらない

「龍可ってやつの事になると動揺するな…よっぽど大切なやつなんだろうな。それに面白い情報も持っている」

キラの怒りは限界を超えてしまった。

「やめろと言っているだろ！マジックカード『ホープ・オブ・フィフス』を発動！」

テンペスター、スパークマン、フェザーマン、バブルマン、ゼクス・ウィングフォルムの５枚をデッキに戻し２枚をドローした

「『Ｏ－オーバーソウル』を発動し、ゼクスを特殊召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゼクス
ＡＴＫ２５００

「エースを出したのは良いがストライクルナの効果で攻撃力はこちらが上だ」

E・HERO　ゼクス
ＡＴＫ２５００→２０００

「さらにマジックカード　『Ｈ－ヒートハート』を発動してゼクスの攻撃力を５００ポイントアップ！」

E・HERO　ゼクス
ＡＴＫ２０００→２５００

「ストライクルナと攻撃力を並べた…ふんっ…次は『ラスト・アタック』だろうな」

「『ラスト・アタック』をゼクスを選択して発動！ゼクスの攻撃力を2倍にする！」

E・HERO　ゼクス
ＡＴＫ２５００→５０００

「バトル！ゼクスでストライクルナに攻撃！」

「我を失ってるなぁ。怒りに実を任せて突っ込んでやがる。これは俺の勝・・・」

昴は驚きの余り目を見開いた。何故ならキラの目がオッドアイになっていたからだ

「手札から『ライア』の効果を発動！自分フィールド場に表側表示で存在する闇属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地に送る事で、エンドフェイズ時まで、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力を０にする！」

ライア
ＡＴＫ１９００　ＤＥＦ１１００
闇　悪魔族　星４
効果
自分のメインフェイズ時に、フィールド場に表側表示で存在するこのカードを手札に戻す事が出来る。また、自分フィールド場に表側表示で存在する闇属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地に送る事で、エンドフェイズ時まで、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力を０にする

「何！？」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ストライクルナ
ＡＴＫ２８００→０

「これじゃあストライクルナの効果が・・」

そう・・無意味だ

ゼクスの背中にライアの悪魔の翼が生え、空高く飛び、闇の閃光を放った

「『ライアー・オブ・ゼクス』！」

ストライクルナでは到底太刀打ち出来ない。たった１ターンで・・・・
たった今しかないチャンスをキラが勝ち取ったのだ

「うわぁあー！！」

昴ＬＰ３５００→０

ゼクスの放つ閃光はただの衝撃ではない。サイコデュエリストと似た衝撃だ。それを昴は受けてしまい吹っ飛んだ

その時にストライクルナのカードが昴の決闘盤から離れ、キラはそれを掴む

「くっ：アンティでストライクルナを頂くってか：：：まぁいい。新しい発見があったよ。お前はサイコデュエリストだな」

キラは俯いて下唇を噛み締めて蚊の鳴くような声で何かを言った。

「……って…れ」

「俺がお前の正体を暴いてやるよ」

「帰れ！」

キラの威圧感に押され、昴は何も言えなかった。エレベーターの方に向かうように戻ろうとするが最後に一言：

「嘘つき」

それだけ言って昴は帰って行った

キラは勝ったのにとても悔しかった。父さんと交わした約束を破った悔しさもある。いろんな感情がキラの中で渦巻いていた

その場でずっと立ち尽くしていると、昴のＳＰらしき人が２人入ってきた。どうやら寝ているだろう龍可と龍亞を運んできたようだ。ソファーに寝かせると戻っていった

キラはリビングに戻って龍可達が寝ているだけと確認すると、安心した

「はぁ…今日は疲れた…」

その呟きは誰にも届いてない。２人をそれぞれの部屋のベッドに寝かせると、キラも部屋に戻って疲れが溜まっていたため、すぐに寝てしまった

こうして編入初日が終わった

キラと偽りの怒り　（後編）　（後書き）

これだけで1日なんですよね。かなり長かった気がします。編入して、両手に話で、龍可とリアがデュエルして、今度はキラとリアがデュエルして、さらにキラと昴がデュエル：

本当に長かった・・・

今回でゼクスの一般的なフォルムは全て出しました。ネオス的に言うと、普通のコンタクト融合です。

トリプルコンタクト融合的な事も考えてあります。

それと遂にキラ自身のカード『ライア』が登場しました

オネストとは真逆の効果なんですが、普通に見るとチートカードです。まず攻撃力が高い。オネストと対決させたら負けは無いと思います。でも欠点はあるんです

次回は特別企画でもやろうかなと考えています。夏休みですし・・・

ではまた次回に

お知らせ&アンケート

ここ最近スランプ状態で全く書けてませんが、徐々に書き上げています。でも、まだまだなんですけどね。

出来れば今月中には更新したいなと思います。

まぁ、でも１２月の始めに公演があるのでそれまで忙しいのですが・・・まぁうん。

ってな訳でちょっとアンケートをしようかなと・・

特別企画的な物のお題を読者の皆さんに考えてみて欲しいんです。

例えば、結局書いてる途中で書き上げてない『プール』の話とか・・

お題は一言でも箇条書きでも何でもＯＫです。

んで、私こと遊が気に入ったお題に沿った話を書きます。

あっ、それともう１つアンケートをやろう。

まだキャラが少ないから人気投票は出来ないけど、オリキャラ達のデュエルの人気投票をしようかな。１人１票で。

?:キラＶＳクロノス
?:キラＶＳ龍亞
?:キラＶＳデラク
?:キラＶＳアキ
?:キラＶＳダークシグナー
?:キラＶＳディヴァイン
?:龍可ＶＳアラン
?:キラＶＳアラン
?:キラＶＳクロウ
?:キラＶＳハイトマン
?:龍可ＶＳリア
?:キラＶＳリア
?:キラＶＳ昴

理由も付けてくれたら嬉しいな↑

では清き1票をアンケート共々よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1800i/

遊戯王5D's～遊城を受け継ぐ者～

2011年11月5日02時08分発行